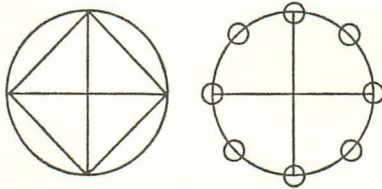
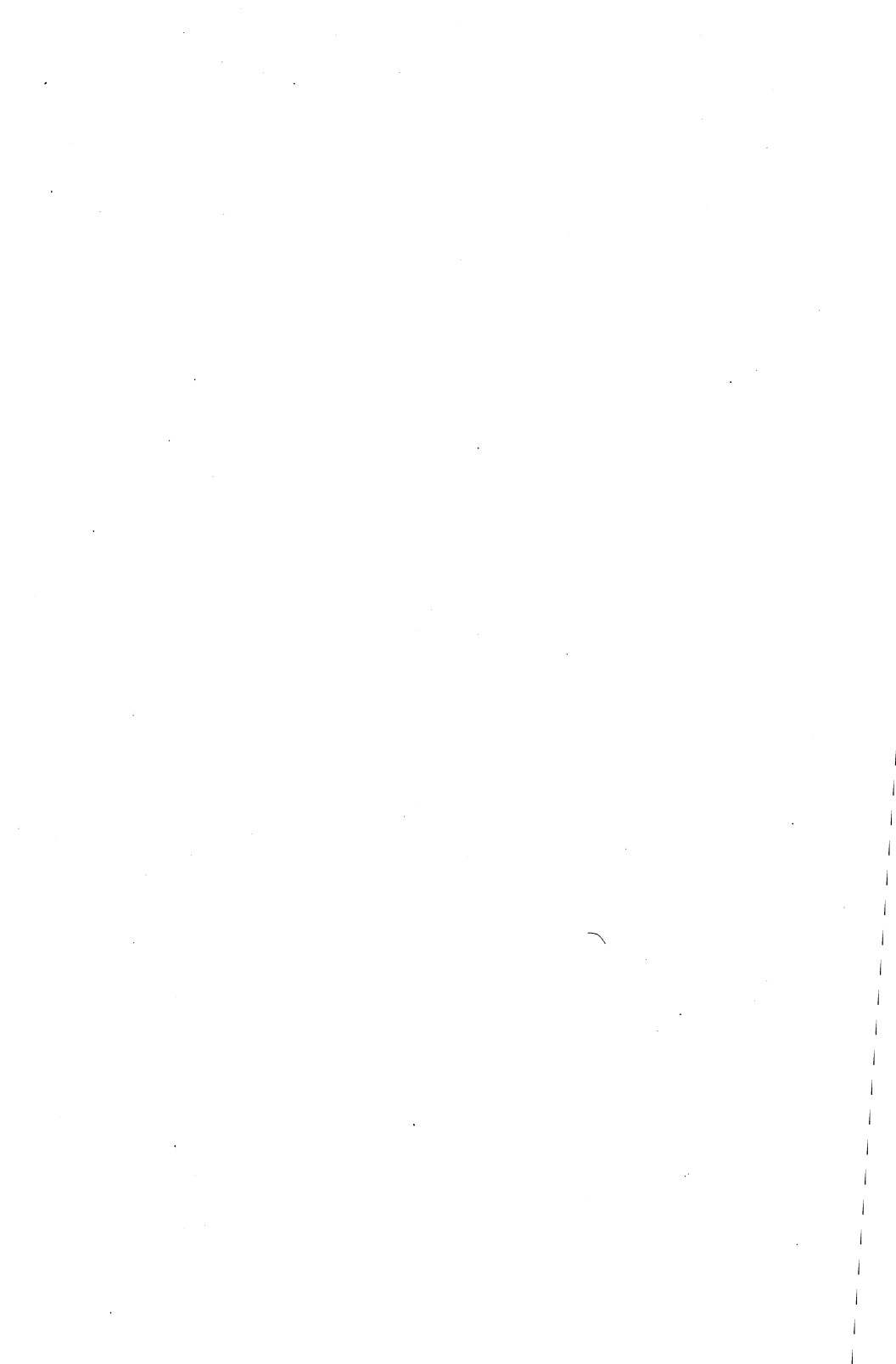


潜象物理研究
相似象学会誌

相似象



第十一号 ■ 一九九四年七月



目次

✱ 前書

(一)

✱ カタカムナの勉強について (一)

▼ カタカムナの勉強は今までの哲学や文学や科学や宗教や道德の勉強とは違ふ

▼ カタカムナは四十八の声音の思念を覚え図象符を見てその意味を自分の感受性で感受できなければわからない

▼ 会誌を読みアタマで理解してわかつたつもりは観念の満足は本当にわかつたのではない

▼ せつかくカタカムナに会いながら従来の先入見で観念次元の勉強に止まることはあまりにモッタイナイ

✱ カタカムナ文献とは (二)

▼ ○と十字の図象符の八十個の渦

▼ 平十字と名のる老人と蘆有三老師から聞かされた八鏡文字

▼ カタカムナは古事記成立の時期に否定され埋没させられてしまった日本語の起源と日本文化の精神的根拠を示すもの

✱ 日本の歴史は古事記に始まるとする「無文字和語」の定説の大きなアヤマリ (五)

▼ 現代の文明国で自民族の文化の起源を知らず自国語の起源のわからぬものは無い日本の歴史の奇妙なナゾ (五)

▼ 国際的にも国内的にももろもろの困った状態をひき起している、そんな日本人になつてしまった最大の原因 (六)

▼ 古事記は大和朝成立後他民族の文化が混入した後につくられたものゝ日本独自の神話というなら日本の神話 河合肇雄

▼ 征服者をも同化してしまつたカタカムナの文化の伝統ゝ辺境の地に残るエゾ・クマノ・アイヌ・オキナワ・エタの事実 (七)

▼ 天皇はオホキミとよばれ天皇の治世は君が代といわれたが他民族の君主の如き最高の権力者支配者とは全く異なる思想

▼ 明治以後大東亜戦争に至る日本人は西洋文化に乗りかえた為の困った状態に陥る(八)

▼ 日本のみ二千年前に一度征服され否定され匿されて以来歴史のタブーは今日まであはかれることは無かったそのわけ(九)

▼ 本来日本の文化は特殊なものでは無く人間として最もアタリマエのものゝそれがなぜ特殊にみえるか(一〇〇)

* 古事記の神話に満足せず古事記以前の真実の歴史を知らせねばならぬ(一〇〇)

▼ 日本語の「カミ」というコトバの真意ゝ他民族の神や仏の如き觀念では無く生命の起源の潜象物理のコトバ(一〇六)

▼ 漠然と生命力・氣・パワー・自然治癒力又は靈性・超能力・宇宙エネルギーとしかいえなかったナゾの正体(一一)

▼ 会誌がカムアマ等の上古代語を使う為にカタカムナは非科学的の前近代的原始民族的な低次の思想と誤解されるが(一二)

▼ カタカムナは人類として最高度まで生命力精神力を向上した人間がイノチとココロのあり方とその根拠を覚ったサトリ(一三)

* 我々は人間として一人前に生きているつもりだった(鮭が鮭として白鳥が白鳥として生きているように)(一三)

▼ 人間はこういうものと思っていたゝこうでない生き方があるとは思わなかったゝゲイテ・ケストラー・富永半次郎(一三)

▼ 人間のあるべきスガタを知らぬまま進化した脳を使いまくり心身の病に陥りながらそれが人間性と思っていた(一四)

▼ 一人前の人間として生きる為にはミツゴのタマシヒに教えこまねばならぬモノがあることを親も教師も知らなかった(一七)

▼ カタカムナに出合い 人間のあるべきスガタを始めて知ったゝ個人の体験レベルでなく民族の文化として存在した事実

▼ 現代文明は古代より進歩したと思っていたがゝその文化が今、滅亡の危険に陥っているわけがわかった(一四)

▼ 人間だけが神や仏をもつと思っていたがゝあらゆる動物が皆知っている生命の「カミ」を人間だけが知らなかった(一五)

▼ しかし本能としてはもっている筈ゝそれ故人間の脳も知らうとして求めたのが神や仏の宗教だった(一五)

▼ 神という漢字をしんとよみながらカミというヒキを保持した日本人ゝほとんどの漢字にオンとクンのあるわけ(一六)

* カタカムナの勉強はゝカタカムナをわかる ということは(一七)

▼ カタカムナ人の感受して示したコトバを自分の感受性でわかり、自分の感受性を鍛えて、カタカムナ人の感受したカムアマの授かりを自分も感受し、真の生命の幸を享受して生きる人間になること 挿図(一八)

▼ 我々は自分の生命のチカラに、サヌキとアワのあることを知らなかったゝ生命のアワ性はうわの空でサヌキの出し放し(一九)

▼ 今の世にカタカムナに出合った者はカタカムナを勉強する以外に生き甲斐はないゝそれは自分の感受性を鍛え続ける事



我々の生命活動は刻々に微妙に変化する（内外環境の関わりをどこまで感受しどんな判断行為を出すか）（二〇）

- ▼ 生物とは受けて出すものゝ感受性と判断力ゝ個体の生命力とは 感受するアワ と判断行為を出すサヌキのチカラ（二一）
 - ▼ 自然の生物は皆アワのチカラをせい一ぱい鍛えて豊かな生命力を感受しマトモな判断行為のサヌキを出して生きている
 - ▼ 人間のみがアワの鍛練を忘れ、サヌキばかりふりまわし宗教も道徳も科学も アワは最もわからぬもの になってしまった
 - ▼ 感受性というユトバは知つていても感受性が 何を感じ受しているか何の為に感受性があるか、その物理を知らない（二二）
 - ▼ 人間がわからなくても科学が発見しなくても、アワは則ちカムアマの事は昔も今も存在するゝ感受性のスナホな者はアワが科学の対象にならなかつた（わからなかつた）わけゝ「美」は人間が発見しなくても昔も今もつねに存在する（二四）
 - ▼ 自分の身体の内臓や筋肉や骨や脈や呼吸や脳が調和的な状態から何らかの変化を生じた時そのサを感じとるのが感受性
 - ▼ マ違えてはならぬのはアワの感受性の鍛練はミの領域、神経質に注意して気をつけてというのはサヌキのイの次元（二五）
 - ▼ 何をするにも何を考えるにも進化した脳が 下廻上して働く為に 脳の落し穴に陥り生命の感受性を忘れてしまった（二五）
 - ▼ 何をするにも無駄なサヌキの緊張を抜いてその時の自分の本来の生命活動の アワのココロ にスナホになること（二六）
 - ▼ 我々の生命はよりよく生きる方向性を天然的に与えられているゝ無駄なサヌキを出すもとのアワを鍛えて強くする（二六）
 - ▼ 脳が進化しても下廻上にならず自然の生物が皆やっているアタリマエの生き方を全うするスベゝ感受性のアワの鍛練
 - ▼ カタカムナがわかるという事は アワがわかる事ゝ何としても脳にアワのイミをわからせ劣えた感受性を鍛え直さねば（二七）
 - ▼ アワ尊重の文化ゝ能く年齢の教え方ゝ仏教の日本化ゝ入魂の技とはゝ日本の民謡ゝ心をこめるにもアワがわからなければ
 - ▼ 内身の声を無視しサヌキの好みによける脳の下廻上に気付き何をするにも自身のアワに問うて命のよろこぶ方向へ（二九）
 - ▼ カタカムナは人間と生れたすべの者に必要なサトリゝしかし今の世にこれを必要として求める者は極めて少い（二九）
 - ▼ 自分の生き方に疑問や悩みをもたぬ者にはカタカムナは無縁ゝカタカムナをわからなければ救われぬ者のみが読者でよい
- ＊
- 勉強というゝ禁欲的な難行苦行的なイメージだが（今までの宗教や修養は無駄の多い能率の悪い教え方）（三〇）
- ▼ 聖人賢者が自分の体験を真理として教えたただけでは観念の満足ゝ本当に実行しようとした者はスベが無いゝ顔回の死
 - ▼ カタカムナの世には難行苦行的な宗教や修養の必要は無かつたゝサヌキを出す本の アワを獲い鍛え高める生き方の根拠
 - ▼ 現代人のようにサヌキ文化で成育し弊害が出てから神や仏を教え難行苦行して我欲を封じさせる必要は無かつた（三一）

- ▼ 古代原始社会はアワ型だがサヌキ文化に出会えば忽ち敗北し人類は文化が発達すれば皆こうなるしかないと思ひ込んでいる
- ▼ 原始アワ型でも現代サヌキ型でもない高度の文明が現実にあるとは誰も考えないが日本のXの謎を解くもの(三三二)
- ▼ カタカムナには「死」は無いと死のとらえ方考え方が現代人と違う一死を恐れ忌避し闘い神を永遠化し帰一する思想(三三三)
- ▼ 本来の生命カンをマツトウに鍛え高命命のよろこぶ生き方を知れば死を恐れ永遠を求める思想をもつ必要はない(三三三)
- ▼ 人間が自然の生物のようにアタリマエに生きて死ぬスベがあることを始めて知ったカタカムナの勉強は命のよろこぶ方法
- ▼ 生命カン(アワ)を養うといっても始めのうちにはついアワを忘れてサヌキが出てしまひ何となく辛抱我慢の重圧感があるが
- ▼ 馴れるとひとりアワがひらめいて必要なサヌキを出しているその時自分の命がひそかによることに気づく
- ▼ その状態は自分には始めてだが何も特別のものではなく自然の動物に近いものゝ感受性を精一杯働かしマノスベに生きる
- ▼ 小鳥の雛も人間の赤ん坊も満腹すればビタリと口を閉じ見向きもせず空腹でも嫌なもののは決して口をあけない(三五)
- ▼ 食べもののみならず万事に感受性に正直に行動し義理やその場の都合で(脳のサヌキで)判断行為を出すことは無い(三三六)
- ▼ 脳の進化の為に我々は生物のアタリマエの生き方を失っていたゝ今、少しばかり自然の動物の安らかなおだやかな気持に
- ▼ 動物は何も意識せず大自然の大きな美の中に自分もただ美の一つとして生きていただけゝ我々はそれを見て生命の幸を感じる
- ▼ 進化した脳があつてもアワを本気で鍛え続ければ脳は邪魔をせずマノスベのサヌキを出す為に働きアタリマエに生きられる
- ▼ サヌキを鍛える難行苦行的な方法も本気で志せばアワ量を増すゝしかし欲望や觀念の満足のための修行はサヌキの陶醉(三七)
- ▼ サヌキの鍛練にも肉體は難行苦行でも精神的満足のよろこびはあるゝサヌキの陶醉とアワの命のよろこびの違い(三七)
- ▼ 生命のイヤシロのよろこびこそ生物に与えられる最高の幸ゝ進化した脳にふりまわされる愚から脱皮し人間も本来のスタガタに
- ▼ 本来の日本人の心ゝ日本文化の伝統の根拠ゝ本来の日本の文化は決して特殊なものでは無く人類の本来のあるべきスタガタ
- ▼ カタカムナを脳で理解しただけでも最高の知的満足ゝ觀念の満足や陶醉に止まれば眞の生命の救いには結びつかぬが(三八)
- ▼ 人を救う世を変える等と考える前に何よりも自分自身が変らなければゝ個人の実験としてカタカムナ人の教えを實踐(三九)



▼ カタカムナは、我々現代人のもつ文明の利器は何一つ無く、現在のような言語も文字も無かった上古代期に開発されていた人類最初の文化である (3)

✦ 第一首…………… (7)

カタカムナ…………… (23)

ヒヒキ…………… (30)

マノスヘシ…………… (33・39・45)

アシアトウアン…………… (36・41)

ウツシ…………… (39)

マツル

カタカムナ

ウタヒ…………… (40)

- ▼ 感覚がなくてもわかった気になる人間の脳のくせをよく知っていないと、自分はまだわかっていないことに気がつかずに、わかったつもりで読み流してしまう(7)
- ▼ 進化した脳の落とし穴にハッキリと気づくことが先決問題と人間の脳の能力と、困った問題(9)
- ▼ カタカムナは最高度の感受性に基く直観のサトリであるから、脳の落とし穴に気がつかぬ者に、わかる筈がない(13)
- ▼ 人間の思想は生きている条件なりのもの、風土的環境の条件と社会的文化の条件と、民族の祖先から受けつがれた本能的生命力(16)
- ▼ 民族の祖先にカタカムナのサトリをもたなかった為に脳の落とし穴に陥り靈魂の思想をもった現代人は、カタカムナのカミヤマアManaの意味がわかっていないことに気がつかない(深野一幸 超科学シリーズ)(17)
- ▼ 人間の覚の段階とベエダの「神」の覚・ウバニシャッドの「アトマン」の覚・釈迦ゲエテの真正覚(生命の根源の覚)(20)
- ▼ カタカムナとは何か(23) カミ感覚とは「力」とは(33・58・94・235・263・287)
- ▼ 生命力とは「生命の根源は」生命活動のチカラ(26)
- ▼ 渡り鳥が何百キロも飛びつづける力は何か(27)
- ▼ 我々はサヌキしか考えずアワを知らなかったアワとは(29・87・109・279・286)
- ▼ アシアトウアンとはなぜアシアトウアンなのか(36)
- ▼ カタカムナのサトリが、今までの我々の知る限りの聖人の悟りや哲学宗教科学の真理と決定的に違う点(39)
- ▼ 人類の歴史の中で人間の脳の落とし穴に陥ることの無かった文化と天然自然のスカ

✠ 第二首

ノ (49)

ヤタ (51)

カ (52・58・60・70)

カミ (51・53・60・64)

カタカムナ (68)

カミ (54・64)

タと人間の最もアタリマエの生き方を示すもの (45)

▼「カタカムナヒキマノスベシ」の根本原理を示すのみでなく「アシアトウアン
ウツシマツル」と「カタカムナウタヒ」が三つ揃わねばカタカムナのサトリでは
ない

▼カタカムナは、生物の最もアタリマエな根本態度を、脳の進化した人間に教える
サトリ (44)

▼マノスベシとはカムアマ始元量が順々に序を通して発生し分化し変遷し還元す
る順序のサトリ

▼人間がそれを知って自分の感受性を教えマノスベに照してサヌキを出すことが
逆序のサトリ (45)

▼ヤタノカカミとは何か？八鏡文字 (50)

▼ヤタノカミといわず、なぜカカミといったか？「カ」と「ミ」の感受がなければ
「カミ」だけがはじめて図象符で示されている人間にとり最も有り難い畏いも
の (54)

▼「カ」というモノが脳の感受性によって感受できなければ「カタ」とか「ヤタノ
カ」といってもわかる筈がない？「ヤ」とは (55)

▼はじめて「潜象」の存在を知らされた時の驚き (57)「カ」は、あらゆる生物が
皆アタリマエに感受して生きているモノ、人間の脳が認識していなかっただけ？

▼「カ」はパワーとか気とかというようなエネルギーの次元では無い (58)

▼カムアマ始元量は、現象に出ても潜象のチカラのままの場合 (アマナ・アワ)

▼と、現象に出ても変遷して様々なカタチをもつ場合がある (60)

▼「生命」とは「カ」がチカラ (生命力) とカタチ (生命体) になる (60)

▼「ヤタノカ」といったわけ (61)「カミ」と「神」マタンとオン (64)「神の救いとか
ミの救い (67)

▼カタカムナというコトバ (68)「カタカムナ人は「カ」というモノの存在を物理

第三首……………(81)

フトタマ……………(81)

ノ

ミ

ミコト……………(83・94)

フトマニ……………(83・93・237)

ニ……………(93)

量として認識に出した大変な発見「カムアマ始元量」といった檜崎學月(70)

▼ カタカムナの表象物(マカタマ・ヤタノカカミ・フトマニのツルギ)(71)と「古世言見」の発見(77)

▼ 日本のわらべうた(73)とカゴメカゴメとツルとカメの原形と能のハヤシ(75)

▼ カタカムナが埋没され、少数者を育成してカタカムナを伝えるスベを失った(77)

▼ 「カミ」について、「ミコト」が図象符で示されているとフトタマノミがミコト(イノチ)になるとは(82)

▼ 生命の起源(カミ)はフトタマ(カムアマ始元量)のフトマニ(重合発生)であるというカタカムナ人の発見した生命発生の根本原理(83)

▼ 科学に無いコトバと潜在・対向発生・カムアマ始元量・サヌキアワ(84)

▼ 生命のチカラとは感受するアワのチカラと、感受に基いて判断行為を出すサヌキのチカラ(86)

▼ 感受性とは何を感受する為にあるのか感受性と判断力の無い生物は無い(85)

▼ アワの心とは(87)と現人類の諸悪の根源は感受性を起励しその脳を教えかえず逆序のサトリ(88)

▼ 感受性が衰えるとは五感の機能のことでは無い、脳に感受させるアワのチカラが上の空の状態(89)

▼ 直観を高めるには老人痴呆の問題

▼ 感受性を鍛えるとはアワの心と脳の使命と進化した脳にふりまわされている現代人の脳の下廻りと落とし穴と本当に進化したのならその状態を自覚できる筈(98)

▼ 「心」と「時空互換重合」の意味(101)

▼ 我々は今まで「ヤタノカ」「フトマニ」「アワの心」という考え方をしたことは無かった(103)

▼ 「ト」という現象は知っていたが「トキ」する界面のことは知らなかった(104)

◆ 第四首…………… (117)

イハ…………… (117・119)

トハ

ニ

カミナリテ…………… (119・121)

カタカムナ

ヨソヤ…………… (120)

コト…………… (120)

ホクシ ウタ…………… (121)

次 ◆ 第五首…………… (131)

目 ヒ……………「ヒ」のつく日本語…………… (133)

xi フ……………「フ」のつく日本語…………… (136)

▼ 我々は自分の生命の力が「アワとサヌキ」のフトマニであることを知らなかったからサヌキばかりふりしぼっていた (108)

▼ 本当にわかるということは、「アワがわかること」「ミを入れる」「思念を入れる」「感受性を鍛える」という意味のわからない者として日本の文化が武士道をはじめ剣道茶道華道……道(ミチ)になってしまったのはアワを鍛えることであった (109)

▼ 「イ」とは時間空間の原点 (118)

▼ イハ トハの解釈 (118)

▼ 「カミナリテ」がなければ何じとも始まらぬ「カミナリテ」が「神成りて」になつたわけ (123)

▼ 「ホクシ」の思念と日本人の自由の思念

▼ 「コトホクシ」が寿ぐ・祝うの思念をもつ日本語の妙

▼ カタカムナワタヒは、既にあるコトハ・文字を使って造ったのでは無い、世界の古代文字の解読とは異なる (123)

▼ カタカムナウタヒの造られた当時の事情 (124)

▼ 潜象カムアマ始元量から現象の万物万象の生命に変遷する状態が、どうしてカタカムナの 四十八のコトバにウツシされたか (125)

▼ 我々の目や耳が感覚したものが、どうして電気信号として脳に運ばれ、感受判断されるのか?

▼ 日本語の起源、日本語の研究が未解明であるわけ(アグノエル・大野晋の研究) (128・220)

▼ 檜崎皕月は五・七調に解読し日本の歌の五七調の起源 (131)

▼ イハトハで読んでもヨソヤコトで読んでも意味が通じるわけ (132)

▼ わきまえていなければならぬのはカタカムナ人は既にある日本語を使ってヒフミ

ミ……「ミ」のつく日本語……………	(138)
ヨ……「ヨ」のつく日本語……………	(148)
イ……「イ」のつく日本語……………	(147・118)
ヒフミヨイ……………	(150・237)
マ……「マ」のつく日本語……………	(153)
ワ……「ワ」のつく日本語……………	(155)
リ……「リ」のつく日本語……………	(156)
テ……「テ」のつく日本語……………	(157)
メ……「メ」のつく日本語……………	(158)
ク……「ク」のつく日本語……………	(159)
ル……「ル」のつく日本語……………	(163)
マワリテメクル……………	(164)
ム……「ム」のつく日本語……………	(165)
ナ……「ナ」のつく日本語……………	(166)
ヤ……「ヤ」のつく日本語……………	(167)
コ……「コ」のつく日本語……………	(169)
ト……「ト」のつく日本語……………	(170・156)
ムナヤコト……………	(239)
ア……「ア」のつく日本語……………	(174・71・101・36)
ウ……「ウ」のつく日本語……………	(176)
ノ……「ノ」のつく日本語……………	(176)

- ヨイといったのではないことゝ教詞として造ったのでも無い(133)
- ▼ 唯一のものから、ものが生れることは無いゝ「カ」(「スモールヒ」)左マワリ右ワリのカのツの状態(135)
- ▼ 我々の環境(宇宙空間)は「ヒ」「フ」「ミ」の潜態の密充填(「ミクマリ」)状態(139)
- ▼ 生命の根拠を求めた世界の民族の思想ゝベータ・ウパニシャッド・小乗大乗仏教・唯識論の相似象(142)
- ▼ 靈魂・氣・アトマン・プシケー・超自我・宇宙生命・神・仏・大極・異次元世界・再生・転生・超能力・臨死体験等の思想をつくり出し出している、自分のイノチとココロの物理を知らない(142)
- ▼ カタカムナには死も神も善も無も愛欲も魔も無い(147)
- ▼ 時間空間の観念はあいまいで確かな定義も無い(151)
- ▼ 「メ」(目・芽)という抽象語(153)
- ▼ 「ク」を自由の思念とした植崎翠月ゝ「ク」の思念の最高の用例は其角の句(162)
- ▼ 「ナ」(名)という抽象語(166)
- ▼ カタカムナ人は宗教の愛や徳や善の教えとはせず「モノスベシ」といった(174)
- ▼ 「ノ」を象徴にすれば「スベ」「モ」ゝ接続詞として使われる例は無い(179)
- ▼ 「ナ・ユト」は夥しい数のくりかえしの生命現象(172・202・270・279)
- ▼ カタカムナのウタヒと象徴文字は人類最高の芸術作品(198)
- ▼ カタカムナ人が「カ」とよんだものが、自分の生命に実際にカカワリ生命のチカラになっていることを感受し認識に出し得たことにより、一般に悟りとか靈感とかといわれる神秘体験が観念の陶醉次元の思想であることを、明確に識別した(198)
- ▼ 我々の生命活動は極めて微波動次元の(ヒフミヨイ)ものすごい数の繰返し(ムナヤコト)ゝ我々の感受性がその生命のカムウツシの場をつくらなければ生命はさずからないゝそのカムウツシのカミと、場をつくるスベを知らなければ生命を全うできない(202)

ス……「ス」のつく日本語……………(178・248・254)
 へ……「へ」のつく日本語……………(181)
 シ……「シ」のつく日本語……………(182)
 レ……「レ」のつく日本語……………(184)
 アウノスへ……………(186・236・239・241)

カ……「カ」のつく日本語……………(186・58・70・235)

タ……「タ」のつく日本語……………(190)

チ……「チ」のつく日本語……………(192)

サ……「サ」のつく日本語……………(194)

キ……「キ」のつく日本語……………(196)

カタチサキ……………(239)

✦

第六首……………(206)

ソ……「ソ」のつく日本語……………(206)

ラ……「ラ」のつく日本語……………(207)

ニ……「ニ」のつく日本語……………(208・93)

モ……「モ」のつく日本語……………(209)

ロ……「ロ」のつく日本語……………(211)

ケ……「ケ」のつく日本語……………(212)

セ……「セ」のつく日本語……………(213)

ソラニモロケセ……………(213・239・240)

▼ カタカムナ文献の解説の途中でよけいなことばかり書くのは迷惑と思われるかもしれぬが、その「よけいなこと」をどうしても書かねばならないわけ(201)

▼ 「モロケセ」と「ユエオ」が「ネ」になって「ハエツ」になる関係
 ▼ 日本語の敬語に使われる「オ」(216)
 ▼ 日本語の敬語は単なる「ていねい語」「謙讓語」とは違う(217)
 ▼ 「を」が助詞として使われた用例は無いが、其角は「をまわし」といっている(217)

ユ…………ユ」のつく日本語……………	(214)
エ…………「エ」のつく日本語……………	(215)
ヌ…………「ヌ」のつく日本語……………	(215)
オ…………「オ」のつく日本語……………	(216)
ヲ…………「ヲ」のつく日本語……………	(218)
ユエヌオヲ……………	(220・239)
ハ…………「ハ」のつく日本語……………	(220)
エ…………「エ」のつく日本語……………	(223)
ツ…………「ツ」のつく日本語……………	(224)
キ…………「キ」のつく日本語……………	(227)
ネ…………「ネ」のつく日本語……………	(228)
ホ…………「ホ」のつく日本語……………	(229)
ン…………「ン」のつく日本語……………	(231)
ヲハエツキネホン……………	(239)
第五・六首通訳……………	(232)
ヒフミヨイ フトマニ 挿図……………	(238)
第七首……………	(247)
マカタマ……………	(247)
ノ……………	(248・254)
アマノミナカヌシ……………	(248)
タカミムスヒ……………	(249)

- ▼ 「は」と「が」の違い (220・127)
- ▼ 檜崎皁月の直観物理と天然則にもづく八の自然則 (235)
- ▼ アウノスベ (正反対向発生・互換重合の根本原理) (236)
- ▼ カタカムナの潜象物理は、人類のもつ脳の全能力を、最もスナホに無駄な思考へ
 走ることなく、最も正直に働かせて、自分たちの感受した生命のサトリをコトバに
 してくれただけのこと (242) ~ 我々現代人も同じ人類である
- ▼ カミの仕事場 (238・172・202・271・279頁) (神の仕事場) はゲーテの言葉)
- ▼ カタカムナ人は「生命」というものをこのような微波動次元の「アマノミナカヌ
 シ」の授かりと直観した (251)
- ▼ 後代人にはこの感受と認識が無かったから靈魂や神や宇宙生命等の神秘思想を考
 え出すしかなかった (251)
- ▼ カタカムナ人の脳は、生命の授かりの「有り難サ」を感受によって知りこの生命

✱

カムミムスヒ……………(249)
 ミスマルノタマ……………(249)

第八首……………

ウマシ……………(257)・269)
 タカカム……………(257)
 アシカヒヒコ……………(258)
 トコロ……………(258)・151)
 チマタ……………(258)
 ノ……………(258)

トキ……………(260)・151)
 オカシ……………(260)

✱ 第九首……………

アメ……………(263)
 ノ……………(264)・269)
 トコタチ……………(263)・270)・81)
 クニ……………(264)・269)
 トコタチ……………(264)
 アメクニカ……………(265)・269)
 ソコソキタチ……………(265)・269)
 カタカムナ……………(265)
 マノ……………(265)・271)
 トキトコロ……………(265)・271)
 トコタチ……………(265)・271)

▼ のヌシを、「アリカタイ」と思うと共に、深く畏れる心をもった(251)
 ▼ ミナカヌシは原子核にあたるが、科学者は原子分子の状態を知っても、「アリカタイ」という心は起きない

▼ 現代人は「時間」「空間」が観念用語(感受なしに脳でつくった言葉)であることとを知らず「時間」といえば一方的に流れる時計時間しか考えられない(259)

▼ 現代人の時間空間の観念は、カタカムナのカムアマの感受がわかつてくるにつれて、「トキ・トコロ」の思念に切り換って(260)

▼ 科学には思考の根拠が無い「ヒ」や「イ」の感受が無いから、脳で想像して「点」や「線」を考え、「カ」や「マ」の感受が無いから、脳が時空の二元を想定した(261)

▼ トコタチとはフト(二つの重合)の繰返しとの互換重合性、人類がはじめて発見した生命の根本原理(263)

▼ 「アメノトコタチ」と言い「クニトコタチ」というカタカムナ人の気持(264)

▼ アメクニカより図象符(263)

▼ ソコソギタチをいきなり膨脹収縮性とアタマで覚えてしまつてはカタカムナはわからない

▼ 「アマは膨脹収縮性」といっての間違い、アマにあるのはソコソギタチ(271)

▼ 科学は現象を見て観念の物理を思考するしかないが、カタカムナ人は膨脹・収縮している現象を見ても、それはトコタチの力がソコソギするスガタと直観して、ありのままにコトバ化した

▼ 最も大事なことを、いとも簡潔に「マノトキトコロ トコタチ」といつている(トキトコロとはアマ始元量から変遷した宇宙の万物万象のこと)(271)

▼ いかにも簡潔でもこれは今日まで誰も言えなかった「生命とは何か?」どのように



第十首

メグルマノ……………(273・276)

ミナカヌシ……………(274・248)

タカミムスヒ……………(274・249)

カムミムスヒ……………(274・249)

オノコロシマ……………(273)

カムナホク……………(275・120)

アメツチネ……………(275)

ハシマリ……………(275)

してどこから生れたか」という問題にズバリ解答するもの

▼ 最初から全部図象符で示されている(273)

▼ 「シマ」(示されたマ)が、鳥(粒子形・ナギ)と縞(流線形・ナミ)になるわけ(274)

▼ 我々の生命は靈魂のようなものではなく、イキのサヌキ・アワのフトによりヤタノカ(生命の力)がヒトツヒトツ発生して、則ちイがノしてチしているもの(276)

▼ 生命とは我々の全身の細胞のアマナとカムナの通うミチ(276)

▼ 後代人もコトバの思念の感受性を失った為に、「アメツチネハシマリ」が「天地創造」の意味になり、「カムナホク」が神道の祝詞の意味に神秘思想化(コジツケ)されてしまった(275)



後書

……………(277)

▼ カムアマから発生した生命体は、アワとサヌキのフトにより生命活動をいとなく、心の中の思いをウタにして出す(277)

▼ 呼吸のサヌキアワとアワのチカラだけのサヌキ(声)を出す、我々は生命力といってもサヌキしか知らなかった(278)

▼ 我々は何一つ行動するにもすべて、生きるということは刻々のそれぞれの場の、両手・両足のサヌキ・アワ、頭と胸のサヌキ・アワ、呼吸のサヌキ・アワ、もろもろの臓器、そして脳の中のサンカーラーのサヌキ・アワの、夥しいサヌキ・アワのフトの何重にも組合

れた絵和の共振波動によって生かされている実態(279)

▼ 人間だけがアタマのサヌキばかり鍛えてアワを忘れ、病気になる、悩み争い苦しみから脱けられなくなっている(279)

▼ 進化した脳があっても邪魔をさせぬよう、つねに感受性(アワ)を鍛え、適切な判断行為(サヌキ)を出す、という生物のアタリマ

エの生き方をミにつけるのが私共の実習(280)

▼ マ違えてはならぬのは、一々の動作に思念(ヒラメキ)を入れるといっても「アタマで注意して気をつける」のでは無いとそれではサヌキの鍛練とアワの鍛練は労力も時間もかからないとソコへ思念(ミ)を入れるだけと思念は脳の感受性(285)

* 編集後記(四一)

- ▼ 孝も愛も仁も、見るは明を思い聞くは聡を思い……というのも、わかつてみればアワの心になるということ(286)
 - ▼ アワとは、自分の生命活動のチカラを判断行為のサヌキを出させるチカラ(287・279・109・87・29)
 - ▼ どんな高貴の身分の天子や王者でも、自分の生命活動は自分の生命力で出さねばならぬ。自分の脳にアワを教え、自分のアワとサヌキの突感を感じることが、アワを鍛える第一歩(287)
 - ▼ アワとはカムを感じカムウツシを感じる生命の感受性のチカラ。カムの支配。日本語の敬語の起源(287)
 - ▼ カムを感じる感受性を失った人間は自然の動物のようにマノスベに生きられなくなった。宗教や道徳は悪いサヌキを出さぬよう(欲望我執を捨てて)よいサヌキ(愛や正義や平和)を出せと教えるしか無かった(288)
 - ▼ 孔子はさすがに「本ヲ務ム」といったが「本」とは何かは言わない。顔回の苦しみ
 - ▼ 釈迦は五蘊の盛が苦であると気がついたがブヤダムマーサンカーラーになる方法論は無い(289)
 - ▼ いかほど高度な理論学説も、それを知ることによって自分の生命が完全発揮されるのでなければ意味が無い(291)
 - ▼ カタカムナに出合ってから、自分はカタカムナの実験人間(292)
 - ▼ 今の世にカタカムナに出合った者の生き甲斐(293)
- * 編集後記(四一)
- ▼ 我々は現代文明のどんな文化を学ぶよりも前にカタカムナの生命のサトリを知るべき(四二)
 - ▼ 人間の 脳の 落し穴ということを本当に心から気がつくことがない限りカタカムナをわかることは出来ない
 - ▼ 今日まで人類は自分たちが脳の 落し穴に陥っていることを誰もハッキリ知らなかった(四二)
 - ▼ 原罪やゴウヤカルマをいう者はあつてもそこから脱出して本来の生命の感受性を復活させる方法を示し得た者は無かった(四三)
 - ▼ 今私共は今日まで謎であった日本語の起源を知り脳の 落し穴に陥らぬ人間の真の文化というものが有り得たことを知らされた
 - ▼ 筆者は三月末、思わぬ災難にあい救急車で入院、檜崎先生のことばが心からわかる気がした(四三)
 - ▼ 自然の生物はどんな思わぬ災難にも理不尽な不公平な目にも一切文句をいわず、自分の感受性を精一杯鍛えて生きぬくのみ
 - ▼ 人間は進化した脳があるから何かにつけ恨み悪み怒り口惜しがり歎き悲しみ悔み愚知り、五蘊の盛を燃してしまふ(四四)

- ▼ 脳があるのだから「苦」の原因をつきとめることは当然だが苦に病んで脳の落し穴に陥るのは愚（不幸）なこと
- ▼ 進化した脳があるならその脳の感受性（アワの心）を起励して、今の「苦」の状態を自分の波動量の鍛練の場（試練）として受ける
- ▼ 当面の試練をうまくパスする為に、いかに自分の感受性をうまく鍛えるか？ その方に脳を働かせば（五蘊の盛に陥ることなく）不幸を幸に転換しうる（四四）

✦ 前書

* カタカムナの勉強について

相似象会誌は、第九号に、檜崎皐月の解読したカタカムナ文献の全文を公開し、第十号から、その解説につとめている。

カタカムナの勉強は、四十八の声音符を覚え、その四十八の声音の思念ヒビヤに馴れ、図象符を見て、その意味を、自分の感受性で感受することが、根本的に大切である。

本号の前に、「感受性について」を、八冊まで、出さねばならなかったのは、それを読んで行くうちに、読者自身が、カタカムナのウタヒを知りたいと思ひ、その声音符図象符を、自分の感受性で読みたい、という気持を、起励されるようになってほしい、(そしてカタカムナのサトリを、どうか、本当に、正しくわかる人になってほしい、)と思う願ひからであった。

しかるに、もし「感受性について」を読んで、カタカムナをわかつた気キになつたとすれば、それは、観念アタマ次元の満足にすぎない。まだ、カタカムナを、本当にわかつたのでは無い。

「観念の満足」では本当にわかつたのではない、というわけは、カタカムナのサトリがどういうものか、その真意を本当にわかれば、納得できる筈である。

▼ カタカムナ ウタヒの全文は、檜崎臯月が解説して、カタカナを附した研究資料を、九号に公開してある。声音符図象符のよみ方は、十号に解説してある。

筆者も、精一杯勉強して、解説を書いてゆく。

どうか読者は、カタカムナ ウタヒの図象文字の示す意味を、めいめい自分の感受性によって感受して頂きたい。

たとえ、解説をいかにていねいにしても、又、読者がいかに熱心に読まれたとしても、それだけで、カタカムナをわかることは無理である。

どうか、読者自身の感受性によって、図象文字のヒビキを感じとり、(アタマでわかった気になるだけの程度に止まること無く)カタカムナの真意を本當にわかって頂きたい。

なぜなら、それを本當にわかることによって、私たちは、はじめて、人間として最高の幸せな生命を全うすることが出来るようになる。カタカムナは、その為に、私たちの遠い祖先のオヤたちが、書き残してくれた文字であったからである。(カタカムナ ウタヒ 第一首)

▼ カタカムナの勉強が、今までの哲学や文学や科学や、又、宗教や道德の勉強と違うのは、アタマでわかった(觀念の満足)だけではすまず、「感受」がなければならぬことである。

いかに高度の学問智識や修養法も、それを勉強したことによって、本人自身の生命が、実際に、豊かな天壽を享受できるようにするのでなければ、意味が無い。(本モノでは無い。)

カタカムナの勉強を、今までの先入見(觀念の満足の次元)でされることは、あまりにも残念な(モツタイ)ことである。

せっかくの宝の山(本モノ)に会いながら、^{イナズ}真実の宝を拒否しているようなものである。

カタカムナは、人間として受けられる最高^{イヤシロ}の幸(生命^{イコトノミ}の祝)を^{サツ}覚った人が、そのサトリ(マノスベ)を、コトバにして示してくれたものである。

* 檜崎皐月が金鳥山で平十字と名のる老人から見せられた長い巻物には、渦巻状に、三十個ほどの図象符が連ねられ、その渦巻きが八十個も、まるで宇宙の星座の群を見るが如く、整然とくり展げられていた。

一目、それを見た時、檜崎皐月は、満州吉林に於て、蘆有三老師から老子経の古伝として「日本の古代には、八鏡文字をもつ高度の文明があり、それが中国に伝えられて易や漢方のもとになった」と聞かされていた、その「八鏡文字」とはこれではないか? という衝撃がヒラメいた。それで、書き写させてほしいと頼み、一ヶ月近く、毎晩、「フーフーノック」して通ってくれることになったのである。

『一体、これほどの沢山の図象符によって、何が示されているのか?』

この〇と十字の図象符は、文字かどうかともわからないが、これらの図象符を造った人々は、何か、よっぽど、言いたいことがあったに違いない。彼らは、一体、何が言いたいのか? 彼らは一体、何がわかったというのか?

とにかく、彼らは、よっぽど^{〇〇〇〇}えらいことをわかったに違いない。しかし、彼らにわかったことを、私がわからぬ筈は無い。何としても、このナゾを解き明かさなければならぬ。

この、おびただしい図象符の渦の群と対決して、私なりに精根こめて、孤軍奮闘、苦心 惨胆 を極めたものでした』

と、檜崎皐月は、当時の思いを筆者に語っている。(八号二二頁)

▼ 檜崎阜月の解説の結果、その八十個の渦巻きのナヅについては、

「これは、カタカムナのサトリを示す カタカムナ ウタヒ である」

と、彼らみずから、冒頭に、宣べていることがわかった。(カタカムナ第一首)

そして、〈カタカムナ〉とは、彼らの開発した〈サトリ〉を示すコトバであり、四十八の声音符と、図象符は、彼らが、自分たちのサトリを伝える為に創り出した文字であることが判明した。

そして現在の我々の使う日本語は、この カタカムナ ウタヒ の上古代語以来、連続と伝えつつけられて来たもので、日本語の語根の四十八の思念は、この 上古代語の思念をうけつぐものであることがわかった。

そこで私共は、この巻物を「カタカムナ文獻」とよび、この図象符を創り出した、我々の遠い祖先の上古代人を、カタカムナ人とよぶことにしたのである。(彼らの時代を「上古代」というのは、古事記の序文の用例による。)

そして、この四十八の思念をもつ図象文字こそ、古事記成立の時期に、政治的に否定され、埋没させられてしまっていた、日本語の起源を示すものであり、日本文化の発祥と、日本民族の精神的な根拠を示すものであることを、発見することが出来たのである。

そもそも日本語のイロハ四十八文字を、古来「カタカナ」とよんで来たのは、実は、それが、もともとカタカムナ ウタヒの声音符の形から出たもので、上古代人自身、それを「カタカムナ」と称していたからであった。それ故、大和朝成立以来、表向きには否定されても、民間では、漢字以前の図象文字から造られた字が伝承され、おのずから「カタカムナ」「カタカンナ」「カタカナ」に、言いならされたものであったに違いない。

後に、公けに、漢字を省略して造ったものを「ひらがな」とよび、敗戦前まで、小学校でも、「カタカナ」

を最初に教えて来たのは、本来の日本の文字は「カタカナ」だ、という気持が、人々に、何となくあったからである。

我々の現在の日本語は、カタカムナの上古代語の思念をうけつぐものであった。

檜崎皐月は、その日本語によって育ち、その日本語によって思想を高め、そして、その思想が、カタカムナの上古代語と文字（図象符）をつくった人々の思想と、（脳の発達レベルが、同じ程度の）、相似の状態に達していたからこそ、彼らの思想を示す図象文字と対決して、遂に、その意味を感得することが出来たのであった、と今にして、考えられるのである。

＊ 我々は、日本の歴史は、古事記によって始まり、それ以前に、文字文化は無かったと教えられた。（それ以前は、敗戦前は「神代」、戦後は「縄文弥生」とされている。）

そして、古事記の神話を国の始まりと教えられるばかりで、実際の、日本人の起源、日本文化の発祥が、どこにあったか？ いまだに不明のままである。

このように、自分たちの民族の起源がわからない国は、現代の世界の文明国の中には例の無い、奇妙な話である。

殊に、他の文明国とは異質の高い文化の伝統をもつ日本人が、その、自分たちの民族の起源を知らず、自分たちの文字文化の起源を知らぬまま、現代の世に生きている、ということが、実は、現在の日本人が、日本の文化の伝統を失い、国際的にも国内的にも、もろもろの不祥事をひき起している、（そんな日本人になってしまった）、最大の原因なのである。

古事記成立以来（来襲した天孫族の国家が成立して以来）、カタカムナのウタヒも凶象文字も、否定されたが、人々のコトバは、カタカムナ以来の日本語が使いつづけられていたおかげで、明治開国までは、曲りなりにも、カタカムナの伝統はうけつがれていた。（日本の心 前号感受性について補遺³ 二二〇頁）

しかし、明治以後、全く異質の西欧文化に乗りかえた為に、今までの先祖の恩恵は裏目に出、「日本の心」は劣等感になり、それまで、無意識のうちにもっていたカタカムナの伝統は失われ、一方、西欧文化の教養はまだ身につかず、現代の日本人の「困った状態」を現出しているのである。（前号 感受性についてその三 二七六、その四 三六、補遺⁴ 一五・四三・三三六頁）

▼ 日本の歴史は、古事記に始まるものでは無かった。

古事記の天照あまてらすや須佐之男すさのせや、出雲系等の神話は、日本本来の神話では無く、世界の他の民族にも存在する、太陽神や天地創造神話や神々の争いの神話と同類の、（脳の開発のレベルが同じ程度の人々の、）ものである。

古事記は、大和朝成立以後、他民族の文化（漢字や仏教等）が混入した後、つくられたものである。もし、日本独自の神話（カミカミの話）というなら、古事記の神話の類がつけられた時代よりも、はるかに古い上古代期につくられた「カタカムナウタヒ」でなければならぬ。

このことは古事記には記されていない。しかし、古事記以前に文字が無かった、とは、どこにも書かれてはいない。それこそ、後代の学者の偏見（真実を知らぬ為の誤解）にすぎない。むしろ、古事記の序文に、過去の書（旧辞・先紀・帝紀・本辞）の『虚偽』を改め正実を『撰録』して『安万侶に詔して献上せしめたまえり』とあるのは、古事記以前の文字文化の存在を証明するものと考えるべきである。（十号 4～6頁）

「カタカムナウタヒ」には、「アマテラス サノヲ」というコトバは出てくるが、それは、神の名では無く、

宇宙の万物万象の生命の起源（カミ）の物理（サトリ）を示すコトバであって、古事記の「神話」の意味とは全く異なるものである。

（又、古事記以外に、秘かに伝えられた「神話」の類が、敗戦後、いくつか発見されているが、（超古代秘史料吾郷清彦）その中には、『神名によりて神を覚え……』と、漢字で書かれたものがあり、天照などの神名が、最初から「神」の名だったのではなかったことを、うかがわせるものがある。（古世言見 比々軌 真之統示）

▼ カタカムナ人のいうサトリとは、自分たちを生かしてくれる生命の起源が何であるかをサトリた思想であり、サトリといっても、所謂、瞑想・坐禅・祈祷又は難行苦行・滝行・巡礼等によって、觀念の満足をほかる類の「悟り」では無い。カミといっても、所謂、神仏の「神」では無い。

カタカムナ人には、カタカムナのカミの思想があったから、そのカミによって、自分の生命が、生かされている有り難さを、実感として感受し、何事にも、生命の本（アワ）を健かに養い鍛える生き方（マノスベ）をモットーとし、その心を、親から子へうけついでいた（ウツシ マツル）。（第一首・第二首）

それ故、カタカムナの日本人には、古事記の神話や、宗教の神や仏の類の觀念を、つくり出す必要は、全く無かったのである。

そして又、後代、大和朝によって征服され、「カタカムナ」の文字も文化も否定され、他民族の神話や宗教の神や仏が入って来ても、日本人は、カタカムナ以来のカミの思想で受け入れ、征服者をも、カタカムナの思想の中に同化してしまい、世界に類のない「天皇」の國家として、二千年の文化の伝統をつくったのであった。

（前号補遺 4 カミと神）

なお、辺境の地に、エゾ・クマソ・アイヌ・オキナワ、又はエタ等とよばれる人々が存在した事実は、征服者（来襲した天孫族）に服従しなかった人々の消息を物語るものである、と考えられる。

因みに日本の天皇は、古来君主オホキミとよばれ、天皇の治世を「君が代」といったが、本来、日本の天皇は、民族の中心オオスミ核オホ的な存在として敬慕されるもので、他民族の君主のような、最高の権力者・支配者、という通念とは、全く異なる思想であった。

それは、カタカムナのカミの思想で、征服者をも、同化してしまったものである。それ故、昭和天皇代に天皇を神格化して、侵略戦争を行ったのは、明治以後の、西洋思想にのりかえた為の、「日本人の困った状態」の一つである。

左翼（共産主義）に対する右翼（国粹主義・民族主義）の思想も、その「困った状態」の一つである。

こうした天皇制の問題（憲法や、靖国神社や、君が代の国歌や日の丸の国旗や皇室外交の問題）についても、我々は自分たちの民族の起源と、匿された歴史の真相を、正しく知ることが、何よりも必要な条件であると、痛感させられる。

▼ それ故、カタカムナの社会には、古事記の神話も、宗教の「神」や「仏」も必要は無かったが、大和朝成立後の日本には、他民族にも存在するような、古事記の神話や、様々な「神」や「仏」があらわれた。

しかし、その古事記の神話を作った人々は、（彼ら自身はそのことを何も意識してはいなかったが、）カタカムナの文化に同化された人々であったから、やせても枯れても、日本文化の伝統の上流にあり、古事記の神話には、世界の神話に無い日本の特色がみとめられることは、確かである。（日本の神話には殺人が一つも無い、河合隼雄「日本の神話」）

それ故、「古事記」も日本の神話の一つには違いないが、しかし、真の日本の神話というのなら、「カタカムナ文獻」をあげなければ意味が無い。なぜなら、真に日本の特色というならば、日本的な特色の根源オホを知らなければならぬからである。

日本以外の世界の他の民族の古代にも、異民族に征服され、新しい権力者によって自分たちの固有の文字や神を否定されたものはあったが、しかし、彼らは、何代か経つうちに、又、次の権力者に変られ、否定されたものが復活したり、又、自分の国内では匿カクされていても、周圉ヤマトの国には知られていたりするから、現在存在する文明国は、自分たちの祖先ヤマトを知らぬものは無いわけである。

ひとり、日本人のみ、二千年前に一度征服され、否定され、匿カクされて以来、そのタブーは 今日まであばかれることは無かったのである。

▼ 今日まで、我々日本人は、このことを知らなかった。

否、知らされなかった。というより、この事実が匿カクされていることを、知らぬままですんでいたのである。

しかし、知らないながら、カタカムナ以来の日本語を使いつづけていたおかげで、何となく、日本人の文化は、西欧人とは違う独自のものだ、という気持があり、その思想が、今日では、進歩的な国際人から、こっぴどく非難され、叩きつぶされている。(前号補遺4 三一九頁)

しかし、いかに非難されても、うまく反論することが出来ないのは、我々が、このことの真実を知らないからである。そして、実は非難する方も、このことの真実を知らないから非難するのである。

このこととは、日本人の文化が、西欧人の文化とは異質の、独特の文化だと、何となく思っている、その日本人の思想の根拠が、カタカムナのサトリにあったという真実を、知らない、ということである。

本来の日本の文化をつくった日本人の思想ユウキョウの根拠にあったこのカタカムナのサトリは、人間の最もアタリマエの「あるべきスガタ」を示すものであった。それ故、本来の日本の文化は、日本人に限らず、人間として、最もアタリマエの「あるべきスガタ」を示すものであり、決して特殊な、特別なものでは無かった。

特殊だといわれるのは、他の民族の文化が、様々の変形を来したものであった為に、最もアタリマエのものが、かえって特殊なもの見られ、独自のものに、なってしまったのである。「最もフランス的なもの」は「最も日本的なもの」に通じる 感受性について補遺³ 三五七頁

敗戦後の日本人の中から、天皇制を否定し、神道（カンナガラノミチ）や教育勅語（的な教育）を否定し、日本人の心（思想）を、民主主義に切りかえ、天皇は英国の王室をお手本に……等と考える者が出たのも、彼らが、明治以後、西欧の文化にのりかえた後の、昭和天皇代（大東亜戦争時代）の日本人の状態だけを見て、この、本来の日本人の思想の真実を、知らなかったからである。

今後、我々が、『日本人は独特だという思い込み』を捨て、国際的に、対等に、自由な交流をして、生存を全うすることが出来る為には、何としても、このことを、則ち、日本人の起源と、日本人の思想の根柢を、正しく認識することから、始まらなければならないのである。（人類の原言語・日本語の問題 補遺³ 二二、二二二頁、補遺 4 三一九頁）

＊ 古事記の神話や宗教の神や仏の思想で満足する人々には、何もいうことは無いが、そのような神や仏の思想によつては救われず、日本人の本当のカミは何か？ 則ち自分たちの生命の本当のカミを知りたい、と求める人々には、古事記よりもはるか以前に、私たちの遠い祖先の日本人の示してくれていた、カタカムナのカミの思想があつた、という真実を、伝えねばならない。

▼ 驚くべきことに、カタカムナ人は、我々の生命の起源とは何であるかを、明らかに、つきとめていたのである。

カタカムナ人は、古事記の神話や宗教の聖典のように『神が万物万象をつくり給うた』等という式の、ぞん

ざいな言い方はしない。

カタカムナ人は、我々の生命の起源が何であり、どのようにして、何から生れ、宇宙は、どのようにして何から発生したか？ という真相を、実に精密な潜在物理として、解明している。

カタカムナ人は、現代人が漠然と「生命力」とか、「気」とか「パワー」とか、「自然治癒力」「自己免疫力」「生体制御機構」、あるいは神秘的な「靈性」「超能力」「宇宙エネルギー」等として、僅かにとらえている生命のチカラのナソの正体をつきとめ、更に、現在一般に「精神」とか「意識」とか「心理」とかの程度で扱われている人間の脳（ブレイク）の生命活動の真相をも、一貫した潜在物理としてつきとめている。

それ故、その物理によれば、古来聖人の教えや正覚体験といわれるものが、実は何であつたかを、解明することが出来る。則ち、その体験を、孔子は「仁」とか「徳一」とか「天命」といい、釈迦は「ブヤダムマーサンカーラー」というコトバをつくって認識に出し、一生をかけて教えたが、弟子たちにその真意をわからせることは出来ずに終つた、そのわけをも、解明することが出来る。

又、現代文明の最高の理念の「人權」や「実存」「民主主義」の思想が、現実の社会に於て、その理想を實現できないでいるのも、その思想には、「根拠」が無いからであることを、つきとめることが出来るのである。

▼ カタカムナ人は、その、自分たちの感得した思想の根拠を表明する為に、コトバを整序して四十八の日本語をつくり、凶象文字を創作して、書き残しておいてくれた。その後、大和朝成立以来、カタカムナ文明は匿（カク）されてしまっていたが、幸いにも、日本語の思念は今日まで伝えつづけられていたから、現代の世に至つて、檜崎卓月によって解読され、今、我々が、それを、知ることが出来るのである。

要するに、カタカムナのサトリとは、宇宙のあらゆる現象（アルこと、生きていること）の物理を示すものであ

り、ひいて、我々人間のアルべきスガタを、ハッキリと明示したものである。

それは、神話的にいえば、天地創造・生命発生の起源を、哲学的にいえば、「存在」とか「実存」とか、又は「人權」とかといわれる、生命現象の根拠を、科学的に言えば、電気・磁気、原子・素粒子、光・電磁波の本質、位置エネルギー・万有引力・重力・原子力・加速度等といわれるものの正体、則ちあらゆる場（時間・空間）の統一原理を、解明した潜在物理である。

▼ 会誌が「カム」とか「アマ」等という言葉を使っている為に、カタカムナは、非科学的な、近代性の無い原始的、又は通俗的民族な低次の思想という印象をもたれるかもしれないが、それは全くの誤解で、科学はまだそれを発見するに至らず、その物理を開発していないから、それに当る用語が無い。それ故やむを得ず、カタカムナ人の示した原語のままを使うしかないのである。

現代科学は、現象系の学として高度に発達したもので、榊崎皐月自身が実証した通り、人類の誇るべき文化である。

私共は、その科学を貶したり、否定したりするものには無い。

ただ、現代科学には、潜在系の物理の開発が欠けている。その為に行き詰っていることを、指摘しなければならぬのである。

真の科学は、現象系だけを研究すればすむものではない。科学者は、榊崎皐月の如く、潜在の存在に気付く直観を、鍛えなければならぬからである。

「カタカムナ」の思想は、今日までの世界の、西洋東洋のあらゆる文化には、まだ無かったものである。

現在の日本語や日本の文化は、その流れには違いないが、「カタカムナ」の思想の伝承は、大和朝成立時に

否定され（カタカムナの文字や文化は滅され）、我々は、祖先の残してくれた、カタカムナの生命のサトリを示す四十八の日本語を使いながら、その真の意味を、失っていたのである。

則ち、遠い祖先のオヤたちの教えてくれた四十八の日本語の真意は、人間として、本当に幸せな生命を全うすることが出来る為の、根本原理（マノスベシ）を示すコトバであったのである。

要するに、カタカムナ文献は、人類として、最高度まで生命力を向上し精神力を向上した人間が、そのイノチとココロのアリかた（マノスベ）と、その根拠（カミシ）を示した物理（サトリ）である。

それこそ、今の世に生れ、病み、悩み、苦しみ多く、救いを求めながら、空しくはかなく死んでゆくしかない我々（人間）にとって、何よりも知りたいことである。

「カタカムナ」は、人間の生命の真の救いとなるものである。

もとより、カタカムナ人が、天然宇宙のすべてを、完全にわかっていたわけではない。ここまでわかったという、基本のものを示してくれたのである。

我々は、それを謙虚に学び、そして、彼らのわかったものを追体験してわかり、更に、その直観によって、まだわからないものを開発して行けばよいのである。

* 人類は、今日まで、人間として、（鯉が鯉として、白鳥が白鳥として立派に生きているように、我々も、一人前の人間として、）生きているつもりだった。

我々の文化には、愚かな歴史が多かったことは反省するが、しかし、人間とは、そういうものだと思い、その他に、人間のあるべきスガタがあるとは考えなかった。

ゲーテのファウストは、『大自然の前に、男一匹として立てたらなあ』と渴望したが、絶望するしか無かつ

た。(「ゲーテのファウストとカタカムナ」特筆号)

『人類は進化の途中で何かが間違ってしまった』といった人はあったが、それなら「マ違わぬ進化」があったか? と考えることはできなかった。(前号補遺4 三八頁)

唯一人、富永半次郎は、真のあるべきスガタに達した人を求め、個人の体験として、釈迦の真正賞、孔子の徳一、ゲーテの転換^{ペンデン}をつきとめていた。

「カタカムナ」に出合い、はじめて、「人間のあるべきスガタ(マノスベ)」というものが、あることを知って、愕然とした。

しかもそれが、(稀にみる天才の)個人の体験のレベルに止まるものではなく、民族の文化として存在した事実があったことを知って、心から驚いた。

我々の現代文明は、古代よりも進歩し、人類は万物の霊長だと思っていた。

しかし、実は、我々は、まだ、(あらゆる生物は、鮭は鮭として、白鳥は白鳥として、皆、立派に生きているのに、我々は、まだ、)人間としてのあるべきスガタを知らぬまま、今日まで夢中で生きてきたことを、知らなかった。

「カタカムナ」に出合って、はじめて、なぜ我々の文化が、今、滅亡の危険に陥っているのか? そのわけが、わかった。

そして、人間は、どんな才能があっても、どんなよい仕事が出来たとしても、それが、最高の人生(人間の生命の最高の幸)とはいえない。人間と生れたからには、人間として与えられた生命の波動量^{チカカ}を、完全に開発して生きる^{オキナ}ことこそ、最高の、(というより、人間として最も基本的な、最も^{オキナ}アタリマエの)生命の幸であり、そのような人々によってこそ、真の人間の文化を築くことが出来る、ということを知り得たのである。

▼ 又、今日まで、我々は、人間だけが、神（や仏）を知り、守られ、畏れ、慕い、祈り、祭っているが、動物は、神（や仏）など知らないものと思っていた。

しかし、カタカムナに出会い、我々は、まだ、真の神（や仏と称するもの）の正体を、正しく知ってはいなかったことを、知らされた。

真のカミとは、人間は知らなかったが、あらゆる動物たちは皆（本能として）知って（持って）居るものであった。

しかし人間も、本能としては知って（持って）いた筈である。それ故、人間の脳も、当然、知ろう（持とう）とした筈である。

どの民族にも神や仏の宗教があったのは、その証拠である。

我々が、今日まで神（や仏）と称して来たものは、あらゆる生物が知らぬものの無い生命のカミを、人間には進化した脳があるから、脳が、知ろうとして求めたものであった。

それ故、純粋なキリスト者（ゲエテがバウチス・フィレモンの夫婦としてとりあげたような）や、貧者の一燈を集めて大伽藍の屋根瓦を寄進したような純情な仏教者たちが、祈り祭った神（や仏と称するもの）は、動物たちが皆知っていた、真のカミと同質のものであった筈である。

しかし、その、彼らが真のカミと信じてきた、大伽藍や教会に祭られていた、神（や仏と称するもの）の正体は、実は、真のカミでは無かったのである。

しかし、そのことを、つゆ、疑う由もなく、真のカミと信じて、祈ることの出来た者は、個人のレベルでは救われた（気持になれる）から、たとえ、その正体が真のカミでは無くても、差支えは無い。彼らにとつては「知らぬが仏」ですむのである。

その人々を、無知だとか、あわれだとか、いう必要はない。

むしろ私共は、その純粋な心情をよみたいと思う。

しかし、彼らの神（や仏と称するものの正体）を信じられぬ者、則ち今までの宗教や哲学によって満足できない者、しかし、人間として一人前に生きたい、と、救いを求める者には、そして、まだ何も知らぬ子供や若者には、真のカミのあることを、知らせねばならない。

その、あらゆる生物が皆知っている、人間の脳も知らねばならない、真の生命のカミとは何であるか？
カタカムナ人は、ソレを知って、「カタカムナ カミ」といつていたのである。

「カミ」という上古代語は、漢字採用以来、「神」という字に当てられた。

しかし、当時の日本人は、一応はそれに従いながら、満足せず、「神道」「神社」「神事」等と言いながら、それだけではおさまらず、一方で、「カミさま」「カミナガラのみち」「カミまつり」「カミ頼み」「カミわざ」「カミがかり」など、「カミ」という声音を保持した。

同じく「カミ」と発音していても、本来の日本の「カミ」は、他民族の「神」とは異なる思想であったことを、我々は、よく知らねばならない。（「カミ」とは オンとクン カタカムナ解説本文 64頁）

▼我々は、今日まで、現代の文化の状態を嘆き、何とかしてこの人類を救う道は無いかと探し求めたが、どうしても成功しなかった。それは、人間とはこういうものだと思っていたからである。

今日まで、我々が救われなかったのは、我々が、真の「人間のあるべきカタ」を知らなかったからである。知らないまま（まだ一人前の人間に発達しない状態で、）進化した脳を使いまくった為である。

今日まで我々は、自分たちが一人前の人間ではなかったことを、そしてその為に、我々が心身の病にかかっていることを、誰も気がつかなかった。それ故、何となく、人間性とはこういうものだと思っていたのである。

我々は、今日まで、本当の「人間のあるべきスガタ」を、誰からも教えてもらえなかった。

人間が、一人前の人間として生きてゆく為には、子供の生れた時に、（ミツゴの魂に、）教えておかなければならぬモノがあることを、我々の親も教師も、知らなかった。

我々の文化には、「人間のあるべきスガタ」のサトリが、まだ、開発されていなかった、ということである。

カタカムナ文献の解説により、我々の遠い祖先のカタカムナ人が、民族の起源の上古代期に、このこと（人間のあるべきスガタのサトリ）を知り、それを、子孫に伝える為に、コトバを造り、そのサトリを示してくれていたことを知って、私共は、心の底から感動した。

今日まで人々が、何となく「人間とは、こう、いうものだ」と思っていたのは、本来の人間のあるべきスガタで無く、彼らの祖先が、人間のあるべきスガタのサトリを持たなかった為に、歪み、病み、狂った状態になっていたものだったのである。（日本民族にはそれがあったのに、失ってしまったのである。）

今の世に、カタカムナに出合った私共は、（自分がどんな生れであろうが、頭が悪かろうが、才能が無かろうが、どんな職業であろうが、又、三十歳の者も五十歳の者も七十歳の者も、）この「カタカムナ」を、（祖先のオヤの教えてくれたサトリを、）一生をかけて、生命のチカラの限り、勉強する以外に生き甲斐は無い、という志を、強く、深く、抱いたのである。

* カタカムナの勉強は、檜崎皐月が体系づけた潜象物理（三号と六号）をアタマで理解すればよいのでは無い。

カタカムナの図象文字を学んで、カタカムナウタヒを記憶すればすむのではない。

もとより、潜在物理を理解し、カタカムナウタヒを記憶することは、必要である。

しかし、それでは、足りるものではなく、それは、 \langle カタカムナ \rangle をわかる為に必要な第一歩なのである。

カタカムナ人が、図象符を造ってカタカムナウタヒを示してくれたのは、それを覚え、理解することによって、私たち自身が、カタカムナ人の思想に相似し、カタカムナ人のような豊かな生命を全うする生き方(マノスベ)が出来るようになる為である。

第二首

第三首

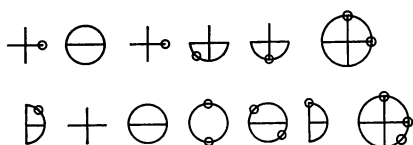
ただアタマで理解し記憶する程度の勉強では、今までの学問智識の習得と変わらず、真の救いの意味が無い。

▼カタカムナがわかるということは、私たちが、図象符を見て、その図象符によって示されているカタカムナ人の生命のサトリの意味を、我が身のこととしてわかることである。

カタカムナ人は、宇宙のあらゆる存在(生命)の根源が何であるか、をつきとめて、カムとアマのフトアマとし、 \langle カミ \rangle という図象符を、第一に示している。又、個体の生命力は、アワとサヌキのフトマニであることを、第二の図象符によって、示している。

私たちは、その図象を習い覚え、彼らのいうカム アマとは何か? アワといい、サヌキというのは、一体、何なのか? まず、アタマでその思念を理解し、それによって、自分自身の存在(生命)の状態を、よくよく観察することである。

なぜなら、我々は、日常、何をするにも、生命の感受性はうわの空の状態で、判断行為の出し放しで流している。ということは、我々は、カタカムナ人がその存在を感受してカム



アマとよんだ、その環境の中に生れ、カタカムナ人がサヌキ アワとよんだその生命力によって生命活動をして（生きて）いながら、彼らのように、カム アマの授かりを知らず（感受せず）、自分のサヌキ アワの生命力の肉体をも知らず（自覚せず）、自分の生命の根元のチカラが、カムからうつされる「アワ」のチカラであるという生命の感受性（生命感）を失い、ただ、現実に出た（「サヌキ」の）、自分の感情や意志のままに流して（生きて）いる、ということである。

それ故、今からは、自分が、実際に何かをして、うまくいったり失敗したりした時、その時の自分の生命活動の状態（自分の感受性と判断力の状態）を、習い覚えたカタカムナのサトリに照して、よく観察してみることから始める、ということである。

▼カムとかアマ、サヌキ・アワ等というコトバは、上古代以来の本来の日本語であるから、我々には何となくわかるものがある。しかし、それは、現代科学ではまだ発見されぬ（認識に出していない）ものであるから、まだ、それに当る用語が無い。又我々は「日本語だから何となくわかる」といっても、それが何であるか、ハッキリとわかってはいない。

（会誌で、カムとかアマとかサヌキ・アワ等と、上古代人の原語のまま、使わねばならぬ理由を、よくわかって頂きたい。）

そして、それらの上古代語を、アタマの先で記憶して聞き流してしまわず、彼らが、カムとか、アマとかとよんで、感受していたモノ（現代科学ではまだ発見されていないモノ）が、どんなものであるかき、ミを以て感受して頂きたいのである。

そのことが無ければ、今までの哲学や科学や宗教の勉強と同じく、観念の知的満足に止まり、カタカムナの本来の勉強にはならないのである。

▼我々は、今までは、一方的に判断行為を出して、病み、悩み、苦しみの多い人生であったのだが、このように、その時、その時の自分の状態をよく観察して、カタカムナに照らして生きていると、次第に、人間の生命活動のサヌキとアワの意味（カムとアマ、カとマの思念）が、ハッキリとわかってくる。

今まで、何も知らずに一方的に生きていたが、我々が、今、ここに、こうして生きている、この自分の生命活動の、現実の判断行為を出すハタカラキを、カタカムナ人は、サヌキといい、そしてそのサヌキは、（それこそ、そのようなチカラのあることを、現代人は、全く知らなかったのだが、カタカムナ人はそのチカラに気がついて、アワといていた、その）アワから出るのだ、という関係がわかってくる。

そして、そのアワこそ個体の生命と精神のチカラの本質、そのものであり、（一般に漠然と、生命力とか精神とか自然治癒力とかといわれるものの正体であり）「人権」とか「実存」とかとして観念的に描いていたものの、根拠の実体であり、そしてそれは、そもそもカム・アマの重合（アウノスベ フトマニ）によって発生し、天然給与（ヤシナヒ アワセ）によって生存を継続させるチカラである。

そのことを、カタカムナ人は、カムウツシ・アマウツシの図象符で示していた、ということが、わかってくる。

そして、その自分のイノチとココロのチカラを、刻々に示しているのが、我々の「感受性」であるから、我々がよりよく生きる生き甲斐は、つねに、自分の感受性を鍛えつつけることであるというわけが、よくわかってくるであろう。「一方的に」といったのは、アワを知らずサヌキだけで、という意味である。（後書二八〇頁）

＊我々の身体（生命活動）は、刻々に、微妙に変化して止まないものである。ふだん我々は、それを意識することなく、何となくよい気持、又は暗い気分のままに流しているのだが、どこまで自分の内身の状態を感受し、どんな判断行為を出すか？それが、感受性の鍛練になるのである。

我々の感受性が、何よりも感受すべきものは、「カタカムナ」の「カミ」のカカワリ（ウマシイキ）である。

少しでも多くソレを感受するような生き方をするのが、最高の幸であり、最も基本的な感受性の鍛練なのである。（何よりも感受すべきモノ 前号補遺4 五五頁、生命力はカミに向う向上性 前号補遺3 二七九頁）

▼ 生物とは、「受けて出す」ものである。

あらゆる生物は、（アメーバから人類まで）「感受性」と「抽象力」の無いものは無い。

「感受性」とは、受けるチカラであり、それは生命のチカラであり、カムのチカラが、個体に入ったアワのチカラである。

「抽象力」とは判断行為を発するチカラであり、個体の生命力（アワ）から出るチカラ（サヌキ）である。

我々の生命力とは、アワ（感受性）とサヌキ（抽象力）である。よい判断行為を出すにはサヌキのチカラを鍛えるだけではなく、感受性を鍛えなければならぬのは、アタリマエのことである。（抽象力と生命カン 十号60頁）

しかし現代人は、現象に出る智能や感情（サヌキ）のことしか知らず、その方のチカラを鍛えることしか、意識に無い。

「感受性」というコトバは知っていても、感受性が何を感じているのか？ 何の為に感受性があるのか？ その物理を知らない。

「感受性」が、あらゆる判断行為（サヌキ）を出す、自分自身の生命のチカラ（アワ）であることを知らない。それ故、感受性の鍛練という意味が、わからないのである。鍛練のしかたも、何かサヌキ的な方法を求めることしか考えられない。（「マワリテメグル」や太極拳の実習を教えられても、体操や運動の程度でしか受けとれない。）

今までの宗教や道徳でも、親に「孝」とか友に「信」とか、人に「愛」を「仁」を等と、よい「サヌキ」を出し、悪い「サヌキ」(欲望・我執・憎悪・怠惰)を捨てることしか考えられない。

よい「サヌキ」(判断行為)を出し、悪い「サヌキ」を捨てる為には、「アワ」を鍛えなければ不可能だ、という発想が無い。

孔子はさすがに「本ヲ務ム」といつている。しかし「本」とは何か？ は、言っていない。

それ故、教えられた者は、欲望我執を捨てて、「愛」を、「仁」を、「孝」を、「信」を、実行しようと思っても、容易に成功するものでは無かったのである。(鬼を払えば福がくるか)感受性について その四 一九一―一九三頁

▼ アワとは、自分の生命が持っている生命のチカラであり、げんに、日々刻々、そのチカラによって生かされているものであるのに、(カタカムナ人はその存在を感受して、サヌキ・アワ(アマ・カム)のフトマニの物理を開発していたのに、) そのアワが、現代人にとっては、最もわかり難いものになってしまったのは、なぜだろう？

それは、実際に存在し、げんに働いているものであっても、人間の目にみえる現象の存在では無いからである。

「アワ」は、今までの、どんな学問技術を勉強しても、わからない。

なぜなら、今までの科学も、あらゆる学問智識も、宗教も哲学も、アワを知らない人々の脳が、つくり出したものだからである。

現象のものなら、科学は、巨大な天体から、極微の(ナノの単位の)ミクロの粒子まで研究しつくしている。しかし、潜象のものは、科学の研究の対象にはならない。

それ故、現代科学の進歩には偉大なものがあっても、アワは、わからなかった。

しかし科学ではわからなくても、(科学が発見しなくても)アワは、則ちカム・アマの仕事は、昔も今も、つねに存在する。

たしかに存在するものであるから、感受性のマトモな者には、その存在を、感受することが出来る。なぜなら、我々の感受性は、潜象からうつされたアワのチカラであるから、潜象の存在を、共振的に感受できる筈である。

げんに自然の生物は、皆、自分のアワをせい一ばい鍛えて、(豊かな生命の幸を受けて)生存を全うしている。カタカムナ人は、その自然の生物の感受性と同等の、マトモな感受性によって、潜象のカカワリを感受し、我々現代人と同等の、進化した脳によって、潜象の物理を開発したのである。(「カ」の物理の発見 解説本文)

▼ 則ち、あらゆる現象は、潜象から発生する。現象は潜象と重合して存在し、目にみえる現象のオクには、必ず潜象が存在する。

電気現象にも現象と潜象がある。

我々人間の生命も、現象の生命体と、潜象の生命力によって生かされている。

我々の生命力は、つねに潜象から補充され、それを感受するのが、我々の感受性である。

感受性は、潜象のチカラ(アワ)である。

それ故、科学では、研究の対象にならなかった(わからなかった)のである。

わずかに、電気現象については、最近になって、トランジスターの研究から、エレクトロン(現象系)のみでなく、ホール(潜象系)の存在が知られている。又、超光速の粒子(タキオン)が発見され、「奇妙サ量」

といわれている。(四号)

天然自然の美(の成り立ち)は、人間が発見しなくても、昔も今も、つねに、存在している。

潜在の存在は、科学が知らなくても、直観の鋭い者には、認識できる。(樞崎皐月は、『将来の科学は、カタカムナのサトリに追隨するしかない。しかし、カム・アマ始元量の存在を認めるには、何世紀もかかるだろう。』といっていた。)

▼ 現代人にも、気圧や気象の変化に敏感な人はあるが、それだけでなく、自分の身体の内臓や筋肉や骨や脳や脈や呼吸等、全身の状態が、平常な調和的な状態から、何らかの変化(差)を生じた時、その気配(信号)を、出来るだけ正しく(アリノママに)、感じとることが大切である。

(正しく感受することができれば、脳は、よりよい判断行為を出して、調和をとりもどすことが出来る。)

この際、間違えてはならぬのは、神経質に、不安や想像や疑問の思考をめぐらすことと、混同してはならないということである。それは、感受性の鍛練では無く、脳の無駄使いであって、それこそ、釈迦のいう五蘊の盛、人間の苦悩の原因となるものである。

「感受性の鍛練」というのは、ミの領域(アワ)のことであり、「神経質に不安や想像の思考をめぐらす」のは、イの次元(サヌキ)である。

「注意が足りない」「一生懸命気をつけて」というのは、脳からの「サヌキ」のチカラである。(感受性の鍛練では無(こ)い。)

我々は、脳で、どんなに「注意」しようと「気」をつけているつもりでも、ころんだり、すべったり、病ん

だり、思わぬ不幸にあう。

それを防ぐ為には、「注意」や「氣」のような脳の指令を出させるモトの、アワ（感受性）を、つねに、活性に（鍛えて）いなければ、不可能なのである。

何をするにも、アワ（感受性）がマトモに働けば、ひとりでオンツカに（電氣的な速さで）適切な指令を出させるから、意識で「注意」しなくても、おのずから「氣」をつけてくれることになる。

自然の動物たちは、皆、その通りに、「アワ」をせい一ぱい鍛えて生きている。それ故彼らは、めったに怪我や病気をしないでいられる。

人間は、なまじ進化した脳がある為、何をすることも、アワが感受して、脳に指令を出させる前に、いち早く、脳から「サヌキ」を出すクセが付き、感受性のチカラ（アワ）を、いちじるしく劣化させてしまったのである。

その為、我々現代人は、進化した脳の「落とし穴」に陥り、自然の生物が皆知っている「アワ」を、最もわからないものにしてしまったのである。（脳の落とし穴と下剋上」感受性について その二 一〇頁、その三 一七一・三六二頁、同補遺 4 一九一〜一九三頁 「脳の感受性」同その四 四三〜頁 「感受性の鍛練」同その四 二〇二、二九一頁等）

▼ 何をするにも、その時の自分の状態（アワ）をよく見てする、ということが、その状態アワを活性ヒラキにして、感受性を鍛えたことになる。

つねに、何をするか、何を食べるか、何を話すか、様々な「サヌキ」を出している自分自身の内身の生命活動の状態（内臓や筋肉や骨や脳や脈や呼吸等の全身の状態）をありのままに感じることが、感受性の鍛練になるのである。といっても、それは、全身の感受性を緊張させることではない。

（緊張させるのはサヌキである。）

感受性の鍛練は、むしろそういうサヌキの緊張を解いて、（無駄な力を抜いて、）感受性が、本来の生命活動の状

態（アワの状態）に、スナホになることである。

（生理学的に言えば、交感・副交感とよばれる神経が正常に働ける状態、ということであらう。）

本来我々の生命は、よりよく生きる方向性を天的に給与されているから、その生命力に、スナホに任せる態度になれば、内身に何らかの異常な変化（差）が起きれば、おのずから感じとることが出来るのである。

それ故、感受性の鍛練とは、無駄なサヌキを出さず、スナホなアワの態度になることである。

「無駄なサヌキ」といっても、出てくるサヌキを、出るな、と、意志で止めても、止まるものではない。

そのサヌキを出しているもの、アワのチカラの方を強くして、（ヒラメキを入れて）つまりカタカムナに照す状態になることが、感受性の鍛練になるのである。

▼ 何をするにもアワになる、ということとは、自然の生物が、皆、やっている、アタリマエの態度である。

人間は、（脳の進化の為に）感受性が退化し、それが出来なくなっている。（何をするにも、アワで受けず、その場の感情で、受けて出してしまふ。）（脳の下剋上）

その結果、人類の生命は滅亡の危期に陥っている。

今、カタカムナに出合い、人間次元に於て（進化した脳があっても、下剋上にならずに、）生物の自然の生き方を全うするスベを知らされ、私共は、それを感受性の鍛練として実行しているのである。（後書二八〇頁）

感受性の鍛練というのは、アワの鍛練である。

アワは、「カムウツシ」を感受する生命のチカラである。

鍛練というとサヌキ的なやり方のように誤解されるが、しかし、何をするにしても、自分の感受性と判断力

を使い放しで流してしまふのでなく、何をしても、又、何を感じても、その時の、それをして、又それを感じている自分の感受性の状態を、カタカムナに照しながら省る（感じとる）のであるから、やはりそれは、感受性の鍛練といつてよいわけである。

鍛練には違いないが、しかし、サヌキのような鍛え方ではない。

アワは、我々が何をすることも、実際に、いつも、本来そこにある、基本的な生命のチカラであるから、その瞬間、パッとヒラメキを入れて、又はジッとソコに思念を入れて、その生命力を起励^{〇〇}してやれば、鍛えられたことになるのである。

それにしても、感受性の鍛練を実行することができる為には、何としても、カタカムナがわからなければならぬ。

カタカムナがわかるということの根本は、アワがわかることである。

アワとは、現代人の感受性が退化した為に、最もわかることの難しいものである。

しかし、我々の脳がマトモな判断行為を出す為には、感受性がよくなければならない。（自然の動物は、一生、感受性を鍛えつつづけている。）

それ故、今、我々は、何としても、脳を逆序^{オシ}して（アワの意味を脳にわからせて）、劣えた感受性を復活^{オシ}させなければならぬのである。

▼ 因みに、アワ尊重の文化の象徴ともいえる、能の女の面は、最もアワ量の多いものであるが、アワは、目に見えるものではないから、サヌキ型文化の人々の目には、「無表情」に見え、能は、難解で、『死ぬ程退屈』なものである。

(しかし、サヌキ型社会にも、アワ量の多い者はあるから、よい能に出合って感動することはある。)

又、人間の年齢を数えるのに、日本人は目に見えぬ胎児期から数え、生れた時を一歳としたが、西欧人は生れた時はゼロ、目にみえてから数える。

日本人も、「アワ」のことを認識に出して知ってはいなかったが、しかし、カタカムナ以来の伝統があったから、子供の育て方にしても、人間関係にしても、生活技法にしても、芸術にしても、何となく、アワ尊重の文化を造って来たのである。

仏教にしても、法然・親鸞の他力仏教は、一切の自力を否定して、生物本来のアワの心(阿弥陀の本願)で生きようという、日本的な宗教になっている。(しかし、カタカムナのサヌキ・アワの物理がなかったから、アワの心といっても、阿弥陀の念仏を唱えるしかすが無く、真の救いにはならなかった。)

又、名人の芸や名工の仕事を「入魂の技」というのも、その「魂」とは、アワのことであった。

日本の歌謡や民謡が、ゆっくりゆっくりと、一音一音を長々と引きのばし、(小節をつけたりして)歌うのも、そこにアワの心をこめているのだった。(それ故、日本人はそれを、こころよい(美)と感じるのだが、感じるアワの無い人や、子供は、退屈する。)

あるいは又、「わざは巧いが心がこもっていない」という時の「心」も、アワのことであった。

それ故、「心をこめよう」と思っても、「魂を入れよう」としても、凡人には、どうすればよいか、わからないのは、「アワ」がわからないからである。アワがわからなければ、「感受性の鍛練とはアワを鍛えることだ」といわれても、どうしてよいかわからないのである。

▼ 要するに、カタカムナがわかるということは、アワがわかることである。

今まで自分の感受性の状態を知らず（無視して）好みにふけて（一方的に流して）生きていたものが、自分の内身の声に気がつき、「イ」と「ミ」を感じ分けることが出来るようになる、ということである。

ということは、自分の感受性が、生命のよろこぶ方向へ、判断行為を出すスベがわかる、ということである。

このようにして、カタカムナの図象符を学習し、その意味を、自分の感受性で、我がミのこととして感受することが出来るようになれば、今までの自分の脳のマ違いに気がつき（眠れる脳・脳の下剋上・脳の落し穴という意味がわかり、）何をするにも、自分のアワを養い（感受性の鍛練）、よいサヌキを出すという、生物として最もアタリマエの生き方が、ミについてくる。

そうすれば、『人間として、最高度まで生命力を向上し、精神力を向上する』ことの出来たカタカムナ人に、近付くことが可能となる。

カタカムナがわかる、ということは、『今の世に生れ、病み、悩み、苦しみ多く、救いを求めても空しく、古事記の神話や宗教の神・仏にも、満足できぬ』という状態が解消されることである。

▼ 本来、カタカムナは、人間に生れたすべての者に必要なサトリである。これを知らなければ、マツトウに生きられぬものである。

しかし、実際には、今、これが必要とする（わかりたいと求める）者は、極めて少い。

カタカムナの無い現代の社会に生れながら、たまたま、まぬかれて障害もなく、当面、一応の健康体に恵まれ、生活にも家族関係にも、悩みをもつことの無い者、又は、心身の健康や生活や人間関係に不安や苦悩があつても、「神」や「仏」や、「宇宙生命」や、古事記の神話等の思想レベルでマに合う者、要するに、今の世に

生れながら、自分の生き方に疑問をもたぬ者(脳の落し穴から出たいと思わぬ者)には、カタカムナは無縁である。それ故、相似象会誌は、カタカムナをわからなければ救われない者だけが、読者になって下さればよい。

則ち、カタカムナがわかるということは、自分の生き方が、今までとは根本的に変わって、(といってもアワの变化であるから、外見には何も違わないが)カタカムナ人の(イヤシロ コトサトリ)(ウルハシ ココロ、アシアトウアン)の生命(生き方)になる(ヨミカエル)、ということである。

カタカムナの勉強とは、そのような人間になる生き方を、(観念で知るだけでなく)日々刻々、生きつつけることである。

* 勉強というと、何か禁欲的な難行苦行的なイメージがあるが、事実、今までの宗教の教えとか人格の修養とかはそうであつたが、そして、その効果は中々上らず、釈迦・孔子ほどの最高の天才の師について勉強しても、完全に修得することは不可能、というのが事実であつた。

榎崎臯月が、彼らの勉強法を、『能率の悪い、無駄の多いもの』といったのは、カタカムナのマノスベのサトリ(勉強法)を知つたからである。

カタカムナのサトリは、後代の聖人賢者のように、自分の体験した真実を言語にして教えただけのものでは無かつた。

カタカムナ人も、自分たちの発見した根本原理を、コトバ化し(図象符や表象物にして)示しているが、それだけでは無く、更に、それを教えられた者が、そのサトリを、自分のものとして、実現することが出来なければならぬ。その為の方法を、彼らは、八十首のカタカムナウタヒとして示した、と、言っている。(ヒビキ マノスベ)

もし、自分の知った真理を、言葉にして言い放したただけであつたら、(今までの聖人賢者の教えのように)、それを教えられた者は、アタマで理解しただけで、真の救いには、なるものではない。

なぜなら、アタマで理解して、わかつた気になつても、それは観念の満足にすぎず、(大ていの人はその満足で片付くのであるが、孔子の場合の顔回のように本当に実行しようとした者は、方法がわからず、苦悩の極、空しく死ぬしかなかつた。)それでは人間の真の救いにはならない。真に救われる為には、理解したサトリを自分のミにつける方法(マノスベの示し)がなければならぬからである。

そのような示しは、今まで、世界のどの文化にも無かつた。

▼ さきに『カタカムナの日本人には、古事記の神話や宗教の神仏のような観念をつくり出して、難行苦行的な修養をさせる必要は全く無かつた』(七頁)といつたのは、そもそもカタカムナの文化の本質が、子供の育て方、教え方からして、現代人のように、サヌキ(脳のイの次元の能力)を鍛え、サヌキの(欲望の)満足を目ざすものではなく、サヌキを出すモトのアワの物理(カタカムナの潜象物理)を彼らは知つていたから、何ごとにも、アワを養い鍛え高める生き方を、(民族の伝統の文化の根拠を)確立していたということである。

それ故、現代人のように、サヌキ型文化で育てられて成人してしまつてから、その弊害を防ぐ為に様々な属性をもつ神や仏(太陽神や唯一神や三位一体、阿弥陀仏や薬師如来や千手観音等々)を造り出して祈らせ、難行苦行して我執欲望を封じさせる、というような必要は全く無かつたのである。

▼ そもそも人類の原始社会は、どの民族でも、アワ性尊重のオサ文化であつたが、しかし現在の文明国といわれる民族の文化は、すべて、といつてよい程サヌキ性優先の「サヌキ型社会」であり、古代の(アワ型の)文化は、現代文明(サヌキ型)に出会えば、忽ち敗北し、人類の文化は、発達すれば皆、そうなるしか無いもの

(人間は、こゝう、い、う、もの)と、人々は思いこんでいる。

それ故、文明国(サヌキ型社会)に住む人間が、原始(アワ型社会)にあこがれ、自然生活エノコロシを求める者であっても、カタカムナのような文化(原始アワ型でも現代サヌキ型でもない、フトマニ型とよぶ文化)が、現実
にありうるとは、現代人は誰も考えもしない。

日本の文化は、まぎれもなく、このカタカムナの文化の伝統であった。しかし、日本人自身はそのことを意識してはいなかったから、明治時代、西洋のサヌキ型文化に出会い、大きなカルチャーショックを受け、ひたすら彼らに追随し、その為に、伝統を失い、今までの祖先の恩恵は裏目に出ることが多かった。

日本人はそのわけがわからず、彼らの文化へ劣等感をもちながら、しかし、『日本の文化は彼らとは違う』と、何となく思いつづけて来た。

その彼らの文化との本質的な異いを、則ち、日本人の文化の根拠を、私共は、カタカムナ文獻の解読によって知り得て、今までの「日本のX」が、はじめて解決されたのである。(別冊「感受性について」「日本のX」)

▼ カタカムナのサトリには、イヤシロ ケカレ イキココロ カエシ カヘシ等というコトバはあるが、(それは、生命力の向上と欠亡、発生と還元等の、生命のありのままの真相アリアケを示すものであって、)死を恐れ、無常をいとい、死後の永遠の生命を希求するような思想は全く無い。第一、我々のいう「死」に当る表現は無い。もとより「死」という状態は知っているし、死なれば悲しいことも当然である。しかしその「死」の状態について、彼らの感受性コウジュウと判断力ハndanは、我々のような「死」のとらえ方、考え方をしているはなかった。

これは、「生命」というもののとらえ方、考え方が現代人とは違うのであるが、その違いが、単に、脳の二次波動(観念)の多様性、という程度の違いでは無いことに、私共は深い感銘と反省の念を覚えるのである。

自分たちの生命の真相(根拠)を、マツトウに感受したカタカムナ人の、「死」というコトバを、持たなかつ

た、)イヤシロ ケカレ、イキココロ、カエシ カヘシの思想と、人間にのみ発達した脳の(欲望や我執の「五蘊盛」の)二次波動の観念によって造り出された、「死」にまつわる思想との、根本的な違いを、読者も、どうか、認識に出して頂きたい。

▼ 人間に進化した脳がある以上、「死にまつわる思想」をもつことは、仕方ないことである。

しかし、それだけが、人間の思想であるかのように思うのは、マ違いであった。

死を恐れ、忌避し、闘う思想は、科学技術を発達させ、高度な(サヌキ型社会の)現代文明を現出した。しかしそれは、人類を滅亡へ追い込む危険なものである。

反対に、「死」を永遠化し、現世の苦を解消する場として、そこに(則ち、極楽浄土や宇宙生命や、又「霊」や「無」の境地に)帰一する思想は、人々の死の不安を救う役に立つことは確かである。

しかし、それはその思想に同調できる人だけのことで、人間の社会を救いうる思想では無い。

しかし、現代人は、人間には、このような(サヌキ型社会の)考え方、生き方しか無いと、皆、思いこんでいる。

しかし、自然の動物がアタリマエに生きてるように、人間も、本来のマトトウな生命カンに基いて、その生命カン(感受性、則ちアワ性)を養い鍛えてスナホに生きるスベを知れば、死を恐れ永遠を求めるような「死にまつわる思想」などムリに持たなくても、イヤシロに、(生命のよろこぶ生き方に、)なることが出来る。そうすれば、進化した脳も、その方向軸に向けて働くから、死を恐れ忌避し闘うような、サヌキ的な(平和な生命を求めながら生命を亡ぼすような)、反自然の生き方にはならない。

今、私共は、カタカムナに出合い、人間に、このような生き方があったことを、はじめて知らされたのである。(アタリマエに生きるマノスベ、)

▼『カタカムナの勉強は難行苦行では無い』というのは、それは、禁欲に努め、悪や死と闘い、善行に励め、というような、サヌキ的なムリな鍛練では無く、様々な判断行為を出させる生命の潜在能力（アワ性）を鍛え養って、おのずから、低次の判断行為（欲望や自己本位のサヌキ）を出さなくなるようになるようになる（生命力の向上する）方法だからである。

今までの宗教者や聖人賢者といわれた人も、自分は天才によって、アワ量を増している、物理としてアワのことを知ってはいなかったから、現実判断行為を出すサヌキのチカラのことしか考えず、難行苦行的な、サヌキを鍛える方法をとるしか無かったのである。

▼アワを養うといっても、我々は、はじめのうちはどうしてもサヌキ的になってしまふ。アワを鍛える、という意味を知って、自分の脳を逆序して、何をするにも、ヒラメキを入れて、自分の感受性を起励すればよいとわかっていても、実際は、つい、アワの心を忘れ、その場の感情や欲望のままにサヌキを出してしまい、（病いや失敗の悪いサヌキが出てしまつてから）、改めてアワの心に気がついて、悪いサヌキの後始末をする、という有様になることが多いのであるが、そして又、アワの鍛練は、アワを起励することであつて、「よく注意して」とか「一生懸命気をつけて」というようなサヌキの鍛練ではないから、「難行苦行」になることは無いのであるが、しかし、何をするにつけても、スナホなアワの心になって、その場の感情に、ふけらぬように、（悪いサヌキを出さぬように）と努める、気持があるので、最初のうちは、何となく、今までなら出る筈の感情が抑えられる、気配があつて、肉体的・心情的に、辛抱我慢の重圧感が、かすかながら、浮ぶことがある。

しかし、このようにして、時々、脳の悪いクセ（病いや失敗の悪いサヌキ）を出しながらも、だんだんこの生き方になれてくると、はじめの頃の「抑えられる気配」は無くなり、その代りに、例えば、道を歩いてい

て、もしこの生き方を知らなければ、つまづいて転ぶところを、無意識のうちに、(自分ではヒラメキを入れた気は無いのに、)ひとり、で、アワがひらめいて、足がうまく、またいでくれている、(だから転ばずにすんだ、)ということに、気がつくようになる。

何か食べる時、何かする時、何か取りにゆく時、ひとり、で、(自分で入れた気は無いのに、)アワがヒラメいていた、(だから、以前のように胃腸を病むこともなく、怪我もせず、呆けの進行も止っている、)ということにも、気がつくようになる。

そうなってくると、(実は最初の頃の「抑えられる気配」のオクの方で、たしかに、自分の生命のチカラが、少しずつ鍛えられ、高められてきたものがあるので、)よく自分の感受性を澄ませてみると、自分の心が、自分のその状態を、ひそかによろこんで、(イキイキとして)いるものがあることに、気がつくのである。

▼ しかしながら、その状態とは、何も特別のものではなく、思えば、自然の動物たちの生き方に近いものである。

則ち何をすることも、自分の感受性をせい一ぱい働かして、その場の状況を、敏速に、正しく感受し、即座に脳に必要指令を出させる、という生き方は、生物の、最もアタリマエの生き方である。

小鳥の雛を育ててみても、おながが空くとピーピー鳴いてせがむが、満腹すると、ピタリと口を閉じて見むきもしない。動物は、(人間の子も赤ん坊のうちは、)いくら好きなものでも、おながが空かなければ食べようとなし、嫌なものは、決して口をあけない。

感受性に正直に行動し、人間の大人のように、空腹でも無いのに、義理やその場の都合で、則ち自分の感受性はうわの空で、もっぱら脳の意向で判断行為を出すというようなことは無い。

食べもののみでなく、万事にそうである。

人間は、食べものもとより、万事に、感受性^アはうわの空で、脳^{サキ}の力が支配的である。

我々は、生物の^{〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇}アタリマエの生き方を失い、アワの力を鍛えることを忘れ、サヌキの力を、ふりしぼることしか知らなかった。

そして、それが人間、というものだ、思いこんでいた。

▼今、我々が、「自分の心がひそかによろこんで（イキイキとして）いる」と感じる時の気持は、大自然の山野の中で、自由に無心に、走り、飛び、安らいている時の、自然の動物たちの感じている気持に近いのではないか？

人類の脳が進化した為に、我々は、そういう生物のアタリマエの気持を、ほとんど失っていたが、今、自分は、少しばかり、自然の動物になったような、今まで知らなかった、やすらかな、やさしい、おだやかな気持になっている。

動物たちはそのことを、何も意識せず、（大自然の大きな「美」の中に、自分もただ、その中の「美」の一つとして）生きていくだけである。

我々は、それを見て「美しい」と感じ、「何ともいえないぬやすらかで、やさしい、おだやかな気持」と感じ、そしてそれを「生命の幸^{ヒコトコ}」（よい気持）と、感じるのである。

それは、「よい気持」といっても、生命^イの充足感であるから、極めて微波動次元のもので、人間の（サヌキ性の）、欲望の満足感のような甚しい感情では無い。

人類の脳が進化した為に、我々は、自分の脳に支配され（脳の下剋上）、生物のアタリマエの感受性を失い、サヌキな感情（欲望の満足感や欠亡感）しか知らず、生命^イの充足感（すこやかな、スナホな、おだやかな、や

さしい気持ココロの感受カウを、無くしてしまっていたのである。

しかし、このアワの心の充足感こそ、どんなサヌキの満足感よりも、**真実の生命マコトノイハの幸コトに違ちがひない。**

人間は、進化した脳があっても、アワをマツトウに鍛えつつけていれば、**脳ハシは邪魔ジャマをせず、正しいサヌキを出す為ために働くチカラになってくれる。**それこそが、**本当の、「人間のあるべきスガタ」であるに違ちがひない。**

▼ 一般の、サヌキを鍛える難行苦行的な勉強にしても、よいサヌキマツトモな判断行為を出そうと志して、本気で修行すれば、**(サヌキを出すチカラはアワであるから、) サヌキを本気で鍛えれば、当然、アワが鍛えられることになり、結果的にアワ量を増すものである。**(孔子や釈迦やゲーテのように。)

しかし大ていは、本気のサヌキでは無く、**欲望や観念の満足の為の修行(二次波動)であるから、アワを通すさず、大脳次元でのサヌキになってしまうのである。**

それ故、肉体的にはきびしい難行苦行であっても、**精神マツトモ的には、満足のよろこび(充足感・優越感・陶醉感)というものはある。**

(というより、大ていは、そういうよろこびしか知らなかった。)

しかしそのような「サヌキの満足」とは、本質的に異なる、この、サヌキのオクの、**生命の根源のアワのココロの高イハシまツってゆく時の、ひそかなイキキとした生命いのちのよろこびの実感じつかんを、読者は、どうか感じ分けて頂きたい。**

▼ 人間には脳があるから、欲望の満足、観念の満足を求めるのは当然のことである。(修行や勉強の方法を求める者も、**サヌキ的な教えを期待している。**)

しかし人間の真の幸は、そのようなサヌキ的な満足では無く、**アワの生命カンの高揚たかまりである。**

自分の生命ウツシツのイヤシロイヤシロの実感こそ、宇宙環境ウツホクキョウに生かされる生物に与えられる最高アタリマエの幸である。

人間も、(進化した脳の能力ノウリキにふりまわされる愚かしさを脱皮して、)生物の、アタリマエアタリマエの(マノスベマノスベ)の生き方によみかえれば、この最高の幸を、受けることが出来る。

「サヌキ的な満足」よりも、「アワ的なよろこび」を大切にし、生命のよろこぶ生き方をする為の根本原理を、則ち、「脳の進化した動物」である人間の、あるべきスガタのサトリを、人類の文化の発祥の上古代期に、カタカムナ人は、開発してくれていたのである。

そして、そのような生き方をさせてくれるカミ(カム・アマ)の恵みを、何よりも有り難いものとして、敬イマヒヤツレい畏れ、その恵みをスナホスナホに受けるマノスベを、「カタカムナウタヒ」として示してくれていたのである。

これこそ、本来の日本人の心であり、日本の文化の伝統の根柢である。

私共のカタカムナの勉強ケンケンというのも、このアワの心を養い鍛える(生イ命ヤツのよろこぶ)生き方を、続けることなのである。

本来の日本の文化はカタカムナ文明であり、決して特殊なものではなく、人類の本来のありべきスガタのものだったのである。

▼カタカムナのサトリ(カタカムナヒヒキマノスヘシ)は、人類最高の根本原理であるから、それをアタマで理解しただけでも、最高の知的満足を得ることが出来る。

しかし、いかに最高のサトリであっても、観念の満足に止まれば、真の生命の救いには結びつかない。(まだ、本当に救われてはいないのに、観念の満足ですんでしまう者を、「知らぬが仏」の「陶酔次元の幸せ」という

わけである。」

觀念の理解に満足せず、刻々に生かされている我が身の命のチカラの向上のよろこびを自覚することが出来るのでなければ、(則ち「カタカムナ ヒヒキ マノスヘシ」を「アシアトウアン」になって「ウツシ マツル」のでなければ、)カタカムナの勉強の意味が無い。

「カタカムナをわかるとはアワをわかることである」とか、「感受性の鍛練が最高のスベである」などといっても、脳の落し穴に陥っている現代人の耳には、そんなことが、釈迦も孔子も言えなかつた人間の最高の覚であるとは、到底、納得されぬであらう。

しかし、その脳の落し穴から、やっとの思いで脱出した者は、人を救うとか世を変える等と、大きなことを言う前に、何よりも、自分自身が変らなければならぬことに気がつく。

今、私共は、「人類」とか「文化」とかという大きなスケールでは無いが、先ず、個人の 実験として、この、カタカムナ人の教えを、実践し、読者にも、それをうったえているのである。

(一九九三年七月三十一日 宇野)

カタカムナのウツシマツルの実験人間として生き抜く以外に生き甲斐は無い、ということになるものである。

(1993年12月 宇野多美恵)

高度の哲学のようなものではない。

読者は、どうか、今までの先入見（宗教・哲学・科学の書を読むようなアタマ）を切り換えて、自分のスナホな生命の感受性を起励する気持で、読んで頂きたい。

* 筆者が、カタカムナ解説の仕事の中で、このような私事にわたることまで書くのは、自己を顕示する為では毛頭無い。

「生命」というモノの^{サトリ}真実を、読者に、本当にわかって頂きたい為である。

筆者は、カタカムナに出合って以来、（^{サトリ}榎崎臯月に鍛練を受けて以来、）自分を、カタカムナのサトリの 実験人間 と思って生きて来た。

それは、何としても、この実験を成功させ、よき天寿を全うしなければならぬ責任のある、（^{サトリ}榎崎臯月に対する恩カエシ、則ちカタカムナのウツシマツルの、）実験である。

それ故、自分のわかったことを、せい一杯、^{コトバ}文字にして書くと共に、自分の実習実験の状態を、ありのままに伝えることが、読者の参考になると思ったのである。

しかしながら、筆者の実験には、大きなハンディキャップがある。

いかに、「人間のあるべき^{スガク}生き方がわかった」といっても、そして、「生物のアタリマエの幸（生命の最高のヨロコビ）を感受できるようになった」といっても、年すでに七十歳を過ぎ、且つ、筆者の^{カミダ}生命体は、長年、カタカムナを知らぬ無知な脳で酷使した為に、心臓も、骨も、肺も、肝も、腎も、胃腸も……、極度に悪くなり、体重も 34 キロを超えられぬ有様である。

今になって、いかに実習・実験に努めても、この衰弱した身が、どこまで復^{ムカ}活^{カキリ}してくれることか、おぼつかない。

筆者がどのような死に方をするか？（交通事故や天災ということもあるが、）とにかく、よく見とどけて、自分たちの参考にしてくれるようにと、後継者に約束している次第である。

今の世に生れ、カタカムナに出合った者は、「朝に道を聞いて夕べに死すとも可なり」などと言ってはいられない。

の脳の感受に基いて（カムウツシを受けて）、シッカリとした方向性をもって（マノスベに照して）、大脳^ス思考^キ力を働かすことによって、発揮されるものである、ということが、ハッキリとわかったのである。

我々は、自分の感受性を、正直に、せい一ばい鍛える生き方を続けていれば、進化した脳があっても、邪魔をせず、（今までのように下剋上して勝手なサヌキを出すこと無く、）マツウな（敏速で正確な）感受にしたがって、マトモなサヌキ（判断行為・直観）を出す為に、忠実に働いてくれるようになる。

これこそが、進化した脳をもつ人間の、本当の、あるべきスガタ であるといっ
てよいであろう。

* 現代文化には、様々の宇宙論がある。彼らは天体を研究し、化石を調べ、宇宙のはじまりを論じ、電磁力・核力・重力などをいう。又生物学・心理学・歴史・経済・文学・芸術・哲学・宗教など、様々の研究がある。しかし、現実の自分の「生命」、現在の宇宙の「存在」の事実を、正しく^{アリノママ}解明したものは、まだ無い。

いかに高度な理論学説と雖も、それを知ったことによって、自分自身の生命が、完全発揮されて（真実の生命の幸を得て）生きることが出来るようになるのでなければ、意味のないものである。

「カタカムナ」は、今、自分たちの生きている、その生命の事実が、何であるかを、アリノママに、（観念の研究では無く、実際の感受に基いて）解明した、直観の物理 である。

それは、今までの有史以来の人類の文化とは、全く異なる発想 なので（感受の無い観念の研究では無いので）、それが、本当に、真実のものであることを確かめるまでに、私共は、非常な努力を要した。

ようやく、僅かながら、カタカムナ人と相似の感受を得るに至ったので、その真実であることを証明する、筆者自身の私事にわたる事実まで、述べているのである。

しかし、このカタカムナのサトリは、孔子も釈迦も言えなかった人類の最高の生命の物理である、といっても、今までの（サヌキの頭で期待するような）

うすることができるであろうという、生命の自信^{ニホヒ}というか、安心^{ヤスラガ}というか、明るい生命カン^{ニホヒ}になっていることに気がついた。

そうしたら、孔子が、『^ミ視るは明を思い、^キ聴くは聰を思い、^{キヤク}貌は恭を思い、』といった言葉が、改めて念頭に浮んだ。今の自分の動作・態度は、まるで、「見るは明、聞くは聰、形は恭……」と、やっているように見えるではないか？ と、思われたのである。

孔子が「見る」を「視る」とし、「聞く」を「聴く」としているのは、単なるサヌキの「見」や「聞」ではなく、アワの心で「視」「聴」という気持があったと思われる。

それにしても、サヌキ・アワの物理^{キツクキツク}（感受性の鍛練）を知らされなければ、「視るは明を思い……」といわれても、サヌキで一生懸命注意して見、聞くことしか考えられない。

実際に、孔子の教えた方法は、筆者のようなアワの鍛練ではなく、ことごと、一々、^{アワ}脳から、自分の感受性（目や耳や口や……）に指令して努力させるのであるから実践が難しく、極めてシンドイものである。しかも、孔子の教えには、宗教のような観念の陶醉をゆるす思想は無い。

それ故、孔子の教えを最も正直に実行した顔回は、その難しさに苦しみ、『やめんと欲して能はず、既に吾が才をつくす』と力づきて、師より先に生命を失った程である。

筆者も、カタカムナに合うまでは、顔回のような苦しみであった。

今、筆者は、同じように孔子の教えを実践しているように見えるが、しかし、実際は、全く苦しみは無く、むしろ逆に、生命のよろこびと安らぎを得ている。

檜崎皐月が『本当の勉強や修業というものは難行苦行ではない、楽しみながらの勉強、明るい心の鍛練でなければ、ホンモノでは無い』といわれた意味が、はじめてわかった気がした。

又、檜崎皐月の言った「直観」とは、（筆者は四年間、本当の直伝で、直観の鍛練を受けたのであるが、（八号）その直観とは、自分の感受性^{アワ}を鍛え、そ

は、サヌキのチカラだけを鍛える方法では、極めて能率が悪い。

孔子が「本を務む」といった通り、「サヌキ」の本の「アワ」を鍛える生き方を知ることが、最も能率の良い、人間の本当の勉強法である。

(しかしその為には、我々の脳が、サヌキ・アワの(アマ・カムの)物理を知り、自分の感受性が、カムを感受できるように、教えなければならない。)

* 釈迦も、さすがに、死の直前、アワのことに気がついて、(三十五歳の初転法輪以来、四十五年間、五蘊観の実習をつづけ、死の三カ月前、)「ヴァダムマーサンカーラー」といつている。

しかし、この場合も、自分のアワの「ヴァダムマーサンカーラー」に気がついただけで、「ヴァダムマーサンカーラー」とは、何であり、どうすればよいのか？(どうすれば「ヴァダムマーサンカーラー」になれるのか?)という説明は無い。

それ故、自分の体験(ヴァダムマーサンカーラー)を、弟子たちにわからせることが出来ぬまま死んでしまい、弟子たちは、自分が師の心を誤解しているとは、知る由もなく、釈迦の教えは、小乗・大乘の「仏教」として、伝えてしまったのである。

* 因みに、筆者は、この「アワ」を鍛える生き方に気がついて以来、しかし実際には、ついアワを忘れ、その場の「サヌキ」でやってしまい、又しても、又しても、病気や失敗や、絶望感等の、まずいサヌキに落ちてしまってから、又、改めて気がついて、自分の感受性を起励する、という状態をくりかえす有様であったのだが、とにかく、せい一杯、この生き方を続けているうち、ある時、自分が、何かする場合、(ふと立って、歩き出す時、重い物を持ち上げる時、)無意識のうちに、アワの心でやっている、(つまづくところをうまくまたぎ、落すところをうまく腰を入れている、)つまり、何をするにも、自然の鳥や動物のように、(いつもサヌキに前駆して、)アワの心でサヌキを出す、という生き方が、かなり、ミについて来たことに、気がついた。

そして、この生き方を続けて行けば、若い間はもとよりのこと、体力が老衰して来ても、病気や怪我や失敗や絶望感や毫碌に落ちることを防ぎ、寿命を全

であるから、(感受性の劣化した)人間には、現象に出た形態(サヌキ)だけしかわからない。

しかし生物は本来、「感受」がなければ「判断行為」は出ないものである。それ故自然の動物たちは、せい一ばいアワを鍛えて、人間の気付かぬ「カム」を感受して、生命によい「サヌキ」を出して、(オノズカラ、マノスベに)生きている。

人間は、「アワ」のことを知らないから、(「カム」を感じる感受性を失ったから、)自然の動物のように(マノスベに)生きられなくなってしまった。

そこで、宗教や道徳は、悪い「サヌキ」を出さずに(欲望我執を捨てて)、よい「サヌキ」(「愛」や「正義」「平和」)を出すこと、則ちサヌキを鍛えることばかり教えるしかなかった(異常バランス)。

孔子は、さすがに「本ヲ務ム」といっているが、本とは何か、は、言っていない。それ故、人には「仁」親には「孝」君には「忠」友には「信」等と、いかにも具体的に教えているようだが、実際に、その教えを実行しようとすれば、どうしてよいかわからない。

「見るは明を思い、聞くは聰を思い、形は恭を思い……」といわれても、それを本気で実行しようとすれば、とても苦勞が甚しく、しかも、(顔回ですら、)成功しなかった。

* 思えば、「愛」も「仁」も「孝」も「忠」も「信」も、皆、アワの心を鍛えることであった。

アワの心で、親に向えば「孝」になり、人に向えば「仁」「愛」になり、君に向えば「忠」になり、友と交れば「信」になる。

「見るは明を思い……」というのも、一々意識で指令して注意しなくても、何をするにも、スナホなアワの心で、その場その時のヒラメキを入れる生き方になれば、当然、見るものには「明」になり、聞くことには「聰」になり、何をするにも態度はおだやかに、やさしく、「恭」になるものである。

よいサヌキ(愛や正義や仁や孝や信や、明や聰や恭や……)を出させるに

それ故にこそ、私共の「マワリテメグル」や、カタカムナの太極拳のように、それを毎日正直に実習し、習熟して行けば、おのずから、日常生活のあり方（身体の動作や、判断行為の定め方）に及んで行き、何をするにもアワのヒラメキが前駆する という、アタリマエの生き方が、ミについてくるのである。

「アワ」は、誰でも、自分のもっている生命活動のチカラである。

どんな高貴の身分の天子や王者でも、自分の生命活動のサヌキは、（例えば自分のガスや排泄物のひとつでも、）自分のチカラで出さねばならぬものである。たとえ医者や薬の力を借りたとしても、自分の生命力がなければ、生きられない。

生物はすべて、その生命のチカラによって、あらゆる生命活動をしている。（その生命のチカラが「アワ」であることを、現代人の脳が、まだ、認識に出していないだけである。）

それ故我々は、自分の脳に、アワのことを教えて（知らせて）、自分でせい一ぱい工夫して、「アワ・サヌキ」の実感を感じることが、アワを鍛える第一歩となるのである。

＊ 生命活動の感受性のチカラは、「アワ」である。

「アワ」とは、「カム」を感じ、カムウツシを感受する、生命の感受性のチカラである。

あらゆる現象は、「カム」からの変遷物であるから、あらゆる現象のオクに潜象がある。

たまたま、その「カム」の気配に、モロにふれた時、（例えば嵐や大地震の前の山鳴り・海鳴り・地鳴りとか、アルプスの朝日やヒマラヤの夕陽などの、あまりに美しい荘厳な風景とか、）我々の感受性は、動物本能的な畏れ、不思議サ、怯えを覚える。（科学にも「奇妙サ量」という言葉がある。（四号）又、日本語の特徴の敬語の起源も、この、カムの気配を、畏れ敬う心から出たものである。）

しかし、「カム」は、平素は目に見えないし、極めて微波動次元のカカワリ

もし子供のうちからこのことを知って（教えられて）生きていたら、筆者も現在のような悪い身体になることはなかったと、つくづく思われる。

優秀な才能のある人々が、立派な仕事を成しとげながら、しかし自身は、癌や事故で、まだまだ残念な生命を失うことになるのも、結局、アワの鍛練が欠亡していたからに違いない。

* カタカムナに出会い、サヌキ・アワの物理を知り、アワを鍛えればよい、とわかってみても、しかし我々は、日常生活の中で、何を、どうすればよいのか？ なかなかわかるものではない。

（わかってしまえば、「孝」とか「愛」とか「仁」とかという、よいサヌキを出すのは、アワの心になることであり、「見るは明を思い」「聞くは聰を思い」というのも、アワを鍛えればよいということであったと、気がつくのである。）

孔子（やキリストや釈迦）も、自分は大きなアワ量があるから、仁や愛や正覚のサトリを得たのであるが、アワのこと（イノチの物理）を知らなかったから、自分のわかった仁や愛や慈悲の心を、人にわからせることが、どうしても難しかった。

* もともと我々現代人は、「アワ」がわからなくなっていたから、「サヌキ」を使いまくるしかなかったのである。そしてアタマで、いかによいサヌキ（愛や無我の）を出そうと苦勞しても、なかなか出来るものでは無かったのである。

アワを鍛えるには、何を、どうすればよいのか？

それは、「アワ」を、よくわかるしか無い。

「アワ」とは、自分の生命活動のチカラである。何かをする時、その判断行為を出させるチカラである。その時、その場の、自分の判断行為は、自分のアワから、出さねばならぬものである。

アワをわかった人に一日中傍についてもらい、ソレ！ ソレ！ と、一々教えてもらうわけにはゆかない。たとえ教えてもらったとしても、それを出すのは、自分である。何としても、自分のチカラ（アワ）で、出さねばならぬものである。

キを出してくれるようになるわけである。

* ただ、ここでマ違えてはならぬのは、「一々の動作に思念^{ヒラメキ}を入れる」というのは、これは、『一生懸命に注意^{アツマ}して、気をつけてやる、』というサヌキの鍛練ではない、ということである。(思念は脳の感受性、則ちミを入れること)

一般の人は、鍛練といえは、サヌキをきたえることしか知らず、アワ(感受性)をきたえるということは常識にないから、思念を入れる、ミを入れる、心をこめて、アワの心になって、等といっても、なかなかわからない。

例えば、水泳や自転車・自動車や、又太極拳などを習う時も、もっぱら、目にみえる形(サヌキ)を練習するが、なれてくると、感受性はウワのソラで、ひたすらサヌキの正反でやってしまう。

生命活動は、サヌキとアワのフトマニでなければ発生しないから、サヌキをよく鍛えるということは、当然アワも鍛えられている。しかし、つねに感受性を鍛えるという物理を知らぬと(感受性はウワのソラという状態になってしまふから)、サヌキの能力がいかに優秀でも、思わぬ失敗をしたり間違いを犯したり、健康によかった筈のものが、逆に身体を悪くすることにもなる。

* 感受性の鍛練は思念^{ヒラメキ}であるから、^{アツマ}努力も^{ヒラメキ}時間もかからない。

張一中老師の太極拳が、あれほど美しくゆっくりと動いていたのは、サヌキがゆっくりやっていたのではなく、アワをこめていたのである。

日本の古謡や民謡が、一音一音をあれほどゆっくりと長々とひっぱるのも、(アワの未熟な子供の頃は、ただ退屈に感じたものだが、)そこに、アワをこめていたのである。

自然の植物や動物のスガタが、あれほど美しいのも、アワ量が大きいからであった。

そして、このように、つねによい姿勢で動いて(アワを鍛えて生きて)いることは、骨や脳や全身の健康の為に、非常に大事なことなのである。

悪いサヌキ(怪我とか病気とか、交通事故とか、争いや様々な不幸など)を、未然に防いで、生命を全うすることになるのである。

気持」に近い状態をもたらすことになるのかも知れない。しかし、それなら、釈迦の三十五歳の正覚の場合と同様である。瞑想の間は悟りの境地にあるが、三昧を出れば（食事をしたりトイレに行ったりすれば）、アートマンは無くなることに気がつき、釈迦は、このヨガの行法をやめたのである。

たしかに、ヨガを行じている間は、正常なイノチが発揮されるわけであろう。インドには、一生、そのポーズをつづけるヨギがあるという。

又、たしかに、病気を治すとか健康法とかの目的の為に、有効なものがあるだろう。それ故、観念の陶醉で満足される人には、ヨガも結構であるが、アワを鍛えるという意味では、能率のよい方法では無い。

その点で、カタカムナの太極拳が、能率のよいアワの鍛練になるというのは、太極拳の型は、人間のあらゆる動作の最も日常的な、基本的な、そして最もマノスへのカタチを、連ねて造られているからである。

我々は、その型（サヌキの動作）を習うことで、アワのチカラを鍛え、それに習熟すれば、（そのカタカムナの太極拳の練習をしている間だけでなく、練習をやめても、）日常生活のあらゆる動作に於て、アワを鍛えてサヌキをマノスへに出す、という生き方が、ミについてくることに、通じるのである。

ということは、日常の動作、何をするにも、立つ時、歩く時の姿勢はもとよりのこと、朝、起きて顔を洗う時の動作、掃除や洗濯、料理、又は庭や畑仕事をする時の姿勢、ものを取る時、ものをもって何かする時、ものを打ったり投げたり、しゃがんだりする時の姿勢、又、座って読書や書きものをする時の姿勢、又は、スポーツや自転車や自動車に乗り、運転する時の姿勢など、今までのように無意識に、悪い姿勢のままで、（脳^{***}の欲求満足の為に）行動するのでは無く、何をするにも、ふと気がつく時、太極拳の姿勢になっている、ということに、気がつくのである。

このことは、水泳でも自転車でも、はじめは一生懸命練習するが、なれてしまうと、無意識にやれるように、太極拳も、はじめは一々の動作にアワの思念を入れて一生懸命練習するのだが、習熟してくると、日常の生活の中でも、おのずから、感受性が、その姿勢を覚えていて、自動的にアワが入ってうまいサヌ

その美しさは「^ア生命のよ^コこび」のスガタであるといっても、それは、人間のサヌキ（アタマ）が期待するような、（プラスエントロピーの恍惚感のような、）めざましい快感感では無い。サヌキ（アタマ）の人間には気のつかない、本当の^ア微波動の、^ア微波動の^ア生命感である。

それ故、つねに、自分の^ア微波動（アワ）を、自然の生物のように、鍛え、養っていなければ、感受できないものであるが、しかし又、我々のような現代人の凡人でも、（張一中老師のような天才でなくても、）^アアワと^アサヌキの物理を知って、マトモに、アワを、養い鍛えていれば、たしかに、感受できるものである。

そして、自然の花や動物たちは、大自然の大きな「美」の中で、自分も又、ヒトツの「美」として、（せいーばい、マノスベの共振波動を出して、）生きていだけであるが、人間は、（脳があるから、）それを「美しい」と感じ、「^ア生命の高揚のよ^コこび」と感謝し、更に、それを^アコトバにして（アワと^アサヌキの^ア重合の^ア調和的な^ア総和などと）表明し、「^アウタ」に示して（コトホグシウタ、カタカムナウタヒ等と）、^アウツシ ^アマツル ことが出来るのである。

筆者は、その「^ア生命のよ^コこび」の感受が、今までの宗教的な三昧の悟りや瞑想による^ア観念の^ア満足感（陶酔）とは異なる、今まで感じた覚えの無い、全く知らなかった^ア生命の^ア感受性^ア高揚の^ア幸の^ア感受 であることを、ハッキリと、^ア認識に出すことが出来て、心から^ア感動した。

と同時に、それは、「^ア生命の^ア幸」といわれたものであり、自然の動物たちが感受している最も^アアタリマエの^ア生命カン である、（動物は意識していないが、人間は、脳が進化したから認識できる、）ということに、気がついたのである。

* なお、ヨガや禅や密教等の瞑想法も、本当は、このような効果をねらっている筈であると思われるが、「カタカムナ」の物理が無い為に、（彼らの脳に、カタカムナの^ア生命の^アサヌキ・^アアワの^ア認識がない為に、）^ア観念の^ア陶酔次元にとどまっているのである。

なぜなら、ヨガの瞑想には、動物のポーズなどもあり、そのポーズをすることで、^ア感受性を鍛え、人間の進化した脳、悪い^アサヌキを否定して、「動物の

彼らは、精一杯マノスベの生命活動（感受性の鍛練）をして、自由に、美しく、よい気持で生きているが、人間のような進化した脳がないから、それを「生命のよろこび」と意識することは無い。

我々人間は、脳が進化した為に、自然の生物の生き方（生命の感受性をせい一杯鍛えて、カムウツシを感受して、マノスベの行為を出すという、生物のアタリマエの生き方）が、出来なくなっている。

生物が皆知っている、「アワ」を鍛えて、その「アワ」のチカラで、マノスベの「サヌキ」を出すという、このアタリマエの生き方が、つまり、「アワ」を鍛えるという、最もアタリマエの生き方が、人間には、最もわからないものになってしまっていたのである。

ところが、その人間が、一たびサヌキ・アワの物理を知らされ、アワを鍛える（起励する）心になって、実習をつづけていたら、進化した脳があるのに、邪魔をしなくなり、スナホなアワの心で生きる自然の動物の気持が、ふと、よみがえてくれたのである。

それ故、筆者にとって、カタカムナの太極拳を実習する四十五分間の「イノチ」は、最も大事な、自分のマノスベの「イノチ」を生きるトキであり、最も能率のよい感受性鍛練のスペと、なっているのである。

* 張一中老師のあの美しいスガタ・カタチは、まさに、この「アワ」の心のマノスベの天然の「美」を示すものであった、と、頷かれる。

自然の木や花や鳥や虫や魚たちが、あれほどに美しいのも、彼らが、せい一ぱい、マノスベの共振波動を出して（カムウツシを豊かに受けて）生きているスガタであったからである。

橋崎臯月が、「美」とはアマ量（カム質）の多さであると言っていたのも、まことに、マノスベの行いには、カムウツシが豊かであるから、というわけであった。（美の根拠 四号・五号）

「マノスベシ」を知った「アシアトウアン」（の図象）が、「ウルハシ」（と同じ図象）であるのも、ウベなるかな、である。



アシアトウアン
ウルハシ
カシラハラ

ついた。(最初は調和させようとして、どうしても出来ず、息苦しくなる状態が、かなりつづいた。その後、カタカムナに出会い、カタカムナウタヒを歌いながらするようになったのである。)

それから三十年実習をつづけて来たのだが、はじめのうちは、一々の動作に、アワの思念^{ヒツメキ}を入れ、呼吸のサヌキ・アワにも、一々思念^{ヒツメキ}を入れて、練習をしていた。やがてそのうちに、一々の動作のアワにも、呼吸のアワにも、一々、ヒラメキを入れるまでも無く、(自分では入れた覚えは無いのに、)無意識的に、ヒトリデに、必要な時に必要なアワが起励されて、次々と、丁度よい動作^{マノスベ}を出してくれていることに、気がつくようになった。

今では、カタカムナのウタの呼吸の(サヌキ・アワ)波動^{チカラ}と、型の肢体の動きの(サヌキ・アワ)波動^{チカラ}と、肢体内部や頭部からも発している生命活動の(サヌキ・アワ)波動^{チカラ}等、それぞれの場から発するサヌキ・アワの波動^{チカラ}が、重なり合い、調和的に総和された(マノスベの)共振波動^{チカラ}となって発せられる時、これまで、かつて、知ることのなかった、たとえようもない気分(生命の高揚とか、マイナスエントロピーの恍惚感とでもいうしかない心持)を、感受できる、ということに気がついた。

* その「たとえようもない気分」というのは、「よい気持」というより、いわば、少しばかり自然の動物になった心持である。

自然の山野でせい一杯に生きている花や動物たちの、何ともいえぬ、やさしい、おだやかなスガタ、浅間・黒淵・高嶺の山々を広々と見はるかす、雲一つない青い大空を、大きく大きく飛んでいる鳥たちの姿を見て、私共は、いかにも自由で、大らかで、ユウユウとして、さぞかしよい気持だろうと思い、「美しい」と思い、それこそ「生命のよろこび^{チカラ}」と思う。

といっても、彼ら自身は、その「よい気持」を、意識しているわけでは無く、それどころか、刻々の大気の気流や気圧の変化を感じて、全身の羽根を一生懸命にうまく働かして(マノスベの生命活動をして)いるだけで、ただただ、その生命活動^{マノスベ}の(カムウツシの感受の)気持を、スナホに味わいながら、精一杯に生きているのである。

く、) 自分の脳がサヌキを出す前に、(パツとヒラメキを入れて、) その場のアワを、起励してやるのである。

そうは言っても、実際には、ついアワを忘れて、その場の感情や欲望で「サヌキ」を出し、悪い結果が出てしまってから、(病気や失敗や怒りや絶望感などにおちてから、) 気がつくことが多いのだが、しかし、気がついた時点で「アワ」を起励してやれば、(カムウツンをよんで、) 悪い結果に落ちこんでしまうことなく、元気をとりもどすことが出来る。

又、何をするにつけても、アワの心になって、悪いサヌキを出さぬように、という気持がいつもある為に、最初のうちは、(アワのことを知らぬ今までだったら出した筈のサヌキが、何となく抑えられているような、) 例えば、今まで好きだったものを見ても食べないとか、やりたいことも我慢するというような、何となく、抑圧感のようなものを、かすかに覚えることがある。

しかし、このアワを鍛える生き方の実習は、サヌキの鍛練ではないから、難行苦行になることは無い。

何をするにもパツと思念を入れる、ということも、(一生懸命注意するとか気をつける というような、) 脳からの指令を出すことではない。思念で入れるのである。

それ故、最初のうちは、ついヒラメキを入れるのを忘れて失敗したり、抑圧感があつたりするが、このやり方(生き方)をせいーばい続けていると、だんだんになれてきて、自分では思念を入れたつもりは無いのに、何かした時、ひとりでアワの心になって、適切なサヌキを出していたことに、気がつくようになる。

* つまり感受性を鍛えて、適切な判断行為を出す、という生物のアタリマエの生き方をミにつけるのが、私共の感受性鍛練の実習である。(前書 26頁)

その感受性鍛練の一つのスベとして、私共は、カタカムナの太極拳を実習しているのであるが、はじめ、張一中老師から太極拳を習った時は、ただ教えられた型を練習するばかりであった。やがて、型をしている肢体の動きの(サヌキ・アワの)チカラと、息をしている呼吸の(サヌキ・アワの)波動との調和に気が

生命の高揚してくるのを感じることもある。(マイナスセントロビーの恍惚 一号)

昔、太極拳をつくった人は、カタカムナを知っていたのではないかと、思われる程である。私共は、感受性の(アワ性の)鍛練向上の、実際の方法として、この練習をつづけている。

* 今では、我々は、生命とか生命力といっても、「サヌキ」のことしか考えなかったが、我々の生命活動には、「アワ」のチカラが、必ず、前駆して(同時的に共役して)、基本的に存在していたことを、私共は、カタカムナによって、はじめて物理として知らされた。

本当に我々は、何一つ行動するにも、すべて、生きている、ということは、刻々の、それぞれの、個々の場の(両手・両足のサヌキとアワ、頭と胴のサヌキとアワ、呼吸のサヌキとアワ、体内のもろもろの臓器の、それぞれの)サヌキとアワのチカラの、そして、脳の中の(サンカーラーの)夥しいサヌキとアワのチカラの、何重にも組合された、総和の共振波動によって(カムウツシされて)生かされているのである!(カミの仕事場 238・172・202・271頁)

それ故、立つにも歩くにも、何一つ行動するにも、話すにも、考えるにも、つねに、アワのチカラを鍛え高めていなければ、よいイノチにはならない。

自然の動物は、皆、ひたすら、自分のアワ(感受性)を鍛えて一生懸命に(マノスベに)生きている。

人間だけが、アタマ(サヌキ)ばかり鍛えてアワを忘れ、その為に病気になったり、怪我をしたり、争いや悩み苦しみから脱けられなくなっている、ということ、痛感させられたのである。

「アワ」とは生命のチカラ、則ち感受性のチカラであるから、アワを鍛えるとは、感受性を鍛えることに他ならない。

我々の生命力とは、感受性と判断力であること、アワはカムのチカラであり、サヌキはアワから出ることを、忘れてはいけない。

* 我々は、どうしても、「サヌキ」のチカラで(その時々欲望や感情のままに)コトバや判断行為を出してしまう習性がついているから、私たちの実習は、先ず、その自分の脳を逆序して(といっても、アタマで強制するのではな

* 人間の呼吸は、^{イノチ}呼吸がアワで、^{スワイキ}吸気がサヌキである。吸うことが目的（サヌキのチカラ）であり、^{ヘブライキ}呼気は、吸うための（サヌキが吸うトキの場を用意する）、アワのチカラである。

呼吸は、吸うのが目的であるから、サヌキのチカラだけでよさそうなものだが、サヌキだけでは生命にならない。

サヌキとアワのフタツのチカラの「フトマニ」にならなければ、^{イノチ}生命活動の「力」は発生しない。

このように、呼吸作用ヒトツとってみても、（我々は、今まで、全く意識していなかったが、）現実には、このようなサヌキとアワのチカラの^{フトマニ}互換重合で、生かされているのである。よい呼吸をすることが、大切なわけである。（呼吸法 感受性について その四 横隔膜呼吸 321～頁）

* さて、歌をうたうということはサヌキの行為であるが、おもしろいことに、実際に声を出すチカラは、^{ヘブライキ}呼気、則ちアワのチカラである。

「サヌキはアワから出て、アワの量だけのサヌキを出す」といったことの、これは、^{チカラ}明らかな証拠である。

時には、^{スワイキ}吸気で声を出す歌い方（裏声）もあるが、やはり不自然であり、異常である。

又、古代人（原始生活人）は、歌だけ単独にうたうことは無く、踊りや、手拍子・足拍子、又は歩行しながら歌うのがつねである。現在でも、日本の民謡はそうだし、能や歌舞伎もその形を残している。世界の民族芸能もおおむねそうである。

何もせず、歌だけうたう西洋音楽は、近代化社会のサヌキ文化（専門化）の産物である。

因みに、私共の実習では、カタカムナのウタを、呼吸のアワのチカラにのせて低く歌いながら、太極拳のサヌキ・アワの動作に合せて、練習している。

カタカムナのウタのサヌキ・アワの波動と、太極拳のサヌキ・アワの動作の波動とが、^{ヒビキ}対向発生（則ちマノスベの共振波動）に、よく合ってくると、^{ヒビキ}実に、

✦ 後書

✦ カタカムナ文献のことを、カタカムナ人は、「カタカムナ ウタヒ」といっている。

「ウタ」とは、ウからタするもの、という思念のコトバである。則ち、心の中にあるものを、コトバにして出すことである。

十^カ

⊕
アワ
(カク
ヒヒキ
ヒタリ
ヒト)

このことを、よく感受してみると、ウからタするチカラは「サヌキ」である。しかし、その「サヌキ」は、ウの、カムのチカラ（アワ）から出ている。

ウとは、その人の心の中である。

⊕
サヌキ
(マク
マスキ
スキ)

心の中とは、その人の生命のチカラに他ならない。

そしてその人の生命体は、カムから変遷した（カム・アマのフトマニによって、ヒフミヨイ マワリテメグル ムナヤコト

⊕
サスキアワ
(コト、ヒコ
アマ、ヤコト
ウカヒコ)

と、変遷して生れてきた）ものであるから、その人の生命のチカラは、カムとアマの共役のものである。

則ち、ウからタした生命体は、「アワ」と「サヌキ」のチカラによって生命活動をいとなみ、心の中の思いをウからタして、「ウタ」にして出すのである。

言いかえれば、我々の個体（の生命体）は、カムから変遷して、重合を繰返して、現象に出たものであるから（フトタモノミミコト）、カムの「力」のチカラは、個体にうつされて、個体の（アマナの）チカラになる。（「アマナ」は「アマノミナカヌシ」のこと（第七首））

「アワ」は、個体の「アマナ」のチカラである。「アマナ」は、つねに「カムナ」と交流して（カムウツシをうけて）、生命を保っている。

それ故、「アワ」のチカラ（の本質）は、カムのチカラであり、カムは生命の根源であるから、「アワ」は、生命のチカラ、そのものである。そしてその「アワ」のチカラなりの「サヌキ」を出すわけである。



アメツチネハシマリ
オノコロシマ

* 要するに第十首は、宇宙の万物万象（オノコロシマ）の生命の発生を、「天地創造」というような観念的な表現では無く、実際の生命体（タカミ）と生命力（カムミ）の発生元は、「メグルマノミナカヌシ」であり、それが、「カムナ」の「ホグ」（親和）によって、「アメツチネ」の「ハシマリ」となる、という、感受に基くコトバとして表明されたものである。



ハシ
イハ.トハ
イカ.カハ
グル.サカル
ホト.シヒタ



マリ
マワリ

* 「生命」とは、現代人の考える靈魂のようなものが宿るのでは無く、「イ」が「ノ」して「チ」していることであつた。

ということは、「イキ」（呼吸）をして「イコイテ」（動いて）いることである。


イキ（呼吸）のサヌキとアワのチカラがフトして、ヤタノカ（カミ）がヒトツヒトツ発生して（カムウツシされて）いる。


胃も腸も肺も肝も腎も心も、そして頭も胴も手足も、それぞれの場のサヌキとアワのフトによって、ヤタノカ（カミ）がヒトツヒトツ発生して（カムウツシされて）いる。全身の細胞のサヌキとアワのフトマニによって、ヤタノカが発生するという微波動次元の動きの連続が、生きている、ということなのである。


生命とは、我々の全身の細胞のアマナ（アマノミナカヌシ）と、カムナ（ヤタノカ）との通り道である。


我々の感受性が、それを感受することによって、我々は生かされているのである。


我々の脳は、このことを知って、アリガタイと思ひ、この生命が、イヤシロにつづくよう、マノスベに生きる判断行為を出すべきものである。（112～頁）


 オノ
(オモサ)
オノズサリ

 コロ
ココロ
トキトコロ


 シマ
ソマ、ソレマ


 オノコロシマ
ハエツキネホン
イキノヒトツネ⁽²⁾

 カムナ
カタカムナ
カムアワナキ⁽²⁾


 ホグ
ホグシ
イフアヒ⁽¹⁾
イハト⁽¹⁾
フダハ⁽¹⁾

 オノツサリ
カムカラアマンノハシマリ⁽²⁾
カムカラアメンノツサリ⁽²⁾
カムツツシスベ⁽⁷⁾
マノスベオキアマツ⁽⁷⁾

 オノズサリ
オノ(オモサ)
ケム、オトメ(オメ)

 アメ
アワノ⁽⁴⁾
ヒメ、コメ、ヒコヒメ
モモヒ⁽⁵⁾
コトサキワレ⁽²⁾

 ツチ

 ネ
キネ サネ
トネ タネ
モロケセ
ユエヌオ

リテ」発生し、自由に、存在する「マ」という意味である。

そしてそれは、「カムナ」の「ホグ」であり、「アメツチネ」の「ハシマリ」である、というのである。

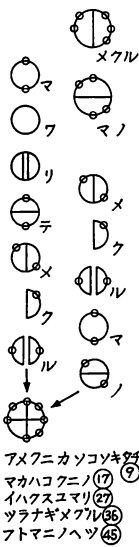
「ホグ」とは、「ヨソヤコト ホグ シウタ」にあったコトバであり(第四首120頁)、「ホ」の声音符は、正反の状態に重合が示されているから、『正反親和の思念』(対向発生でカムウツシを受けること)と、檜崎皐月は解説したのである。

そして「ク」は自由の思念であるから、「ホグ」といえば、カムナの自由な(自然サリの)カカワリによって、「アメツチのネ」となる、わけである。(そしてそれは、ホグ(祝福する)意味にも通じる。)

「アメツチネ」とは、一般にいうアメとツチ、則ち天と地のように読まれ易いが、「アメツチ」の声音思念を感受してみると、「ア」の「メ」したも則ち「アメ」の、個々の持続とは、「個々の生命体」の「持続」であり、つまりそれは個々の「オノコロシマ」の「ネ」であり、「ハエツキネホン」といった「ネ」、則ち「ユエヌオ」の根元である。(第六首)

「ハシマリ」も、「正反に示されたマリ」の思念が、「始まり」の意味になったのであるが、カタカムナ人の感受は、「正反に示す」とは、「イハ トハ」の「ハシ」であり、「アメツチ」の「イハ」に、「トハ」(カの正反)が、「カミナリテ」(「ホグシ」されて)、「オノコロシマ」になった、という意味である。その、根元の「ネ」は、カタカムナのミナカヌシである、というわけである。

ところが、その「アメツチネハシマリ」というコトバが、後に「カムナホグ」(神の祝詞)の「天地創造」の意味に神秘化されてしまった。後代人が、このコトバの思念の感受性を失った為に、観念的に解釈するしか無くなったのである。



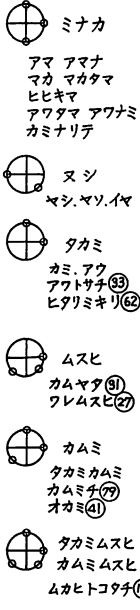
「ミナカヌシ」とは、^{マワリタメ}回転循環している^マ粒子の中心核（^ミミのナカの^{ヌシ}潜象の存在）のこと、

「マカタマノアマノミナカヌシ」は、「ミスマルノタマ」（第七首）になり、そのミナカヌシが、「タカミ」（現象の生命体）を発生し（アマウツシ）、「カムミ」（潜象の生命力）を発生し（カムウツシ）、「オノコロシマ」をつくる。

「オノコロシマ」とは、「おのずから固まった島」という語感で読まれるが、「オノコロシマ」の思念は、「オ」から「ノ」した「コロ」（繰返しツの口）。則ち口が繰返される、ということは、カムのカカワリの繰返しであり、重合が繰返し「口」されれば、凝集し（カタマリ）、^{トコロ}粒子になる、そのトコロが「マ」に示される、というわけである。

「シマ」というコトバも、我々は「島」や「縞」の意味で使っているが、実は、「島」や「縞」は、「シマ」（示されたマ）である、というカタカムナ人の感受でつくられたコトバであった。


マからノしてマトマリとなった個々の物は、「クニ」といってもよいが、それは「シマ」（示されているマ）であるという感受である。そしてその形には、「島」（^{ナギ}粒子形）と、「縞」（^{ナギ}流線形）があるわけである。（後出「イサナギ イサナミ」）



「オノコロシマ」といえば、「おのずから、ひとりでに、自然に出来たもの」と、大まかに解釈されるが、自然サ（「オノズサリ」）というコトバは、実は、「オ」（六方環境）から「ノ」（マノスベに進行）している個々の状態であり、それが、「コロ」（マトマリの粒子）になる、という感受である。則ち「ノ」とは、「マワリテメ」と、ヨからヤへ、進行し変遷することである。

それ故、「メグルマノ」というのは、「アマノ」ということを、説明しているわけで、「メグルマ」とは、カムから「マワ


✠ 第十首



 メグル マノ ミナカ ヌシ タカミ ムスビ カムミ ムスビ オノ コロ シマ カムナ ホク



 アメ ツチ ネ ハシ マリ

中心は  ヤタノカカミ図象

* 檜崎臯月解読 メグル マノ ミナカ ヌシ タカミ ムスビ カムミ ムスビ
オノ コロ シマ カムナ ホク アメ ツチ ネ
ハシ マリ

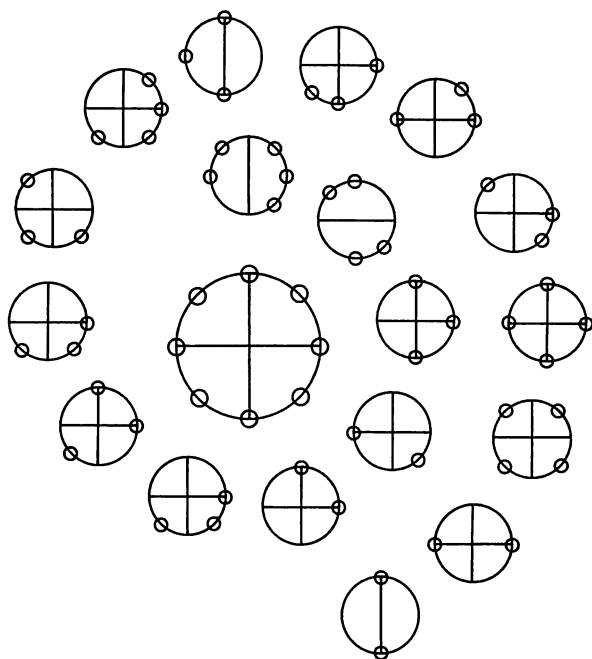
第二首で「カミ」、第三首で「ミコト」の図象符を示し、第五・六首で四十八の声音符を示し、第九首の「アメ」「クニカ」から、図象符が始まり、第十首では、最初から図象符ばかりとなった。

この示し方にしたがって、よく感受してみると、カタカムナ人が、図象符の造り方（読み方）を、順序よく教えてくれていたことに、気付かされる。

檜崎臯月が、『図象符があったからこそ読めた』のは、一つには、この、順序のよい示し方に導かれた故であろう。

* 概要 メグル マ から ノ した ミナカヌシ は、タカミ を発生させる ヒ であり、カムミ を発生させる ヒ であり、オノコロシマ をつくる。それは、カムナ の ホク による、アメツチ の ネ の、正反に示される 始まり である。

* 解説 「メグルマノ」とは、「マワリテメグル」(第五首) といったマのマワリ (マワリテメグル) のサトリのことで、「マカタマノアマノミナカヌシ」(第八首) といったことである。



相似象で言えば、運動場で、マスメームをしている子供たちの一人一人は、単に、一步二歩…、ソコに、(又はソギに、) 動くだけであるが、その全体を上から見ると、膨脹(又は収縮)しているように見える、(子供が膨脹・収縮性である、とはいえない、) というようなものである。

* まことに、マカタマの(アマノ)仕事は、則ち「カミ」の仕事場は、実に、夥しい数の(「トコタチ」の「ソコソギタチ」の)繰返しである。(「カミ」 51・238頁)

それ故、その仕事の結果の現象だけをみて、「膨脹」とか「収縮」とか「陰」とか「陽」とかといっただけでは、生命の物理はわからない。

カタカムナのコトバは、その「カミ」の仕事の一部始終を感受して、(という事は、結果の現象だけではなく、現象のオクの潜象の状態をも感受して、) それを、ありのままのコトバにうつしたものであるから、そのコトバの思念をたどれば、その仕事の意味(物理)を、わかることが出来るのである。

* 最も大事なことを、彼らは、いとも簡潔に、「マノトキトコロ トコタチ」(マからノしたすべてのモノはトコタチである)といっている。

いかに簡潔でも、これは、実に、今日まで、誰も言えなかった『生命とは何か? どのようにして、どこから生れたか?』という問題に、ズバリと、解答するものである。

アワとサヌキの「フトマニ」(対向発生)の「トコタチ」(互換重合性)という物理は、人類の脳が はじめて発見した生命の根本原理である。(エジプト・ギリシャ・インド等の古代文明の発祥よりも、はるかに古い上古代期である。)

よくぞ彼らは、膨脹収縮・重力引力・粒子性波動性・分化還元等の現象を表す、根源のチカラの根本原理に、よくぞ、よくぞ、気がついたものである。

いとも簡潔な、彼らのコトバの思念がわかってくるにつれ、驚きの感動が、深まるばかりである。

「カ」は、先天的に、ア^{ヒカリ}とサ^{ミカリ}ヌキの正・反のウツ、則ち、カとマのフトのチカラである。

それ故、その「カ」のチカラが、「アメノトコタチ」となり、その「カ」のチカラが、「クニトコタチ」となるわけである。

さて、その「アメクニ」の「カ」が、「ソコソギタチ」になる、ということは、「ソコソギタチ」を、いきなり、「膨脹性・収縮性」と、アタマで覚えてしまつては、この物理は感受^{ツカラ}できない。

なぜ「ソコ」が膨脹の意味になるか？ それは、「ソにコする」という思念を感受してみるとわかる。

「ヒ」の正・反が重合^{サズカ}発生して、「フ」になる、ということは、「カ」のチカラが、「ヒ」のソトにひろがることであり、それが繰返されれば（ソコタチ）、チカラとしては膨脹して行く。しかし、「ヒフミヨイ」と統合^{ツカ}発生（マトマリ）が繰返されると、つまり「ソキ」（ソにキ）すれば、形としては収縮し、凝結^{ツカ}して行くわけである。

* 「ソコ・ソギ」というコトバは、はじめから膨脹・収縮の意味で作ったのでは無く、「ソにコする」「ソにキする」という、その状態を、アリノママ（物理的）に表現したコトバである。今、我々がその現象をみると、ひろがったり、縮んだりしている、と思うから、榎崎臯月は「膨脹収縮性」と訳したわけである。

つまり、我々の現代語は、現象^{サズカ}の形を表わす言葉を使っているから、例えば、「膨脹性」といえば、「ふくらみひろがる性」という意味しかわからない。

しかし、カタカムナ人の感受性は、その膨脹した現象^{サズカ}をみて、それは「ソにコする」状態であると感受^{ツカラ}して、ありのままにコトバ化していたのである。（自然の動物並みに鋭い感受性の感受したものを、脳が、アリノママに判断して、コトバにしていたわけである。）

それ故、アマは膨脹・収縮性であるといつては間違いで、アマにあるのは、「ソコ・ソギ」の性である。

アメクニの（「トコタチ」の）「カ」が、「ソコソギタチ」に働けば、現象は、膨脹・収縮の形態を呈する、というわけである。

の「フトタマ」であり、「アワ」と「サヌキ」は、カムとアマのチカラのあらわれであるから、「ヒ」は、最小の「マカタマ」である、といってもよいわけである。

(読者もこのように、「アメ」とは「アマのメ」、「マリ」とは「マのリ」、「フトタマ」とは、「マカタマ」とは……と、アタマで知った思念を、実際のモノとしてあてはめて感受してみると、カタカムナ人の知った「カ」の物理が、だんだん実感として、わかって来られるに違いない。)

* 「アメノ」(アメがノする)とは、その「ヒ」が、(則ち「ヒ」といっても「アメ」といっても「マリ」といってもよい、極微の粒子が、)重合を繰返して「フ」「ミ」の重合マリとなり、則ち「フトタマノミミコト」となって、まとまって行くことである。

「クニ」(自由に定着されたもの)とは、そのヒ・フ・ミの「ミ」が、「ヨ・イ」と繰返し重合されてマトマリになったもの(ムナヤコト)、則ち、「イカツ」は、「クニ」の最小のもの、というわけである。

そして、「イカツ」(正反電気粒子、サヌキ・アワ)は、「ハコクニ」(原子・分子)を構成し、「アメ」が「ノ」してゆく「トコタチ」(互換重合性)は、「クニ」の「トコタチ」となり、様々な「トキ・トコロ」の「トコタチ」となるわけである。

則ち「クニ」とは、「イカツ」が「ノ」して、様々な原子・分子となったものも「クニ」であり、更に「ノ」して細胞となり、様々な(万物万象の)個体となり、社会・国家を構成するのも「クニ」である。あるいは又、原子・分子は様々な物質を構成し、地球となり、月となり、太陽となるも、皆「クニ」である。

そのように、アメが「ノ」して(様々なクニに変遷して)ゆくのは、「アメクニ」の「カ」の(「トコタチ」の)、「ソコソギ」のタチによるのであるが、それこそ、カタカムナのフトマニ(対向発生)のおかげである。

* 「生命」の生成は、昔も今も、この最初の「ヒ」のマリの、根本の、「カ」から始まり、宇宙の万物万象は、すべて、「マノトキトコロ トコタチ」の相似象である。

はお留守で、サヌキのアタマが、いつでも出しゃばるから、感受に基いてマトモな判断行為を出すという、正常な生命活動が出来ないのである。

それでも、いつも、いつも、感受性鍛練の気持を心がけていると、ヒラメキを入れよう、と思う前に、ヒトりに（自然の動物のように）、無意識にアワが入って、脳の感受性が正しく働き、よいサヌキを出していた、ということになってくるものである。

＊ さて、ここまでわかって来て、今、私共は、自分の劣化した感受性を、出来るだけ起励して、(カムウツシをよんで、)カタカムナ人のコトバを読んでみるしか無い。

カタカムナ人が「カタ」といい、「アマノ」という、則ち、カム(潜象)からアマ(現象)が出る、と、当り前のようにいっているものは、具体的にいえば、どういことであらうか？ その状態を感受してみると、「ヒフミヨイ マワリテメグル ムナヤコト」ということである。

則ち、「カ」は^カ潜象の渦の状態であり、^カ正・^カ反の(左マワリと右マワリ)のチカワが、重合されて「ヒ」となる。それが、「カタ」であり、「カ ムから タ して アマ に出る」ということの始まりである。

そしてそれは、昔もそうであったし、現在もそうである。

何億年前に、はじめて生命が発生して、それがそれ以来つづいている、というようなものでは無く、生命は、昔も今も、発生している。又、^カ潜象界と^カ現象界とは、別の元の(異次元世界とか反物質などという)ものでは無く、^カ潜象の中に^カ現象があり(マカタマ)、^カ現象の中に^カ潜象があり(フトマニ)、^カ潜象は^カ現象の環境にある(オカシ)。

それ故、カ から タ して出た「ヒ」は 最初の「マ」であり、アマ全体からみれば、「ヒ」は、一個しか出ないのでは無く、いつでも 場ができたトコロに発生する から、) 最小の「マリ」であり、最初の「アメ」でもある。

又、「カ」の^カ正反の左マワリと右マワリのウツは、「アワ」と「サヌキ」の原型であるから、「ヒ」は、その^カ正・^カ反のウツの重合した(正反対向発生の)、最初

ーダ・ウパニシャッドにはじまり、キリスト教・回教・仏教等で、靈魂や神仏や多次元世界・宇宙生命・宇宙エネルギー等を考え出したのだ、) ということが、わかって来た。

そして、カタカムナの上古代人は、感受性が自然の動物並みに良かったので、その感受性を、脳が、認識に出すことが出来たのであろう。檜崎皐月は、しばしば『僕は動物だから…』といていたが、それは、彼の感受性が、動物並みに良かったカタカムナ人の感受性に近かった、ということであろう。その上に、彼の脳(判断力)が、現代科学の最高度の能力をもっていたから、カタカムナ人のコトバ(直観力)を、解読することが出来たのであろう、ということもわかって来た。

それにつけても、脳(判断力)の力ばかり発達させ、感受性を劣化させたことが、現人類の悲劇の因(原罪)であることを、痛感させられたのである。

我々は、何としても、自分たちの生き方(脳の能力ばかり鍛える)を変えて、感受性を鍛え直す生き方を実行する以外に、救いは無い、というのが、私共の結論である。

感受性を鍛え直す、といっても、今までの(サヌキ的な)修業や勉強のような努力では無い。「カ」と「マ」のチカラ、則ち自分の生命力の「ア」とサヌキのフトマニの物理を知って、何をするにも、「サヌキ」に前駆する「ア」を起励し、脳の感受性に正しく感受させ、マノスへの判断行為を出すようにさせる ということである。具体的には、何をするにも、パッとヒラメキを入れて自分の感受性(ア)を刺戟する(励起させる)というだけのことである。

ただ、それが実際は、なかなか出来ない。気がつくのは無駄な「サヌキ」が出てしまったから、ということになる。

何をするにも、つねに、自分の感受性を起励して、ヒラメキを入れる、という生き方をしないと、我々の脳の感受性はウワのソラの状態で、(大脳が進化した為に、)いつも、サヌキのアタマががんばっている。(頭のよい人ほどそうである。)

それ故、何をするにも、その場でスナホに働くべき脳の感受性(アワの心)

表明 である。

* さて、カタカムナ人は、「カ タ」とか「ア マ ノ」とか、当り前のことのように言っているが、又、「ヤタノ カ」とか「アメクニ カ」とか「オ カ ツ」等と、当り前のように言っているが、実は、その「カ」とか「マ」とかというモノは、現代語には無いものだ、ということ、改めて認識に出して頂きたい。


現代語に無いということは、我々は、そのモノを知らない、ということである。とすれば、カタカムナ人の言っている「カ」とか「マ」とかというモノは、荒唐無稽、事実無根のデタラメ、単なる古代人の寝言にすぎないのか？…

筆者は、この、カタカムナ人のコトバに出合ってから以来、その言うところの意味を、よくよく吟味し、そして、その一方で、現代語の、マがよい・マが悪い・マに合う・マにうける・マ トモ・マ ジメとか、チカラ・カミ・カゼ・カ ツ等、「カ」や「マ」のつく日本語の思念をいろいろと考え合せているうちに、実は、我々は、カタカムナ人が「マ」とか「カ」とかといったモノを全く知らなかったのでは無く、「マ」といったモノは、何となく「宇宙」のような大きな存在として、「カ」は、その宇宙の大きな生命力チカラのヌシとして、何となく、漠然と、無意識に、とらえていたらしい、ということに気がついた。

* 更に言えば、何となくとらえられていながら、それが「マ」であり、「カ」である、ということ知らなかった、ということは、現代人（の脳）が、認識に出さなかった、というだけのことで、その（「マ」とか「カ」とかという）モノは、あらゆる生物（の感受性）は、皆、当り前のこととして、知っていたものである。

知っていたからこそ、ソレのカカワリを、感受して、当り前のように生きて来られたのである。

我々人間（の感受性）も、ソレを、全く知らなければ生きられる筈は無い。ただ、現代人（の感受性）は、非常に劣化したから、何となく感じてはいても、それを、脳が、ハッキリと認識に出すことが出来なくなってしまった、（しかし何とかして知りたい気はあるから、ギリシャ人の哲学、インド人のべ



 アメクニカ
 アメクニ
 アメクニノ
 アメクニサギリ
 ヒノクニ
 モモヒクニ

メ」と「クニ」は別ものでは無く、アメがノして自由なマトマリとなった、そのクニの力は、と、という意味である。

他にも、「アメクニサギリ」「アメクニサツチ」「アメクニクラト」等とっている。



 ソコ
 ハヤ、ヤハ

「ソコ」とは、「ソ」に「コ」すること、ソの方へソの方へと、ソがくりかえされること、つまり、外へ外へと、ひろがる（膨脹する）こと。



 ソギ
 ソト、イフ、イサ
 イサキ

「ソギ」とは、「ソ」に「キ」すること、凝集すること。

現代語でソギといえば、削ぎ・けずる・殺ぐ（へらす・省きへらす）・うばう、等の意味であるのは、「ソギ」（凝集）すれば形が削ぎ出される（縮小する）からであろう。「ソギ」とは、ソコ（膨脹）の反対の収縮の思念である、と榎崎阜月は判断し、「ソコソギタチ」とは、「膨脹・収縮性」である、と解説した。



 タチ
 トウ、ウミ、ウタ
 ミチ、サキミチ

なお、「ソコ」というコトバは、ソの方へソの方へと繰返されて行く、ソの先を指さして、「其処」という意味に使われ、又、「底」という意味にも使われるようになった、と思われる。


 ソコソギタチ
 ヤホフミ⑩
 ハストチ④
 アウホコ②
 (ハマミ、パラソ)



 カタ

「マノ トキ トコロ トコタチ」とは、「マ」が「ノ」すれば、様々な（万物万象の）「トキ トコロ」になる。その「トキ トコロ」の「トコタチ」も、すべてカタカムナによるのである、というわけである。


 カムナ



 マノ



 トキ


 トコロ

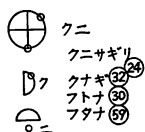
* 要するに第九首は、「アメ」が変遷するその「トコタチ」が、「クニ」の「トコタチ」になる。その「アメ」のノした「クニ」の「力」は、「ソコソギ」の「タチ」となる「カタカムナ」なのであり、とりもなおさず、「マ」から「ノ」した様々の「トキトコロ」（クニ）は、すべて「トコタチ」である。


 トコ


 タチ

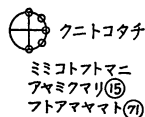

 マノトキトコロ
 トコタチ
 トコロチマタノ⑧
 マノネカタカムナ④
 アマタモノネ⑤
 ヒトネアツタマ②

則ち、第九首も、「アウノスベ」の説明として、「トコタチ」（マの互換重合性）の「ソコソギタチ」（力の膨脹・収縮性）のサトリの



「クニ」とは、「自由^リに定着^{テイカク}されたモノ」という基底^{キダイ}思念^{シネン}である。「クニ」といえば我々は「国」と思うが、カタカムナ人の「クニ」とは、「マカハコクニ」というように、様々な「原子」の如きマトマリのものを直観^{チクカン}していたと思われる。

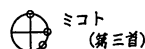
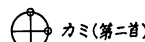
則ち、アメが変遷^{ヘンケン}して、様々なモノに、自由^リに構成^{ケイセイ}され、それぞれのマトマリを示して定着^{テイカク}されているものごとである。原子も分子も細胞も個体も、そして国も、皆「クニ」である。



「アメ」が「ノ」してとは、ヒフミヨイ ムナヤコトと、重合^{トコタチ}を繰返^{クマヒ}して変遷^{ヘンケン}してゆくことであり、その互換^{トコタチ}重合^{トコタチ}性^{セイ}によって「クニ」がつくられ、「クニ」が又、カタカムナの重合^{トコタチ}、フトマニの対向^{トコタチ}発生^{トコタチ}を繰返^{クマヒ}す「トコタチ」をもっているわけである。

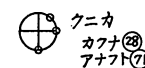
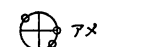
ここで気がつくのは（注意すべきことは）、「アメ ノ トコタチ」といいながら、「クニノトコタチ」とはしていない。ということは、「ノ」が、現代語の単なる接続詞的なものではなく、「ノ」というコトバの思念^{シネン}で使われている、ということが確認されるのである。

* さて、ここで、第九首のウタヒは、突如、一字一字の声音符から、図象符^{ズゾウジ}に変っている。























図象符^{ズゾウジ}は、今までに、第二首の「カミ」と第三首の「ミコト」とに、示されていたのみである。

(因みに、図象符^{ズゾウジ}をよみつけるのは非常に難しいので、かつて、筆者が『一字一字の声音符ばかりならわかり易くてよいのに』とこぼした時、檜崎臯月は、『難しいけれども、図象符^{ズゾウジ}があったからこそ読めたので、もし声音符ばかりであったら、読むことは出来ても、その意味を読みつけることは、できなかった』といていた。)



「アメ クニカ」とは「アメ」の「クニ」の「カ」、則ち、「ア

✠ 第九首

ア メ ノ ト コ タ チ ク ニ ト コ タ チ アメ クニカ ソコ ソキ タチ












カタ カムナ マノ トキ トコロ トコ タチ

中心は  ヤタノカカミ図象


* 檜崎阜月解説 アメノトコタチ クニ トコタチ アメ クニカ ソコ ソキ タチ カタ カムナ マノ トキ トコロ トコ タチ

* 概要 アメがノして、トコのタチとなり、クニのトコタチになる。アメクニの力は、ソコとソキのタチになる。それは、カタカムナによるのであり、マから発生するあらゆるトキ トコロはトコタチである。


* 解説 「アメ」とは「アマのメ」、則ち、「アマから芽が出るように、アマから分れて現象に出た微小なマリ」という思念で、アマ始元量の微粒子、の意味である。


 アメ
アメノ

 ノ

 トコ
サヌキアワ

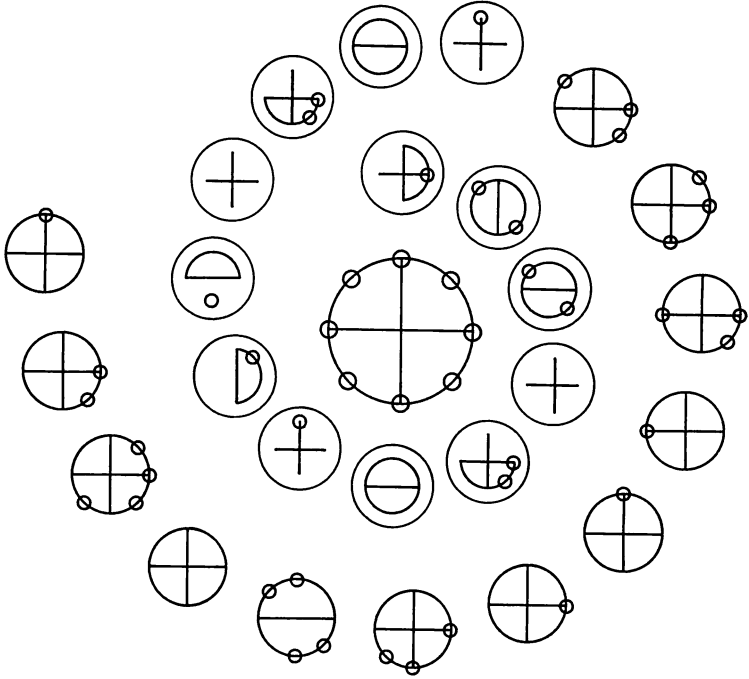
 タチ

 トコタチ
ミコト
サヌキチアワトサチ
(33)

 アメノトコタチ
アウノスベ
ヒタリミキリノ
ヤタノカカミ
(34)

「トコタチ」とは、「重合の繰返しのタチ」であり、「タチ」とは、現在は、生れつきのもちまえ、物の本質、の意味であるが、語源は、タのチ、則ち現象に出たタが、持続していることであり、持続していれば、そのモノの性質になるわけである。

「トコ」の「タチ」とは、アウノスベ、則ち、正・反重合発生
の繰返しの性質、則ち「互換重合性」と、檜崎阜月は訳した。
(そもそも檜崎阜月は、最初、「トコ」という語感を、「床」(トモ
にコロがる)と感じた。『品がなくて、おかしいようだが、…』
と、もらしていた。)



* 要するに、我々が時間・空間といっているものの物理は、トキ・トコロであり、「ヒフミヨイ」の「ヨ・イ」のマリである。第八首は、「アウノスベ」の説明として、「トキ トコロ」^レ、則ち、時間・空間の本質は、オカシ（環境に示された「カ」）である、という、サトリの表明である。

* 科学とカタカムナのサトリとの違いは、カタカムナが、すべて、カタカムナ人の実際の感受に基く直観であるのに対し、科学は、感受の無い、観念の物理であることである。

そもそも、「点」とか「線」というのも、観念上のもので、実際に「位置だけあって大きさの無いもの」なぞ、存在しない。更に、その点を延長した、「幅の無い線だけのもの」なぞ、存在しない。

又「時間」も、何となく流れ去る、時計時間のようなものを考えているが、時間の本質は、まだ定義できない。「空間」とは、「万物の存在する無限の場所」とか「何も無い空な場」という概念であるが、やはり空間の定義は出来ない。

要するに、根拠を知って、その感受に基いて脳が思考する認識と、^{サトリ}根拠を知らぬ脳で思考する観念の物理との違いである。（科学には、「ヒ」や「イ」の感受が無いから、脳で想像して「点」や「線」（の観念）を考え出し、「カ」や「マ」の感受が無いから、脳が、時・空の二元（の観念）を想定したのである。）

科学には、カムアマ始元量の発見（直観）が無かったから、「ヒフミヨイ」という認識（物理）が無い。やむなく、点・線・面等という観念を考え出さなければ、説明がつかなかったのである。

時間・空間の問題も、カタカムナ人のような「トキ・トコロ」の感受（直観）が無かったから、やむなく、時間・空間のような観念をつくらなければ、説明が出来なかったのである。

我々は時間・空間のあいまいな概念をつきつめて、カタカムナのトキ・トコロの考え方（感受）に、^{キリカ}転換しない限り、「カタカムナ」はわからない。

というより、カム・アマの感受がわかってくるにつれて、「時間・空間」の概念は、「トキ・トコロ」のカタカムナのサトリに、切り換っている、というのが、筆者の経験である。

最近では体内時計とか生物時間とかということもいわれるが、とにかく時間といえば「時計時間」しか考えられぬ先入見を払拭して、「私の時間」と「あなたの時間」は違うし、「大人の時間」と「子供の時間」も違う。「時計時間」ではない様々の時間があること、しかし、それは、皆、マワリテメグルそれぞれの周期をもって循環しているという、「トコロチマタノトキオカシ」のサトリを、感受して頂きたい。

* 「トコロチマタ ノ トキ オカシ」とは、トコロがチマタにノして、六方環



トコロチマタノ
マノキトコロ⑨
マノネカタカムナ④⑩
アマタマノ⑥⑤

境にトキが示される、という意味であるが、「オカシ」というコトバに、「オに示されるモノは、「カ」である」という思念がこめられている。



トキ

現象に発生した「タカカム」が、様々に変遷してチマタのトコロにトキして、「オカシ」される、というわけである。



オカシ

トキオカシ①
オホ、オホワ⑥⑧
オホワダ⑭④
オホカム④③
オホトヒ⑭④
オキサカル④④
オキハヒ⑥⑥
カムアシキ⑧⑧
ハム⑦⑦

「オカシ」といえば、現代語では、「可笑しい、面白い、又はあやしい」という意味に使われるが、古文中で「いとをかし」などとといえば、よろしい・おもしろい・興味がある・おもむきがある・おくゆかしい、等という意味がある。

「オカシ」というコトバは、「現象のオクにカが示されている」という、カタカムナの思念がこめられていたからであろう。



トコロチマタノトキオカシ



アウノスベ
ヤタノカカミ
ヒタリミキリ②②
アメノトコダチ⑨

「オカシ」という図象は、「トキオカシ」「オホトヒ」「オホワ」「オキサカル」「オキハヒ」「ハム」「カムアシキ」等と同じである。それぞれの思念を感受してみると、いずれも「オカシ」の意味と相似であることがうなずかれる。



トキ

う思念である。ということは、我々が、「時」(時間)といっているモノの本質は、「トのキ」、則ち、カムアマの重合によって、発生^{トコロ}の場が出来たトキに、発生することである。



トキトコロ
トコロ
ワクムスビ

それ故、「時間」というコトバは、「時」が発生して、その場が持続される「間」、則ち「トキノマ」という意味である。



トキノマ
チマタノ
マワリテメ

この「トキ」の思念は、(日本人自身、気がついていないが、)現在の日本語にうけつがれて居り、「……する時」とか「その時には」等というときの「時」は、時計時間の「時」でなく、まさしく「トのキ」の思念である。

* しかし、現代人の一般の感覚では、時間・空間の概念はあいまいで、「時間」といえば時計時間のことしか考えず、未来の方向から過去の方へ直線的に一方向的に経過するもの又は過去から未来へ流れるものであり、「空間」も、無限に広がっているばかりで、縮小的な反の方向性は感受できない。

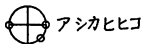
科学に於ても、時間空間は、非可逆性の現象であり、別々のものとして扱い、時空量を、一切の物理量の「二つの元」としている。

それ故、時・空量の本質は未知である(わかってはいない)。(六号 33頁～、三号 65頁～)

カタカムナ人には、現代人のような「時間」「空間」という概念は無く、トキ・トコロを、現象の別々の元、などとする考えは全く無かった。(トキトコロ トコタチ)

あらゆる現象(アマ)は、(我々の生命も、万物万象の存在も、)すべて、カムアマからトキして(ウマシ タカカム)、様々に変遷して(アシカヒヒコ)、発現したトコロである、と考えていた。(そして発生した現象は、一回だけの非可逆性のものではなく、すべての現象は、やがて、アマに還元する循環系、則ち連続的可逆性のモノとして把握していた。(マワリテメクルムナヤコト)

トキがなければ、トコロは無い。トコロはトキなしにあり得ない。「トキ」と「トコロ」は、決して切り離すことのできぬ、重合互換のモノ、という感受であった。(トキトコロ トコタチ 第九首)



アシカヒビコ

ヤホ、ヤハ ④
ハヤ、ハヤス ⑪
イキコト ⑩
ソコソギ

いえば、黴という菌類のことであろう。

おそらく、「アの示し」という思念の「アシ」が、マッスグに、タテ(立・縦)に伸びるモノ、則ち「足」や「芦」の名につけられ、又、アッというマにはびこって(横に伸びて)ゆくあやしいモノに、目に見えぬ「カのヒ」を感じて、「黴」と名をつけたのではないか？



トコロ

コロ、ココロ
トキトコロ
アオココロ ⑫
ヒトココロ ④⑧

則ち「アシカヒビコ」とは、芦や黴のように、縦・横にひろがってゆくという意味である、と榎崎阜月は解説した。



チマタ

ナミ、ナギナミ ⑮
ナリテ
マワリテ
マトマリ

「トコロ チマタ ノ」の「トコロ」とは、「重合が繰返されると口になる」という基底思念であり、カム・アマの重合が繰返されると、「コロ」になる、というわけである。



マ



エ



マタ



エダ

(チマタ)

「コロ」といえば、現代語でも、コロコロと転がるモノ、という思念があるが、カタカムナウタヒでは、「モコロ」「アオココロ」「トキトコロ」「イキココロ」「アナミコロ」「タナココロ」「オホトコロ」「カムツミココロ」「ウルハシココロ」「ケヒココロ」「ココロワク」「ココロツラナギ」「フナコロシ」等とうたわれている。

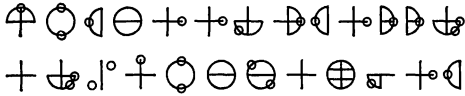
則ち、カムアマの重合が繰返されれば、凝集して、カタマリ、粒子状の「コロ」となる。(最初の「コロ」が「ヒ」である。) その「コロ」の発生の方が「トコロ」(所・処)である。


それ故、「トコロ」といえば、モノの存在する場所、又、存在するそのモノ自体のことをいう。則ち現代語の「空間」「場」「位置」の意味である。(最小の「トコロ」は「イ」である。)

「チマタ」とは、「持続的にマがタすること」則ち現代語でも、「ちまた(巷)」といえば、いくつにも分れた道、街路、のことである。則ち、持続してマが分れば、千の(多くの)、(枝分れた)又(股・胯)になるわけである。

「トキ」とは、「カムアマの重合によって発生すること」とい

✠ 第八首

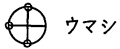


中心は  ヤタノカカミ図象

* 橋崎皐月解説 ウマシ タカカム アシカヒヒコ トコロ チマタ ノ トキ オカシ

* 概要 ウからマに示されたタカカムは、アシカヒにヒコして、トコロ チマタにウツリカワってトキし、六方環境にカが示される。

* 解説 「ウマシ」は、ウからマが示されること。「ウ」とは、^カ潜象から現象が発生する界面の思念。

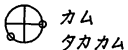


ウマシ

「ウマシ」は「生れる示し」の意から、それが、甘い・おいしい・上手だ・巧妙な・都合のよい・おもしろい、等という意味に引伸されたのである。

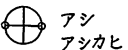


タカ



カム
タカカム

「タカカム」は、タしたカのカム、則ち「現象に出たカ」という思念である。



アシ
アシカヒ

「アシカヒヒコ」の「アシ」とは、「アシアトウアン」の「アシ」であり(36頁~)、「アの示し」とは、^ア現象の示し、という思念である。



カヒ

「カヒ」とは、「カのヒ」、則ち、カがヒである、という思念である。



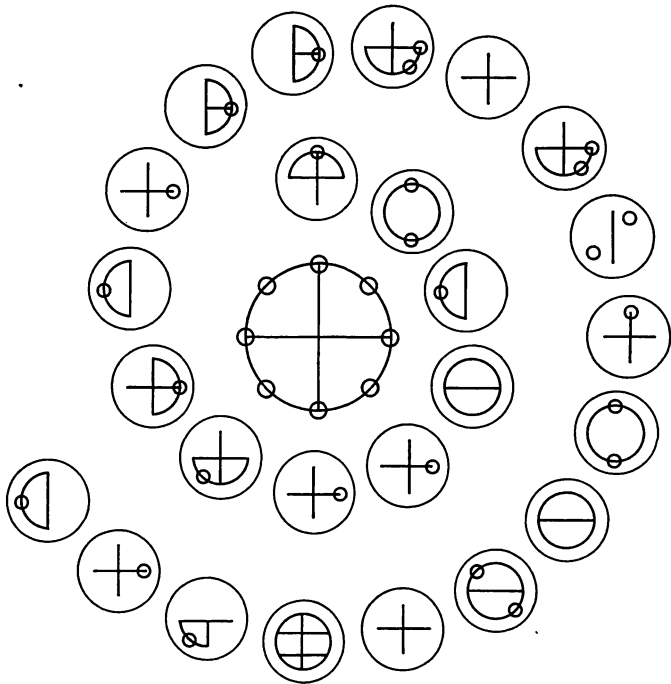
ヒコ
(アヤ)

「ヒコ」は、「ヒがくりかえされること」である。



ウマシタカカムアシカヒヒコ
オキミツゴ(22)
アヤオキツ(28)
カムツミシツマツ(29)
タカマカムスヒマシ

さて、「アシ カヒ」の「ヒコ」とは、どういうことか？
現代語で「アシ」といえば、足・声が思い浮ぶ。「カヒ」と



* ここで、マカタマ ノ、アマ ノ、ミスマル ノ、といい、さきに、マノ (スベ)、ヤタ ノ (カカミ)、フトタマ ノ (ミミコト)、アウ ノ (スベ)、といった、この「ノ」というコトバの意味を、よく感受してみたい。

カタカムナ人は、宇宙^{アマ}のあらゆるモノは、「カ」^カから「タ」した「マ」から、「ノ」したものである、と直観した(という物理を開発した)のである。

* 「光」とか「電磁波」とか「宇宙線」とかというものは無く、「マ」が「ノ」する状態の中の、ある波長帯のものを、我々は、「光」とよび、「電磁波」「宇宙線」と、とらえているというにすぎない。

「電子」も「原子」も「素粒子」も「プラズマ」もすべて、「マ」(アマ始元量)の「ノ」したものである。

このカタカムナの物理は、「光」も「電気」も「磁気」も「音」も「熱」も「圧力」も「速度」も「質量」も、則ち「時間・空間」も、もろもろの「物性論」も、すべてに通じる、あらゆるチカラの統一原理を示すものである、という所以である。

科学には、「電磁波」や「原子」や「素粒子」や「重力」や「熱」等の、個々の現象の研究はあるが、その本質の解明は無い。

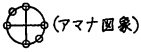
医学でも、胃や腸や肝・腎・心・脳・神経・骨・筋肉等、あらゆる器官から遺伝子まで研究されているが、その根元の生命の解明は無い。

則ち、「マカタマ ノ」「ヤタ ノ」「マ ノ」といった、「ノ」の物理が無い(未開明である)、ということは、「マ」「カ」(アマ始元量)の物理が無い(未発見である)、ということである。

又、一般に「心」とか「靈魂」といわれるものも、実は、そういう特別のものがあるのでは無く、その正体は、「マカタマ」が「ノ」して「ムナヤコト」した「ココロ」(小粒子)であって、それが、「タマシヒ」(ミスマルノタマ)であり、とりも直さず「アマノミナカヌシ」(アマナ)に他ならないのである。

それは、我々の生命活動の刻々の変化を指令し、(内外環境の変化に対応して、刻々に必要な「アウノスベ」を発生させ、) 様々なホルモンや伝達物質の発動や抑制を指令し、要するに、生命のホメオスタシス(恒常性)の維持や免疫の働きをつかさどっている、生命のヌシである。

「ヌシ」は「目には見えぬ潜象のチカラの示し」であるから、科学的手段ではとらえられない。しかし確かに存在し、刻々に働いているモノであるから、感受性がマトモなら、そのカカワリの状態を感受し、直観によって認識に出すことが出来る。



(アマナ図象)

アマノミナカヌシ
 ミスマルノタマ
 ヒビキマノスヘシ
 イキツチノワ(11)
 アメノウツメ(19)
 ミツハノメ(25)
 ヒトアメノウツシ(20)
 スヘカエシ(24)
 アマウツシ
 アウホコアメ
 (22)

なお、「アマノミナカヌシ」「ミスマルノタマ」の図象を、私共は「アマナ図象」とよんでいる。

「アマナ図象」に一致するコトバは、カタカムナウタヒには、「ヒビキマノスヘシ」「イキツチノワ」「アメノウツメヒメ」「ミツハノメ」「アメノウツシ」「スヘカエシ」「アマウツシ アウホコアメ」等、八十四ほども出てくる。

* 要するに第七首は、「アウノスベ」の具体的な説明として、我々の生命(ミコト)は、生命体を構成する「タカミ」と、生命活動をいとなむ「カムミ」とによって維持されている。そのタカミ・カムミを発生する根源は、アマノミナカヌシである。それは、マとカのノしたアマの中心核的な存在であるが、目にみえぬミスマルのタマである、というサトリの表明である。

「マカタマ」「アマノミナカヌシ」という言葉は、一般に、神道の用語として知られているが、檜崎阜月の解説により、カタカムナの原語の意味は、それとは思いもよらぬ、物質の究極の、科学で「原子核」といっているものの、本質本性を解明した、潜象物理のコトバであることが、判明したのである。

又、「マカタマ」「ミスマルノタマ」の表象物については、三・四号に解説してある。

自分の生命が微波動次元の生命活動によって、カムのカカワリのおかげで生かされているという真実を、脳アリカサの感受性が、深く、ミを以て感受（共振）しなければ、心から「アリカタイ」という感動は、湧いてこないのである。

その代り、カムアマのカカワリを、ミを以て感受しさえすれば、誰でも、（学問智識が無くて、何の業績も、名もない、ただの凡俗の一人にすぎぬものでも、）心からアリガタイという生命ココロの感動を知ることが出来る。

それ故、カタカムナのサトリを持たぬ民族には、「感謝」という言葉はあるが、「アリガタイ」というコトバは無かったのである。（アリガタイという日本語「日本のX」352～頁）

カタカムナ人は、この最高に「アリガタイ」生命を生んでくれた者を「オヤ」とよび、その大もとの祖先（ひいてカムアマの存在）を「オカミ」といい、敬語を使い、生命を尊重する「アリガタイ」「モツタイナイ」「オカゲサマ」の、人間の文化キトの原型を、つくりあげていたのである。

* 「アマノミナカヌシ」「タカミムスヒ・カムミムスヒ」「ミスマルノタマ」という考え方（物理）は、科学に無いカタカムナの独特の、「アウノスベ」の直観物理である。

「アマノミナカヌシ」と、カタカムナ人が直観したモノは、原子では原子核とよばれるものに当り、原子を構成する中心的なチカラ（目にみえぬ潜象）である。

科学は、この原子核の現象は知っている。しかしその原子核の物理を解明していない。カタカムナ人は、それを「ミナカヌシ」と言い、その「ヌシ」のチカラによって様々な元素が出来、原子の転換も起きると直観した。（後出 オモドルヌシ）

「ミナカヌシ」は、生命体では、細胞の中心部、核内にあり、タカミムスヒ・カムミムスヒの（アマウツシ・カムウツシの）「カムナ」を受けて、生命活動アウノスベをいとなむチカラとなっている。（恰も、アマの出先機関のようなモノであるから、「アマナ」ともよばれるわけである。）

そして、その「タカミ」(現象の「サヌキ」のチカラ)と、「カムミ」(潜象の「アワ」のチカラ)を、発生する「ヒ」(根源)は、「アマナ」(則ち マカタマ ノ アマ ノ ミナカヌシ の ミスマル ノ タマ)である、ということである。

* カタカムナ人は、「生命というものの物理を、このように直観(感受し、判断)したのである。

後代人には、この感受と認識が無かったから、(しかし、何としても、生命の根源を知らなければならぬという欲求から、)ギリシャの哲学やインドのベダウパニシャッドをはじめとする「靈魂」や「神」や「宇宙生命」のような、観念の神秘思想が発生したのである。

* カタカムナ人の脳は、自分たちの感受している「生命」というモノが、このようにして「マカタマノアマノミナカヌシ」によって授けられているものであることを、認識に出すことが出来て、実に、これほどの大変な(世にも有り難い)ことを示してくれる大きなチカラのヌシ(潜象の存在)を、畏れ、「アリカタイ」と感謝する思念を、深く、強く、思い知ったのである。

(自然の動物は、ソレを感受し、本能として畏れ、マノスベにしたがって生きているが、人間のような脳が無いから、それを認識に出して「アリガタイ」と思うことは無い。)

* 「アリガタイ」という思念は、『神が万物の生命をつくりたまう』として、神に『感謝』するというような、大脳次元の観念では全く無い。

解剖学や発生学を勉強した者は、生命活動の現場が、いかに微小な単位の、おびただしい数のくりかえしでなされるものか? を、実感で知ることができているが、しかし、それを、脳が知っただけでは、その「有り難さ」(difficult)に驚きはするが、「アリカタイ!」という思いは、起きない。

「アリガタイ」という思念は、「ヤタノカ」のカミの「フトマニ」の、「アマノミナカヌシ」による生命の授かり(カムウツシ・アマウツシ)の感受を、脳が真実に感受しなければ発生しない。つまり、脳が、カタカムナのサトリを知って、

う語感があるので、「アマナ」(ミナカヌシ)は潜象である、という思念が感じられる。

実際に、^{マワリテ}回転している物体は、(ミツゴマリや^{イカフ}電子や^{ヘコクニ}原子のような、小さいマリでもそうだが、地球や太陽のような大きなタマでも、)皆、中心部が濃く重くなり、「核」の状態になっている。この現象は、誰でも(科学も)知っている。

しかし、カタカムナ人は、その「核」の本質を、「アマノミナカヌシ」と言い、^ミ核状の中に「ミス」の「マル」(潜象のアマナの「ヌシ」)として、存在する、と直観したのである。

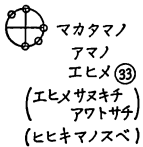
* カムがアマにタして(重合発生を繰返して)、「アマノミナカヌシ」となったモノは、「ミスマル」であり、それが「ノ」して(重合発生を繰返して)、「ミスマルノタマ」となる。

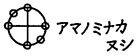
則ち「アマノミナカヌシ」を、「ミスマル」(潜象のチカラのヌシ)と説明し、「ミスマル」は「ノ」して「ミスマルノタマ」(潜象の凝縮した、マの中心核的存在)となる、というわけである。

その「ミスマルノタマ」の「アマノミナカヌシ」が、現象の^ミ生命体を発生し、^ヘ潜象の^ミ生命力を発生する「キネホン」の正体であることを、^ツ説明しているのである。

* 要するに、「マカタマ ノ アマ ノ ミナカヌシ」は、^ミ現象の^ミ生命体と^ミ潜象の^ミ生命力を発生する「アマナ」であるが、自身は、(マと力のタマのノした、アマのノした^ミ変遷物であり、)ミの^ツスけた(目に見えぬ潜態の)状態で、マに止っている、「ミスマル ノ タマ」である、という物理である。

ということは、我々の生命は、現象の個体を維持する「タカミ」の(アマの)チカラと、潜象の「カムミ」の(カムの)チカラとの、フトマニによって生かされている、ということである。





アマノミナカヌシ

「マカタマ ノ アマノミナカヌシ」とは、「マ」と「カ」の重合によって発生した「タマ」が、「ノ」して（対向発生を繰返して）、現象の個体となり、その「アマ」が「ノ」して（変遷して）、「ミナカヌシ」となる、というのである。



タカミ
カウチ
カラミ
カミ

そして、その「アマノミナカヌシ」は、現象の生命体（形態）を発生する根源（井のネ）となり、潜在の生命力を発生する根源（井のネ）となり、「ミスマルノタマ」となる、という意味である。



カムミ
オカミ④
カムミチ⑦

（なお、「アマノミナカヌシ」は、後出の「アマナ」の本質である。）



ムスヒ
カムヤヅ③
アマカム④
アマオキ⑥

* 「タカミ」とは、現象の生命体を構成する形態のミであり、「カムミ」とは、現実の生命体を維持する生命活動のチカラのミである。

則ち「タカミ」は、アマウツシされるミであり、「カムミ」は、カムウツシされるミであり、「タカミ・カムミ」は、重合（結合）をくりかえして「ミコト」になり、「フトマニ」となるわけである。（フトタマノミミコトフトマニ = 81~頁）



タカミムスヒ
カムミムスヒ
ムカヒトコウチ⑩

その「タカミ・カムミ」を発生している「ムスヒヌシ」が、「アマノミナカヌシ」であり、それは、「ミスマルノタマ」（目にみえぬ潜象のタマ）である、というのである。



ミスマルノタマ
アマノミナカヌシ

「アマノミナカヌシ」は、マカから（アマから別れたミが）、おびただしい数のヒフミヨイの重合を繰返し、中心核的なヌシ（目にみえぬが核的な存在）となったモノのことであり、それは、「ミスマルノタマ」である、というわけである。



ミスマル
ミナカヌシ
アマハマミ

* 「ミスマルノタマ」とは、「ミがヤまで進行してマに存在し、重合発生を繰返しているタマ」という思念で、後出の「アマナ」とよばれるモノである。（「アマナクニヌシ」第二十七首）



ノタマ
マノ
マノスベ
タマノ

「ミスマル」といえば「ミの透けて、目には見えないモノ」とい

「タマ」も「マリ」も球状のものの意味であるが、現代語でも、「マリ」といえば小さいもの、「タマ」といえば大きなものという語感がある。それは、「カムからタしたマ」というのと、「そのマから分れたモノ」というのとの、語源の思念の違いにあったのである。

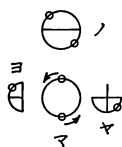
（なお、ここでは、説明の為に出したのであるが、「マリ」というコトバは、カタカムナウタヒでは、まだ、出て来ない。第十首で、「ハシマリ」として出てくる。）

因みに、「マリ」の用例には、「フマリ」「クマリ」「ユマリ」「ハマリ」「ミクマリ」「フトマリ」「ミソギマリ」「クニツマリ」「ヤホマリ」「カムミマリ」「オホワタマリ」「イキコトマリ」「ナミマリ」「ムカヒマリ」「メグルマリ」「カムヤタマリ」「マトマリ」「シヅマリヌ」「マリタバネ」「マリツラネ」等がある。

「マカタマ」の図象は、「アマ」「アマナ」「アマタマ」「タカマ」と同じである。

なお 曲玉・勾玉という解釈は、後世、曲った形の玉の装身具が伝来した以後のものと思われる。

（マガタマの原語の意味は、「マとカのタマ」であり、「曲った」という意味は無かった。）



* 「ノ」とは、「マ」の状態が次々と（ヨ イムナ ヤ と）変遷すること。

* 「アマノミナカヌシ」とは、「アマ」が「ノ」して「ミナカ」の「ヌシ」となる、という思念であり、「ミナカ」とは、「ミの何回も繰返されたカ」, 「ヌシ」とは「潜象の示し」という基底思念である。

ミが何回も対向発生を繰返せば、内部が濃く重くなり、「ヌシ」（目にみえぬ潜象の示し）になる、というわけである。

✠ 第七首

中心は マタノカカミ図象

* 檜崎阜月解説 マカタマ ノ アマノ ミナカヌシ タカミムスヒ カムミ ムスヒ ミスマルノタマ

* 概要 マカタマからノしたアマノミナカヌシは、タカミをムスヒであり、カムミをムスヒであり、ミスマルノタマとなる。

* 解説 「マカタマ」とは、マカ^マのタマ、「マ」と「カ」の重合（アウノスへ）によって発生したマ、則ち、「アマ」「アマタマ」のことである。

マカタマ
 マカ.アマ
 アマタマ
 タカマ
 ミナカ.アマナ
 ヒトタマ
 アキタマ
 アワタマ
 ヒビキマ

「タマ」の思念 そのものには「球」という意味は無いが、「タしたマ」は、「マワリテメグル」ものであるから、「マリ」と同じく、丸い球状のもの、という意味になる。

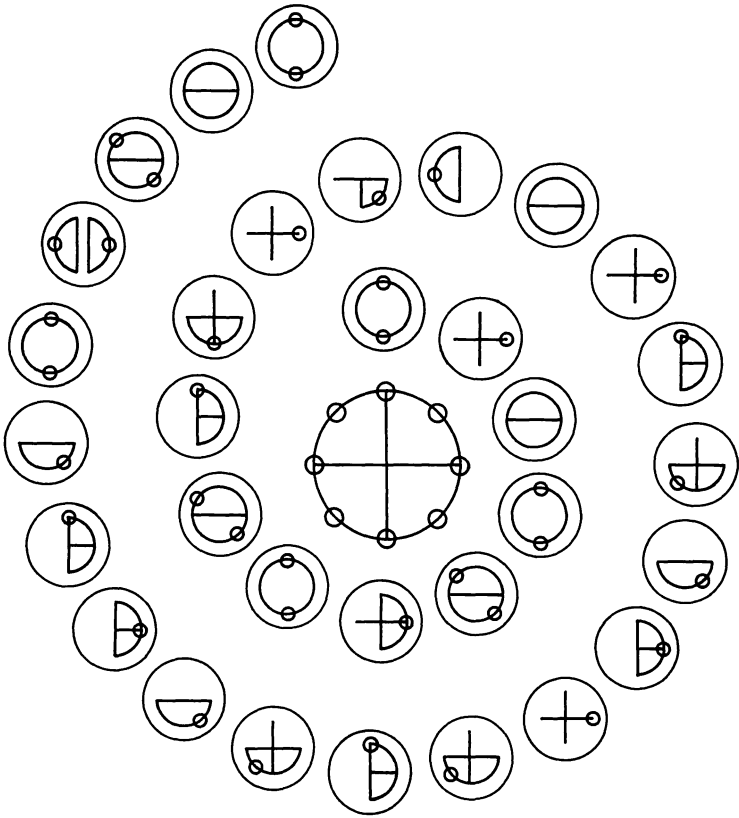
「タマ」（カムからタしたマ）といえは、「アマ」であり、アマ^{タマ}宇宙球をはじめ、カムから発生したあらゆる「マ」の総称である。

タマ

「タマ」の用例は、カタカムナウタヒでは、「フトタマ」「マカタマ」「ミスマルノタマ」「ヒトタマ」「アキタマ」「アマタマ」「ワクタマ」「ミチタマ」「オホトタマ」「アワタマヒメ」「ウツシタマ」「ハヒタマ」「タマワケ」「タマキソラ」「タマルツチ」等と使われている。

タ

 マ



らである。

動物たちは皆、それを感受して生きているが、脳が進化していないから、それを認識に出すことは無い。

カタカムナ人は、自分が感受していることを、脳（直観）によって、物理として、認識に出したのである。

（楢崎卓月は、感受に基く判断を「直観物理」といったわけである。それは、人間の脳次元の観念の判断では無く、感受（対向発生）によって発生する判断認識であるからである。）

後代人が、（現代科学も、）今日まで、生命の物理が開発できなかったのは、進化した脳はあったが、その実態の感受が無かったからである。

生命の物理は、直観がなければわからない。

我々は、進化した脳をもっているのだから、感受があれば、「カタカムナ」（直観物理）がわかる筈である。

そして我々現代人も、進化の度に於て、カタカムナ人と同じ人類として生れているのである。（筆者のような、現代文化に汚染され、苦悩多く、カンの悪かった凡人でも、カタカムナに出合い、マノスベに照して、感受性の鍛練にとめれば、「アウノスベ」が感受できるようになれるのである。）

感受性の鍛練実習を、人間の生きる至上命令（人間のあるべきスガタ）とするのは、このわけである。

タカムナをわかりたいと思い、直観を高めたいと、勉強するつもりであっても、実際は、先入見で一ぱいのアタマでカタカムナのコトバを記憶するだけに終始し、自分の感受性に、スナホな心で受けいれることがどうしても出来ぬ状態に、なってしまっていることである。

今、我々は、何としても、我々現代人のこのような（脳の落し穴に陥っている）状態に、気がつくことから始めなければならないのである。

＊ カム・アマ のことについては、他の民族の古代にも、例えば「そもそものはじめ、無限なるもののみが存在し、この無限の中に AUM 住めり」（インド ダナーバ ダルマ サストラ）とか、「神は一にしてすべてなるもの」「神その像の如くに人を創造給い、これを男と女に創造給えり」（創世記）等のように、同じような、似た言葉がある、と、いわれるかもしれない。

しかし、それは、脳の落し穴の中での批判である。よくみれば、それらの「神」といい「創造」という言葉の内容は、示されていない。「神」とか「無限」とか「創造」のような、似た言葉はあっても、「神」とはどういうものであり、どのようにして創造されるのか？ という物理は、一向に示されていない。

富永老師が検証した、釈迦の「正覚」（ブヤダムマーサンカーラー）や、孔子の「知天命」（徳一の仁）、ゲーテの「生の秘奥」（根原現象）ですら、物理の、結果（天才者の体験の境地）を表明しているだけであり、その体験を、物理として、示してはいない。（それ故に、彼らは、自分の知ったことを、他に教え、後継者をつくることは出来なかった。）

現代人が誰一人、開発できなかったその生命発生の物理を、どうしてカタカムナ人が、開発することが出来たのか？

それは、彼らの感受性が、動物なみの鋭さをもっていて、自分たちの生命現象の実態を、（生命がどのようにして発生し持続されるか、という実態を、則ち、我々の生命体は、イマ・イマに、カムアマのカカワリによって生かされているのだ、という実態を、）感受することができたからである。そして彼らの脳が、その感受したものを、正しく判断することが出来るまでに、開発されていたか

どの高度な意味がある（物理の表明である）とは、感じられないであろう。

（科学者の榎崎皐月が、よくぞ、この上古代語をそのように読みつけたもの、と、筆者は心から感動する。）

ただ、榎崎皐月の直観物理（三号～六号）は、カタカムナのサトリを解説して、科学的に体系化したものである。

それ故、現代の科学智識をもつ者は、それを勉強して、認識を改めなければならぬ。筆者も、榎崎皐月から教えられ、非常に難しいと思ったが、カタカムナのサトリを何とかしてわかりたい一心で、一生懸命に直観の鍛練に努めたのである。

そうして十年・二十年経って、わかって来たことは、カタカムナ人は、例えば、榎崎皐月の「八の自然則」（234～頁、三号・六号）のような科学的な智識として、意識していたわけではない、ということである。

カタカムナ人は、『自分たちの生きている生命は、どういうもので、どうして発生したのか？』という、脳の進化した人類が、もたずにいられぬ最も根源的な問題について、現代人の文化（科学や宗教等）のような、無駄の多い脳の使い方では無く、人類のもつ脳の全能力を、最もスナホに、（無駄な思考へ走ることなく、）最も正直に働かせて、自分達の感受に基いて、「カタカムナ」の判断^{サトリ}をつきとめ、それをコトバにうつしただけのことであった。

榎崎皐月も、私たちの頭では発想できぬ、実に上古代人らしい表現だ、と感心していたが、しかし、それ故にこそ、人間の脳をもつ者なら、誰でも（我々でも）、自分の脳の感受性をスナホにし、（脳に無駄な判断^{ハジメ}を出させず、）カタカムナのコトバを正直に受け入れたなら、（榎崎皐月の解説した直観物理は難しくわからなくても、）カタカムナ人のサトリのココロは（ヤタノカカミ・フトマニといった心は）わかる筈である。

なぜなら、人間の脳の開発向上の順序は、昔も今も、変らぬものであるからであるが、問題は、カタカムナのコトバを受け入れる我々の脳の感受性が甚しく劣化し、生物の正常^{スナホ}さを失い、人類の進化した脳の落とし穴に陥ってしまい（先入見にこり固^{レバ}って、他の発想ができない状態になっている為に）、自分では、カ



アウノスベ
 (マタノカカミ
 ヒタリミキリノ)

(因みに、「モロケセ」の「モ」や「ケ」に当る状態は、最新の分子生物学の細胞の遺伝子や、ウイルスやプラスミドの研究をみると、具体的に感受できるが、科学に無いのは、そのもの「ロ」、ケの「セ」、ユの「エ」「ヌ」「オ」、そして「キ」「ネ」「ホ」の思念(感受)なのである。それ故、科学は、まだ、「アウノスベ」の物理が、開発できないのである。)

* この、「アウノスベ」という物理は、現代科学も未開発のもので、これを解説してその意味を知った檜崎皐月は、『実に、ブッキラブッキラ、上古代人らしい表現だが、よくぞ、カタカムナ人が、ここまでわかったものだ。上古代には偉いヤツがいたものだ。頭が下がります』と驚嘆し、熟慮の末、「対向発生」と訳したのであった。

生命が発生し、存在する状態は、我々は皆、日常的に経験し、よく見て、知っている。しかし、自分が、げんに見て居り、自分自身が感受して(経験して)よく知っているその生命の現象を、物理として(脳が)、認識に出すことは、まだ、出来ていない。

最近の科学は、分子レベルで、(遺伝子や免疫等の生命現象も、)著しく進歩したといわれている。

事実、DNAの構造やよみとり、制御や修復等のしくみに至るまで、科学はよくぞここまで明らかにしてくれたものである。生きる為のしくみは、どんな微細な生物(細菌やウイルスやプラスミド等)でも、我々哺乳類と全く変らぬ同じ順序をふんでつくられていることに、深く感動させられる。

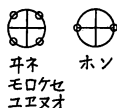
しかし、その生命活動が、どうして発生し、どうして持続されるのか? という核心の物理は、未だ、解明されていないのである。

檜崎皐月が驚嘆したのは、その核心の物理を、カタカムナの上古代人が、(自分たちの感受している生命現象の発生の物理として、)「アウノスベ」というコトバを造って示していたことである。

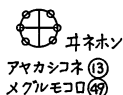
* 「アウノスベ・カムツミ・アマウツシ」等というコトバは、科学用語になれた我々現代人には、何か幻想的な、うさんくさい印象がつきまとい、それは

みると、

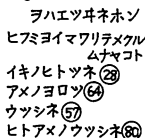
「ヒフミヨイ」は、カムアマ始元量から、「イカツ」(現象の極微粒子)が発生する、サヌキアワの「マワリテメグル」の物理を示し、



「ムナヤコト」は、その「イカツ」から万物万象が発生する、「アウノスベ」の物理を示している。



つまり、「ヒフミヨイ ムナヤコト」は、潜象(カムアマ始元量)から、形態ある現象物が発生する「アウノスベ」の順序を「示すコトバ」である。



「ソラニモロケセユエヌオヲ」は、そのイカツから、様々の現象の形態に、どのようにして進展するか、という、実際の状態(物理)を示すコトバである。

それらの一々のコトバの思念を、現代語に訳すことは難しいが、なぜなら、現代人は、カタカムナ人のような感受が無く、したがってカタカムナのような考え方がないから、それらのカタカムナ人のコトバにあたる用語が無いからである。それ故、私共は、自分の感受性を鍛えて、その感受によって、スナホに(先入見に邪魔されずに、カタカムナのコトバを正直に判断して、)それを、述べている次第であるが、榎崎阜月は、「アウノスベ」を「互換重合・正反対向発生」(フトマニの物理)とし、「マワリテメグル」「カタチサキ」「ソラニモロケセ」「ユエヌオヲ」を、「回転・循環性」「微分統合性」「膨脹・凝縮性」「粒子性・波動性」「統計的存在性」「同種反撥・異種親和」「飽和極限律」「分化・還元性」とした。

「フエツキネホンカタカムナ」は、そのようにして、正・反に枝分れして行く、現象の万物万象の生存の根元の大本は、「カタカムナ」である、というわけである。

要するに、我々の生命は、「カタカムナ」から「アウノスベ」によって、発生したものである、というサトリの表明である。

キ・トコロ)のマリの重合^{フト}があって(アウノスベ),「イカツ」が発生する,ということである。

「イカツ」は,科学で電気粒子といっているモノにあたる。

(「イカツ」という場^{トコロ}を構成するマリだから,ヨ・イのマリを,トキ・トコロのマリというわけである。)(カミの仕事場 238・271・279頁)

カムから分れて出た(タした)「マリ」は,ヒタリ・ミキリに^{マワリ}回転しながら,ヒフミヨイと,重合^グ変遷を繰返し,「ムナヤコト」と,六方^{ムナ}環境から,おびた^ヒだしい数の重合^グ発生を繰返して,ヤ(飽和安定・極限崩壊)に至るまで,重合^グの対向^オ発生が繰返される。

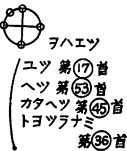
その正反^フ対向^オ重合^グ発生のアウノスベの示^シしは,次の如くである。

「カタチサキ」とは,力^{チカラ}からタして,持^ホ続^ツ的に^ツ分離^リ発生した^ツ小さいマリ,則ちカム無限量の左マワリ・右マワリの潜象のウヅからサキした,ヒフミヨイの小さいマリ,ということ。

「ソラニモロケセユエヌオヲ」とは,そのマリが,ソレゾレの^ソその場^バに^ソあらわれて,次々^ツと(ヨからヤへ),ワクをつくって^ツ連^ツり(織^{オリ}物や編^{アミ}物のメのように),様々^ツな^ツ変化^ツ性を以て,活^ツ性に^ツ勢よく,涌^ツき出してゆく。その生命^ツ力の授^ツかりは,目にみえぬ生命^ツ体^ツ構成のヌシ(アマナ)である。

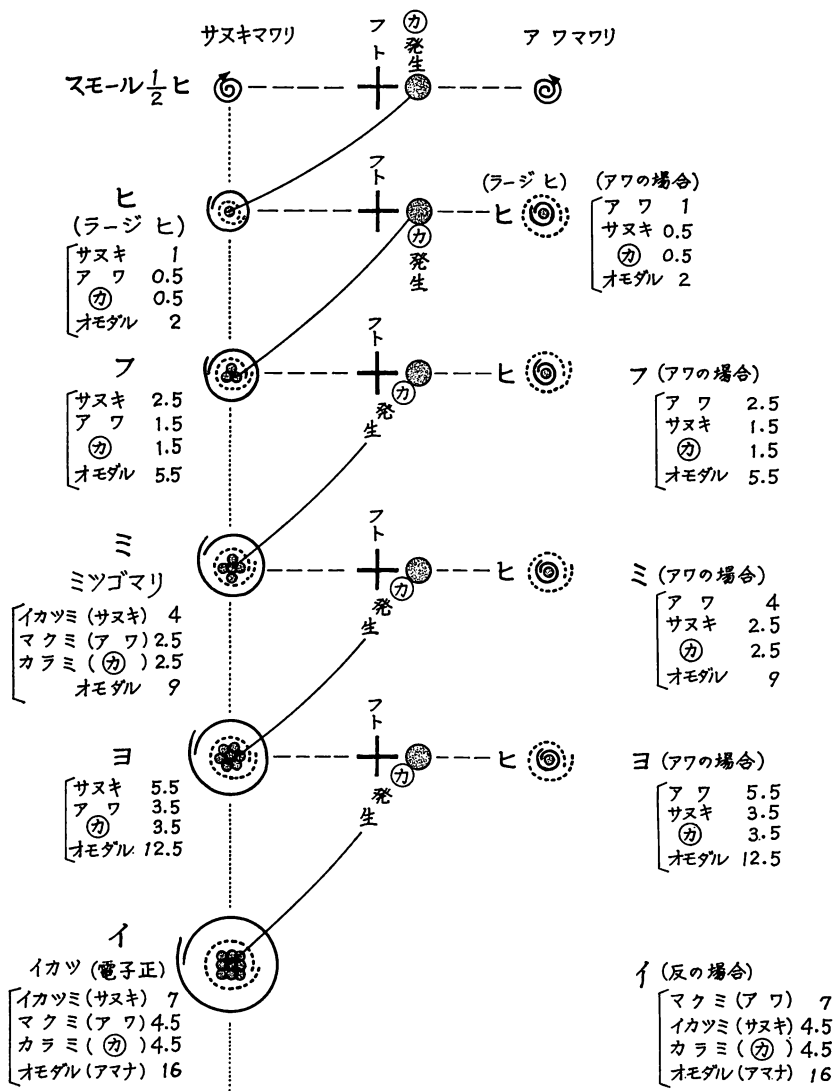
「モロケセ」は,次々と^ツ変遷^ツしてゆくチカラの状態であり,現象^ツ発生^ツの「ネ」である。

「ユエヌオ」は,現象^ツの生命^ツ体を構成し,生命^ツ力を賦与^ツするヌシ,カムナの^ツ重合^ツを受ける個体^ツの^ツアマナ,則ち「^ツキネ」である。



「ヲハエツキネホン」とは,「モロケセユエヌオ」を以て,現象^ツの正反^フ(サヌキ・アワ)の個々^ツのモノ(物質・生命^ツ質)を,豊^ツかに^ツ発生^ツし繁榮^ツさせる,そのカムアマの二^ツつの重合^ツの^ツ根源^ツの,大^ツも^ツとは,「カタカムナ」である,ということである。

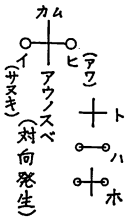
* さて,ここで改めて,この第五・六首のウタを通して読んで



ハコクニ アマナクニ・ アナマクニ (四号 207頁)
 カタチ(原子) チカラ (核子・アマナ)

然の生物，人間の身体と精神の生命現象)，およそ，原初の宇宙から今日まで続いている，あらゆる現象の発生^トの物理である。

カタカムナ人は，そのスガタを，「フトタマノミ ミコト フトマニ ニ」といっている。



「フトマニ」とは，サヌキ・アウが相対して，カムと対向することによって，発生^トの場^{トコ}が出来る，則ち，重合^ト（カムウツシ）がオキ^トて，マ^{イノチ}に，発生^トする，というサトリである。（第三首）

具体的に言えば，宇宙環境には，無限量の潜象^カのチカラが，左マワリ・右マワリのウヅの状態^トで存在する。その正・反のマワリのウヅが出合うと，弱い方をマキ込んで，「ヒ」のマリになる。（「ヒ」は，カムの粒子であるから「カムツミ」ともいう。）（カムツミ・スモールヒ・ラージヒ 135頁参照）

「ヒ」のマリは，表面は左（又は右）のマワリを示しているが，内部には反対のマワリのチカラを重合^トしている。重合^トして「ヒ」のマリとして存在してられるのは，「アウノスベ」（対向発生）で，「カ」（イノチ）が発生^ト（カムウツシ）されているからである。則ち，「ヤタノカ カミ カタカムナ カミ」の本来性^{カガ}の故である。

「ヒフミヨイ」というのは，このようにしてカム無限量から分離^ワしたカムツミ（ヤタノカ）が，「ヒ トツ」の右マワリ^{サヌキ}又は左マワリ^{アウ}のマリとなり，中に「カ」が発生^トして命を保っている。その正反のマワリの「ヒ」のマリが出合えば（アウノスベ），「フ タツメ」の正反^{サヌキ}（右マワリ・左マワリ）の「フ」のマリとなり，内部に反対のマワリを重合^トし，中に，「ヤタノカ」が発生^トし「フ」のマリの命を保っている。その「フ」に又「ヒ」が出合えば（アウノスベ），同様にして「ミ ツゴ」のマリとなる。「ミツゴ」とは，右マワリ^{サヌキ}のチカラの「イカツミ」と，左マワリ^{アウ}のチカラの「マクミ」と，フ タツの重合^トで発生^トしたカ^トの「カラミ」との三素量である。（オキミツゴ 第二十二首，三号81頁）

「ミ ツゴ」マリは，あらゆる生命の実質であり，その上に，「ヨ・イ」（ト

⊕ ヒタリ
ア (アフ. ヒト
カダ. ヒヒキ
サカ. アキカダ)

⊕ ミキリ
ウ (ウチ. ミチ
ウミ. サチ
ウダ. サキミチ)

⊕ アウ
カミ カタチ
チカラ
ヒタリミキリ

「潜象」という言葉は、榑崎臯月の造語であるが、現代語に、「現象」という言葉があるのだから、「潜象」という言葉があっても不思議は無いであろう。

「潜象」といっても、現象宇宙とは別の異次元の世界、というような、宗教やオカルト的な神秘思想では、決して無い。

「カム」を「潜象」というのは、確かに存在するモノであるが、そのスケールは、人間の測定器で（どんな精密な顕微鏡や望遠鏡でも）計ることが出来ないから、「潜象」としたのである。

「カム」から変遷した「アマ」（宇宙の万物万象）は、その質量（オモダル）をはかることは出来る。しかし「カム」は、確かに存在し、我々が感受できるモノであるが、その質量を計ることは出来ないから、「カム無限量」というのである。（我々は潜象を計る測定器を持たない。）

さて、カムは潜象のチカラの状態で左マワリ・右マワリの極微のウヅをまいて遍満している、といっても、それだけでは、何ごとも始まらない。

実際は、極微のウヅであっても、そのチカラには、大・小さまざまの差がある。

それ故、その左マワリ・右マワリのチカラが出合えば、チカラの強い方のマワリに巻きこまれ、表面は、左（又は右）のマワリを示し、内部に、反対の右（又は左）のマワリを重合したマリになる。（カタチサキ）

この、最初に出たマリを、カタカムナ人は「ヒ」とよんだ。

「ヒ」とは、最初の「アウノスペ」の示しであり、最初の「フトマニ」である、ということが出来る。

「アウノスペ」とは、榑崎臯月が、「正反対向発生・互換重合」と訳した、カタカムナの根本原理である。

則ち、正・反のものが相対して向い合う場ができると、カタカムナの重合（カムウツシ）が発生する、という、生命発生のサトリである。

それは、原初の宇宙の、最初の生命の発生、というだけの意味では無い。昔も今も、およそあらゆる天然・自然・人間の現象（雨や雲の自然現象から、自

る。

- 1 回転循環性 (ヒフミヨイマワリテメグル・ムナヤコト)
- 2 互換重合性(アウノスヘシレ・トキトコロトコタチ・フトマニのサトリ)
- 3 微分統合性 (カタチサキ・統計的存在性・イマタチのサトリ)
- 4 正反対称・歪性 (ソラニモロケセ・変化性・不確定性)
- 5 正反親和・同種反撥性 (ソラニモロケセ・マトマリ性・重深性)
- 6 膨張・収縮・流線 (波動性)・結球 (粒子性) 四相性 (ソコソギ シマ
マリ ユエヌオラ)
- 7 極限飽和安定性 (ハエツキネホン カタカムナ)
- 8 分化・変遷・還元・循環性 (オホマノワ・環境・相似性)
(三号 38頁, 六号 38~, 84~頁)

又, カタカムナのサトリ (直観物理) に基き, 科学に無い, (未知の,) 時空量の真意, 互換重合の物理, 質量の考え方, 物質・生命質の本質, 統一場の理論, 相対象, 融通性, 交換と連帯の本質, について, 述べている。(六号)

これは, 彼が『将来の科学は, カタカムナに追随することになる』といった, その, 将来の科学を, 先どりしたものであるから, 科学者が読んでも難解であり, 筆者が精一杯解説に努めても, 一般読者から, 難しい, わからない, といわれている。

科学者・専門家には, いかにも難しくとも, 楯崎皐月の示したレベルでの理解に, つとめて頂くしかないが, 一般読者には, そのようなレベルの理解は無くとも, カタカムナ人が感受した, 人間の生命と精神のサトリの根拠を, マ違いなくつかんで, 現代人の失ったカタカムナの心 (本当のヒトココロ) を, 復活されればよいのであるから, 出来るだけ, カタカムナのコトバをスナホに, (筆者自身の感受に正直に,) 解説することに, 努めてゆくつもりである。

＊「カタカムナ」の「力」とは, 人間の能力では, 「カム」(無限量) というしか無いが, 確かに存在し, 潜象のチカラの状態で, 左マワリ・右マワリの極微のウツをまいて, 宇宙環境に遍満しているものである。(と, カタカムナ人は感受した。)

(カタ チサキ)という感受があった。

その感受が、今日までうけつがれているわけである。則ち「マリ」といえば、丸くてまわっている小さいものであり、「タマ」といえば、「タしたマ」であるから、ハッキリと「球」の形のもの、という思念である。

* 「ヒ」のマリとは、科学が最小の物質としている電子・原子・素粒子よりもはるかに小さい、科学がまだ発見していない極微の潜象のモノである。

「ヒ」(のマリ)は、どうして発生したのか？

その「ヒ」から、どうして現象の万物万象が発生したのか？

その物理を、カタカムナ人は 感受に基づいて、直観によって開発し、「ヒフミヨイ マワリテメクル ムナヤコト」というコトバにウツシ、その物理の根本は、「アウノスベ」(正反対向・互換重合の自然理)であり、その根源の大本は、「カタカムナ」であることを、宣言している。

このコトバは、マサに「宣言」というべき重さ、畏しさをもっている。

今日まで人類が、(科学も哲学も宗教も、) 求めても探しても、どうしても得られなかった、生命と精神の根源の物理 である。

それがここには「ヒヒキ マノスベシ」「アウノスベシレ」と、明言されている。

榎崎皐月から、この「カタカムナ」の解説を伝えられた時、筆者は、身のふるえるほどの驚きを覚えた。

それから二十年、今、カタカムナ人が「ヒフミヨイ」といったモノを、筆者自身の感受によって、確かに直観しうるに至り、カタカムナ人のコトバ(八十首のウタヒ)が、少しずつ、実感できるようになって来た。

まだまだ未熟で、わからぬこと多く、解説に苦慮している有様であるが、感受し得ただけを、(できるだけカタカムナ人の心になって、) 正直に、述べている次第である。

* カタカムナ文献の内容を、榎崎皐月は、アマ始元量の物性論 とし、時空互換量子の物性、心の物性、物質基礎粒子の物性、基礎生命質の物性 としてまとめている。(三号)

又、天然の本来性にもとづく現象界の方則を、八の自然則 として示してい

いうことを、読者はもう一度、よく考えて頂きたい。カタカムナ人は、今、我々が持っている様々な智識は無く、例えば「脳」という言葉も、「生命」という言葉も、無かった。彼らは、人類としての（我々現代人と同等の）基本的な生命力（感受性と判断力）を以て、自分たちの感受し判断したモノを、四十八のコトバを造って、表明したのである。

それ故、カタカムナのサトリをわかりたいと思えば、我々も、現代人の智識や常識のままて読むのではなく、人間が本来もっていた、最も基本的な正直な感受性と判断力になった気持で読むのでなければ、わかりようがないのだということ、もう一度よく考えて（自分自身を逆序して起励して）、読み進んで頂きたい。

* 次に、この四十八語のカタカムナのウタヒを、出来る限り、カタカムナ人の心になって、解説してみよう。

ヒフミヨイ マワリテメグル ムナヤコト は、既に述べた通り、単なる教詞では無く、無限量のカムから、どうして現象物質の万物万象の生命体が発生するのか？（現代科学が、最小の物質とする、電子・原子・素粒子とよぶものが、どのようにして何から発現するか？）について、カタカムナ人の感受し、開発した潜象物理を示したコトバである。

㊦ヒ 「ヒ」とは、カム 無限量から発生した アマ 始元量の、最初の最小の単位（マリ）である。（「ヒ」133～頁）

十カ カタカムナ人（上古代語）の「マリ」というコトバは、まだ

㊦ア 「粒子」と訳すわけにはゆかない。なぜなら、それはまだ マからりした（別れた）ばかりの状態 であって、現象の「粒子」のように形があるわけではないからである。

㊦マ 今日、我々は、「マリ」といえば、当然、丸い球状の形（タマ）を思うが、その語源はカタカムナにあったことが、カタカムナ

㊦リ

㊦マ

㊦タ

㊦マ

㊦タ

今日、我々は、「マリ」といえば、当然、丸い球状の形（タマ）を思うが、その語源はカタカムナにあったことが、カタカムナ文献の解説によって、つきとめられた。「マリ」とは、カタカムナ人が、「マからり（分別）したもの」という意味で造ったコトバであり、「マリ」には「マワリ」という思念があるから、「マリ」といえば彼らには、「丸くてまわっている小さいもの」

につけることができる。(アンアトウアン 36~41頁)

- | ヲ カタカムナウタヒには、「アン」と「ホン」しか無いが、我々が
④ | シ 「ン」というのは、うなづく時であり、力を入れてものを押し
④ | イ たり圧したりする時である。
○ | D | ヲ 「ン」という声音は、それを、確認し、納得し、強調する思念
と考えられる。

* さて、このウタヒは、「ヒフミヨイ マワリテメグル ムナヤコト アウ
ノスペシレ カタチサキ ソラニモロケセ ユエヌオラ ハエツキネホン」
が、「カタカムナ」である、と結んでいる。

要するに、「ヒフミヨイ」に始まる四十八語のウタヒは、「カタカムナ」を説明
して(教えて)いるわけである。

四十八語の思念は述べたから、このウタヒ全体の意味を、読者自身も、味読
してみて頂きたい。

筆者は、榑崎皁月の解説にもとづき、私共が今日までに感受し得た内容を、
述べてみよう。

果して、これで、カタカムナ人が、「ウン」とうなづいてくれるかどうか？
を畏れながら、なお生命のある限り、つきつめてゆく所存である。

* 直訳的に訳すれば、

ヒ・フ・ミのマリがヨ・イのマリとなり、^{マツリ}回転しながら^{メグル}循環し、^{ムナ}六方環境
から何回もくりかえしくりかえし、^{キョウ}極限安定するまで、^{マシ}繰返し^{カヘ}重合される。

その^{カマ}重合が^{マシ}繰返し発生する物理を示せば、^{カマ}カムの無限のチカラが、^{マシ}微分されて、
^{マシ}環境の場に現れ、^{マシ}次々と^{マシ}凝集連合し、^{マシ}多様な変化性を發揮して、^{マシ}もろもろの万象
に^{マシ}発現する^{マシ}恵みの生命力となり、^{マシ}目にみえぬ、^{マシ}生命体構成の^{マシ}根源(生命の核)のチ
カラとなる。

このような、^{マシ}環境のチカラを以て、^{マシ}万物万象は、^{マシ}正・反に発生し、^{マシ}成長し^{マシ}繁榮して
行くのであるが、その^{マシ}個々の^{マシ}生命の^{マシ}重合の^{マシ}根源の^{マシ}大本は、^{マシ}カタカムナなのである。

カタカムナ人は、今我々現代人が使っている日本語は、何も持っていなかった、と

(ウヒチニホロン)「ホケ」(オホケツヒメ)「ホツ」(イホツワケ)「ホン」(ハエツキネホン)

「イホ」(イホクニツマリ・イホツワケ・イホハラハメ)「ヨホ」(トヨホイホ)「ナホ」(カムナホグ, アヤカムナホヒ・オホカムナホヒ・オホナホヒメ・カムナホヒ・アメノナホヒ・ヤタナホヒ)「ヤホ」(ヤホトヨノユツ・ヤホソトナミ・ミコニホヤホ・ヤホウツシクマリ・ヤホヤタトメ・ヤホマリフナミ・ヤホマ・ヤホウミ)「オホ」(オホアマウツシ・オホヤヒコ・オホカムナホヒ……)

「ホ」のつく日本語は、ホホ(頬)・ほほえみ・ホボ(大かた)・ホクロ・ホシ・ホカ(外)・ホコリ(誇・埃)・ホマレ・ホしい(欲)・ホス(干)・ホウ(方)・ホエル(映)・ホゾ(へそ)・ホソ(細)・ホタル・ホド(程)・ホネ(骨)・ホラ(洞)・ホリ(堀)・ホン(本)・ほれる(惚)・ほれぼれ・ほのぼの・ほがらか・ほのか・ほのめかす・ほめる・ほこる・ほころびる・ほしいまま・ほぞをかむ・ほっさ(発作)・ほどあい・ほどく(解)・ほとぼしる・ほどこす・ほとぼり・ほねみ(骨身)・ほむら(炎)・ほてり・ほや(小火)・ほら吹き・ほうほうのてい・ほうぼう(もえる)・草ぼうぼう・ぼつぼつ・ほうじる(焙)・ほうる(放・投)・ボツ(没)・ほる(彫・掘)・ぼる(むさぼる)・ぼろ・ぼろぼろ 等がある。

(因みに、豊・奉・報・謀・宝・防・亡・忘・放・法・坊・訪 等は、ホウでも、漢字からのものである。)

* 「ン」という声音符は、縦線 と、イの位置の小円一個で造られている。大円(ワ)は無い。

縦線はカムのカカワリを象徴し、小円の「イ」の位置は、現象物の最小単位を示す。

又、「ン」は、アン・イン・ウンの如く、他の四十七の声音

ギ(祝), ホノボノ・ホンノリ・ホンモノ・ホントウ等は, 「ホ」の思念から出来たコトバである。(ホグ 120~頁)

人間が何よりもホしいのは, イノチの授かり(カムウツシ)である。

愛しあう男女が交っても(ハ), 「ホ」がなければ, 子は生れない。

人間がいかに考え, 努力しても, 「ホ」がなければ, 新しい思想も, 真の美も愛も, 創造も, 発生することは出来ない。「ホ」される場をつくりつづけることが, ホントウの「イノチ」である。

「ホ」を図象符にすると, ホト・ホキ・ホン・イホ, アシ・アシア・アシアト・アシカヒ・アハキ・アン, イハ・イカ, カハ・カシ・カル・サカル, シヒ・シヒハタ・ハヒ・トハ・ハシ・ハシリ・ハリ, カン・アリカタイ等とよめる。

* カタカムナウタヒの中で「ホ」のつくコトバは, 次の通りである。

「ホク」(ホグシウタ・カムナホグ・イホクニツマリ)「ホナ」(オホナホヒメ・オホナミヒメ)「ホヤ」(オホヤヒコ・オホヤマツミ・オホヤマト)「ホコ」(ホコアメ・オホコトオシラ)「ホト」(ミホト・ミソデホト, オホトノチ・オホトノベ・オホトヒワケ・オホトマト・オホトコロ・オホトヤシマ・オホトタマ・オホトチムスヒ・オホトチカサネ・オホトマトヒコ・オホトマトヒメ・オホトケハシリ, オキホトムツ・ヤホトヨノユツ)「ホマ」(オホマヒコヒメ・オホマカツヒ・ヤホマリフナミ・ヤホマカムウツシ)「ホワ」(オホワカエシ・オホワタツミ・オホワタマリ・オホワクムスヒ)「ホノ」(ホノサワケ)「ホカ」(オホカムツミ・オホカムナホヒ・オホカムカエシ・オホカムナガラ・ミナカノオホカミ)「ホタ」(オホタマル)「ホチ」(オホチカム)「ホソ」(ヤホソトナミ)「ホキ」(ウツシホギ)「ホロ」

⊕ ホン
ホギ, ホト
イホ, イハ, イカ
アン, アシ, アシア
アシカヒ, アシアト
(カン)(アrikataシ)
カハ, カシ, カル
タル, サカル,
サカタル,
シヒ, シヒハタ
ハヒ, ハシ, ハリ,
ハシリ, トヒ, トハ
イハトハ

ける・ねじこむ・ねじめ・ねたむ・ねだやし・ねだる・ねづよい・ねばり・ねむけ・ねる（練・煉・鍊）・ねりあるく・こねる・ネン（念・捻）・ねんいり・ねんりん（年輪）・ねえさん・ねんねこ等は、この「ネ」の思念から引伸したものと思われる。

* カタカムナウタヒの中で「ネ」のつくコトハは、次の通りである。

㊦ユ ㊧エ

㊨オ ㊩ヌ

㊪ヨ ㊫ヲ

㊬ネ
トネ・ノネ
タネ・フネ
キネ・トフネ
サネ・ネキ
ムネ・ネサク
ヤネ・ノセ
メノセ
セヲキネ

「ネ」（イハサクネサク・フトヤユマリネキ）「ヒネ」（ムスヒメヒネ・ヒネシマヒメ・ヤマトヒネ）「フネ」（イハクスフネ・イワクストリフネ）「マネ」（アマネキアメノワク）「クネ」（イハサクネサク）「ムネ」（ムネニタナマタ）「ヤネ」（イハフトヤネ）「コネ」（アヤカシコネ・アヤクメシコネ）「トネ」（アメノヒトネ）「ノネ」（イカツチヒビキマノネ・イカツチヒビキアマタマノネ）「シネ」（アカキウツシネ・ケシキウツシネ・ヒトアメノウツシネ）「タネ」（フタネフタハシ・ヨミタネウム）「チネ」（アメツチネハシマリ）「サネ」（イヤミツギサネ・シマカサネ・アワナギカサネ・オホトチカサネ・ワツラヒノウシカサネツミ）「ラネ」（マリツラネ）「ハネ」（フナカエシハネ・マリタバネ）「ツネ」（イキノヒトツネ・アマツアキツネ）「キネ」（ハエツキネホン）

* 「ホ」という声音符は、十字象 と、ヒとイの位置の 小円二個 で造られている。

㊭ホ

十ト

〇ハ

㊮イ ㊯ヒ

㊰シ ㊱ア

〇ソ 十カ

〇ソ

又、「ハ」に縦線を加えたともいえる。

縦線は、カムのカカワリ（カムウツシ）を意味するから、

「ホ」とは、正反のものが向いあっているところに、カムウツシが発生する状態、則ち正・反親和の思念であり、カタカムナの対向発生メカのサトリを意味するわけである。

日本語の「ホ」（穂）や、ホしい・ホめる・ホれる（惚）・ホ



ト.トフ.トサ
トキ.トリ
サ.サト.サロ
サキ
サキサトリ
サワ
キ.ネリ.キサ
タキリ
タリ

である。

「十」の図象符は、サトリを象徴し、二重のサトリとは、カム・アマのフトのサトリの意味に違いない。則ち、アマウツシ・カムウツシの発生を示すものと思われる。

檜崎臯月は、後代の、古い神社の鳥居が、井の形であったことから、最高のイヤシロチの印としたのではないかと語っていた。仏教伝来後、トーラナ（鳥居）と混同されたものと思われる。



* 「キ」の思念は、泉や井戸の水の湧くように、二重に発生する生命の根源（イキノト）の意味と考えられる。



現代語では、「キ」は「イ」の中に入れられてしまい、発音の区別もできないが、日本語の「キ」は、井戸・胃・居・遣・畏・為・委・敬（キヤマヒ）・偉・位（クラキ・キチ）・圍（カコキ・キロリ）・堰（キセキ）・田舎（キナカ）等に、「キ」の思念が感じられる。



カタクamnaウタヒの中の「キ」というコトバは、この「ハエツキネホン」のみである。

* 「ネ」という声音符は、十字象と、フヨムヤの位置の 小円四個で造られ、大円（ワ）は無い。

 ネ

 } 

 } 

 } 

「ネ」とは、モロケセのユエヌオを以て、「ハエ」する個々の、根源（マカツヒ）と、なるものなのである。

「ネ」といえば、我々は「根」という意味が浮ぶ。「ネ」の思念とは、要するにものごとの根源という意味であろうと考えられる。

現在の日本語の「ネ」のつくものの、ネ（根・音・値）・ネカヒ（願）・ネコ（猫）・ネジ・ネジル・ネジロ（根城）・ネズミ・ネタ（たね）・ネツ・ネムリ・ネヤ・ネラヒ（狙）・ネる（寝）・ネエ・ねぎらう・ねぎる・ねこそぎ・ねこばば・ねざす・ねじ

ツト (みやげ)・つど (都度)・つとに (早く)・ツナ・ツナミ・
 ツネ・ツノ・ツバ (唾・鏝)・ツバサ・ツブ・ツボ・ツボミ・
 ツマ・ツメ・ツミ (罪・積・摘)・ツムジ・ツヤ (艶・通夜)・
 ツユ (露・汁・少しも)・ツマリ・ツラ (面・列)・ツラナリ
 (連)・ツララ・ツリ (釣・吊)・ツリアヒ (均衡)・ツル (弦・
 蔓・鶴)・ツルギ・ツルベ・ツレ (連)・つい (思わず・すぐ)・
 ついえ (費・潰)・ついて (就)・ついで (序・次)・ついに (遂)・
 ついばむ・ツエ (杖)・ツカ (束・塚)・ツカサ・つかい (使・
 遣)・つがい (番)・つかえる (仕・支・間)・つかまえる・つ
 かまつる・つかむ・つかれる・ツキ (月)・つきあい・つきあ
 たり・つぎこむ・つぎつぎ・つきつめる・つきなみ・つき穂・
 つきまとう・つきる (盡)・つく (突・付・撞・憑)・つぐ (継・
 次・注・嗣)・つくづく・つくだに・つぐなう・つくる (造・
 作・創)・つくるう (繕)・つけあがる・つげぐち・つけつけ
 と・つけめ・つけやきば・つける (付・就・着・潰)・つごう・
 つごもり・つじつま・つたえ (伝)・つたない (拙)・つちか
 う・つつ (ながら)・づつ (宛・ひとつづつ)・つつがなし・つ
 つしむ・つったつ・つつぬけ・つつましい・つつむ (包)・つ
 づら折り・つづりかた・つながり・つねる・つる・つのかく
 し・つぶさに・つぶす・つぶやく・つぶれる・つまされる・つ
 ま戸・つまはじき・つまみぐい・つまむ・つむる・つめかけ
 る・つめこむ・つめたい・つめばら・つもり・つやけし・つゆ
 ばかり・つよい・つらつら・つらあて・つらい・つらくし・
 つらぬく・つりあい・つり出す・つるむ・つれづれ・つれ子・
 つわもの・つわり・つんざく・つんぼさじき 等がある。

* 「𠩺」という声音符は、一見して、現行カタカナの「キ」が大円(ワ)に
 入っている、とわかるが、その思念は、何であろうか？

⊕ 𠩺 (トリキ)

「𠩺」は、カタカムナの「ト」(+)が、二重に組合された形

ミ)「ワツ」(ワツラヒノ)「ムツ」(オキホトムツ・ムツノウツシカエシ・カムツミ)「シナツヒコ」,「ヒトツ」(ヒトツカタ・ヒトツネ・ヒトツハシラ)「ノツ」(イククヒノツチ・イヤシロノツチ・カムマトマリノツキタテ)「ヘツ」(ヘツナギサヒコ・ヘツカヒヘラ・カタヘツ)「シツマリヌ」,「ウツ」(ウツシマツル・ウツシホギ・ウツシヨミワケ・ウツシタマイキ・ウツシネ・ウツシキカナ, ヤホウツシツミ・イカツチウツシツミ・ヘサカルカムミウツシツミ, アマウツシ・ハヤウツシ・アナウツシ・チハウツシ・ハヒウツシ・ナギウツシ・ナミウツシ・フカヒウツシ・アメノウツシ・ヤホウツシ・カムウツシ・アメウツシ・ヒトウツシ・ウミウツシ・アキウツシ, アメノウヅメ・ウヅメクソ・ウツメヒメ・ハニヤギウヅメ)「カツ」(カツムスヒ, イカツアワナギ・イカツツラナギ・イカツチヒヒキマノネ・イカツチヒヒキアマタマノネ・タケイカツチ・ヤクサイカツチ, クニカツキ・セカツキ・ナカツシロ・ナカツツラ)「タツ」(ツキタツフナト・ヒトツカタツミ, オホワタツミ・ソコツワタツミ・ハヤウツシワタツミ・アナウツシワタツミ・チハウツシワタツミ)「キツ」(イキツサキヨリ・イキツヒメシマ・イキツチノワ・ハヤアキツ・タニキヒコアキツノ・アマツアキツネ, オキツフトマリ・オキツカヒヘラ・オキツサキシマ・アヤオキツ)「モツ」(ヨモツチシキ・ヨモツチカヘツ)「ロツ」(ヨロツ・ヨワロツ)「ケツ」(カサケツワケ・オホケツヒメ)「アメノトヨセツミ」,「ユツ」(ヤホトヨノユツ・アナユツ・ユツコナカムミマリ)「ハツ」(イハツチヒコ・イハツツラ・イハツツヌラ・ウハツワタツミ・ウハツツラ・ハツチヒコ)「ハエツ」「イホツワケ」

* 「ツ」のつく和語には、ツ(津)・ツイ(対)・ツジ(辻)・ツタ(蔦)・ツチ(土・槌)・ツツ(筒)・つづうらうら(津々浦々)・ツヅキ(続)・ツツミ(堤)・ツヅミ(鼓)・ツテ(伝)・

マツミ、カムツミシヅマリヌ・カムツミツキタツフナトイキコ
コロ・オホカムツミ・トヨカムツミ・カムツミココロ、ヒトツ
カタツミ・フツサカルツミ・ウキフツミ・イハスヒメツミ・ワ
クツミ・カサネツミ・アメノトヨセツミ・ソレツミ、ヤホウツ
シツミ・ヤクサイカツチウツシツミ・ヘサカルカムミウツシツ
ミ、オホワタツミ・ソコツワタツミ・ウハツワタツミ・ハヤウ
ツシワタツミ・アナウツシワタツミ・チハウツシワタツミ)
「ツク」(ツクシマ・ムラチイツク)「ツノ」(イツノタテカ
ム・イツノメニ・イツノメノ、アキツノ・タケフツノ・ムツノ)
「ツカヒ」(オキツカヒヘラ・カタヘツカヒヘラ・ヘツナキサヒ
コヘツカヒヘラ)「ツチ」(アメツチネハシマリ・イキツチノ
ワ・イハツチヒコ・ヌツチ・カヤヌヒメツチ、アメノサツチ・
クニノサツチ、ヒノカクツチ・イククヒノツチ・カクナツチ、
イカツチヒヒキ・タケイカツチ・ヤクサイカツチ、タマルツ
チ・ケカクツチ・イヤシロノツチ・ハツチヒコ・ヨモツチカヘ
シ・アナユツチハウツシ)「ツキ」(ツキタテフナト・ツキタツ
フナト・ツキヨミマ・クニカツキ・セカツキ)「ツラ」(ツラナ
ギナミ・ツラナギメグル・トヨツラナミ・マリツラネ・ココロ
ツラナギ・イカツツラナギ・ワツラヒノウシ)「ツヌ」(ツヌク
ヒ・ツヌラ)「ツヲ」(イツヲノメ・イハツツヲ・ソコツツヲ・
ナカツツヲ・ウハツツヲ)「ツツウミノアナ」,「ツツミ」(トロ
ヤマツツミ・クミトヤマツツミ・イワトヌマツツミ・オトワヤ
マツツミ)「ツネ」(アマツアキツネ・イキノヒトツネ)

「フツ」(ウキフツミ・タケフツ・フツサカルツミ・トヨフツ
フミ)「ミツ」(オキミツゴ・オキミツゴシマ・ミツゴナミ、ミ
ツハノメ・ミツハワクムス・クラミツハ、カセミツ・ハヤヨミ
ツ・チハヨミツ)「イツ」(イツノタテカム・イツノメ・イツ
ク・イツヲノメ)「マツ」(ウツシマツル・アマツクニ・アマツ
ミソラ・アマツカミ・アマツトメ・アマツアキツネ・オキアマツ・ヤマツ



マワリテ、ナリテ
マトマリ
ナミ、ナミナギ
ミナ
タマキ
チマタ

ある。

「エヒメ」, 「カエシ」 (トロカエシ・オホカムカエシ・ワケカエシ・オホワカエシ・ワタカエシ・チハウツシカエシ・イキカエシ・スヘカエシ・ムツノウツシカエシ・フナカエシ・カエシナギ・カエシコト)

「エ」のつく和語は、(本来「エ」のものを除き,) エダ(枝)・エビ(海老)・エゾ(蝦夷)・エビス・えと(干支)・エナ(胞)・エラ(鰓)・エリ(衿)・エニシ(縁)・エモン(衣紋)・えもんかけ・えもの・えやみ(疫病)・えらぶ・えこひいき・えこじ・えせもの(似而非)・えたい(正体)・えもの(得物)・えんえんと等がある。

漢字からのものは、映・永・栄・英・鋭・詠・影・悦・越・役・易・益・疫・駅等がある。

* 「ツ」という声音符は、十字象と、ヒミイナの位置の四個の小円とで造られている。



又それは、「ハ」と「エ」を合せた形と、いってもよい。

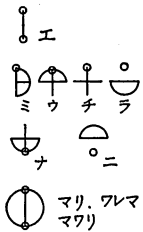
「ツ」の思念は、「ハ」に「エ」すること、則ち、正反にのびひろがったもの。それを、ヒトツ・フタツ・ミツと数える、その力のツ(数)の個々、という思念である。

* カタカムナウタヒの中には、「ツ」のつくコトバは沢山あり、次の通りである。(それをみれば、カタカムナ人のみだ「ハエツ」は、どのようなものであったかがわかって、おもしろい。)

「ツヒ」(マカツヒ・アキツヒコ・アキツヒメ・シナツヒコ・オホケツヒメ・イキツヒメシマ・アワノマカヤソマカツヒ・オホマカツヒ)「ツミ」(ニナタマノワケツミ・ヤスマワケツミ, オホヤマツミ・マサカヤマツミ・イワトヤマツミ・オドヤマツミ・クラヤマツミス・オクヤマツミ・ハヤマツミ・ヨミオキヤ

タキ(叩)・ハダシ・ハタシテ(果)・ハタチ(二十)・ハタと(当惑)・ハタハタと(旗が)・ハタメ(端目)・パタヤ(くず拾い)・はたらく(働)・ハチ(鉢・蜂・八)・バチ(罰・撥)・ハツタリ・果て(なれの)・はで(派手)・ハナ(花・鼻・端・漢)・はなぐすり・はなもちならぬ・ハナシ(話・談・噺・放し)・はなはだ(甚)・はなやか・はなれる(離)・ハニ(埴)・はにかむ・ハネ(羽・跳)・ピンはね・ハハ(母)・ハバ(幅)・ババ(婆・祖母・馬場)・はばかりながら・はばきき・はぶり・はばむ(阻)・はびこる・はぶく(省)・はぶたえ(羽二重)・はべる(侍)・ハマ(浜)・ハマグリ(蛤)・はまる・はみでる・はむ(食)・ハメ(羽目)・はめをはずす・はやい(早・速)・もはや・はやし(林・噺子)・はやて(風)・はやまる・はやる(流行・逸)・ハラ(腹)・はらから・はらつづみ・はらばい・はらう(払・祓)・はらす(晴)・はらむ(孕)・はらわた・ハリ(針・鍼・鉤・張り)・はりきる・はりあい・はりこむ・ハル(春・張・貼)・ハレ(晴・腫)・はるか・はるばる・はれもの・はれんち・バン(晩・番)・はんば・ハンパもの・ばんばん(よろしく)等がある。

* 「エ」という声音符は、ミとナの位置の 小円二個 が、縦線によって結ばれている。



これは、「ハ」を縦にした形であり、又、現行カタカナの「エ」を連想させる。

「エ」を図象符にすれば「マリ」「マフリ」となる。

又、日本語のエダ(枝)・ハエる(生・栄・映)等の連想から、「エ」は、波が^{なみ}拡がるように、枝がのびるように、生成繁栄する思念と考えられる。

* カタカムナウタヒの中で「エ」のつくコトバは、次の通りで

ス・イハクス・イハサク・イハツツ・イハツツヌヲ)「ヤハ」
 (ヤハマカシ・イヤハム)「トハ」(イハトハ・イマトハ・アカ
 ミコトハ)「アハ」(アハチホノサワケ・アハキマハラ・アハキ
 タカタマ)「ノハ」(アメノハニヤス・マノハストチ・アメノハ
 ジマリ・アメノハム)「カハ」(カハウミワケ・マカハコクニ・
 タカマカハラ・ミカハヤヒ)「チハ」(イヤシロチハ・ミチナカ
 チハ・アナユツチハウツシ・ワタカエシミチチハ・ハマトヨチ
 ハウツシカエシ・カムナガラチハヨミツ・カムアマミチハヒウ
 ツシ・アメノナホヒチハヒメ)「キハ」(ヒノヤキハヤヲ・イヤ
 ミソギハニヤス・ココロツラナギハヤマツミ・セカツキハクミ
 ・アマアワナギハヤアキツ・オキハヒ)「モハ」(イモハヤアキ
 ツ)「ロハ」(ウロハユ)「ケハ」(ウケハシ・オホトケハシリ・
 サクタケハヤス・オホトヒワケハツチヒコ)「ヲハ」(ヲハバ
 リ・ヲハエツ)「ホハ」(イホハラハメ)

「ハ」のつく日本語は、漢字からのものが多いが(反・版・半・
 万・般・判・発・波・白・破・博・配・拝・背・敗・廃・排・
 派等),和語では、ハ(葉・齒・羽・端)・バ(場)・バアヒ(場
 合)・ハイ(返事・灰)・はいく(俳句)・はう(這)・はえ(榮
 生・映)・はえぬき・はかない・ばかす(化・魅)・バケモノ・
 バケのかわ・はかどる・はがゆい・はかる(計・量・測・図・
 謀・諮)・ハカ(墓)・ハギ(脛・接)・ハク(吐・掃・履・剝
 ぐ)・はぐくむ(育・哺)・はぐれる・ハケ(刷毛)・はけぐち・
 はげしい・はげむ・ハゲ(禿)・ハコ(箱)・はこぶ(運)・は
 ざま(狭間)・はさみ(鋏・挾)・ハシ(橋・端・簪)・ハヂ(恥
 愧)・はしる・はしご・はしたない・はしゃぐ・はじめ(始
 初)・ハシラ・ハシリ(走・初物)・はしりがき・ハス(蓮・
 斜)・はすかい・ハズ(筈)・はずかしい・はずす(外)・はす
 っぱ(下品)・はずみ・はずむ(弾)・はぜる(爆)・ハタ(畑
 旗・機)・はたまた(もしくは)・ハダ(肌)・ハダカ(裸)・ハ

端等は、まさに、正・反に出たものが、バランスよく結合されている。

又、「ハシ」（ハの示し）とよばれる橋も（正反の岸を），箸も（二本の箸で口と食物とを），結んでいる。花も，鼻も，羽も，「ハ」の思念がある。日本語はまさしく高度の抽象語である。

* カタカムナウタヒには、「ハ」の助詞的な用例は無い。

カタカムナウタヒの中で、「ハ」のつくコトバは，次の通りである。

「ハヒ」（マクハヒ・オキハヒ・ハヒウツシ・ハヒタマ・ハヒオキナサキミチ）「ハマ」（ハマリ・ハマトヨ・ヤハマカシ）「ハリ」（ヲハバリ）「ハメ」（ナミハメ・イホハラハメ）「ハク」（ハクミ・イハクス）「ハム」（アメノハム・フナイヤハム）「ハナクスヘ」，「ハヤ」（ハヤアキツヒコハヤアキツヒメ・ハヤヒタケフツ・ミカヒハヤヒヌ・ヒノヤキハヤヲヒメ・ハヤマツミ・ハヤササノヲ・ハヤタニサキ・ハヤウツシ・ハヤヨミツ）「ハコ」（マカハコクニ）「ハノ」（ミツハノメ）「ハウ」（カハウミワケ・チハウツシカエシ）「ハス」（イハスヒメツチ・マノハストチ）「ハシ」（ハシマリ・フタハシ・ヒトツハシラ・ウルハシ・ウケハシ・オホトケハシリ・オキツフトマハシ）「ハカ」（ミハカシナ）「ハタ」（シヒハタ）「ハサ」（イハサク）「ハキ」（アハキマハラ・アハキタカタマ）「ハラ」（タカマカハラ・マハラ・アシハラ・カシラハラ・ハラヤマ・ミハラ・イホハラ）「ハニ」（イハトハニ・ハニヤス・ハニヤギ）「ハユ」（ハユタヘ・アマハユ・ウロハユ・トロミハユ）「ハハ」（ヲハハリ）「ハエツ」，「ハツ」（イハツチ・イハツツヌヲ・ウハツ・ウハツツヲ・ハツチヒコ）「ハネ」（タバネ・カエシハネ）「ミハカ」，「ヨハ」（アメノヨハ）「イハ」（イハトハ・イハフト・イハツチ・イハ

をっと(夫)・をとこ(男)・をとめ(少女)・のをこ・をんな・ヲル(居)・ヲリから(折柄)・ヲリ(折・節・機・牢檻)・ヲノク(戦・慄)・をえつ(嗚咽)・ヲワル(終・卒・了・薨)・ヲンリョウ(怨霊)等がある。



* さて、「ユ」「エ」「ヌ」「オ」「ヲ」の声音符は、いずれも大円の四分の一と小円一個で造られ、「ユエヌオ」を合せると、「ネ」「ネ」の図象になる。

「モロケセ」は、現象のオクのチカラの状態を示し、「ユエヌオ」は、環境のカカワリ方、現象の因縁の状態を示し、「ヲ」は、その状態を以て、(則ち「モロケセ」と「ユエヌオ」が「ネ」となつて、)「ハエツ」になる、という関係である。

因みに、ユエヌオを、一筆がきのようにつづけて書くことから、ウヅのサトリが開発されている。(別述)

* ハエツキネホン カタカムナ

「ハ」という声音符は、ヒとイの位置の小円二個が、横線によって結ばれている。



これは、現行カタカナの「ハ」の原型である、という連想は、誰でも持つであろう。

そして、日本語の助詞の「は」と「が」の違いを考えてみると、例えば、「私 が します」「あなた が 好き」等といえば断定的であるが、「私 は します」といえば、私はするが、しない人もある。又、「あなたは 好き」といえば、あなたは好きだが、好きでない人もある、という、正反の状態があるわけである。

則ち「ハ」の思念は、正・反のものが、バランスよく、つながっている状態を意味する、(それ故、正・反のどちらへも行く、)と考えられる。ズバリ「ハ」の一音でよばれる日本語の葉・齒・

㊦ ヲ
 ㊧ ヲ
 ㊨ ヲ
 ㊩ ヲ
 ㊪ ヲ
 ㊫ ヲ
 ㊬ ヲ
 ㊭ ヲ
 ㊮ ヲ
 ㊯ ヲ
 ㊰ ヲ
 ㊱ ヲ
 ㊲ ヲ
 ㊳ ヲ
 ㊴ ヲ
 ㊵ ヲ
 ㊶ ヲ
 ㊷ ヲ
 ㊸ ヲ
 ㊹ ヲ
 ㊺ ヲ
 ㊻ ヲ
 ㊼ ヲ
 ㊽ ヲ
 ㊾ ヲ
 ㊿ ヲ

と同じ位置の 小円一個 とで造られている。

ということは、四^〇相性・方向性・変化性を以て、「オ」から発生する、則ち、……を以て……する という思念を示すものと考えられる。

カタカムナウタヒには、助詞として使われている例は無いが、「オドヤマ ツミヲ」とか「セラ キネ」等のようなコトバをみると、「ヲ」の思念が、後世、「てにをは」(助詞)の意味になったことがうなずかれる。(其角は、「をまわし」ということを述べている。(其角十七條))

カタカムナには、「ヲ」が最初につく単語は少いが、「ヲ」の前後のコトバをみると、何が、「ヲ」によって、どうなったか、という関係がわかってくる。

* カタカムナウタヒの中で「ヲ」のつくコトバは、次の通りである。

「オドヤマツミヲメグルマリ」「ヒノヤギハヤヲヒメ」「ヤクサアラヒト」「サクタケハヤスサノヲツキヨミマ」「アメノヲハバリ」「イツノヲハバリ」,「オシヲ」(オホコトオシヲイハツチヒコ・カサケツワケノオシヲオホワタツミ)「アメノフキラノオホヤヒコ」「アメノセラキネ」「イハツツヌヲ」,「ツヲ」(ソコツツヲ・ナカツツヲ・ウハツツヲ)「イツヲノメ」「アメノフキラノ」

「ヲ」のつく日本語は、(現代人には、「オ」と「ヲ」は混同され、発音も区別できないが、ここでは、本来「ヲ」のものをあげておく。) ヲ (於・小・尾・雄・乎・悪・汚・緒)・をあい(汚穢)・ヲカ(丘・岡・陸)・をかし(可笑)・をがむ(拝)・ヲケ(桶)・をけら(虫)・ヲサ(長・酋・宰)・ヲサマル(治納)・ヲサメル(修・理)・ヲサナゴ・ヲす(食)・ヲシ(愛し・惜・吝)・をこがまし・をしょう(和尚)・ヲシへ(教・訓)・

ほふ(覆・被)・おもい(重)・おもに(主)・おもひ(思・念・意・想・懐)・おもしろい・おもかげ・おもごし・おもちゃ・おもて(表・面)・おもねる・おもむき(趣)・おもむく(赴)・おもや(母屋)・おもんばかり・オヤ(親・オヤ!)・おやじ・おら・おやこ井・およぐ(泳)・およぶ(及)・おり(沈澱)・おる(織)・おりる・おろす(降・下)・おろか(愚)・おろし(大根)・おろそか・オイオイ(呼・泣)・おう(応)・おひおひ^{オイ}(追々)・おやおや・おっと危い等がある。

* カタカムナウタヒの中で「オ」のつくコトバは、次の通りである。

「オク」(オクヤマ・オクソギ)「オト」(オドヤマツミラ・オトワヤマ)「オキ」(オキミツゴ・オキサカル・オキナギサヒコ・オキナギサキ・オキハヒ・オキイキ・オキホトムツ・オキヤホマ・オキヤマツミ・オキナサキミチ・オキアマツ・オキツフトマリ・オキツカヒヘラ・オキツサキシマウシ)「オノコロシマ」,「オシ」(オシコロ・オホコトオシラ・カサケツワケノオシラ・オホヤヒコオシラ)「オカシ」(トコロチマタノトキオカシ・マノハストチノトキオカシ)「オカミ」(トヨクラオカミ)「オモ」(オモタルイモ・オモタルヌシ)「オホ」(オホトノチ・オホトノベ・オホトヒワケ・オホトマトヒコ・オホトマトヒメ・オホトコロ・オホトヤシマ・オホトチカサネ・オホトチムスヒ・オホトタマ・オホトケハンリ・オホコトオシラ・オホマヒコヒメ・オホマカツヒ・オホワタツミ・オホワクムスヒ・オホワカエシ・オホワタマリ・オホナホヒメ・オホナミヒメ・オホヤヒコ・オホヤマツミ・オホヤマト・オホアマウツシ・オホカミ・オホカムツミ・オホカムナホヒ・オホカムカエシ・オホカムナカラ・オホタマル・オホチカム)

* 「ヲ」という声音符は、大円(ワ)、の左上四分の一の縦線がのび、「ヨ・ユ・ヘ」

するカムツミ（生命の根源のカミ）を、彼らは「オカミ」「オホカミ」「オホカムツミ」といつている。

それ故、本来の日本語の敬語は、他民族の言語には無い用法であり、単なる「ていねい語」とか、「謙讓語」とする説明は間違いである。

なお、カタカムナウタヒには、「オホ」のつくコトバが三十一個ほどもあるが、それらをよくみると、「オカミ」の「オホ」によって、どういうモノが、どうなってゆくか、という、カタカムナ人の感受したサトリの意味が、うかがわれる。

現在の日本語の、大きい・大もと・大もの・大ごと・大らか・大よろこび等の「大」の語源の思念は、この「オホ」であった。

オヤ・オク・オニ・オト・オカゲ・オソレ・オドロキ・オボエ・オモヒ等も、「オ」の思念から出来たコトバと思われる。

その他に、「オ」のつく日本語には、（現代語では、「オ」と「ヲ」は混同されているが、ここでは、本来の「オ」のものをあげておく。）お・オン（御・敬語・恩）・オキ（起・沖）・オキテ・オキナ・オク（奥・置）・おう（王・大^ワ・追^{オホ}ふ・負^{オホ}ふ）・おかす（侵・冒・犯）・おいる（老）・おいぼれ・おいしい・おかげさま・おくび・おくる（送・贈）・おごそか・おこたる・おこない（行為）・おごり（傲・奢・慢）・おこり（起・瘡）・おこる（怒・興）・おさえる（抑・按）・オシ（臣）・オス（押・推）・おじぎ（辞儀）・ものおじ・おぞけ（怖）・おずおず・おしろい・おそい（遅・晩）・おそれ（恐・畏）・おそれいる・おそまき・おそらく・おだてる・おち（落）・おちいる（陥）・おとうと・おとがい・おと（音）・おどかす・おびやかす（脅）・おびえる・おぼえる（覚・憶）・おどろおどろしい・おどける・おとな・おとる（劣）・おとろへる（衰）・おなじ・おのおの・おのずから・おび・おびる（帶）・おぼしめし・おぼろげ・お

ぬく (抜・貫)・ぬぐ (脱)・ぬすむ (盗)・ぬかす・ぬかづく・
ぬかる (失敗)・ぬかるみ・ぬき足・ぬきんでる・ぬぐう (拭)・
ぬくぬく・ぬくもり・ぬくい (温)・ぬけめない・ぬたくる・
ぬる (塗)・ぬるむ・ぬれぎぬ・ぬれごと・ぬれ手・ぬれ場・
ぬれる 等に、「ヌ」の思念が感じられる。

* カタカムナウタヒの中で「ヌ」のつくコトバは、次の通りである。

「ヌヒ」(チマタムスヒヌヒ)「ヌマ」(イワトヌマ)「ヌツチ」
「ヌフトヤマト」, 「ヌシ」(ミナカヌシ・ムスヒヌシ・クニヌ
シ・オモタルヌシ)「ハヤヒヌ」「ウキフヌ」「ツミノ」
「シツマリヌ」
「トヨウケヒメヌ」
「トヨクモノ」
「ユエヌ」
「カヤヌヒメ」
「サヌキチ」
「イハツツヌヲ」
「ツヌクヒ」

* 「オ」という声音符は、大円(ワ)の、左下の四分の一の横線を伸ばし、「ム」と同じ位置の 小円一個 を付して造られている。



ということは、「オ」とは、六方にひろがる大きな環境のチカラを意味する。それは、環境といっても、単なる「空間」では無く、我々の生命の根源、「ヤ」まで一ぱい遍満しているが、目には見えぬ「カム」の存在するところ、という意味の環境である。

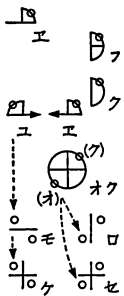
それ故、「オキ」といえば、その環境から発生(立体化)することであり、「オホ」といえば、「オ」から「ホ」(正反親和・対向発生、カムウツシ・アマウツシ)されることという意味になる。

「ユエヌオ」とは、ユエヌのオ、則ち、環境(オ)の状態を示す意味であり、「ムナヤコト」の「ムナヤ」の説明になる。

日本語の「オ」の思念の最もよくうつさされているコトバは、敬語に使われる「オ」であり、その最もはじまりは、カタカムナの「オカミ」であらう(第四十一首)。我々の環境(オ)に存在

マハユツコナカムミマリ・ウロハユアメウツシ・トロミハ
ユ)

* 「エ」という声音符は、大円(ワ)の、右四分の一の横線をのばし、「フ・ク」と
同じ位置に、小円一個をつけて造られている。

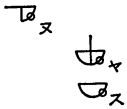


「エ」というコトバは、カタカムナウタヒの中では、「ユエヌ
オヲ」とうたわれているのみである。

現行の日本語では、「エ」は、すべて「エ」の中へ入れられてし
まったが、例えば、絵・餌・酔・穢・笑み・会釈・恵方・知
恵・彫る・植る・畫・描く・絵馬・縁・故等は、本来「エ」
として使われていた。

私共は、「エ」は、「ユ」の因(オク)、則ち「モ」の「ロ」、
「ケ」の「セ」のように、「エ」とは「ユ」する所以(オク)であ
り、絵を描く心、知の恵、会得の会、帰依の依、笑みのココロ
等の思念であると感受している。

* 「ヌ」という声音符は、大円(ワ)の、右下の四分の一の横線をのばし、「ヤ・ス」
と同じ位置に小円一個をつけている。

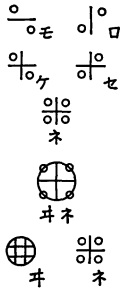


ということは、そのチカラは、ヤまで進むものであるが、目に
見えぬ潜態である、という思念と思われる。

カタカムナのウタヒでは、ウキフヌ・ツミノ・シツマリヌ・
トヨウケヒメヌ等と、コトバの最後に付して、それが潜象であ
ることを、念を入れている。

その為に、後世になると、シツマリヌ・ヒメヌ等が、シ
ツマリマシタ・ヒメタという過去形の後尾の意味になって
いったものであろうと考えられる。

日本語の「ヌ」を用いたものには、ヌツ(主)・ヌう(縫)・ヌ
カ(糠)・ヌマ(沼)・ヌノ(布)・ヌタ(あえもの)・ヌメリ・



タケ・サワケ・ヤヘ・ヤタノ・スベワリ・トメ・トノ・トノ
ヘ・トリノ・ヨモになる。

そして「モロ」も「ケセ」も、合せれば「ネ」になり、図象
符にすれば「キネ」になる。

則ち「モ」のチカラのオクに「ロ」があり、「ケ」のチカラ
は「セ」から出る。

そして「モロ」も「ケセ」も、生命発生の「ネ」である、と
いう意味になる。

* 「ユ」という声音符は、大円(ワ)の、左上の四分の一の横線をのぼし、「ヨ・ヘ・

ユ

ヨ

ヘ

ヲ

ヲ」と同じ位置の 小円一個 をつけて造られている。

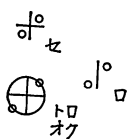
「ユ」という思念は、水の沸いたものをズバリ「ユ」(湯)と
いうように、ものの 状態変化、則ち、四相性、方向性、変化性
を以て、湧き出す 思念と考えられる。

日本語の、ユ (湯)・ユゲ (湯気)・ゆでる・ユウ (結・夕・
幽・勇)・ゆうゆう・ゆうづう・ゆうよ・ユビ(指)・ユミ(弓)・
ユメ (夢)・カユ (粥・痒)・ユキ (雪・往)・ユバ (湯葉)・ゆ
がむ・ゆえ (故・由縁)・ゆえん (所以)・ゆかしい・ゆく(行・
逝)・ユクヘ (行方)・ゆくゆく・ゆくりなく・ゆすぐ・ゆすぶ
る・ゆらぐ・ゆずる・ゆする (強請)・ユタカ・ゆるい・ゆる
す (許・宥・赦)・ゆるめる・ゆるやか・ゆれる・ゆんで (弓
手・左手)・ツユ (露・汁)・サユ (白湯) 等に、「ユ」の思念が
あると思われる。

* カタカムナウタヒの中で「ユ」のつくコトバは、次の通りで
ある。

「ユマリ」(イハクスユマリ・フトヤユマリ)「ユラ」(アカユ
ラ・タカユラ)「ユエ」(ユエヌオヲ)「ユツ」(ヤホトヨノユ
ツ・アナユツ・ハユツ)「ハユ」(アカユラハユタヘ・アナア

* 「セ」という声音符は、十字象と、「フ・ク・エ」と「ム・オ」と同じ位置の 小円二個 とで造られている。



又、「セ」は「口」の声音符に、横線を加えたものともいえる。

ということは、「セ」とは、「ケ」になるオクの子カラが、現象に出る勢を示すものと考えられる。

「セ」のつく日本語には、漢字からのものが多いが、和語では、セ(背・瀬)・カセ(風・枷)・セキ(堰・咳)・セク(急)・セセラギ(細流)・セチ(節)・セツ(切)・セツナ(刹那)・セッセ、とか、一せいに何かをする時に、セーノ、と声を合せるなどに、「セ」の思念があらわれている。

又、せいせいする・せいぜい・せっかく・せっかち・おせっかい・せがむ・おせじ(おあいそ)・せせる・せせら笑い・せっぱつまる・せびる・せまい・せまる・せめる(責・攻)・せめぐ・せりあう(競)・せりふ(台詞)・せわ・せわしい・ぜひ・ぜに・せんない・ぜろ 等がある。

カタカムナウタヒの中で、「セ」のつくコトバは、次の通りである。

「セカツキハクミ」「セラキネ」「トヨセツミ」「アワセマクハヒ」「タナココロノセ」「カセミツトロヤマ」「サキカセシナツヒコ」「モロケセ」

* さて、「モ」「口」「ケ」「セ」という声音符には、いずれも大円(ワ)が無い。ということは、現象物を示すコトバではない。

又、「モ」を図象符に入れば、(現象に於ては、)「ノ」になり「スベ」になる。

「ケ」を図象符に入れば、(現象に於ては、)ワケ・トケ・

* 「ケ」という声音符は、十字象 と、「ヨ・ユ・ヘ・ヲ」と「ヤ・ス・ヌ」と同じ位置の 小円二個 とで造られている。



ワケ、トヨワケ
タケ、サワケ
トケ、トノ
トメ、トノヘ
トリノ、
マヘ
ヤタノ
ヨモ
スヘワリ
スサノヲ

又、「モ」の声音符に、縦線を 加えた、といってもよい。

ということは、「モ」の状態に、カムのカカワリ（カムウツシ）が加わると、「ケ」の状態に 変化 する、ということである。

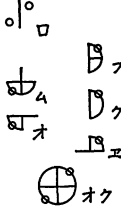
「ケ」のつく日本語は、漢字からのものが多いが、和語では、もののケ（怪）、バケ（化）・ケす（消）・ケ高い・ケナゲ（健気）・ケガレ・ケナス（貶）・ケチ・ケる（蹴）・ケムリ（煙）・ケムにまく・ケシキ（気色・景色）・ケショウ（化生・化粧）・ケガ（怪我）・ケシン（化身）・毛・けたたましい・けっこう・けいこ・けわしい・げてももの・ゲビ（下卑）・ゲヒン（品）・けじめ・つけ・けずる・こじつけ・けさ・けふ・げんき（元気）・ボケ（呆）・ケツ（尻）等に、「ケ」の思念が入っている。

「ケ」を図象符に入れると、ワケ・トケ・タケ・サワケ・ヤヘ・ヤタノ・スベワリ・トメ・トノ・トノヘ・トリノ・ヨモ等とよめる。ということは、現象に出れば、「モ」は、そういう状態になる、ということである。その意味で、「ケ」は、四十八字のすべてにつけられるワケである。

* カタカムナウタヒの中で「ケ」のつくコトバは、次の通りである。

「ケヒ」（タケヒワケ・ケヒココロ）「ケシキ」「ケカクツチ」,
「ケセ」（モロケセ）「ケツ」（カサケツワケ・オホケツヒメ）「ワケ」（ホノサワケ・カサケツワケ・クナギノタマワケ・タケヒワケ・トヨワケ・オホタマルワケ・オホトヒワケノカタカムナ・オホトヒワケハツチヒコ・カミワケノウタ・カミワケノミチ・カハウミワケ・ソラワケ・ヤスマワケツミ・イホツワケ・ヨミワケ・ヤマコフワケ・ニナタマノワケツミ・イキコトマリノワケヨミ・オホカムカエシワケカエシ）

* 「口」という声音符は、これも大円(ワ)は無く、縦線と、小円二個が、
「フ・ク・エ」と、「オ・ム」と、同じ位置につけられている。


 「口」の思念はわかりにくいが、縦線がカムのカカワリを意味し、「フ・ク・エ」「ム・オ」には現象のオクのチカラの思念があるから、「口」とは、現象に出た「モ」のチカラのオク、則ち、^オ六^ク方^エの^ム環^オ境^クからの^エカ^ムの^フカ^クワ^リがつづく、という思念であると考えられる。

榎崎皐月は、「口」の思念は、夏羽織等にする絹という文字の「呂」(もののつらなる様、呂律)から連想された、と言っていた。

「口」がはじめにつく日本語は、漢字からのもの(論・老・勞・六等)は多いが、和語には少く、口(炉・鑪)・ロウソク・ロウロウと・ロレツ・ろくろく・ろくでなし・ろくすっぽ等が使われる。又、もろもろ・こころ・こころろ・よるこぶ・ほころぶ・おもしろい・のろま・そぼろ・おぼろ・ぼろぼろ・どろ・どろんこ・どろどろ・いろ・いろいろ・おろおろ・よろよろ・そろそろ・ぞろぞろ・おどろき・うるこ・おろし(大根おろし・棚おろし)・どくろ等に使われている。

* カタカムナウタヒの中で、「口」のつくコトバは、次の通りである。

「コロ」(オホトコロ・オノコロ・オシコロ・モコロ・アナミコロ・フナコロシ)「トコロ」(トコロチマタノ・トキトコロトコタチ・トキトコロタカユラ)「ココロ」(アオココロ・ヒトココロ・カムツミココロ・イキココロ・ウルハシココロ・ケヒココロ・タナココロ・ココロツラナギ・ココロワク)「ヨロツ」(アメノヨロツ)「ヨワロツ」「ウロハユ」「モロケセ」「ホロシ」, 「シロ」(ミシロ・イヤシロ)「トロ」(トロミハユ・トロヤマ・トロカエシ・ミトロカヘシ)

モノ
 スヘ
 モノ
 スヘ
 モノ
 スヘ

になるチカラを指摘するコトバであり、「モ」のチカラで「ノ」したものが、「モノ」になる、という関係であり、それが、「スベ」でもあるわけである。

日本語の、モノ（物）・藻（みずくさ）・裳（もすそ）・模（かたどる）・喪、雲（自由にモするもの）、モヤ（霧）等は、「モ」の思念を、よく模している。

又、……も……も、もしも、…もまた、またも、等と使われる。

「モ」のつく日本語には、モチ（餅）・モト（本・元・素・許）・もえる（萌・燃）・もぐ（挽）・もぐる・もじる・もこ（あいまい）・もし・もしや・もたげる・もたれる・もたらす・もちろん・もはや・もより・もっけの幸・ものものしい・もったいない・もっぱら・もって（以）・もっとも・もつれ・もどす・もとづく・もとる・もなか・もぬけ・ものいい・ものうい・ものかたり・ものぐさ・もの心・ものあわれ・ものすごい・ものけ・ものわらい・もむ（揉）・もり（森・盛）・もも（桃・股）・もらす・もらう・もる（調合・盛）・もろい・もろこし等がある。又、字引にのるような言葉ではないが、もしもし・もくもく・モックリ・モツモツ・もぞもぞ・もごもご・もう・もうもうと・もやもや・もじもじ・もっちり・もりもり・もつと・もろに・もんもんと 等と、よく使われている。

* カタカムナウタヒの中で、「モ」のつくコトバは次の通りである。

「モコロ」（モコロシマ・ヤヘモコロ・メグルモコロ）「モモヒクニ」,「モチ」（クヒサモチ）「モロケセ」,「クモ」（トヨクモヌ）「モリ」（アマナアモリムカヒ）「ヨモ」（ヨモツチシキ・ヨモツチカヘシ）「イモ」（イモイククヒ・イモマクカラミ・イモオホトノベ・イモアヤカシコネ）「オモタル」

似る)・ニギ(和・握)・ニワ(庭)・ニアウ(似合)・ニオイ(匂)・ニガイ(苦)・ニブイ(鈍)・ニギヤカ・ニキビ・ニク(肉)・ニゴリ・ニクム・ニジル・ニゲル・ニシ(西・螺・虹)・ニシキ・にじむ(滲)・ニセ(偽)・ニチ(日)・ニホン(日本)・ニワカ(俄)・ニコニコ・ニコヤカ・ニヤニヤ・ニッコリ・ニンマリ・ニンゲン 等は、「ニ」の思念を受けていると思われる。

* カタカムナウタヒの中で、「ニ」のつくコトバは次の通りである。

「ヨニ」(ミホトヨニ)「マニ」(フトマニ・マニマニウタサトシ・マニマニカミワケノウタ・マニマニトヨウケヒメ)「メニ」(イツノメニ)「クニ」(クニトコタチ・クニノミクマリ・クニノクヒサモチ・クニノサツチ・クニノサキリ・クニノクラト・クニカツキ・クニヒトアメ・マカハコクニ・アメクニカソコソギタチ・アメクニノヤホソトナミ・アメクニクラト・アメクニサキリ・アメクニサツチ・アマクニムカヒ・アマツクニコトミチ・アマナクニヌシ・イホクニツマリ・シツマリヌクニヌシ・ヒノクニクマソ・モモヒクニ)「タニ」(タニキヒコ・ハヤタニサキ)「チニ」(スヒチニ・ウヒチニ)「ラニ」(ソラニ)「ハニ」(イハトハニ・ハニヤス・ハニヤキ)「ネニ」(ムネニ)

* 「モ」という声音符は、大円(ワ)は無く、横線と、「ヨ・ユ・ヘ・ヲ」と、「ヤ・ス・ヌ」と同じ位置の小円二個で造られている。

。モ

ヨ ヨ

ユ ヨ

ヲ ヨ

ということは、「モ」も、現象物質を示すコトバでは無く、ものが、四相性、方向性、変化性を以て、ヤまで進行するチカラを示すコトバである。

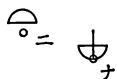
又、「モ」を大円(ワ)に入れて図象符としてみれば「ノ」であり「モノ」であり「スベ」である。(179頁)

ということは、「モ」とは、現象に於ては、「ノ」という状態

* カタカムナウタヒの中で「ラ」のつくコトバは、次の通りである。

「ワツラヒノ」「カラ」(カラミ・カラヤマ・カムナカラ)「テラ」(アマテラス)「クラ」(クラト・トヨクラ・クラミツハ・クラヤマツミ・ミクラタナ)「ムラチ」, 「ヘラ」(カヒヘラ)「シラ」(ハシラ・カシラ)「ソラ」(ソラニ・ミソラ・ソラワケ・タマキソラ・スヘソラ)「ユラ」(アカユラ・タカユラ)「ハラ」(アマタカマカハラ・ミハラ・マハラ・アシハラ・カシラハラ・ハラヤマ・イホハラハメ)「ツラ」(ツラナギナミ・ツラナギメグル・トヨツラナミ・ココロツラナギ・イカツツラナギ・マリツラネ)「ラク」(カムナカラクラヤマツミヌ・カムナガラクニカツキ)

* 「ニ」という声音符は、現象系をあらわす上半円と、「ナ」と同じ位置の小円一個とで造られている。



よく見ると、「ニ」は、「ラ」をひっくりかえした形である。ということは、「ニ」とは、現象に表れたものが(互換重合・対向発生を)何回もくりかえして、定着的になった状態という思念であろう。

日本語では、「てにをは」の助詞として扱われるが、本来のカタカムナの「ニ」という声音には、助詞というような考え方は無かった。

カタカムナウタヒの中には、「フトマニ」「イハトハニ」のように、しっかりと定着させる意味で使われている。そしてその思念は、現在の日本語でも、「そこに」「ここに」「あちらに」「上におく」「下にもおかぬ」「京都に長く住む」等と、うけつがれている。

「ニ」が最初につく日本語は、単語には少いが、ニ(荷・煮る・

カタカムナウタヒの中で「ソ」のつくコトバは次の通りである。

「ソマ」(アメノソマ)「ソテ」(ミソテホト・ミソデマクカラミ)「ソヤ」(ヨソヤコト)「ソコ」(ソコソギタチ・ソコソギシマ・ソコツワタツミ・ソコツツヲ)「ソト」(ヤホソトナミ)「ソレ」(ソレツミ・ソレマ・ソレヤス)「ソギ」(ソコソギ・オクソギ・イヤミソギ・カムミソギ)「ソラ」(ソラニ・ミソラノ・ソラワケ・タマキソラ・スヘソラ)「クマソ」(クソ)「クソ」(ウヅメクソ・クソムス・オクソギ)「ヤソ」(アワノマカヤソマカツヒ)「ヘソ」(スヘソラ)「カソ」(アメクニカソコギタチ)「チソ」(アメクニサツチソコソギシマ)「キソ」(カタチサキソラニ・タマキソラ)

* 「ラ」という声音符は、潜象系を示す下半円と、「ミ」「ウ」「チ」と同じ位置の小円一個とで造られている。

ラ

ミ ウ チ

下半円は潜象系を示し、小円も、輪の線の上に無い、ということとは、「ラ」は、物が(ミ)、潜象・現象の界面(ウ)から生れて持続的に(チ)、あらわれるという思念であると考えられる。

「ラ」が、最初につく日本語は少く、楽(あらわれて自由にある状態)、埒もない、等は、「ラ」の思念があると思われるが、雷・来・礼・羅・頼・頼・裸・等、などは皆、漢字からのものである。

しかし一般には、ランランと輝くとか、ユラユラとか、ソラ! と、ものを指す時、又、ソラ(空)・ツラ(面)・照らす・あらわれ・あたらしい・めずらしい・いやらしい・女らしさ・ほがらか・大らか・あきらめ・ムラ(村)ハラ(原・腹)カラ(空・殻・はらから・やから・うから)カラダ等、「ラ」は、何かに附けて、使われるわけである。

「ラ」の思念は、アラ・イラ・ウラ・エラ・オラ・カラ……サラ……タラ……ナラ……ハラ……マラ……ヤラ……ワラ……ラン等、四十八のすべての声音につけられるわけである。

※ 第六首 ソラニモロケセユエヌオヲ

「ソ」という声音符は、潜象系を示す右半円と、「イ」「シ」「ン」と同じ位置の小円一個とで造られている。

右半円ということは、現象物では無いわけであり、小円が、輪の線上にない、ということは、現象に示された状態であるが、ワクにはまらず、ワクからソレテ、ソのトコロにある、という思念であると考えられる。

°D_ソ

⊕_イ D_レ

⊕_シ

°|_ソ



ソレ

「ソ」の声音の思念は何か？を説明するのは難しいが、しかし日本語は「ソ」が無ければ話せない。

ソノ・ソレ・ソラ・ソコデ・ソシテ・ソレカラ・ソンナニ・ソレゾレ・ソツと・ソウ、をはじめ、現在の「ソ」のつく日本語をみても、例えば、ソラ（空）・そらぞらしい・そらだのみ・そらんず・そらごと・そら耳・ソレル（逸）・ソル（反）・ソリ（剃）・ソト（外）・ソバ（側・傍）・ソムク（背）・ソロウ（揃）・ソメ（染）・ソコ（其処・底）・ソックリ・コソソリ・ヒソソリ・ソッケない・ソソのかず・ソヨソヨ・ソレゾレ・ソロソロ・ゾロゾロ・ゾツと・ソロリソロリ・ソワソワ・ソモソモ・ぞめく（騒）・ソレガシ（某）・ソロ（候）・オソレ・オソラク等に、「ソ」の思念が生きている。

又、三十一文字・四十路等というのは、第四首の「ヨソヤ」の「ソ」の思念がうけつがれていると思われる。

又、「それこそ」「……ぞ」「な…そ」などと、強める意味にも使われる。

因みに、祚・祖・疎・素・粗・組・俎・阻・磯・酥・訴等は、漢字からのものである。

単独の「ソ」の意味は説明し難いが、何かに目をとめ、何かをさす気持であり、そのあとに附ける声音と合せて、意味を表すわけである。

我々の文化は、古代人より進歩したと思っていたが、実は、我々現代人は、まだ、人間として、(鮭が鮭として、白鳥が白鳥として、立派に生きているように、) 一人前の人間のあるべきスガタを知って生きていたのではなかった、ということ、思い知らされたのである。(前書 13頁)

* 我々は、カタカムナ人が「力」とよんだモノを、知らなかった。

そして、今、それを知らされても、それを わかる感受性を失っている。

しかし、絶望では無い。

『馬鹿は死ななきゃ直らない』といわれるが、感受性は、(誰でも持たぬ者の無い) 生きるチカラ であるから、鍛えれば必ず向上 する。

(ただし、脳がこのことに 気がつき、自分の感受性を鍛えようと、本気に思っ
て、本当に脳の感受性を鍛えるのでなければ、観念の理解だけではダメである。)

人間の能力としては、我々現代人も、カタカムナ人も、同じ「種」である。

現代人が、「カタカムナ」のサトリをわからないのは、古代人よりも馬鹿に
(アタマが悪く) なったのでは無く、感受性が劣化した故である。

感受性は生命のチカラ である。そして、人間には、逆序の能力(カシラ)があ
る。

我々の脳が、自分の 生命の感受性(カム・アワのこと) を知って、自分の感
受性を教えれば、我々現代人も、カタカムナ人の思想に共振する(彼らの開発
したサトリをわかる) ことが、可能となる筈である。

檜崎臯月の後継者鍛練の実験と、私共の二十年の実験によって、言い得るこ
のコトバを、読者はどうか信用して、カタカムナの勉強を、則ち感受性の鍛練
を、つづけて頂きたい。

* 今日まで、我々は、人間として生きているつもりであった。

鮭が魚として、白鳥が鳥として、立派に生きているように、我々も、人間として、(万物の霊長として)立派に生きていることを疑わなかった。

というより、今までの人類の文化や歴史には愚かなものが多いという反省はあったが、しかし、それが人間というものだと、思っていた。

学問知識も科学技術も大いに発達し、現代の文化は古代よりも進歩した、と思っていたのである。

ところが、発達したのは、サヌキ型社会の、専門分野の末端の文化であって、本当の進歩では無かったことに、気がつかなかった。

「人類の進化の途中でどこかが間違った」と考えた人はあったが、「間違わない人間」があり得るとは考えなかった。

今、「カタカムナ」に出会い、はじめて、人類の脳の進化の頂点に於て(上古代期に)、人間の生命活動の真相を感受し、それを認識に出し(四十八のコトバ化)、その脳の判断行為によって、真の(間違わない)人間の文化をつくり出す、という事実が、存在したことを知らされた。

* カタカムナに出会い、「カタカムナ」のコトバの真意を知って、筆者が真に驚いたのは、カタカムナ人は、自分たちの子孫が、現在の人類の文化のような状態にならない為に、(ということは、鮭が鮭として、白鳥が白鳥として、立派に生きているように、我々も、人間としてあるべきスガタを全うして生きることが出来る為に、)人間の本来の生命のあり方(マノスベ)を示し、その生命のチカラの感受性と判断力の物理性を示し、そのチカラの根源が何であるかを、示していたことである。(『上古代にはエライ人がいたものだ』と、榎崎皐月は驚嘆していた。)

彼らは、我々の感受性が最も感受しなければならぬ、それを感受しなければ生きられないモノ、(自然の生物が皆ソレを感受して生存を全うしているモノ、)それが何であるか? を、知っていたのである。

そして、彼らは、生れた子供に、それを教えておかなければ、人間の脳は、サヌキ性ばかりが発達し、アワ性は退化して(現代の我々のような状態になって)しまうことを、知っていたのである。

ければ、生きられない。彼らにとって、生きることは、感受性を鍛え（正しく使
い）つづけることである。

* カタカムナの上古代期に、日本列島（というイヤシロチ）に住んでいたカ
タカムナ人の感受性は、豊かな生命のカムウツシを受ける場をつくりつづけ、遂
に、自分の感受しているモノが何であるか？を、つきとめるに至ったのであ
る。

それは、上古代人の、自然の動物並みの鋭い感受性が、自分の生命にカカワ
てくる潜象の存在を感受していることを、彼らの脳が、認識に出した、というこ
とである。

彼らはそれを「カ」とよんだ。（「カ」というコトバにうつした。）

彼らの感受性が「カ」の存在をつきとめたからこそ、その「カ」が、様々に変遷
するヒビキ（宇宙の万物万象のあらゆる状態）を感じわけて、他の四十七のコ
トバをも、造る（うつす）ことが出来たのである。

どうして、現代科学がまだ開発していない潜象の物理を、彼らが成し得たの
か？ それは、鋭い感受性を鍛えた（認識に出した）高度の直観のチカラである。

およそ、人間が生きていることのいとなみは、則ち、人間の思想も人格も芸
術も、凡そ人間の文化の高さは、人間の感受性の鍛練の度（波動量）によるもの
である、ということが出来る。

カタカムナ人が、人類最高の思想をもったのは、彼らの感受性が鍛えられ
て、豊かなカムウツシをうける場（波動量）をもったからであり、現代人が、
彼らの思想をわかることが難しいのは、我々の感受性が鍛練を忘れ、（低い波
動量で）脳を使い、無理な無駄な、自然サのない、スジの通らぬ（カムウツシ
の感受の無い）思想を、一ぱい持ってしまったからである。

筆者が、「感受性の鍛練」を「カタカムナ」の「マノスベ」の実習の根本態度
とするのは、我々現代人の劣化した感受性を復活させ、生物（人間）として本
来の生き方を、とりもどす為である。

（今までの宗教や道徳の教えや科学的手段によっては、我々の劣化した感受
性を、正しく鍛え高めることは出来ない。）

ができるものである。)

それ故、筆者は、本当に「カタカムナ」を知りたいと求められる読者の為に、よけいなことを、(筆者の知るかぎりのことを、)長々と書かねばならないのである。

どうか、このわけを諒承して、忍耐(アワの心)を以て、読みつづけて頂きたい。

「アワの心を以て」ということは、「自分の 脳の感受性を鍛えて」ということである。

感受性の鍛練 ということ、読者はどうか、本当にわかって、そして正しく実行して頂かなければならない。

* 我々は、自分の力で勝手に生れ、勝手に生き、勝手に考えているようにみえるが、実は、我々の生命は、つねに、その 生命のチカラを「力」からウツされる場をつくらなければ、生かしてもらえないものであることを、(漠然と、宗教的に神や仏の加護と考える程度では無く、)物理として正しく知らなければならない。

そして、その我々の現実の生命活動の現場は、極めて 微波動次元の(ヒフミヨイの)、絶えまのない、膨大な数の繰返し(ムナヤコト)であることを、ミを以て、正しく知らなければならない。我々人間は、「脳の動物」なのだから、その脳が無知な状態では、今の世に、自分の生命を、本当に、全うすることはできない。

我々が生れたのも、今日まで生きてこられたのも、いろいろな思想をもったのも、すべて、我々の 生命の感受性が、その生命のチカラをウツされる(カムウツシ)場をつくって来たからである。

その、生命のチカラをウツしてくれるヌシ(根源)のあることを、そして、ウツされる 場をつくるスベを知らなければならぬことを、我々は、(科学も、)まだ、ハッキリと(物理として)認識してはいなかった。

自然の動物は、ソレを知らなければ、則ち彼らの感受性が、ソレを感受しな

この確証を得たことにより、筆者は、責任を以て、読者に、うたえているのである。『どうか、先ず、十年つづけて下さい』と。

* 読者の中には、自分は、カタカムナ^{ウタヒ}文献の解釈を知りたいと思って会誌を読んでいるのだから、どんどん解説を進めてくれればよいのに、よけいなことばかり長々と書くのは迷惑だ、と思われる方があるかもしれない。

しかし筆者は、どうしても、そのよけいなことを、書かねばならない。

なぜなら、「カタカムナ」は、単に、今までの人類の文化の中の、一つの「古代人の詩歌」などという類のものでは無いからである。

我々のもっている文化の概念（波動量）には無かったものであるから、たとえ、その歌詞を、いかに詳細に解釈してみても、それだけで、「カタカムナ」の意味を、読者にわかって頂くことは、不可能である。

何としても、読者の脳が、受けいれ態勢をもって読んで下さらなければ、通じるものではないのである。

受けいれ態勢とは、人間本来の感受性（アワの心）になることである。

我々現代人は、進化した脳の落とし穴に陥り、感受性を無視して脳のサヌキばかりを使ってきたから、今、読者が、カタカムナに出会い、自分では、感受性の鍛錬をしているつもりでも、実際は、鍛えるべき感受性が退化している為に、どうしても、アワならぬサヌキが出てしまう。しかし自分では気がつかずに、カタカムナを勉強してアワを鍛えているつもりでいる、という有様になりがちである。

筆者がよけいなことばかり長々と書かねばならぬのは、読者が自分たち現代人の脳の落とし穴の状態によくよく気がついて、心から、自分の感受性を鍛錬する態度（アワの心）になって、読んで頂きたいと念願する故である。（後記277～頁）

しかし、又、それは、人間の脳次元で作り上げた特別の思想ではないから、今までの哲学や神学のような、又科学や数学の理論や定理のような難解さでは無い。一たび先入見を払拭して、本来の人間のスナホなアワの心（子供の心）になってみれば、実にスジの通った、少しの無理も無駄も無い、真実のマノスベの物理であることが、わかってくる。（私共のような凡人にも、わかること

うコトバが、思い浮んだ。

それは、まことにゲーテならぬ、みすぼらしい、ちっぽけな、まるで暗い穴の中を必死にはいずりまわっていたような、惨めな女にすぎなかった自分が、何と、今、この大自然の前に、女一匹として、立って、自由に、歩き出そうとしているではないか、という、人しれぬ驚きであった。

＊ カタカムナ人が「ウツシマツル」といった、カタカムナのサトリが、なぜ、現代人に、それほどわかり難いのか？

それは、とりも直さず、カタカムナの世ならぬ現代の世に生きる我々の感受性が劣化し、脳が様々な先入見をもってしまったからに他ならない。

それ故、「カタカムナ」のコトバに出合っても、^{スナホ}直に感受することが出来ず、先入見をもつ脳に（観念的に）理解させるしかないのである。

その観念のレベルで、大ていの方は、わかった気になり、（深野一幸氏らのように、）自分はまた、本当にわかっていないということに気がつかないですんでしまう。

しかしそれでは、僅かな観念次元の満足に止まり、「カタカムナ」を「ウツシマツル」者が当然受けられる、^{ウツシホギ}生命の向上の^{ホコビ}幸は、得るよしも無い。

何とかして本当にわかりたい、と心から思えば、自分の感受性の鍛練向上につとめればよい。

感受性というものは、^{アツ}生命のチカラであるから、この実習を、毎日、十年、二十年と続けていれば、筆者のような凡人の劣化した感受性の者でも、確実に、^{ホミカマリ}復活し、向上してくるものである。

あれほど、わからなくて苦しかったものが、雲が晴れるように明るくなっている。ふと、折にふれ、その、自分の内心の違いに気がついて、我ながら、深くおどろいている。

＊ 樫崎臯月に死別して二十年、私共は、ひたすら、カタカムナウタヒの図象文字の思念をつきつめ、自分の感受性の鍛練実習につとめ、カタカムナの勉強は、感受性の鍛練向上によらねばならぬことを、凡人のミを以て、立証することが出来た。

をハッキリと識別し得たのである。

則ち、富永老師が人間の最高の真正覚の境地として認めた釈迦・ゲーテの境地と、一般の悟りや靈感等の神秘体験との違いを、物理として説明することが出来るようになったのである。

因みに、自然の動物たちは、皆、ソレを感受して（カムウツシを受けて）、生命活動をいとなみ（感受性を鍛え）、生存の場を維持しているが、進化した脳が無いから、ソレを認識に出したり、まして、観念の陶醉（神や仏や宇宙エネルギー等の思想）をもつことは、あり得ない。

もし、その思想（観念の陶醉）で満足する者は、カタカムナを勉強する必要は無いが、カタカムナを本当に知りたいと思う読者は、（自分の感受性でソレを感受できるまで、）それは観念の陶醉とは違うものだということを、自分の脳に教えて（逆序して）おけばよい。

* 筆者は、今、自分の感受性が感受しているこの感得が、カタカムナ人のいう「カタカムナ」の「カ」の「ミ」のカカワリ、則ち「カムウツシ」の感受であるに違いない、という確かな認識をもつに至って、ようやく、榎崎臯月から教えられていた、カタカムナの「正反対向発性」や「互換重合」等の物理^{サトリ}が、今までの観念^{レベ}の理解の程度では無く、釈然と、納得することが出来るようになった。（榎崎臯月の「直観」「直観物理」「直観鍛練」といった意味が、本当にわかって来た。）

そして、カタカムナ人が「マノスベ」といったコトバの意味も、ミを以てわかってきて、はじめて、人間としてあるべき生き方を、ふみ出すことが出来るようになったのである。

自分も、自然の動物（ツルやカメたち）の気持に、少し、似てきた、ということかもしれない。（榎崎臯月が、しばしば、『僕は動物だから……』とって笑っていた気持が、わかる気がして来たのである。）

長いきびしい冬をしのいで咲き出した梅の花を眺めながら、サンサンと降る太陽の光を浴びて、ひとりで野道を歩いていた時、筆者の脳裡に、ふと、ゲーテのいった『この大自然の前に男一匹として立てたらなあ』（ファウスト）とい

これほどの高度な思想^{サト}を、よくも、これほどの端的な(最も適切で最も単純な)図象に、ウツスことが、出来たものである。

まことにこれは、天然の生命現象の真実のマノスベの(例えば生命体の内臓や皮膚等の全身の状態を、電気信号にウツシて、脳に伝えるカムの仕事と同じレベルの、)人間の最高の芸術作品というべきものである。

我々は、人間と生れたからには、カタカムナ人の示してくれたこの最高の芸術作品「カタカムノウタヒ」を、マツウに感受する(ウツシマツル)ことのできる^フ生命の^チ波動量^カを持ちたい、と思う。

そして、その思い^{ココロザシ}を以て生きぬくことこそ、人間のもつ、どんな、物質や才能や精神的な満足^{ネガヒ}を求める人生よりも、人間として、最も真実^{アタリマエ}の生き甲斐であると、思われるのである。

* 筆者は、橋崎臯月からカタカムナの潜象物理^{サトツ}を教えられながら、四年間、ミッチリと直観の鍛練を受け、カタカムノウタヒの解説を伝えられた。

しかし、カタカムナ人が「カ」(カム)とよんだモノ、「カミ」(カムナ)といったものが何であるか? ということを、本当にわかったのは、その、カタカムナ人の「カ」と名づけたモノが、(現代科学はまだそれを発見していないが、)実際に存在^{イノチ}し、それが、自分の生命体に、実際にカカワリ、自分の生命^{イノチ}のチカラ^アになっていることを、自分の感受性によって、実感として感受することが出来た時であった。

それは、今までの宗教者たちの、神秘思想による(大脳次元の)観念の陶醉(満足感)とは異なるもので、現実の実際の感受(共振現象)による「直観」である。

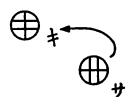
(その違いは、いかに言葉で説明しても、実際の感受のない者には、わからせることは出来ない。)

筆者は、自分がソレ(カタカムナ人が「カ」とよび「カムウツシ」といったモノ)を、実際に感受していることを、認識に出し得たことによって、今まで、一般に「悟り」とか「正覚」とか「靈感」とかといわれ、最高の神秘体験と信じられていたものが、人間の脳の造り出す、観念の陶醉次元の思想であったこと

「キリ」(サキリ・タキリ・ミキリ)「キノ」(キノククノチ・イキノヒトツネ・クナキノタマワケ・チシキノイフヤサカ)「キツ」(イキツチ・アキツ・オキツ)「キネ」(アシキネ・セラキネ)「キシマ」(ソコソギシマ・シキシマ・イチキシマ・サキシマ)「ヒヒキ」(ヒヒキマノスヘシ・イカツチヒヒキ)「アメノフキヲ」「ミキリ」,「イキ」(イキツチノワ・イキツヒメシマ・イキコトマリ・イキノヒトツネ・イキココロ・イキトキオホワカエシ・イキアマツトメ・イキカエシワク・オキイキカムアマ・カムアマイキフナイサキ)「タマキソラ」,「ナキ」(イサナギ・アワナギ・ツラナギ・クナギ・カエシナギ・フミナギ・ナギサヒコ・ナギサキトコ・ナギウツシミチ・ナギウムカムナガラ)「ヒノヤギハヤヲ」「ハニヤギウヅメ」,「トキ」(トコロチマタノトキオカシ・マノハストチノトキオカシ・アハキマハラトキオカシ・マノトキトコロトコタチ・カエシナギトキトコロ・イキトキオホワカエシ)「アキ」(アキタマ・アキツヒコ・アマツアキツネ・アキツヒメ・ハヤアキツ・アキクヒノウシ・アキカタフマリ・アキウツシスヘワリ)「ウキフヌ」,「シキ」(シキシマ・シキケカクツチ・アシキネ・チシキ・ウツシキ・ムナシキ・ケシキ)「カキ」(アカキウツシネ・サカキメグリ)「イチキシマ」,「ソギ」(アメクニカソコソギタチ・アメクニサキリソコソギシマ・イヤミソギ・カムミソギ・オクソギ)「タニキヒコ」「サヌキチ」「セラキネ」,「ハキ」(アハキマハラ・アハキタカタマ)「ネキ」(アマネキ・フトヤユマリネキ)「ウツシホキ」(「サキ」は「サ」の項へ)

＊ カタカムナウタヒの勉強を長年つづけているうちに、私共は、カタカムナの図象符の十字の意味、「ワ」の意味、小円の八つの位置の意味が、少しずつ、わかって来て、その度に、その、造字の物理性の高度さに、舌を巻く思いをした。

＊ 「キ」という声音符は、サを九十度まわせばキになるわけで、大円と、縦線一本、横線二本、である。



ということは、サが、タテになったわけで、縦線はカムウツンを象徴するから、「キ」とは、「サ」によって、発生するという思念であると考えられる。



ものは、一個から発生することは無い。もの（アマ）が分けられて（リ）、サヌキとアワになり、分けられれば必ず「サ」が出る。則ち、「サ」のあるものから発生する。「キ」とは、その、発生する という思念である。

「キ」という声音符は、これも、誰がみても現行カタカナの「キ」に似ている。

又、現在の「キ」のつく日本語には、キ（元氣・電気・磁氣・天気・空氣・生・木・黄）・キク（聞・聴・利・効）・キン（岸）・キズ（傷・疵）・キチ（吉）・キヌ（絹・衣）・キネ（杵）・キバ（牙）・キミ（君・黄味）・キモ（肝）・キリ（霧・錐・限）・キル（切・着・斬・伐）・キン（金）・きおう（氣負）・きだて（氣立）・氣狂い・氣遣い・氣持・氣づまり・氣のり・氣はらし・氣品・氣合・氣色・氣配・きてん・きどる・きざ・きざす（萌・兆）・きさらぎ・きざむ・きしる（軋）・きそう（競）・きばる・きたない・きちょうめん・きびしい・きまり（定・決）・きのう・きのこ・きめ（木目・肌理）・きもの・きみが悪い・きやく（客）・きゅう（灸・急）・きらい・きわ（際）・きわどい・きわだつ・きわめる（極・究）・きわもの 等がある。

「キ」という思念は、アキ・イキ・ウキ……カキ……サキ……タキ……トキ……ナキ……ハキ……マキ……ヤキ……ワキ……等、四十八のすべての声音につけて使われるわけである。

＊ カタカムナウタの中で「キ」のつくコトバは、次の通りである。

(叫)・ささげる・さしつかえ・さしづめ・さし出ぐち・さしひき・さしみ・さすが・さずける・さすらい・さそう(誘)・さた(沙汰)・さだめ(定・運命)・さとい(聰)・さとす(論)・さとり(悟)・さながら・さばく・さび(寂・錆)・さびしい(淋・寂)・サベツ(差別)・さまざま・さます(冷・覚・醒)・さまたげる・さむい・さぼる・さや(莢・鞆)・さやか・さら(更)・さら(皿)・さらす(晒・暴)・まっさら・さる(去・猿)・ざる・さるもの・ざれごと・さわ(沢)・さわぐ・さわやか・さわる(触・障)・さしさわり・サッサと・さっそく・さっぱり 等がある。

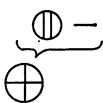
* 「サ」を図象符としてみれば、「サリ」「サキ」「サキリ」「サト」「サトリ」「サワ」「ト」「トワ」「トリ」「トサ」「トキ」「キリ」「タリ」「タキリ」等とよめる。

カクカムナウタヒの中の「サ」のつくコトバは、次の通りである。

「サカ」(フツサカル・オキサカル・ヘツサカル・サカキメグリ・マサカヤマツミ・イフヤサカ)「サト」(カミサキサトリ・カミワクサトリ・イヤシロコトサトリ・サトオホヤマト・カムナマニマニウタサトシ)「サツチ」(アメノサツチ・クニノサツチ)「サヌキ」(エヒメサヌキチアワトサチ)「サクタケハヤササノヲツキヨミマ」「サヨリヒメ」「イヤミノギサネ」,「カサネ」(アワナギカサネ・シマカサネ・ワツラヒノウシカサネツミ)「サ」(ナギサヒコ・ホノサワケ・クヒサモチ・ヤクサスへ)「カサケツワケ」,「サク」(イハサクネサク・サクタケハヤス)「イサナミ・イサナギ」「マカヒクシサリ」,「サキ」(アメノサキリ・クニノサキリ・イキツサキヨリ・サキカセ・サキシマウシ・サキミチ・カタチサキ・カミサキサトリ・タニサキ・ナギサキ・オキナキサキ・ワタサキ・イサキ・コトサキワレメ・イマサキ)等である。

※ 「サ」という声音符は、大円の中に、縦線二本と横線一本とで造られている。

⊕ サ



サ、サワ、サト、サリ
トリ、サトリ、トサ
サキ、サキリ
タリ、キリ、タキリ
ト、トワ、トキ

又、「リ」という声音符に、横線一本を加えたともいえる。

横線を入れたということは、横線を「リ」する、ということであり、横線はアマを象徴するから、物が分けられていること、分ければ「サ」が出る。則ち、「サ」とは、物の差という思念であろう。

又、縦線が二本あるところから、三等分という意味も出てくる。折り紙なら三つに折ればよいが、計算で三つに分けるとなると、割り切れないから、どうしても「差」が出てしまう。そういうニュアンスも考えられる。

とにかく「サ」という声音符は、誰がみても現行カタカナ文字の「サ」に似ている。

現在の「サ」のつく日本語をみても、例えば、「サ」（差別・差異）、「サカ」（坂・逆・堺）、「サトリ」（覚）等、「サ」の思念が伝っている。又、高サ、低サ、長サ、美しサ、自由サ、大事サ、恥しサ、むなしサとか、又、「あったとサ」「サッ早くしなさい」「サッサと」…等と、断定や強調の意味にも使われている。

サトリ（覚・悟）とは、「サ」をトル（^{サト}知る）という思念とも考えられる。

又、さぎり・さつち、とか、ささいな・ささめ雪・さよ（小夜）・さゆ（白湯）・さをとめ・ささやき・さみどり・ささやか・ささなみ・さみだれ等、接頭語的にも使われる。

その他「サ」のつく日本語には、サオ（竿・棹）・サケ（酒・避）・サキ（先）・サク（裂・咲）・サクラ（桜）・ササ（笹）・サジ（匙）・サス（指・差）・サチ（幸）・サト（里）・サネ（核）・サマ（様）・サカイ（堺）・サカキ（榊）・さかえる・さかうらみ・さかしら・さかさま・さがす・さぐる・さがる（下）・サカン（盛）・サキガケ・お先に・さえぎる・さげすむ・さけぶ

「カ」のチカラが、様々な働き、則ち「カ」の変遷物にあらわれる、個々のチカラに、それぞれの名をつけるしか無いわけである。

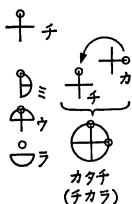
* カタカムナウタヒの中で、「チ」のつくコトバは次の通りである。

「チ」(チマタ・チシキ・チサキ・イチキシマ・ムラチイツク)「チノ」(イキツチノワ・アハチノホノサワケ・ハストチノ・ミチノナカチハ)「チカ」(トワチカ・チカヘシ・オホチカム)「チニ」(スヒチニ・ウヒチニ)「チハ」(イヤシロチハ・ナカチハ・ミチチハ・チハウツシカエシ・チハヨミツ・チハヒメ)「チホ」(アワチホノサワケ・アハチホノサワケ)「ヒチ」(スヒチ・ウヒチ)「ミチ」(コトミチ・クスベミチ・イヤミツギミチ・カミワケノミチ・トメミチ・カムアマミチ・ナギウツシミチ・イヤミチ・アメノコトミチ・オキナサキミチ・カムミチ・ミチナカチハ・ミチタマ・ミチチハ)「ウチムシ」「トチ」(オホトチカサネ・ハストチ)「ノチ」(トノチ・ククノチ)「カタチ」「アトサチ」「サヌキチ」, 「ツチ」(アメツチ・イキツチノワ・イハツチヒコ・サツチ・ヌツチ・イククヒノツチ・カクナツチ・カヤヌヒメツチ・ヒノカクツチ・タマルツチ・ケカクツチ・イヤシロノツチ・ヨモツチシキ・ヨモツチカヘシ・イカツチヒビキ・タケイカツチ・ヤクサイカツチ)

「チ」のつく日本語には、チ(地・血)・チチ(乳・父)・チエ(知恵)・チキ(地位)・イチ(位置)・チカ(近)・チカラ・チカヒ(違)・チマタ・チリ(塵)・チル(散)・小さい・ちぎる・ちぢむ・ちなみ(囚)・ちゃ(茶)・ちやかす・ちやち・ちやめ・ちょうだい・ちょうし・ちょうど・ちょっと・ちよがみ・ちらし・ちりがみ・ちくちく・ちんどんや・ちんびら・ちんちん電車・チビ・ちびる・おチンチン 等がある。

ル・カタヘツカヒヘラ・ヒトツカタ・アキカタ)「フタ」(フタ
 ネ・フタハシ・フタヤ・フタナ)「マタ」(チマタムスヒ・トコ
 ロチマタノ・チマタシ), 「ヒタリ」 「オモタル」 「シヒハタ」
 「オホタル」等がある。

＊ 「チ」という声音符は、「大円」(ワ)が無くて、十字象と、「ミ」「ウ」「ラ」
 と同じ位置の 小円一個 で造られている。



「ワ」が無いということは、「カ」と同じく、それが、現象の
 物質をさすコトバでは無いことを意味している。又よく見ると
 「チ」は、「カ」の小円を「ミ」までうつした だけである。

ということは、「チ」とは、「カ」が「ミ」まで 持続されて
 「ウ」に(生れて)「ラ」する(あらわれる), という意味であ
 るから、「チ」とは、「カ」の持続する思念, と考えられる。

現代の日本語でも、「チ」のつくコトバには、例えば、地・
 血・乳・持、等の如く、この「チ」の思念が生きている。

殊に チカラ(力)というコトバは、ズバリ、「カが^チ持続的に
 あらわれる」という思念である。

我々日本人は、「チカラ」といえば「カ」のチカラそのもの
 のあらわれ, という思念を, 先天的に持っているわけである。

しかし現代の日本人は、「チカラ」というコトバを使ってい
 ても、「カ」の思念を失い, 「カ」というモノの存在を知らない
 のは, まことに残念である。

因みに, はじめから「カ」の存在を知らなかった民族の言葉
 には, 「チカラ」に当る便利なコトバは無い。

彼らは, 筋肉の働きの力は「ストレングス」(strength), 物
 体の運動を変化させる作用は「フォース」(force), 労力・権力・
 能力・体力・生命力・精神力という一般の力は「パワー」(po-
 wer), 又は「エネルギー」「気」などといった具合である。

彼らには, 日本語の「チカラ」という概念(思念)が無いから,

い・たけなわ・たける（猛・長）・たしなむ・たしなめる・だす（出）・だく（抱）・たっする（達）・たっしゃ（達者）・だっこ・たつてのたのみ・たてつく・たとえ・たどる・たのしい・たのもしい・たびたび・たぶらかす・だぶる・たてまつる・たまわる・たまご（卵）・だます・ダメになる・たまり（溜）・だまる（黙）・たむろ・ためいき・だれる・たわら・たわし・たんたん・だんだん・だんご・たんかをきる 等がある。

こうして味わってみると、我々の日本語が、いかに、四十八の思念によってつくられているかという、おもしろさが、よくわかってくるであろう。

* 「タ」を図象符としてよめば、「ワタ」とよむことが出来る。

カタカムナウタヒの中の「タ」のつくコトバは、次の通りである。（それを見ると、「タ」のしかたが、よくわかる。）

「タマ」（フトタマ・マカタマ・ミスマルノタマ・ヒトタマ・ニナタマ・アキタマ・アマタマ・マクミワクタマ・ムカヒマリタマ・ヘサカルミチタマ・アハキタカタマ・オホトタマ・アワタマヒメ・ウツシタマ・ハヒタマ・クナギノタマワケ・オホタマル・タマルツチ・タマキソラ）「タテ」（イツノタテカム・ツキタテフナト）「タナ」（ミクラタナ・イヨフタナ・ヤタナホヒ・タナカヒ・タナマタ・タナココロ）「タノ」（ヤタノカ・チマタノトキオカシ）「タチ」（カタチサキ・トコタチ・ソコソギタチ）「タニ」（タニキヒコ・ハヤタニサキ）「タカ」（タカミ・タカカム・タカマカ・タカタマ・タカユラ）「タケ」（タケヒワケ・ハヤヒタケフツ・タケイカツチ・タケフツノムスヒ・タケナミハメ・タケハヤスサノヲ）、「タハネ」「タネ」「タキリヒメ」, 「ヤタ」（ヤタノカカミ・ヤタシマ・ヤタマリ・ヤタトメ・ヤタナホヒ・ヤタカミ）「ウタ」（ウタヒ・ウタシメシ・ウタサトシ・ホグシウタ・シメシウタ・カミワケノウタ）「カタ」（カタカムナ・カタカム・カタチ・カタフトムスヒ・カタカケメグ

す(交)・かわり(代・替)・かな(感嘆)・カン(勘)・カンガヘル(考)・かんのむし 等がある。

＊ 「タ」という声音符は、大円(ワ)が、横線(ヒからイへ、アマウツシの象徴)によって、分けられている。

⊖
タ
ワ

大円は、図象としてはアマ宇宙球(現象界の全体像)をあらわし、思念としては「ワ」(輪をつくる、枠をつくる、マトマリの全体)を意味するから、「タ」とは、「ワ」から分離独立する思念である。

則ち「タ」とは、大もとから分けられて独立的になるという基底思念であるから、「カタ」といえば「カ」から「タ」すること、「タマ」といえば「タしたマ」という意味になる。

「タ」の思念は、現代日本語にもよく残って居り、例えば、土地一般から「タ」して(分けて)、自分のタガヤスところとしたものを「田」といい、自分とは別の者を「他人」(タニン)というとか、立つ・断つ・経つ・旅・種・谷・滝・痰とか、又、「ワタシ」(私)は、ワから「タ」して示された者・「ワタクシ」は、ワから「タ」して自由に示された者、というわけである。

「タ」のつく日本語は、タ(田・その他・他人)・タマ(玉・球)・タマシヒ・タカ(高)・タカラ・タツ(立・建・経・断・裁)・タキ(滝・炊)・タクミ(巧・工)・タケ(竹・丈・茸)・タシ・タチ(質)・タテ(縦)・タナ(棚)・たなごころ・たなびく・タニ(谷)・タネ(種)・タビ(旅・度・足袋)・タパネ・タベ(食)・タメ(為・溜)・タレ(誰・垂)・タン(痰・単)・タシカ・タダ(唯・只)・タタク・ただしい(正)・ただす(正・訊・質)・たたかう・たたえる・ただちに(直)・ただいま・たたむ・たたり・たえず・たえる・たおれる・たがやす・たぐひ(類)・たくましい・たくらむ・たぐる・たくわえ・たけだけし

チカム・マカヒクシサリ・アワノマカ・ヤツマカツヒ・オホマ
カツヒ・マカウミコ・ヤハマカシ・マカウミウツシ), 「ナカ」
(ミナカヌシ・ミナカノオホカミ・ナカチハ・ナカツツラ・ナ
カツミシロ), 「アカ」(アカクスヘ・アカミコト・アカキウツ
シネ・アカユラハユタヘ), 「ノカ」(ヤタノカカミ・アマノカ
カミ・ヒノカカヒコ・ヒノカクツチ・アマノカミ・アメノカ
ミ), 「タカ」(タカミ・タカカム・タカマカ・タカタマ・タカ
ユラ), 「チカ」(トワチカ・チカヘシ), 「サカ」(フツサカル・
オキサカル・ヘサカル・サカキメグリ・マサカヤマツミ・イフ
ヤサカ), 「ニカ」(クニカツキ・アメクニカ), 「セカ」(セカツ
キ), 「ハカ」(ミハカシナ), 「オカ」(オカシ・オカミ) 等であ
る。

「力」のつく日本語には、カタ (片・型・堅・肩)・カタチ・カ
シラ・カツ (数・勝・克・且・喝)・カセ (風)・かう (銅・
買・交)・かえる (反・返・代・替・帰・孵化・変換・還元)・
カホ (顔)・カホる (香・薫)・カカミ・カカヤキ・カカワリ・
カク (書・欠・嗅)・カケ (賭・掛・馭・翔・影・蔭)・カゴ
(籠)・カコム (囲)・カサ (笠・量)・カサネ・カス (粕・貸)・
カスカ・カスミ・カタナ・カタマリ・カタメ (固)・カタヨリ
(傾)・カタリ (語)・カド・カベ・カマ・カナメ・カネ (金・
鐘)・カミ (上・紙・髪・神)・カミナリ・カメ・カラ (殻・
空・辛)・カリ (雁・刈・狩・借)・カワ (川・河・皮)・かえ
りみる・かかげる・かがむ・かかわらず・かかあ・かくす (隠・
匿)・かげる・かこつ・かざす・かざる (飾)・かざむ (嵩)・
かしこい (賢・畏)・かしこまる・かしましい・かじる・かた
い・かたむく・かたず・かたわら・かつえる (餓)・かつこよ
い (格好)・かつて・かなしい・かなり・かばね・かばやき・
かぶる・かまえ・かむ・かもす・かやく・かゆい・かよう・か
らむ・かれる (枯・酒)・かろうじて・かるい・かわく・かわ

「カミ」(カカミ・カタカムナカミ・アマツカミ・トヨヒカミ・アミノカミ・アメノカミ・オホカミ・タカミ・ヤタカミ・オカミ・カミサキサトリ・カミワクサトリ・カミワケノウタ・カミワケノミチ)「カヒ」(アシカヒ・ムカヒ・カカヒコ・ミカヒ・マカヒ・ツカヒ・フカヒ・タナカヒ・カヒヘラ), 「カフシヌ」
「カクナツチ」 「カクツチ」 「ケカクツチ」, 「カム」(カタカムナ・カムナガラ・カムツミ・カムウツシ・カムナマニマニ・カムアシキネ・トヨカムツミ・オホカムツミ・カムナホグ・カムヤタマリ・カムマリ・カムミチ・カムミスヒ・アキタマトアウカムミ・ヘサカルカムミ・カムミイヤマヒ・カムミノギ・タカカム・タテカム・オホチカム・アヤカムナホヒ・オホカムナホヒ・オホカムカエシ・カムマトマリ・カムアマ・オホカムナガラ・アヤカムナガラ), 「カナ」(カナヤマ・ウツシキカナ), 「カヤ」(カヤヌヒメ), 「カヘ」(チカヘシ・ミトロカヘシ), 「カシ」(トキオカシ・カシコネ・カシラハラ・ヤハマカシ), 「カカ」(マカカ・ヒノカカヒコ・ヤタノカカミ・アミノカカミ), 「カタ」(カタカムナ・カタチサキ・ヒトツカタ・カタフトムスヒ・カタカムフトマニ・カタカケメグル・カタヘツカヒヘラ・アキカタフマリ), 「カサ」(カサケツワケ・カサネ・アワナギカサネ・シマカサネ・オホトチカサネ・カサネツミ), 「カラ」(カムナカラ・カラミマクミ・マクカラミ・カムミカラヤマ), 「カセ」(サキカセ・カセミツ), 「カハ」(カハウミワケ・マカハコクニ・タカマカハラ・ミカハヤヒ), 「カエシ」(トロカエシ・オホカムカエシ・ワケカエシ・オホワカエシ・ワタカエシ・チハウツシカエシ・イキカエシ・スヘカエシ・ムツノウツシカエシ・フナカエシ・カエシコト・カエシスベ), 「カツ」(カツムスヒ・イカツ・イカツチ・クニカツキ・セカツキ・ナカツツラ・ナカツミシロ・ヤソマカツヒ・オホマカツヒ), 「マカ」(マカタマ・マカハコクニ・タカマカハラ・マカカオホ

字象を以てした。

則ち、カムウツシ・アマウツシを表象する十字象に、根源・始元を意味する「ヒ」「ア」と同じ位置の小円一個を付して、示したのである。

* 「力」という声音符は、カタカムナ人が発見した、生命の根源の存在を、コトバにウツシて示したものであるが、それは、科学がまだ発見していないものであるから、それに当る用語が無い。

それ故、我々は、その存在を、科学的に証明することはできない。榎崎阜月は、「カムアマ始元量」といい、直観によって、カタカムナ文献^{ウタヒ}を解読した。

そして、将来の科学は、必ず、このカタカムナ人の^{サト}潜象物理を追隨することになるが、しかし現代科学がそれを認めるには、何世紀もかかるだろう、といていた。

我々は、そのような科学に頼るわけにはゆかない。

カタカムナ人の示してくれた四十八の声音符の思念を感受し、カタカムナ人の示すカタカムナウタヒのコトバの意味を感受することによって、「カタカムナ」の^{サト}潜象物理をわかる、という道をとる以外に、^{スベ}方法は無いのである。

* 「力」を^{サト}図象符にすると、「カタ」「タカ」「カヒ」「カサ」「サカ」「サカキ」「アワ」「アカ」「アキ」「アカキ」「アト」「ヒト」「ヒヒキ」「ヒタリ」「トヒ」「キヒ」「ヒカリ」「カカワリ」「アワレ」等とよめる。

カタカムナウタヒの中で「力」の使われているコトバは次の通りである。

(このような「カ」のつくコトバの思念をよく感受してみると、「力」の^{サト}変遷のしかた、則ち、カタカムナ人の^{サト}知った^{サト}潜象物理が、具体的に、わかってくる。)



カタ、タカ、カヒ
カサ、サカ、サカヒ
サカキ
アト、アワ、アキ
アカ、アカキ、キヒ
ヒ、ヒヒキ、ヒト、ヒ
ヒトワ、ヒタリ
(ヒカリ、カカワリ、アワレ)

* 「レ」という声音符は、潜象系を示す 右半円で、造られている。(檜崎臯月は、解読の際、「レ」は「カ・ヒ・ア」と同じ位置に小円を入れても、入れなくてもよい、と判断していたが、カタカムナウタヒをよく見ると、小円は無いことがたしかめられた。)

D_レ

D

「レ」という声音の思念は、現行の、「あれ」「それ」「これ」「どれ」というように、そのものの量を指摘する意味があると思われる。

それ故、「知レ・去レ・取レ・売レ・居レ・切レ・呉レ」等というコトバにつく時は、おのずから、命令的な意味が出るわけである。

「レ」のつく日本語は、和語は少く、れんれん・れつれつ・れつきとした等と使っているが、殆んど漢字からのもの(礼・令・例・零・霊・麗・齡・劣・列・烈・連・恋等)である。

* カタカムナウタヒの中では、「レ」の用例は少く、「スペースレ」「ソレツミ」「ソレマ」「ソレヤス」「ワレメ」「ワレムスヒ」「ワレマ」のみである。

* 「カ」という声音符は、縦横 十字と、「ヒ」「ア」と同じ位置の 小円一個とで造られている。

十_カ D_ヒ
| D_ア
— 十

「カ」はカタカムナ人の造った四十八の日本語の中で、最も大事なコトバである。

なぜなら、それは、カタカムナ人が発見した、生命の根源が何であるかという根本の物理を、「カ」という声音に表示したコトバであり、あとの四十七音は、「カ」というものがわかったからこそ、その「カ」が、現象界に於てあらゆるモノにあらわれる状態(発生・変遷・還元のスガタ)を、抽象して示すこと(コトホグシ)が出来たのである。

「カ」というモノの存在を発見し、その物理を覚ったカタカムナ人は、その「カ」とは何か? を示すのに、最も端的な、縦横の十

「シツマリヌ」「ウツツツミ」「シヒハタシヒフミ」「シマ」(オノコロシマ・モコロシマ・ミツゴシマ・オホトヤシマ・ツクシマ・ソコソギシマ・シキシマ・ヤタシマ・ホノサワケシマ・イチキシマ・ヒネシマ・シマカサネ)「シコネ」「カシコネ」「トキオカシ」「カシラハラ」「ヤハマカシ」「ミハカシナ」「シキ」(カムアシキネ・ヨモツチシキ・ミカヒシキシマ・ウツシキカナ・シキケカクツチ・ムナシキ・ケシキ)「ヌシ」(ミナカヌシ・ムスヒヌシ・クニヌシ・オモダルヌシ)「ハシ」(ハシマリ・ハシラ・フタハシ・ウルハシ・ウケハシ・ハシリ・ハシフトヤ)「カエシ」(トロカエシ・オホカムカエシ・ワケカエシ・オホワカエシ・イキカエシ・スペカエシ・ムツノウツシカエシ・フナカエシ・カエシナギ・カエシコト・カエシスベ)「ウツシマツル」「ホロシ」「コロシ」等である。

「シ」のつく日本語には、シル(知・汁)・シ(詩・師・死)・シメシ(示・占)・サシ(指)・ココロサシ・ワタクシ・シホ(塩・潮)・シキ(式・指揮)・シク(敷)・シゴト・シタ(舌・下)・シチ(質)・シナ(品)・シバフ(芝生)・シブ(渋)・シマ(島・縞)・シミ・シモ(霜・下)・シラベ・シリ(尻)・シロ(白)・シワ・シン(芯・心)・しあわせ・しひる(強)・しうち・しおれる・しかし・しかと・しかる・しきりに・しぐさ・しこみ・しこり・しごく・しじま・しずか・しずむ・したう・したしい・したたか・したためる・しめりけ・しける・しなう・しなびれ・しなやか・しめやか・しばし・しばしば・しばらく・しのぶ(忍・憊)・しのぐ・じゆう(自由・自然)・しびれる・しぼる・おしまい・しまつ・しらけ・しらじらしい・しらふ・しりごみ・しりぞける・しりめ・しるし・しっかり・しとしと・しわざ・じれる・じっと・じわじわ・しんどい・まことしやか 等がある。

・へなたり・へなへな男 等がある。

* 「シ」という声音符は、現象系を示す左半円に、「イ」「ソ」「ン」と同じ位置の 小円一個 とで造られている。

シ

イ

ソ

ン

「シ」という声音の思念は、現代人でも、世界共通のものがあ
るらしく、日本人に限らず、ほぼ、どの民族でも、「シッ」
とか「シィーッ」とかといえは「シズカにシロ！」という
厳肅さを示すヒビキとして、通じるようである。殊に日本人は、
『シーンと静まりかえる』『夜がシッ シンと更ける』等と、
大自然の示すヒビキを、シーという声音で感じている。

はじめて「シ」という声音を、コトバとして造ったカタカム
ナ人も、やはり、そう感じたのであろう。そして、その感じを
抽象した、「示される」「知レ」という意味が、「シ」という声音
の基底思念になったと思われる。

声音符をみると、小円の位置は、「イ・ソ・ン」と同じであ
る。しかし「イ」には、現象の最小の極微粒子を意味する縦・
横の線があるが、「シ」は縦線のみである。ということは、「シ」
は現象物質を意味するのではなく、現象の「イ」や「ソ」や
「ン」の状態を 指し示すという思念 であることが、うかがわれ
るわけである。

シ

シレ
シリ
ソレ
ソリ

シレ、シソ
シリ、ソリ
ソソ、ワソ
レン、リン
シワ

「シ」を図象符にすると、「シレ」「シリ」「シン」「ソレ」「ソリ」
「ソソ」「ワソ」「レン」「リン」とよめる。

* カタカムナウタヒの中で、「シ」の使われているコトバは、
「シメシウタ」「ウマシ」「カフシ」「イシマトマリ」「ホグシ」
「ツクシ」「ヘシ」（マノスヘシ・アウノスヘシレ・トノヘシ・
チカヘシ・ミトロカヘシ）「クシサリ」「ムナシ」「サトシ」「ウ
チムシ」, 「アシアトウアン」「アシカヒ」「アシキネ」「アシハ
ラ」「ヤシマ」「イヤシロ」「ヒトヨヤシ」, 「ミシロ」「ウシ」
（ワツラヒノウシ・アキクヒノウシ・サキシマウシ）「カブシヌ」

なお、「スへ」を図象符にすると「ノ」になる。(179頁)

* カタカムナウタヒの中では、「へ」は方向性の思念であるといっても、現行の「東京へ行く」「山へ登る」等というような、助詞的に使われている例は無い。

しかし、榑崎臯月がカタカムナウタヒを解説できたのは、現行の日本語の「へ」が、方向を示す思念で使われ、「ノ」は、接続する思念であることから、読みつけたのである。

つまり、榑崎臯月は、「ノ」や「へ」のみでなく、テニヲハ等の、他民族の言語にはみられぬ助詞的なコトバに、^イ思念がある、ということに気がつき、ひいて、助詞のみでなく日本語の語根の四十八音には、それぞれ思念がある、と直観した。

それで、その思念をつかもうと、古書をあさり、辞引三冊をつぶす程つきつめ、遂に八十首の解説を果したのである。(天才にも、このような地道な努力の積み重ねがあったことを知り、ひそかに深い感動を覚えたものである。)

* カタカムナウタヒの中で「へ」の使われているコトバは、「へラ」(オキツカヒヘラ・カタヘツカヒヘラ)「へツ」(へツナギサヒコ・へツカヒヘラ)「へシ」(スヘシレ・トノヘシ・チカヘシ・ミトロカヘシ)「へサカル」「ハユタへ」「オホトノへ」「ヤヘモコロ」「フトマニノへツ」「スへ」(マノスヘシ・アウノスベ・イヤシロスベ・ヤクサスへ・スベソラ・スベカエシ・スヘワリ・クスベミチ)等である。

「へ」のつく日本語は、助詞的な使い方の他には、単語としては、漢字からのものが多いが、へソ・へそまがり・へそくり・へタ(下手・帯)・へだて・へつらう・へど・へドロ・ベに(紅)・へビ(蛇)・へヤ・へリ(縁・辺)・へさき・へラ・へらす・へこむ・べたに(おしなべて)・べつに・へン(変・辺・返)・へ(屁・理屈)・へっぱり腰・へんてこ・ベタベタ・へえ

スガメ(斜視)・すがる・すくむ・すくう(抄・救)・すける(透・助)・すげなく・すこし・すこぶる・すごい・すこやか・すっかり・すっきり・スゴロク・スサビ(遊)・すさむ(荒)・すし(鮎)・スス(煤・鈴)・スズメ・スズリ・ススキ・すずしい(涼)・すがすがしい・すすり泣き・すする・すだく・スデに(既)・ステキ・すなわち・スナ(砂)・スネ・すねる・ずぬける・すぼしこい・すばやく・すばらしい・ずさん・ずぼら・ずぼし・すべて・すべる(統・滑)・すべからく・ずべ公・ずらかる・すぼむ・ずぶぬれ・すむ(住・澄・濟)・スミ(炭・墨)・すみやか・すみません・すり・すりかえ・する(こする)・すわる・すわ一大事・すんでのことに・すっとんきょう・すってんてん等がある。

* カタカムナウタヒの中では、「ムスヒ」(タカミムスヒカムミムスヒ・カツムスヒ・ワレムスヒ・ワクムスヒ・カタフトムスヒ・オホワクムスヒ・タケフツノムスヒ・チマタムスヒ・オホトチムスヒ・ムスヒメ・ムスヒヌシ)「ムス」(ミツハワクムス・クソムス・イヤミソギムス)「ミスマル」「ヤスマ」「ハニヤス」「ハヤス」「ソレヤス」「ハストチ」「イハスヒメ」「イハクストリフネ」「アマテラス」,「スベ」(マノスベシ・アウノスベ・イヤシロスベ・クスベ・ハナクスベ・ヤクサスヘヒト・スベソラ・スベカエシ・スベワリ・トヨクスベ)

* 「へ」という声音符は、現象面を示す上半円と「ヨ」「ユ」「ラ」と同じ位置の小円一個とで造られている。

ㇿへ

ㇿヨ

ㇿユ

ㇿラ

ㇿへ

「へ」の基底思念は、現行日本語に明らかなに残っている通り、方向性を示す意味である。発音は、おそらく当初は「へ」といったのであろうが、今は「エ」と発音され、その為、一時(敗戦後)、「へ」と書くことを止めて「エ」にされたが、今は「へ」にもどった。カタカムナ以来の日本人の正直な感受性である。

ヘツ」「イキツチノワ」

「ノ」という日本語は、「その」「あの」「この」をはじめ接続詞として使われるが、その他に、「ノ」のつく日本語は、野・能・農・脳・ノキ(軒)・ノコリ・ノシ・ノチ(後)・ノド・ノボリ(上・幟・登・昇)・ノミ・ノム(飲・呑)・ノリ(海苔・糊)・ノル(乗・載)・ノロイ(呪詛)・のがれる(逃)・のく(退)・のぞく(除・覗)・のぞむ(望・臨)・のさばる・のす(伸)・のせる・のたまう・のっとる・のっぴきならぬ・のっべらぼう・のっぼ・のどか・ののしる・のばす(延)・のびのび・のべつ・のほうず・のぼせ・のめりこむ・……のみ・のら犬・のら息子・のろい・のろけ・のろま・のろし・のわき(野分)・のんき・のんびり 等がある。

* 「ス」という声音符は、潜象系を示す 下半円と、「ヤ」「ヌ」と同じ位置の小円一個とで造られている。

ス

「ス」は、ススム、スル、等の、進行形の思念であるが、小円が「ヤ」「ヌ」と同じ位置にあるということは、「ス」が、「ヤ」(極限飽和安定)まで進むものであり、そのチカラは潜象(カム)のナリ(ヌ)であるという思念がこもっている。

日本語の「スツとスる」「スーとススむ」「スう」(吸)「スキ」(好)「スナホ」「スベ」「ステ」(捨)「ハス」(斜)「スグ」(直)「ススぐ」(濯・漱・雪)「ススめる」(進・勸・奨・薦)「スる」(擦・刷・磨・掏・為)、又は、米や果物の発酵の進んだものを、ズバリ「酢」という等、「ス」の思念は、現在まで、明らかに伝っている。

又、「します」「あります」「渡す」「探す」「示す」等と、語尾につけて使われている。

その他、「ス」のつく日本語には、す(巢)・す足・す肌・すい(粹)・スエ(末・据)・スジ(筋)・スガタ・すかす(なだめ)・

ると、「ノ」のしかた，則ちカタカムナ人の発見した潜象物理(サトリ)の意味が感受できるのである。

「ヒノ」(ヒノカカヒコ・ヒノクニクマツ・ヒノヤギハヤラ・ワツラヒノウシ・アキクヒノウシ・タナカヒノマ)「マノ」(マノスベシ・マノネ・マノトキトコロ・マノヒコヒメ・メグルマノ)「アマノ」(アマノヒトタマ・アマノミナカヌシ・アマノカカミ)「タマノ」(フトタマノ・マカタマノ・ニナタマノ・アマタマノムカヒ・アマタマノネ)「アワノマカ」「ヤホトヨノユツ」「イヨノイヤシロチ」, 「イツノ」(イツノメノ・イツノタテカム・イツノヲハバリ・イツノメニ)「イツヲノメ」「アメノ」(アメノトコタチ・アメノフキラ・アメノクヒサモチ・アメノサキリ・アメノサツチ・アメノクラト・アメノウツメ・アメノヨロツ・アメノハニヤス・アメノミクマリ・アメノセラキネ・アメノトヨセツミ・アメノワク・アメノヨハ・アメノハジマリ・アメノヒトネフトタマ・アメノカミカムアマ・アメノウケハシ・アメノナホビ・アメノウツシ・アメノクソムス・アメノコトミチ・アメノフトマリ)「クニノ」(クニノクラト・クニノミクマリ・クニノクヒサモチ・クニノサツチ・クニノサキリ・マカハコクニノヒトツカタ・アメクニノヤホツトナミ)「オノコロシマ」「カミワケノウタ」「イヤシロノツチ」「キノククノチ」「サカキメグリノカムヤタマリ」「ミスマルノタマ」「ヒタリミケリノタナカヒノマ」「イキツチノワ」「マノハストチノトキオカシ」「アハチノホノサワケ」「ミチノナカチハ」「トコロチマタノトキオカシ」「ヤタノカカミ」「オホトノチ」「オホトノベ」「オホトヒワケノカタカムナ」「カサケツワケノオシヲ」「トノヘシ」「ミツハノメ」「イキコトマリノワケヨミ」「ニナタマノワケツミ」「タケフツノムスヒ」「アキツノイヤシロスヘ」「タケハヤスサノラツキヨミマ」「ムツノウツシカエシ」「カタカムナノミソデホト」「ツツウミノアナ」「カミワケノウタ」「フトマニノ

ようになったわけなのである。(カタカムナ人には、「てにをは」の概念は無かった。)

日本語の起源は、宇宙の万物万象の生存の物理を、^{マノスベツ}四十八に^{コトナヅク}抽象して表明したコトバであった、という所以である。

* なお、「ノ」を図象符としてみれば、「スベ」又は「ノスベ」とよめる。

つまり、「ノ」の思念は、「ス」と「へ」を合せたもの、といってもよいわけである。

「ノ」は「スベ」と同じ図象であり、二つの小円の位置は、「メ」(158頁)や、後出の「モ」「ケ」とも同じである。(209頁)

ということは、「スベ」「モ」「ケ」については後述するが、) 相似た図象は関連のある状態であることを意味し、「ノ」という状態は、考えてみれば「スベ」であり、「スベ」とは、「進む方向」という意味であるが(マノスベ・イヤシロスベ等)、それは、おのずから、「為すべき方法」という意味が出てくる。

現行では「スベ」は、もっぱら方法・方策の意味で使われているが、その語根(ス・へ)の思念で考えれば、そのわけが明らかになる。

* 「ノ」という声音は、カタカムナウタヒの中では、接続詞として使われる例は無く、すべて、〇〇が「ノ」して〇〇になる、という意味で使われているのである。

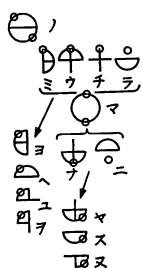
「の」のみではなく、カタカムナ人には、現在の日本語の「てにをは」の概念は無かった。

それ故、私共は、カタカムナウタヒを読む時、「ノ」を、軽い接続の意味で読み過ぎぬよう、注意しなければならない。彼らは、八十首の図象符の中で、「アマ」「ノ」「ヒトタマ」、「カタ」「カムナ」「ノ」「ミソデ」「ホト」等と、しばしば、「ノ」一字を、図象符としている。それらの「ノ」を用いたコトバをよく見



タ・ウチ（内・打）・ウラ（裏・浦・末）・ウス（白）・ウツ・
 ウデ（腕）・ウナジ・ウマ（馬）・ウマシ（生・甘・旨）・ウシ
 （牛・大人・憂い）・ウツシ（移・遷・写・映）・ウメ（梅）・ウ
 メキ・ウナリ・ウネリ・ウレル（熟）・ウレヒ（憂）・ウレン
 （嬉）・ウワサ・うかがう・うかつ・うかぬ顔・うかれる・うき
 世・うき名・うごめく・うさんくさい・うすい（薄）・うずた
 かい・うずく・うせもの（失）・うそぶく・うたがう・うたた・
 うたたね・うだる・うでる・うどん・うとい・うとうしい・
 うぬぼれ・うのみ・うぶ（初・産）・うぶすな・うべなう・う
 ばう・うやうやしい・うらかなしい・うろたえる・うろおぼ
 え・うえ（植・飢）・うん（運）・ウンウン・うんざり・ウンコ
 等がある。

＊ 「ノ」という声音符は、大円と横線（タ）と、「ヨ」「ヘ」「ユ」「ヲ」と、
 「ヤ」「ス」「ヌ」と、同じ位置の小円二個とで造られている。



ということは、「ノ」という声音の思念は、現象界に「タ」した
 「マ」が、「ヨ・ヘ・ユ・ヲ」（四相性・方向性・向上性を以て発生し）
 「ヤ・ス・ヌ」（極限飽和安定まで進行する、その変遷のスカタ）とい
 う意味である。（因みに、前出の「メ」も、小円の位置は同じ
 である。しかし、縦線と横線の違いが、それぞれの思念の意味
 をあらわしている。）（158頁）



〇モ
 〇ケ

「の」という日本語は、今では単なる接続詞のように使われ
 ているが、「ノ」という声音図象を造ったカタカムナ人の気持
 は、ものが発生して様々に状態変化してゆく現象を抽象して示
 そうと思ひ、「マ」の二個の小円（ミとナ）を、一寸、左へ斜
 に（ヨとヤに）ウツシて、「ノ」としたのである。

「ノ」がそのような思念のコトバであったから、後に、接続詞的に使われる

よくわかるであろう。

そして、「ウ」から、現象に（マ）現れる（レ）ことが、「生れ」というコトバになり、「ウ」から、くりかえし（コ）発生しつづければ（キ）、「動き」になり、「ウ」から存在して（ル）正反に調和して（ハ）示されれば（シ）、「ウルハシ」となる。又、心の中に「ウー」という状態で、一ぱいになっているものを、解き放つように出す（タ）ことが、「ウタ」というコトバである。

我々の日本語は、このようにして造られたことを知れば、他の民族の言語と、全く異った成り立ちのものであることが、納得されるであろう。

「ウ」を図象符にすれば、「ウミ」「ウタ」「ウチ」「ウラ」「トウ」「トチ」「チサキ」「トサチ」「タチサキ」「ミチ」「ミト」「ミキリ」等とよめる。



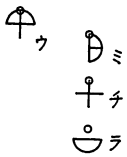
ウタ、ウキ、ウミ
ウチ
チ、チサキ
タチ、タチサキ
トチ、トサチ
ミチ、サキミチ
ミト
ミキリ、(ウラ)

カタカムナウタヒの中では、「ウマシ」「ウルハシ」「ウム」（ナギウム・ヨミタネウム）「ウシ」（ワツラヒノウシ・アキクヒノウシ・サキシマウシ）「ウミ」（カハウミワケ・ウミコ・ウミノアナ・イマウミ・ヤホウミ・ウミウツシ）「ウキフヌ」「ウタ」（ウタヒ・ホクシウタ・シメシウタ・ウタサトシ・カミワケノウタ）「トヨウケヒメ」「ウハツワタツミ」「ウツ」（ウツシマツル・ウツシキカナ・ウツシネ・ウツシタマ・ウツシホギ・ウツシヨミワケ・ウツメ・アマウツシ・オホアマウツシ・ソレアマウツシ・カムウツシ・ハヤウツシ・アナウツシ・フカヒウツシ・アメノウツシ・ヤホウツシ・ヒトウツシ・アキウツシ・チハウツシ・ムツノウツシ・ナミウツシ・ウツシカエシ・ウツシツミ）「ウヒチ」「ウチムシ」「ウロハユ」等。（十号（31）頁）

「ウ」のつく日本語は、ウヘ（上）・ウク（浮）・ウケ（受）・ウゴキ（動）・ウシロ・ウヅ（渦）・ウミ（産・海・倦・膿）・ウ

怪)・アサ(朝・麻・浅)・アシ(足・芦・味)・アセ・アミ・アソビ・アキ(秋・飽・空)・アダ・アタマ・アタヒ(価)・アク・アクタ・アゲ(上・挙・揚)・アス(明日)・アト・アナ・アニ・アネ・アブラ・アブク・アグラ・あさぎ(浅黄)・アキラメ・アタラシ(新)・アサツテ・アザヤカ・アラレ・あらわれ・あらまし・あおぐ・あえる・あえぐ・あえなく・あいそよく・あいにく・あがき・あがなう・あがめる・あきない・あきれる・あきんど・あざける・あさまし・あざむく・あばく・あずかる・あせる・あたえる・あたかも・あつい・あながち・あなた・あぶない・あぶる・あやす・あやまる・あやまち・あたり・あわれ・あんずる・あんこ(餠)・あんばい・あんま・あられもない・アー! ・アラ? ・アレ?

* 「ウ」という声音符は、現象系をあらわす上半円(「ワ」の上半分と十字)と、「ミ」「チ」「ラ」と同じ位置の小円一個とで作られている。



ということは、「ウ」という声音の思念は、潜象から現象の発生する(ミ・チ・ラ)、^{サカヒ}界面を意味している。

界面とは、水が蒸発して気体となり、凍って固体となる時の境界面のように、その状態の変化は明らかに見られるが、その変リメは、どんな早いカメラでもとらえられない。そのような現象と潜象の境イメを、カタカムナ人は「ウ」という^{ヒキ}声音にうつしたのである。

その「ウ」の思念は、現代語にも、そのまま伝えられている。

実際に、人間のみならず動物たちでも、又自然現象(地震・海鳴り・山鳴り等の)でも、「ウー」という音を、発している時の状況を思い浮べてみれば、そのような状況を抽象して(ウツシテ)、「ウ」という^{コトバ}声音符を造ったカタカムナ人の思念は、



ア

ヒ
ヒビキ (ヒカリ)
ヒト (ヒトリ)
ヒサ
ヒタリ
カタ
カヒ
カカ (カカワリ)
タカ
サカ サカキ
アワ
アキ
アト
アカ

トリ」「ヒトワ」「ヒサ」「カタ」「タカ」「カヒ」「ヒカリ」「カカヒ」「カカワリ」「サカ」「サカキ」「アワ」「アカ」「アカキ」「アキ」「アト」等とよめる。

カタカムナウタヒの中では、「アマ」(アマノミナカヌシ・アマノカミ・アマウツシ・アマタカマカハラ・アマタマ・アマナ・アマツ・アマアメ・アマヤマト・アマネキ・アマワレマ・アマテラス・カムアマ)「アメ」(アメクニカ・アメツチネ・アメオキミツゴ・アメヨロツ・アメヒトツハシラ・ホコアメ・アメノトコタチ・アメノフキラ・アメノウヅメ・アメノハニヤス・アメノクヒサモチ・アメノオシコロ・アメノミクマリ・アメノラハバリ・アメノセラキネ・アメノトヨセツミ・アメノウケハシ・アメノハジマリ・アメノワク・アメノフトマリ・アメノウツシ・アメノカミ・アメノナホビ・アメノコトミチ)「アシ」(アシアトウアン・アシカヒヒコ・アシキネ・アシハラ)「アワ」(アワナギアワナミ・アマアワナギ・アワセ・アワチ・アワトサチ・アワノマカ・アワタマヒメ)「アナ」(アナミ・アナウツシ・アナトヨ・アナユツ・アナフト・アナアマ)「アキ」(アキタマ・アキツ・アキクヒ・アキカタ・アキウツシ)「アカ」(アカクスベ・アカミコト・アカユラ・アカキウツシネ)「アウ」(アウノスベ・アウホコアメ・アキタマトアウ)「アヤ」(アヤカシコネ・アヤミクマリ・アヤクメシコネ・アヤオキツ・アヤカムナガラ・アヤカムナホビ)「アモリ」「アオココロ」「アラヒト」「アン」等に、「ア」が使われている。

「ア」のつく日本語は非常に多く、書き出して、思念を味ってみると、日本語のナリタチがわかって面白いものである。「ア」のみでなく、四十八の声音について、読者も、ぜひ、めいめいで、吟味してみて頂きたい。

アウ(合・会)・アル(有・在)・アマ(天・女・尼・海人)・アオ・アカ(赤・明・垢)・アカシ(証・燈)・アヤ(綾・危)

* 又、このように図象符に示される声音思念をよく感受してみると、「ヒフミヨイ マワリテメグル ムナヤコト」とは、単なる数詞を並べた数え歌のようなものではなく、天然宇宙の生命が、どこから、どのようにして発生するか？ という、生命発生の根本原理を、示すコトバであることがわかってくる。

現代科学は、分子・原子・電子レベルで、生命活動の実態を観測することが出来る。(しかし生命発生の根本原理を知るには至らない。)

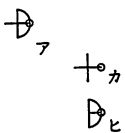
カタカムナ人は、直観によって、分子・原子・電子以下の極微(潜象と潜象過渡)の物理を開発していた。

今、私共は、細胞分子生物学、遺伝子、生体情報、脳神経系、免疫系等の学習によって、(科学では言っていないが,)カタカムナ人の「ヒ」とよんだモノを、実感的に、スモール「ヒ」の左・右のマワリの重合とし、潜象のカム・アマ始元量の存在と、それが現象粒子(イ)として発生する、正・反重合の物理(アウノスベ)を、直観的に感受することが出来るようになった。

その潜象物理は、現象の物理に、一貫して通じるものである(相似象)。

どうか科学者が、このカタカムナの潜象物理を受けいれて、(橋崎卓月のように、)現代科学を一新して下さることを、強く期待したい。

* アウノスベシレ カタチサキ



「ア」という声音符は、潜象系をあらわす右半円(「ワ」の右半分と十字)と、「カ」「ヒ」と同じ位置の小円一個とで造られている。

ということは、「カ」が、カムウツシ・アマウツシ(縦横の十字)によって、あらゆる存在の根元(ヒ)の、始元の量(ア)として示される、という意味である。(「アジアトウアン」 36~41頁)

* 「ア」を図象符に入れると、「ヒヒキ」「ヒタリ」「ヒト」「ヒ

「イハトハ」「フトタマ」「フトマニ」「フナト」「クミト」「イワト」「ミコト」「トサチ」「トメミチ」「ヒト」「コト」「コトミチ」「ホト」(ミホト・ミソデホト・オホトコロ・オホトヒワケ・オホトノチ・オホトノベ・オホトタマ・オホトマト・オホトチ・オホトケ・オホトヤシマ・オキホトムツ)「ヒトネ」「ヒトミ」「トリフネ」「ヤマト」「ヌフト」「ミト」「トロ」(トロミハユ・ミトロカヘシ・トロヤマ・トロカエシ)等。

* このように解説して、カタカムナ人のコトバがわかり、その意味が感受されてくると、カタカムナのサトリは、(今までの宗教や道徳的な悟りのような、)観念の教えでは無く、現実の我々の実生活の生命活動の^{サトリ}解明であることを、痛感させられる。

そして、そのサトリを知らされれば、そのような大へんな生命活動を、正しく続けて(健康に生きて)ゆく為には、日々、刻々の判断行為を、どのようにすればよいか? と、^{カムカヘリ}考えて、(つねに自分の感受性を鍛えて)生きる態度に、おのずからなってくる。

カタカムナ人は、そのカタカムナのサトリを、(宗教や道徳的な「善」や「徳」や「愛」の教えとはいわず、)「マノスベシ」といっていたのである。

思えば、我々は今まで、このサトリを知らされずに、則ち、この大変な生命活動の^{サトリ}実際の状態を知らなかった為に、自分の^{アタマ}欲望や感情などの観念にふりまわされ、この大変な生命活動をおろそかにし、というより殆んど無視していた。

もともとこの生命活動は意識にないものであるが、脳の進化しない自然の動物たちは、(アタマに犯されることなく、)おのずから、正しく(マノスベに)生きているのであるが、人間は、様々な欲望や感情のままにふるまうので、この大変な生命活動が邪魔されて、正常なイトナミが出来なくなってしまったのである。

その結果、我々の生命活動は、様々な身体的・精神的な障害や病化を来たし、とにかく、その場の^{サトリ}応急の治療(医薬)と、宗教や道徳的な(善や徳や愛の)教えが、必要となったのである。



コト、コトワリ、コトザシ
 ヤコト、コトサキ
 ヒコ、キヒコ、カカヒコ
 ヒズ、ヌヒ、スヒ
 アヤ、カヤヌ、ヤサカ
 サヌキアワ (スガタ)



ムナヤコト
 ヌヒカタカムナ
 オキナギサヒコ
 ナギサヒコカタカムナ
 (オコナヒ)

ということは、「コト」(くりかえし重合)されるものは、サヌキ・アワのコトワリのスガタである、ということでもあることが、感受される。

日本語にしばしば使われる「……のコト」「そういうコト」「物事」という言葉の語源は、このムナヤの「コト」であったのである。

因みに、「ムナヤ」の「ナ」も、「コト」の「コ」も、「何回もくりかえされる」という思念であるが、その繰返しの状態は、実に膨大な数の微波動の繰返しであることを知らねばならない。

「ヒフミヨイ マワリテメグル」が「ヤ」になるまで、「ムナ」「ムナ」と、くりかえされ、更に、「ヒフミヨイマワリテメグルムナヤのコト」が、「コト」「コト」と、(則ち、「アウノスベ」が潜象過渡の極微の次元で、)繰返し、繰返されるのである。

生命の発生や生命活動の現場は、我々の意識しない微波動の次元で、絶えまなく、繰返されている。

そのことは、実際に、胎児の発生や、植物や動物の生態や物質の結晶や、雨や雲の気象などを、細胞や高分子レベルの極微の次元で勉強してみると、カタカムナ人のヒフミヨイ マワリテメグルの、ムナヤの「ナ」や、ムナヤコトの「コ」の状態が、相似象として、感受されてくる。

カタカムナウタヒの中で「ト」の使われているコトバは、「トキ」「イキトキ」「トコロ」「トヨ」(トヨクスベ・トヨカブシヌ・トヨヒカミ・トヨウケヒメ・トヨクモヌ・トヨウケ・トヨツラナミ・トヨウケミ・トヨクラオカミ・トヨカムツミ・トヨフツフミ・トヨホイホ・ヒトヨ・フトヨ・アマトヨ・ヤホトヨ・ハマトヨ・ミホトヨニ)「トウアン」「トノチ」「トノベ」「トワチカ」

十

⊕

ト、サ、
サク、サクリ
サト、ワササキ
サリ、サトリ
サクサトリ
トキ、トサ
トワ、トリ
キ

ては、統合・重合の単位、数としては「十」を意味する。

カタカムナ人が図象符をつくる時、「ワ」と「ト」を基本にしたことは前述の通りである。

「ワ」は現象界（アマ）に出たことを意味し、「ト」は正反（アマとカム）の重合を意味し、縦線はカムウツシ（生命系）を、横線はアマウツシ（物質系）を意味する。

日本語としては、「……と……と」というように、言葉を重ねていう時に使われる。

「ト」のつく日本語は、ト（十・戸・度）・トキ・トコロ・トシ・トミ・トイキ（吐息）・マト（的）・マトマリ・マコト・トウ（間）・トオイ（遠）・トオル（通・透）・トガ（咎）・トゲ・トク（説・解・篤・溶・疾）・トガリ（尖）・トコ（床）・トキワ・トジル（閉・綴）・トチ（土地）・ドテ（土手）・トドメ・トナリ・トノ（殿）・トブ（飛・跳）・トビラ・トマル（止・泊）・トモ（友・朋・共・供）・トモス（点・灯）・トリ（鳥）・トル（取・執・採・捕・撰）・ドロ（泥）・トワ・トコシエ・ちよっと・いちど（一度）・どあい（度合）・ていど・とがめる・とぎれる・とくする・とぎす・どしがたい・ととも・とつぐ・とたん・とっくり・ととのう・とどまる・とどろく・となえる・とどのつまり・どなる・とぼける・とぼしい・とまどい・ともかく・ともし火・ともなう・どもる・とりつぎ・とりつくり・とりまき・とろりと・とろかす・どろぼう・どぶどろ・とろろ・どぶろく・どわすれ・トントン叩く・どんだん・とんとん拍子・とうとう・トンチ・トンマ・どんじり・どん底・どんぶり・どんでんかえし、ホット・ソット・もっと等がある。

* 「コ」「ト」を図象符にすると、「コト」「トコ」「キヒコ」「スヒ」「ヌヒ」「ヤコト」「アヤ」「カヤヌ」「カカヒコ」とよめる。又、「サヌキアワ」「コトワリ」「スカタ」ともよめる。

「コ」のつく日本語には、コト（事・殊）・コトワリ（理・断）・コトホグ・コトゴトク・コトサラ・コドモ・コトナル（異）・コロ・ココロ・コゴリ（擬）・コロモ（衣）・コナ（粉）・コナス（消化）・コナタ・コメ（米・込）・コエ（肥・声・越・超）・コヒ（恋）・コビ（媚）・コグ（漕）・コゲ（焦）・コスル（擦）・コネル・コタエル（答・応）・コラエル（堪）・コメカミ・コノヨ・コノカタ・コノゴロ・コノミ（好）・コマル（困）・コリゴリ・コソコソ・コトコト・コラ！ ・こわい・こわす・ころぶ・ころす（殺）・ころがす（転）・こおる（凍）・こらす（擬）・こもる（籠）・こきおろす・こもごも・こみあう（込）・こまやか・こまかい・こまねく・こばむ・こじる・こぼす・こそばゆい・コキミよい 等に、「コ」の思念が引伸されている。

「コ」を図象符にすれば「コト」になる。（後出）

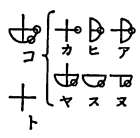
カタカムナウタの中で「コ」の使われているコトバは、「コト」（ミコト・ヨソヤコト・ムナヤコト・イキコト・アカミコト・イヤシロコト・カエシコト・オホコト・コトミチ）「コロ」（トコロ・モコロ・アナミコロ・オホトコロ・イキココロ・タナココロ・カムツミココロ・アオココロ・ウルハシココロ・ケヒココロ・ココロツラナギ・オシコロ）「ミツゴ」「マカウミコ」「ミコニホヤホ」「ヒコ」（アシカヒヒコ・ヒノカカヒコ・アキツヒコ・シナツヒコ・オホトマトヒコ・ナギサヒコ・イハツチヒコ・カナヤマヒコ・オホヤヒコ・ハツチヒコ・タニキヒコ）「ヒコヒメ」（マノヒコヒメ・オホマヒコヒメ・ハニヤスヒコヒメ）「カシコネ」「ヤマコフワケ」「ホコアメ」「ハコクニ」「ソコ」（ソコツギシマ・ソコツワタツミ・ソコツツラ）「トコ」（トコタチ・トキトコロ・ナギサキトコ）等。

＊ 「ト」という声音符は、ズバリ、カム・アマの重合を意味し、声音思念とし


 ヤ
 ヤタ
 ヤキ
 ヤス
 ヤト、トヤ
 ヤスキ

カタカムナウタヒの中では、「ヤタノカカミ」(ヤタシマ・ヤタ
 トメ・ヤタナホヒ・ヤタカミ・ヤタマリ)「ヨソヤコト」「ムナ
 ヤコト」「オホトヤシマ」「ヤマツミ」(オホヤマツミ・マサカ
 ヤマツミ・クラヤマ・オクヤマ・カナヤマ・トロヤマ・クミト
 ヤマ・オトワヤマ・イワトヤマ・ハラヤマ・ヤマコフワケ)「ヤ
 スマ」「ヤヘモコロ」「ヤホ」(ヤホトヨ・ヤホマリ・ヤホマ・ヤ
 ホウツツミ)「ヤマト」(オホヤマト・アマヤマト・ヌフトヤ
 マト・ヤマトヒネ)「イヤ」(イヤシロチ・イヤシロチバ・イヤ
 シロコト・イヤシロスベ・イヤシロノツチ・イヤマヒ・イヤミ
 チ・イヤアマウツシ・イヤミソギ・イヤミヨ・イヤハム)「ヤ
 ソマカツヒ」「ヤハマカシ」「ヒトヨヤシ」「オホトヤシマ」「イ
 フヤサカ」「アヤカム」(アヤカシコネ・アヤミクマリ・アヤカ
 ムナホヒ・アヤオキツ・アヤカムナガラ・アヤクメシコネ)「ハ
 ヤ」(ハヤヒ・ハヤアキツ・ハヤウツシ・ハヤマツミ・ハヤヨミ
 ツ・ハヤタニサキ・ハヤヲヒメ・ハヤス・ミカヒハヤヒヌ)
 「カヤヌヒメ」「フタヤヒメ」「オホヤヒコ」「ハニヤギ」「ハニ
 ヤス」等に、「ヤ」が使われている。

* 「コ」という声音符は、潜象系を示す下半円(「ワ」の下半分と、十字)と、
 「ヒ・ア・カ」と「ヤ・ス・ヌ」と同じ位置の 小円二個 とで造
 られている。



この小円二個は、「ヒ」(一個)と「ヤ」(八個)という数の
 意味でもあるから、「コ」(九)は、「一十八」という意味の、
 数の造字ともいえるわけである。

「コ」という声音の思念は、声音符に示されるように、カムウツ
 シ(縦線)とアマウツシ(横線)の重合(ト)が「ヤ」まで進
 み、そのことが、更に、一段上まわって、又「ヒ」からくりか
 えされる、という意味である。

トヤ
トス

「ス」「ヌ」と同じ位置にある 小円一個 とで造られている。

ということは、「ヤ」という声音は、単なる「八」という数詞ではなく、「ヤ」という声音符の示す思念、則ち、カムの始元量が、ヒ・フ・ミ・ヨ・イとマワリテ メグル、ム・ナの極限飽和安定まで進む(ヤになる)という意味であり、それは、目にみえぬカムのナリ(ヌ)である、という思念である。

「ヤ」には、ヤマト・ヤシマ・ヤクサ・ヤソ(八十)・ヤヘ(八重)・ヤホ(八百)・ヤスラギ(和)・ヤサシ・ヤスミ・ヤワラギ・ハニヤス・アオニヤシ・ヤタノカカミ等のように、満ち足りた状態を示すと共に、又、ヤブレ・ヤケ・ヤメ・ヤカマシ・マヤカシ・ヤセ・ヤマヒ・ヤッカイ・ヤクドシ・ヤク(焼)・ヤミ・ヤム(止・病)・ヤツレ・ヤタラ・イヤ等のように、破滅崩壊の状態を示すものがある。「ヤ」には 正・反の状態があるわけである。

その他「ヤ」には、八・矢・ヤリ・ヤニ(脂)・ヤケド・ヤド(宿)・ヤトイ(雇)・ヤナ(梁)・ヤナギ(柳)・ヤカラ・ヤモメ・ヤマビコ・ヤマ分け・ヤミ市・ヤミツキ・ヤヤ(稍)・ヤユ(からかい)・ヤヨイ等がある。

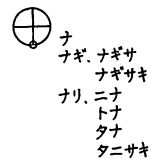
又、…や…や、といったり、やった! とか、そうや・やつと・やっぱり・やっき・やつぎ早や・やがて・やおら・やにわ・やりくり・やりて・やるせない・ヤキモキ・やじる・やじ馬・八百屋・やわらか・しめやか・なよやか・おだやか・はなやか 等といったり、又、やきもち・やすやす・やせがまん・やすんじる・やつ当り・やっこ・やましい・やま出し・やむなく・やりこめる・やれやれ・やわ・やくざ・このやろう・やけくそ・うやむや 等、又、俳句や和歌等には「古池や」「夏草や」「思いきや」などと、しきりに使われている。

* 「ヤ」を図象符にすると、「ヤタ」「ヤキ」「ヤス」「ヤト」「トヤ」「サヌキ」等となる。

「ナ」の思念のある日本語は、ナナツ（七）・ナ（名）・ナレ（汝）・ナエ（苗）・ナミ（波・並）・ナミダ・ナヤミ・ナメル・ナホル（直・治）・ナカ（中・仲）・ナガレ（流）・ナク（鳴・泣）・ナギサ・ナギ（風）・ナゲ（投）・ナゴム（和）・ナス（為・成・済・生）・ナガイ（長・永）・ナカバ（半）・なかれ（勿）・ナゼ・ナゾ・ナニ・ナニガシ・ナツ・ナデ・ナワ（繩）・ナナメ・ナマ（生）・ナマリ・ならう（習・倣）・ならぶ・なりわい・なりふり・なりもの・ないまぜ・なおさら・なおざり・なげく・なぐる・なじる・なずむ・なする・なすび（茄子）・なぞらえる・なだめる・なだらか・なめらか・なつかし・なつく・なつとく・なげく・なびく・なぶる・なまいき、なまくら・なまける・なまじっか・なやまし・なめくじ・なるほど・なれる（馴・慣・熟）・なれのはて・ならずもの・なれあい・おなら・なんぼ 等である。

* 「ナ」を図象符にすると、「ナギ」「ナギサ」「ナリ」「タナ」「ニナ」「トナ」とよめる。

カタカムナウタヒの中では、「カムナ」「アマナ」「フトナ」「ミナカヌシ」「ナガラ」「ナリテ」「アナ」「ハナ」「コナ」,「ナミ」（イサナマイサナギ・アワナギアワナミ・ツラナギナミ・ソトナミ・ミツゴナミ・カヒヘラナミ・フナミ・オホナミ・ヒメチナミ・ヤホマリフナミ・ナマリメグル・ナミハメ・ナギウツシミチナミウツシミチ・ナミウロハユ）,「ナホヒ」（オホナホヒメ・アメノナホヒ・ヤタナホヒ・カムナホヒ・アヤカムナホヒ）,「クナギ」「ナギサヒコ」「カクナツチ」「カナヤマ」「タナココロ」「タナマタ」「タナカヒ」「ニナタマ」「フナコロシ」「ムナシキ」等に「ナ」が使われている。



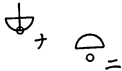
* 「ヤ」という声音符は、潜象系を示す 下半円（「ワ」の下半分と、十字）と、



オト、オキ
オトワ
トキオ(カシ)

「ム」を図象符とすれば、「オト」「オトワ」「オキ」とよめる。
 「ム」は、カタカムナウタヒの中では、「カム」「カムナ」をはじめとして、「ムス」「ムスヒ」(タカミムスヒ・カムミムスヒ・ワクムスヒ・オホワクムスヒ・オホトチムスヒ・ワレムスヒ・カタフトムスヒ・カツムスヒ・タケフツノムスヒ・タカマカムスヒヌシ・ミツハワクムス・イヤミソギムス・クソムス・ムスヒメ), 「ムカヒ」(アマタマノムカヒ・アマクニムカヒ・アマナアモリムカヒ・ウシムカヒマリ・ヤマツミムカヒマリ), 「ウム」(ナギウム・ヨミタネウム), 「ムツ」(オキホトムツ・ムツノウツシ), 「ムネ」「ハム」「ウチムシ」「ムナシキ」「イムナ」等に使われている。そして、「カム」には、カムナガラ・カムツミ・カムナホヒ・カムヤタマリ・オホカム・カムウツシ等がある。

* 「ナ」という声音符は、「ム」と同じく潜象系を示す 下半円(ワの下半分と、縦・横の十字)と、「ニ」と同じ位置の 小円一個 とで造られている。



「ナ」という日本語は、「七」という数を示すコトバであるが、「ナ」の思念は、「ヒ・フ・ミ・ヨ・イ」の発生が、「ム」(環境)から、^{マツリテ}何度も何度も繰り返されるにつれ、^ナ定着(ニ)されてくる、という意味である。同時に、^ナ何度も繰り返されるといふことは、^ナ多様性・^ナ変化性が現われる(七変化・七周期 四号)という思念でもある。

日本語の「名」は、まさに、^ナ何度も繰り返しよばれて、その人の「名」として定着したものである。

(例えば「目」や「芽」という「名」は、それらが、「メ」の思念をもつ故に、^ナ抽象されて名として定着したわけである。)
 (158頁)



ナミナギナミ
ナミマリ
ナリテ
マトマリ
ニナタマ
タマキ
タナマタ
チマタ

て左・右に出てマリになることであり、「メグル」は、「ム」の「ナ」の「ヤ」の「コト」である。



メグル

カム（潜象）の微分がどうして左・右の「マワリテ」になり、それが「メグル」ことになるのか？

その状態（物理）を示すのが、マ・ワ・リ・テ ^{コトバ}メ ク ル、ム ナ ヤ コ ト 等の、一々の声音の基底思念である。つまりカタカムナ人は、その状態の物理を知って、四十八の声音 ^{クワン}を造り、その声音を使って、「マワリテ」「メグル」等のコトバ ^{クワン}を造ったのである。



ムナヤコト
(オコナヒ)

四十八の声音思念の説明をつづけよう。



マワリテメグル
メグルマノ
メグルマリ
ナミマリメフル
マトマリメフル

* 「ム」という声音符は、潜象系を示す 下半円（「ワ」の下半分と、^{カムクワン} 縦・^{アマクワン} 横 の線の十字）と、「オ」と同じ位置の 小円一個とで造られている。



4 オ

「ム」という日本語は、「六」という数を示すコトバであるが、「ム」という声音符を造った時の基底思念は、六方（左右・前後・上下）に、無限にひろがる 大きい環境（オ）を意味するものである。それは、何もない大きな空間であるから「無」の意味にも通じる。又、十字があるから、その環境（オ）から凝集して、六方体になって出る（立方化^{*}・粒子化^{*}する）、という思念もある。

「ム」のつく日本語は、ムカヒ（向・対・迎）・ムカシ・ムクヒ・ムス（蒸・産）・ムスビ（結）・ムスブ（掬）・ムシロ（寧・筵）・ムスコ（息）・ムネ（胸・旨・宗・棟）・ムベ（宜）・ムダ・ムチ・ムラ（村・群・斑）・むかつく・むかで・むげにする・むさぼる・こけむす・むじゅん・むずかる・むつかしい・むつまじい・むらくも・むらさき・むせる・ムンムン・ムツとする・むなしい・ムザムザ・ムリヤリ・ムチャ等である。

カタカムナウタヒの中では、「マツル」「サカル」「ヘサカル」「ミスマル」「タマル」「ウルハシ」「オモタル」等があり、「メグル」には、「マワリテメグル」の他に、「メグルマノ」「メグルマリ」「メグルモコロ」「メグルナカツツラ」「カタカケメグル」「ツラナギメグル」「ナミマリメグル」等がある。

* このように、日本人なら誰でも知っている、日本語の四十八の声音を説明していると、フランス人に、フランス語の発音を教えるモリエールの「町人貴族」の喜劇が思い出される。

しかし、彼らののは、単に発音だけの勉強であった。これは、発声のみでなく、思念の勉強であり、それこそ、他に類の無い日本語だけの特長であるから、出来るだけ、正しく究明されなければならないのである。


因みに、一時、敗戦後の改革で「ワ」を排し「オ」だけにし、「ハ」は「ワ」にし、「ヘ」は「エ」に統一したことがある。


もし日本語の四十八音が、単なる記号のようなものなら、それでよい筈であるが、(エ・キは無くされたが、)しかし日本人は、どうしても「ワ」「ハ」「ヘ」は、なければ承知できず、もとにもどってしまった。

たしかに日本語の四十八音には、それぞれに、思念がこもって居り、その思念の声音を連れ、組み合わせ、造られていたのであった。

それがなぜなのか、その根拠を、我々は正しく知らなければならないのである。

* 以上で「ヒフミヨイ」につづく「マワリテメグル」の七字の声音の基底思念を述べた。

 マワリテ

 マワリ

 テ

「マワリテメグル」とは、ヒからフになりミになり、ヨイとなつて、マのワからリしたマリは、右マワリ・左マワリに回転しながら、マを自由に巡環して、「ムナヤコト」している、という意味である。

則ち、「ヒフミヨイ」は「マワリテ」であり、「ムナヤコト」はそれが「メグル」わけである。則ち「マワリテ」は、回転し

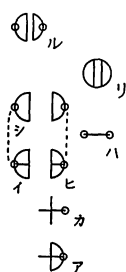
人々は、創造性を持ってとか、直観が大事だと、さかんに言いたてるが、しかし、実際には、コペルニクスやガリレオの如く、其角やゲーテや釈迦の如く、榎崎皐月の如く、真実の独創や直観は、一般人には、容易に受け入れられるものではない。

心ある人々は「独創」や「直観」を求めているに違いないのだが、それをわかる自由な脳のココロをもつすべは、今日まで、我々の文化には、(天才者以外,)無かったのである。

今、我々は、カタカムナに会い、その方法(脳のココロを鍛える逆序のすべ)を知らされたことに、改めて、深い感動を覚えずにられない。

脳アの感受性こそ、其角が「情をこらして景を尋ぬる」(雑談集)といい、我々が「心ココロ」とよんだモノの真実だったのである。

* 「ル」という声音符は、左・右の半円に、ヒ・ア・カと、イ・シと同じ位置にある小円二個とで造られ、安定のよい形である。



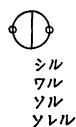
左・右の半円ということは、前出の「リ」によってワからリした状態を意味し、小円二個は、ヒ・ア・カの潜象とイ・シの現象とが、正反に存在する(とどまっている)という思念である。

「ル」は現代語でも、「ある」「する」「なる」「みる」等と、その状態がそこに存在しているという思念である。

つまり「ル」は、四十八のすべての声音につけてさかんに使われるわけである。更に現代人は「ルンルン」等というコトバをつくり出した。

しかし「ル」のつく和語は、単語では極めて少く(るつば・るるとして・るいるい)、ほとんど漢字からのものである(流・涙・留・類・累・縷)。

* 「ル」を図象符としてみると、「シル」「ソル」「ワル」とよめる。



それに反し、其角は、ことさら道を求めて諸国を旅するようなことはせず、どこでも、いつでも、誰とでも、又日常生活の中のどんなものでも、情にひびく感動があれば、何でも、自由に句を生じて、師（芭蕉）をして、「うらやましく覚え」させたという。

其角は、「句兄弟」の文中で、「作意より句を自由せまほしき望也」と言い、又「たとえば一丁の鼓に、つつみより諷をはなれ、うたひより鼓によらずして、自然に合意するごとくに、文句にかかはらずして、一句にたつこと本意なるべくや」といっている。

又、句をつくる上での縦と横の法をのべ、「縦は、古詩古歌の本意をとり連歌の式例を守りて文章の力をかり、私の詞なく、一句の風流を専一にすべし。横の題にては、洒落にもいかにも、我思ふ事を自由に言とるべし……」といっている。

「自由」とう思念の最高の用例は、其角の句にあるといつてよいであろう。

しかし、その其角は、自分は自由に句を作れたが、他人に、その方法をいかに説明しても、（その文は実に名文であるが、）他人にその情をわからせることはできなかった。

則ち、他人にも、自由な句をつくれる脳のココロを、育成させる方法を、知らなかったのである。

それ故、人々からほめられ、師をも「うらやまし」がらせたほどであったが、其角の自由な句の情を受けつぐ後継者を残すことも無く、「老愁の深思」のうちに、孤独な死をとげるしかなかったのである。

世人は今日、芭蕉の句を知らぬ者は無いが、其角の句の情の深さを知る由も無く、ただに、機智・洒脱・多才の人としてのみ、（富永老師がとりあげるまで）殆ど忘れられていた。

釈迦の正覚といい、ゲーテの転換といい、其角の情といい、橋崎皐月の直観物理といい、人間の真実の直観（自由な独創）の体験というものは、一般人に、到底、通じるものではない。

「ク」は自由の思念を示す^{コトバ}ヒトキである故であろう。

* カタカムナウタヒの中には、「クマリ」「クミト」「クナギ」「ク
ラト」「クスペ」「クマソ」「トヨクラ」「ヒノクニ」「ハコクニ」
「アマナクニヌシ」「クヒサモチ」「ホクシウタ」「オクソギ」
「ハグミ」「ヤクサ」「クシサリ」「ククノチ」「イワクス」「カム
ナガラワク」「アマネキアメノワク」「アナミワク」「イキカエ
シワク」「ワクハヤタニ」「ワクムスヒ」「カミワクサトリ」「イ
ヤミソギワク」「ミツハワクムス」「ココロワク」等がある。

* かつて筆者は、楢崎皐月から伝えられたカタカムナのフトマニヤトキトコ
ロトコタチ（正反対向発生 互換重合）等のサトリを、会誌に解説する際、
一生懸命、^{ムツ}考えに^{ムツ}考えて、三号～六号のような例をあげて書いたのであったが、
（それはそれで、少しも違いではないが、）二十年経った今は、それが、（現
代科学にはまだ発見されぬ物理なので、科学的に説明するとなると、難しい表
現になってしまいが、実は、正反対向発生 互換重合ということは、）何も、そ
んなに難しい物理なのでは無く、そんなに一生懸命になって^{ムツ}探さなくても、我
々の日常の生命活動のあらゆる場に、その例が自由に見出せるものであること
に気がつき、筆者の筆も、自由^{ムツ}に^{ムツ}書けるようになったのである。

問題は、カタカムナを「難しい物理」として「一生懸命に理解」させる、と
いうことでは無く、「難しい」と思い、「一生懸命に^{ムツ}考えることしか出来ぬ
我々現代人の^{アタマ}脳を、どうすれば、自由な^{ムツ}発想をして、自由^{ムツ}に^{ムツ}実行することが出来るよ
うな^{ムツ}脳に、育成するか（自分自身を^{ムツ}逆序^{ムツ}することが出来るか）ということであ
る。

* そこで、ふと、其角のことが思い浮んだ。

其角の師 芭蕉は、俳諧の道^{ムツ}を極めて、西行をしたい、病弱の身をむちうって
は、諸国を旅して多くの名句をよんだが、かえって松島や吉野山では、あまり
の「美景にけをされて」一句も無かったという。（其角全集 句兄弟）

ク

フ

エ

①

ワク
クリ
クク

つかむことは難しかった。

本来の日本語の「ク」の思念は、「ク」の声音符の造られた気持(カタカムナ人の抽象のしかた)をみれば、則ち、「ク」の声音符が、潜態を示す右半円と、「フ」「エ」の位置の小円一個で造られている、というところをみれば、「ク」とは、カムのチカラが、自由に発生する、という思念であると、橋崎臯月は考えつけた。

橋崎臯月は、四十八の日本語の基底思念をつきつめて(辞引三冊をつぶした程であったが)、「ク」の思念についても、和語の、クモ・クビ・クニ・クサ・クセ・クチ(口・朽)・クミ(組・汲)・クラ(暗・倉・比・眩)・クヒ(首・枕・食)・クレ(暮・呉)・クシ・クロ・クズ・クサビ・クサメ・クサリ・クグル・クル(来・繰)・クルヒ(狂)・クルシイ・クヤシイ・クワシイ・クサイ・クサル・クサス・クジク・クダル・クチル・クツガエル・クツログ・クドクド・クラクラ・クルクル・クドク・クバル、又は、現代語のクタビレル・クッタクタ・クレグレも・いっしょクタ……クダクダ・クジャ・クチャ・クジャミ・グズグズ等々の思念や、又は、美しく・楽しく・むなしく・新しく等と、語尾につけていう思念等々を吟味し、そして、カタカムナの声音符の思念に照して、「ク」とは、自由^{クンヤリ}の思念である、と考えつけたのである。(「ク」の思念 122頁)

「苦」ということも、和語の「ク」の「ル」の「シ」の「イ」として、その思念を感じてみれば、「ク」(自由)の思念が、「苦しい」意味になる関連がわかるであろう。

「ク」の思念の生きているコトバには、前出の「クモ」「クサ」「クニ」「クソ」「クヒ」「クラ」,「ワク」「マク」等があり、又、「アク」「イク」「ウク」等と、四十八のすべてのコトバに「ク」をつけて使うことが出来るのも、カタカムナ人が直観した通り、

「目」や「芽」は、すばらしい抽象語である。

たしかに胎児は、発生5週にして「眼」があらわれ、8ミリ程の小さな身体の中に、明らかに、丸い点のような「メ」が認められる。

そして、我々は、相手と話す時、先ず「メ」を見る。

大地からあらわれる草木や野菜の芽を見ても、それは、まさに「メ」である。

又、「メ」の出方によって「アメ……」「カメ……」「サメ……」「タメ……」「ナメ……」「ハメ……」「マメ……」「ヤメ……」のように、様々の「メ」のつくコトバが造られる。

そして、現代語の、メグリ・メグミ・メクラ・メシ（飯・召）・メス（雌）・めおと（夫婦）・メド・めずらしい・めでたい・めとる・めっそもない・めんどうくさい・めったに・めっちゃ・めいる・めいめい 等にも「メ」の思念が感じられる。

又、「メ」を図象符としてみると、「ワレメ」とよめる。（「私は、ワから分れて出た ワレメ でございます。」）

* カタカムナウタヒの中では、「マワリテメグル」「メグルモコロ」「イツヲノメ」「ミツハノメ」「ウヅメクソ」「トヨウケヒメ」「アキツヒメ」「オホナホヒメ」「オホケツヒメ」「イキツヒメシマ」、又、アマの微分を「アメ」といい、「アマアメオホトノチ」「アメノウヅメ」「アメノヨワロツ」「アメオキミツゴ」「アメクニクラト」「アメクニサキリ」「アメノハニヤス」等がある。

* 「ク」という声音符は、大円の右半分 と、小円一個（フ・エの位置）とで造られている。

現代語で「ク」といえば、「苦」や「九」の意味が浮ぶが、それは漢字からの影響であって、カタカムナの「ク」の思念を

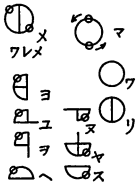
てこずる・てごころ・てごたえ・てんてこまい・テレル・テイ
 ネイ・でれでれ・デブ・でかい・てごわい・てて親・おてて・
 テキパキ・おつむてん等には、「テ」の思念が感じられる。

なお「テ」は、現代語では「てにをは」として扱われ、又、
 四十八の殆んどの声音につけて使われる。(アテ・イテ・ウテ・
 エテ・……カテ・キテ……サテ……タテ……)

* 「テ」を図象符としてみれば、「タマ」「タテ」「マニ」とよめ
 る。

「テ」の思念は、カタカムナウタヒの中では「カミナリテ」「マ
 ワリテメグル」「イツノタテカム」「ツキタテフナト」「アマテ
 ラス」「ミソデ」等に示されている。

* 「メ」という声音符は、大円と縦線と小円二個(ヨ・ユ・ラ・へと、ヌ
 ス・ヤの位置)で造られている。

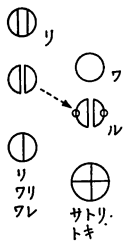


従って「メ」の思念は、「マ」に於て、四相性・方向性・立体
 (状態変化)性を以て、極限まで進行する、目にみえぬチカラ
 として、発生する、という意味である。

「メ」という声音符は、よくみると、「マ」に縦線が入って、
 「マ」の二つの小円(ミとナの位置)が、(ヨとヤの位置へ)移
 されている。

ということは、「メ」とは、力(潜象)のチカラがマ(現象)に
 出る思念であり、「メ」という声音が、「目」や「芽」の名に
 つけられ、「芽が出る」「目出たい」のように使われているわけ
 である。(「ナ」の思念166頁)

* 我々は、今まで、我々の「目」や草木の「芽」を、なぜ
 「メ」とよぶのか? わけも知らずに、「メ」というコトバを使
 っていたが、カタカムナの「メ」の思念がわかってみると、



「リ」は「ワ」を分離する思念であり、因みに、縦線一本では、ワは分けられず、二本なければ分離出来ない（生体膜は必ず二重であるように）。実に正直な、スナホな抽象である。

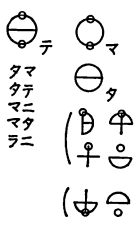
しかし図象符に造る時は、更に抽象して、縦線は一つになる。（「サトリ」の図象符のように。）

なお「リ」は、現在は、「分離」「離反」の他に、「コトワ理」「理解」「利用」等の言葉に使われている。

「リ」ではじまる日本語は、漢字からのものが多く（利・里・理・力・離・立・律・裏・流・粒・留・良等）、和語では、単語は少いが（りりしい・りゅうりゅう・りちぎ・りっぱ等）、例えばコトワリ・イツワリ・マトマリ・アツマリ・ハジマリをはじめ、そもそも、あります・いります・うり・えり・おり・かり…さり・しり…、又は、あかり・あまり・いろり・うまり・つまり・はっきり・どっきり・スッカリ・やはり等々、四十八のすべての声音につけて、「リ」の思念が使われている。

* カタカムナウタヒの中では、「カミナリテ」「マワリテ」「サトリ」「サケリ」「タケリ」「アモリ」「トリフネ」「タクリ」「ヲハバリ」「ヒタリ」「ミケリ」「スヘワリ」「サヨリヒメ」「クンサリ」「ハシリ」等がある。又「ミクマリ」「ハシマリ」「イキコトマリ」「マトマリ」「シツマリヌ」「フマリ」「クマリ」「ハマリ」「ユマリ」等、「マリ」の項で述べた様々のマリがある。

* 「テ」という声音符は、大円と横線と小円二個（ミ・ウ・チ・ラと、ナニの位置）とで造られている。（なお、大円と横線では「タ」である。）



従って「テ」の思念は、「ワからタして正反に出る」という意味になる。現代語に「手」「手間」とか、「そうして」「こうして」「立って」「笑って」とか、テンキ（天気・電気）・テラス（照）・テラ（寺）・デル（出）・デバ（出刃）・テコ（挺）・

「人の和」など、精神的な一体感の意味に使われるわけである。

「ト」とは、それにカカワル、カムウツシ（縦線）とアマウツシ（横線）の重合（アウノスベ）を意味する。（十号（30）頁～）

四十八の日本語の声音符（文字）を造るに当り、「ワ」と「ト」を基本にした、ということは、宇宙の万物万象（ワ）は、カムアマの「ト」（カムウツシ・アマウツシの^{カカワリ}重合）によって発現したというカタカムナの根本原理を、「ワ」と「ト」が、端的に表明しているからである。

いみじくも、「ワ」と「ト」を合せた図象符は、「トキ」であり、「サトリ」であることに、改めて感動を覚える。（「ワとト」十号 83～頁）

又「ワ」は前述の如くカタカムナ文献では、ミクマリ図象に使われている。

* 「ワ」のつく日本語は、ワ（輪・和・倭）・ワレ（我・吾）・ワタシ・ワタクシ・ワタ・ワタツミ・ワタル・ワナ・ワカ（若）・ワキ（傍・脇）・ワク（梓・湧）・ワケ（分・解）・ワザ（技・業）・ワル（割）・ワラ（藁）・ワザワヒ・ワツラヒ・ワスレ・わるい・わらい（笑）・ワセ・ワビ・わきまえる・わざと・わだかまる・わびしい・わびる・わめく・わらじ・わさび・わらび・わらべ・ワン（腕・碗・腕・湾）・わんぱく・わんさ・ワッシュイ等に「ワ」の思念が使われている。

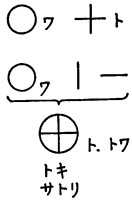
* カタカムナウタヒの中では、「マワリテ」「イキツチノワ」「オホワカエシ」「オホワクムスヒ」「カミワクサトリ」「イキカエシワク」「ミツハワクムス」「ワクムスヒ」「ココロワク」「ワクツミ」「ワクミト」「ワクハヤタニサキ」「イワクストリフネ」「イワト」「オトワ」「アワ」「ワタツミ」「ワツラヒ」「ヤマコフワケ」「ヤスマワケツミ」「タケヒワケ」「ホノサワケ」「オホタマルワケ」「オホトヒワケ」「カミワケ」「ヨミワケ」「ソラワケ」「クナギノタマワケ」「ワケタマ」「ワケカエシ」「スヘワリ」等に使われている。

又、因みに、今我々が使っている「ワタクシ」「ワタン」「ワレ」という一人称は、「ワ から タ して自由^ツに示されたもの」「ワ から レ したのもの」という思念であることにも、気がついたのである。

* 「リ」という声音符は、大円の中に縦線が二本あり、現行カタカナの「リ」は、この声音符からうつされたものであるに違いない。

のマリが示されている。「ミクマリ」「ハジマリ」「マトマリ」「ナミマリ」「フトマリ」「ムカヒマリ」「メグルマリ」「フマリ」「クマリ」「ユマリ」「ハマリ」「ヤホマリ」「カムヤタマリ」「カムマリ」「カムミマリ」「オホワタマリ」「クニツマリ」「マリツラネ」「マリタパネ」等。

＊ 「ワ」という声音は、現代でも、子供が両手で丸い円をつくって示す「輪」の意味であり、丸い輪になるということは「和」の意味でもある。それは、カタカムナ人の造語の思念が、上古代以来、うけつがれて使われて来た、ということである。(十号34頁, 83~85頁)



カタカムナ人は四十八の日本語を定めるに当り、「ワ」と「ト」を基本とし、その上に、天然自然のあらゆる状態を抽象して(変換して)造った四十八のコトバの声音符を配置したのである。

それ故、日本語と日本文字の成り立ちは、現代人の言語や文字の概念とは、大いに趣きが異なるのである。(単に、コミュニケーションの為に自然発生したものが、発達したのでは無い。)

「ワ」とは、無限のカムのチカラが、現象系へ発現して、あるマトマリ(輪)をもったもの、という思念である。

それ故、「ワ」とは、大きくは アマ宇宙球の全体像 であり、小さくは 宇宙の万物万象の個体 を意味する。

○ワ
○マ
概念としては、「ワ」と「マ」は、同じような説明になるが、「マ」は、カムアマ始元質の状態としての思念 であり、「ワ」は、「マノスベ」の説明(物理)としての思念 である。

一般に「ワ」は、 $1+2=3$ (1と2の和) というような、加算性の意味に使われているが、カタカムナ人の「ワ」の思念は単なる加算性では無く、ワしたものは、ミクマリ(融和状態)であって、ワの中に個を見出すことは出来ない、つまり「マ」「アマナ」の状態である。それ故、日本人の好きな「親子の和」

り、多くの民族で、ことに幼児語に、マンマ・ママ・アマ等と使われている。

カタカムナ人は、「潜象から発生する現象」という最も根元的なモノを、「マ」とよんだのである。

それ故、「マ」とは、その現象全体をいうと共に、アマ界に発現するイチイチのモノも、「マ」である。

「マ」について述べるとなると限りが無いが、そもそもカタカムナ^{ウタヒ}文献は、「マ」のサトリである。

「マ」という思念は、現代の日本語にも、日本人独特の言いマワシに使われている。「マ」がよい・マに合う・マにうける・そのママ・ママならぬ・マがさす・マの悪い人・マサに・まして・イマ・マリ・マル・マワリ・マツル・マト・マトマリ・マチガヒ・マトモ・マジメ・マゴコロ・マメ・マナコ（眼）・マユ（眉・繭）・マツ毛・まばたく・まばら（疎）・まぶしい・マナブ（学）・マヅ（先ず）・マズイ（不味）・マスマス・マッ先・マ人間・マツトウ・マッタク・まあまあ・マタ（又・股）・マダ・マン・マレ・マネ・まねく・マへ（前）・マヒ（舞）・マク（巻・蔭・幕）・マケ（負）・マゲ（曲）・マチ（町）・マツ（待）・マメ（豆・元気）・マジワリ（交）・マモリ（守）・マヨヒ（迷）・マツピラ・まっさら・マンザラ・マサカ・まわり合せ・ママ（間間・儘）・マヌケ・トンマ……

* 「マ」は、カタカムナウタヒの中では、「マノスヘシ」「マツル」「フトタマ」「フトマニ」「マカタマ」「ミスマルノタマ」「アマタマ」「タカタマ」「オホトタマ」「アマノカカミ」「アマツカミ」「アマタマノムカヒ」「アマアワナギ」「マノヒコヒメ」「マワリテ」「ウマシ」「チマタ」「マカカ」「アマナクニヌシ」「マク」「ヤマト」「カナヤマ」「カラヤマ」「モコロシマ」「ツクシシマ」「オホトヤシマ」「オキミツゴシマ」「ソコソギシマ」「ミカヒシキシマ」「ヤタシマ」「イキツヒメシマ」「アマツアキツネ」「アマタカマカハラ」「オホトマト」「マノヒコヒメ」「マカヒクシサリ」「カムナマニマニ」「マカウミコ」「マハラ」「タマキソラ」「タマルツチ」「タナカヒノマ」「タナマタ」「ヤスマワケツミ」「ソレマアマウツシ」「イヤマヒ」等のコトバになっている。

又、「マ」から分れて出たものを「マリ」といい、その分れ方によって様々

つ、ナゾがホグレルのように、わかって来た、その感受したことを、述べているのである。)

* マワリテ メクル は、現日本語の、まわり(回転・回転・周囲)、めぐる(巡る・繞る・循環)の意味と、ほぼ同じであったと思われる。ということは、カタカムナ人が表現したコトバが、そのまま受けつがれている、ということである。



マワリテメクル



しかし、どうしてカタカムナ人は、その状態を「マワリテメグル」というコトバにウツシた(造った)のか? 一つ一つの声音の、カタカムナ人の思念を、感受して見なければならぬ。
* 「マ」という声音符は、現象界(宇宙球全体)を意味する大円(ワ)と、「ミ」(ウ・チ・ラ)と「ナ」(ニ)の位置にある小円二個とで造られている。



因みに図象は、大円(ワ)と、十字(ト)と、小円とで造られるが、「マ」には、大円(ワ)のみで十字(ト)が無い。
ということは、「マ」は、現象にあらわれたものであり、「ミ」(ウ・チ・ラ)と「ナ」(ニ)の状態はあるが、まだ「ト」(重合発生)は無い状態、という思念である。



ミクマリ図象



カタカムナ図象



フトマニ図象

* 「マ」という声音の思念は、アマ宇宙球が、カム アマ始元量(カ)の変遷した粒子(ミ)を、絶えることなく持続的に(チ)、生み出し(ウ)、何回も繰返し変化性をもちながら(ナ)、中和・安定・平衡の状態で存在している(ニ)、ということ、感受した思念である。(十号(8)~頁)

カタカムナ人は、始元の宇宙球の状態を、このように感受し、「マ」というコトバにウツシて、示したのである。

そして、その状態を、「ミクマリ図象」として、「カタカムナ図象」「フトマニ図象」と共に示している。

「マ」とは、唇をもつ哺乳類の人間が、^マ声音を^マ発すれば自然に出るコトバであ

という概念も、漠然と「何もない宇宙空間」などというあいまいなもので、「空間とは何か」というハッキリした定義はまだ無い。(102頁)

本質がわからないまま、(脳の悪い習性にふりまわされて、)思考を進めているのが、現代の科学・技術の智識である。(「カタカムナの直観物理に於る物性論」三号 18～、64～頁、六号 38～、53～頁)

* 私共は、このことが、はじめて、ハッキリとわかったから、時間空間の考え方を整理し、今までの先入見を払拭して、カタカムナ人が、ヒフミヨイのヨイを、トキトコロのマリとした意味を感受し(よく納得し)、日々、良いトキトコロを持続して生きる幸に恵まれるよう、自分の感受性の鍛練に努めているわけである。

* なお、解説は、まだ「ヒフミヨイ」までしかすんでいないが、その思念を説明する為には、「マワリテメグル」以下の四十三の声音を使わなければならないので、まだ説明のないまま、述べて来た。

例えば、「ヨイ」を説明する為には、「トキトコロ」という声音が必要である。

さらに「ヒ」や「フ」を説明する時にも、「アウノスベ」(重合)というコトバが必要であった。

そもそも、第一首の最初からして、四十八の声音思念を知らぬ人に、「カタカムナ ヒヒキ……」というコトバの説明をしなければならなかったのである。

筆者としては、微力をつくして解説につとめているが、読者には、わかりにくい(難しい)と思われる点が多いであろう。

どうか、しばらく辛抱して、読み進み、読みかえし、読みつづけてみて頂きたい。

(筆者自身、檜崎皐月の死後は、誰一人教えてもらう人も無く、参考資料も無く、頼みとするものは、ただ、彼らの示している図象文字だけであった。あらゆるコトバを図象符にして、その思念を感受し、図象符の字引をつくり、くりかえし、くりかえし、カタカムナ文献をよみかえしているうちに、少しずつ

素量の重合したものである。

則ち、ヒ フ ミはミツゴマリ、ヨ イはトキ トコロのマリ というわけである。

「ミツゴマリ」とか、「トキ・トコロのマリ」とよぶけれども、実質は、すべて、カムアマ始元量の変遷したマリであり、結合のしかたによって、様々なトキトコロ（則ち万物万象の形態）が構造されるのである。

* 因みに、科学の、時間・空間の概念は、まだ、ハッキリとした定義が無い。

というのは、時間・空間は観念上の二つの元として扱われているが、しかし、時間・空間の本質本性、つまり時間とは何か？ 空間とは何か？ という意味が、まだ、本当にわかっていないのである。

したがって、一般現代人の時間・空間の概念は甚だあいまいで、『時間は、過去から未来へ流れている』などと漠然と考えている。（もし「時間」を、流れているものとするなら、現在の時間は、未来から来て過去へ流れている筈である。）

現代人が、「時間・空間」というコトの意味をハッキリわかっていないということは、「生命」というモノを、本当にわかってはいない、ということである。

それ故、相当の科学者でも、「タイムトンネル」や「異次元の共時性」や「臨死体験」「靈魂の転生」等の思想を、信じられるのである。

カタカムナの日本語では、ハッキリと、時間の本質は「トのキ」であり、時間とは「トキノマ」であり、空間は「トキしたトコロ」であって、「トキ トコロ トコタチ」といっている。（第九首）

「時間・空間」を、上古代日本語にあてれば、トキ トコロ であるが、正しくいえば、「時間」にあたる日本語は、「トキノマ」である。

というのは、現代人は、カタカムナ人のような「トキ」の概念（感受）が無いから、トキの集積された 時計時間しか、考えられない。「時間」といっているものの本質は何であるか、ということがわかっていないのである。又、「空間」

サ・イサキ・シキ・ソギ・ソト・サトシ等の思念が潜在していることがわかる。

カタカムナウタヒでは、「イマ」「イキ」「イサキ」「イキココロ」「イキツ」「イキカエシワク」「イカツ」「イカツチ」「イハクス」「イハサク」「イハツツ」「イハツチ」「イハスヒメ」「イククヒ」「イヨ」「イモ」「イホ」「イシ」「イチキ」「イヤシロ」「イヤマヒ」「イヤミソギ」「イワ」「イワト」「イムナ」「イサナミイサナギ」等と示されている。

現代語でも、イツツ・イキ・イブキ・イノチ・イノリ・イキホヒ・イヤサカ・イマ・イウ（言）・イワク（曰）・イナ（否）・イヤ（弥・嫌）・イミ（意味・忌）・イタミ（痛・悼）・イモ・イロ・イニシへ・イヌ（犬・婦・去）・イネ（稻・去レ）・イボ・イル（居・射・入・炒）・イツ・イツコ・イチ（位置）・イシ（石・意志）・イワ（岩）・イツ（磯）・イタ（板）・イト（糸）・イトフ（厭）・イヤシ（癒・賤）・いなか・いかり（怒・礎）・いかが・いかにも・いじめ・いとしい・いたましい・いとも・いそぐ・いさぎよい・いさましい・いよいよ・いっしょ・いっぺん・いったん・いかす 等と、イの思念が、イロイロに引伸してイカされている。又、良い・悪い・赤い・白い・軽い・重い・美しい・悲しい・苦しい等の形容詞につけて使われている。

* 要するに、「ヒフミヨイ」とは、ヒがフになりミになりヨしてイになったマリであるから、「ヒ」も「フ」も「ミ」も「ヨ」も「イ」も、皆、カムアマの始元量の変遷したマリ（潜象過渡粒子）である。

そして「イ」のイカツは、現象に発生した最小の粒子であり、あらゆる生物（イキモノ）の生命体を構成する最小単位の極微粒子（マリ）である。

その内容の実質は、ヒからフになりミとなったミツゴマリ（イカツミ・マクミ・カラミの三素量）と、「イカツ」という場を形成するヨイのマリとの五の

が、方向性を持ち、四相性をもって、湧き出す（トキする）という思念である。「ヨ」は、トキのマリである。（トキ・トコロの本義）

又、「ヨ」は、「ヨイマワリ」とよめば、「良い」という意味が出てくる。そして、よし・よろしく・よろこび・よみする・よしみ・よすが 等の言葉が造られた。

現代では、世・代・夜・ヨイ（宵・酔）・ヨウ（用・要）・ヨコ（横）・ヨク（欲）・ヨル（寄・依・夜）・ヨモ（四方）・ヨシ（由）・よしなに・ようこそ・ヨワイ（齢）・よけい・よごれ・よせる・ヨソ・よそおう・よだれ・よだつ・よた・よっぱらい・よぶ（呼）・よみ（黄泉）・よめ（嫁）・よむ（読）・よろず・よわる・よどむ・よんどころない・よける・よせ（止）等と使われている。

カタカムナウタヒでは、「ヨロツ」「ヨモツ」「トヨホ」「トヨウケヒメ」「トヨセツミ」「アナトヨ」「フトヨ」「ヨハ」「ヨミツ」「ヨミワケ」「ヨミオキ」「ヨミタネ」「ヨミマ」「サキヨリ」「イヨフタナ」等とよまれている。

* 「イ」という声音符は、「タしたマ」のワ（大円）の現象系を意味する左半円と、「シ」「ン」「ソ」の声音符と同じ位置にある小円一個とで造られている。（「イ」については、第四首 118～頁）



イワ イワト
イサ イサキ
イキ イキトキ
イシ イシトシ
シキ
ソト
ソキ

「イ」という声音符は、「五」という数の意味であるが、そもそものは、モノの発生の順序を、順々に示す意味である。則ちヒがフになり、ミになり、ミツゴになったマリが、「ソ」して「ン」して示され、トキしてトコロを得て、現象の最小の粒子（イカツ）となる、その順序を示す意味である。

* 「イ」を図象符にすると、イワ・イワト・イシ・イキ・イ

カタカムナの^{サトリ}思想は、人間の脳が、本当に^{スナホ}正直に、マツトウに、考えついたものである。それ故私たちも、本当にスナホに、マツトウに考えれば、カタカムナのコトバがわかる筈である。

* 進化した脳をもつ人間に生れた以上、我々は、何としても、脳のことをよく知り、自分の脳に、イノチとココロのサトリを知らせなければ、ヒトとしてマツトウに生きることは出来ないのである。

それは、自然の動物が、皆、本能として知っている 筈のことである。

脳の進化した人間は、その脳が、本能の知っているものを、ハッキリと認識していなければ、人間として生存を全うすることが出来なくなるのは^{アタリマエ}当然のことである。

我々の遠い祖先のカタカムナ人は、日本人の文化の創成期にあって、このアタリマエのことに気がつき、自分たちの知り得たイノチとココロのサトリを、マノスベシとして示してくれていたのであった。

他の民族の文化は、このアタリマエのことに気がつかぬまま、脳の能力に^{ノキ}ふりまわされて来たものである。

カタカムナ文献の解説によって、このことが、はじめてハッキリと、わかったのである。

* 「ヨ」という声音符は、「タしたマ」のワ（大円）の現象系を意味する左半円と、「ヘ」「ユ」「ヲ」の声音符と同じ位置にある小円一個とで造られている。

ヨ

ヘ
ユ
ヲ

ヨ

トヨ
ヨリ
サヨリ
サキヨリ
ヘサ
ヲ

「ヨ」という声音は、「四」という数の意味であるが、カタカムナ人は、単なる数詞として造ったのでは無く、「ヘ」（方向性）、「ユ」（湧き出る、トキする）、「ヲ」（四相性をもって出現する）という思念がこめられている。

「ヨ」を図象符にすると、トヨ・ヨリ・サキヨリ・サヨリ・ヲ・ヘサ・ユタヘ等の思念が潜在していることがわかる。

要するに「ヨ」とは、ヒがフになりミとなったミツゴマリ

しかし、そのレベルの思想で満足できない者があっても、自分は何がほしいのか？ わからぬまま悩み、トラブルを起している。

今、カタカムナ文献が解読され、我々の遠い祖先の上古代人が、自分たちの生命の根拠を発見し、コトバと文字を造って、その思想を伝えていたことを、知らされた。

それは、現代人のもっている文化の根拠とは異なる思想である。

そこには、後代の世界のどの民族ももっている、死・靈魂・神・仏・天国・地獄・善・悪・愛欲・魔等に当る概念用語は無い。

カタカムナは現日本語の起源であるから、多くのコトバが同じ発音で使われているが、例えば「カミ」は「神」と同じ発音であるが、その意味は、「神」では無く「カのみ」(第二首)である。

なぜなら、カタカムナは、感受性の劣化した後代人の大脳次元で思考されたものではなく、上古代人の鋭い感受性の感受に基いて、脳が順序に開発され、認識に出されたものであるから、我々後代人の思考では、理解できないものがあるわけである。

それ故、今までの文化の根拠の宗教や哲学の「神」や「仏」や「靈魂」等の思想で満足している人々には、関係の無いことであるが、満足できないで悩んで(求めて)いた者は、わかる(共振する)かもしれない。

というより、自分の悩みやトラブルの状態をよく反省して、それが人間の脳の落とし穴(下剋上)であることに気がつき、(則ち、従来の宗教や哲学や科学の思想のレベルに満足できなかったわけがわかり)、自分のイノチとココロの本質本性をせい一杯つきつめて、『どうして自分はこうなのだろう。一体自分はどうしたらよいのだろうか?』と、本気に、(大脳次元の先入見になれあわずに、)疑問を抱く者なら、カタカムナ人の示すコトバと文字に、共振が起る筈である。

なぜなら、人間の脳の開発の順序は、古代人であろうが現代人であろうが、どの民族も、変らぬものだからである。

トシヤカに、全世界に、二千数百年間伝えられ、富永老師によって始めてその真相があかされるまで、誰一人、小乗大乘仏教に対する疑念をつきつめ、真実を見破る者は、無かったのである。

カタカムナのサトリが、二千年間、無視されて（埋没されて）来たものが、今、橋崎阜月によって解読された、といっても、正しく受けとられることが難しいのは、どうしようもないことである。

* それ故にこそ、現代人は、自分の脳を働かせている、本能とよばれる生命の感受性を、マツトウに育て、鍛え、教えるスベを知らなければ、我々は、成人しても、マトモな思想をもつことが出来ず、マトモな判断行為を出して生きることができぬまま、（則ち、カタカムナ人が「ヒトココロ」といった、本来の人間が持つべき真実の心を知らぬまま、）死んで行くしかない。いかにアタマの機能はよくても、今、自分の思いこんでいる思想がどの程度^{レベル}のものかを、気付くことも出来ないのである。

その為に、本来の人間なら当然の救いとしてあたえられる筈の真実の生命のよろこびを知ることも無く、自分の持った思想のレベルに殉じた陶酔次元のよろこびと、異常バランスで満足する程度の人生を、終えるしか無いのである。

本来は、生命の幸せの為に進化した筈の脳を、もって生れながら、我々は、その自分の脳の本質本性^{ハヅラツキ}を知らずに、無知のまま、その脳の悪い習性^{クセ}にふりまわされている。これが現人類の不幸の最大の原因である。

「知る能力」をもつ人間であるからこそ、無知ほど悲しいことは無い。（前号補遺4「感受と判断をつきつめる、脳の下剋上」）

何としても、我々現代人は、自分の脳が、人間の脳の落とし穴に陥ってしまい、感受性が退化していることに気がつかなければ、全く救われようがない。たとえ今カタカムナに出合っても、それをマトモに知る（感受する）ことが出来ないのである。

* しかし、現代人のすべてが、今までの宗教や哲学や易占や科学等の思想で、満足して（なれあって）いるわけは無い。

受けいられることは無かった。(一人の後継者も残せなかった。)(前号補遺 3「覚作用について」)

たとえ潜象であっても、たしかに存在するものであれば、直観によって解明することが出来る。しかし現代の科学者は(檜崎臯月以外)その直観をもっていない。

* いずれにしても、現代人は、まだ、人間の脳のこと(則ちイノチとココロの物理)を、正しく解明しうる直観をもっていないから、直観力研究の権威といわれる学者が、直観の定義として、『直観とは、五感・思考を通さず、心が直接何かを認識することである』等という杜撰な表現をしても、怪しまれもせずに通用し、人々は、「絶対の愛」「純粋な心」「個の中に無限の全宇宙を内包する」等というあいまいな概念を、「靈魂」や「神」や「超自我」や「宇宙エネルギー」「宇宙生命」等の思想に、わけもなく結びつけて、満足して(なれあって)しまうのである。

人間の脳は、そういう習性をもつものなのである。困ったことに、その自分のクセに(自分が、自分の、その脳の落とし穴に陥っていることに)、自力で気がつくことが、出来ないのである。

彼らは、たとえ「カタカムナ」に出合っても、共振波動は起きないから(わからないから)、自分のアタマの波動量のレベルで、勝手な解釈をし、(それが、脳の能力の限界であることを、つゆ自覚しないから、「あなたはまだカタカムナがわかっていない」といわれても、気にしないで、)『カタカムナは自分の思想と同じだ』と思うものである。(9~、17~頁)

例えば、「カムは無限の潜象」というのは、『異次元世界のこと』ととり、「カムナ」とは『靈的生命体の主』のこと、「アマナやミナカヌシ」とは『靈魂』のこと、「アマハヤミは超光速粒子」といえば、それは『宇宙エネルギー』のことである、とこじつけ、憚りもなく、自分の思想に利用して、何の悪意も、反省も、無いのである。(深野一幸著書)

* 思えば、釈迦の教え(思想)が、小乗大乘の仏教思想に誤解されて、マコ

* およそ人間の 進化した脳の特長 は、意識をもったことである。

「意識をもつ」というのは、眠っている時や気を失っている時は『意識が無い』というような動物次元の意識だけでは無く、例えば、これは「私」であり、それは「昨日のこと」であり、「私は愛している」のに、「彼は気がついていない」等と、自分の 経験を認識 に出し、それらの 経験を抽象 して、その経験の量なりの思想をもつことである。

人間の脳が進化し、意識の能力をもった以上、思想をもたぬ人間は無いわけで、それが、前述の通り、どの民族も持っている宗教や哲学や科学の思想となったのである。

それ故、人々は、その思想の^{レベル}程度なりの人生を生き、その思想の^{レベル}波動量なりの文化をいとなんでいるわけである。

その際人々は、今、自分の持っている（意識している）思想が真理である、と、一方的に思いこんでいるだけ であって、その思想が、どの^{レベル}程度のものか？ 果して本当に正しい天然宇宙の物理にかなうものであるかどうか？ を、^{ワカン}判断する能力は、持ち合わせてはいない。

もし、それをわかることが出来る為には、今の自分の思想よりも、波動量の多い思想に出会い、共振波動を獲得する、ということがなければならない。あるいは、今の自分の思想に 不満や疑念を生じ、真の根拠を知りたい と、つきつめる、という者でなければ不可能である。

* その意味で、今日までの人類のもった思想は、ハッキリ言えば、すべて『ベーダ・ウパニシャッド・小乗大乘仏教・唯識論』のレベルの波動量までのもの であつたから、そのレベルの思想の共鳴者は多かつたが、しかし、その数がいくら多くても、彼らは、自分たちの思想が最高の真理であると自己満足するばかりで、それが、実は 人間の思想（覚作用）の、どの^{ナレアイ}レベルのものであるか、ということ、ハッキリと認識に出せる者は、（富永老師に至るまで）まだ無かつたのである。（「覚作用について」補遺3）

稀に（釈迦・孔子・ゲーテのような）天才が出て、彼らのレベルを抜け、^{マノスベツ}真の天然宇宙の物理に達したとしても、それは 天才者個人の体験に止まり、人々に

次元でつくり上げられたものであることを、全く自覚していないのである。(陶酔次元の観念の満足、という所以である。)

その根拠に、彼らの「神」(や仏や宇宙生命等)の属性^{ハクク}についてはいろいろ言っているが、その「神」の本質については、正当な物理をもっていないにもかかわらず、そのことを全く気にしていない。(「真の救いと異常バランスの救い」前号 補遺 4)

それ故、彼らは、自分が一生懸命につくり上げた、(自分の超能力や神通力によって悟ったと思っている、)その思想が、昔の聖者賢者といわれた人々の悟りと一致することに力を得、それが真理であると確信して、安心立命の境地を得ると共に、その思想は多くの人々に受け入れられ、互いに信念や信仰心を深めることにもなっているのである。

因みに、この思想レベル^{レベル}の人は、カタカムナに出会っても、自分たちの「靈魂」の思想と、カタカムナの「アマナ」の違いがわからない。人間の脳は、自分より高い波動量^{レベル}のもの^{レベル}のことはわからないから、自分と同じ思想だと思ふものである。(そのレベルの思想で満足してられる者は、個人としては、「知らぬが仏」^{スライ}(陶酔次元)の幸である。)

一方、科学は、客観的に実証できぬ、それらの目に見えぬ主体(靈魂や超常現象、神や異次元世界)の存在を、認めるわけには行かぬ。

といって、生命は遺伝子まで、物質は原子・電子・素粒子以上のものを発見することは出来ない。

その為に、科学は、生命の本質も、生命発生の物理も未開明で、「生命とは何か?」の解答は、まだ出せないでいるのである。

これは、私共の独善でも、独断でも無い。

なぜ私共が、このようなことを、わかってしまったのか?

それは、彼らの思想の根拠が、その程度^{レベル}のものである、ということ、判断しうるだけの波動量をもつ思想、則ち、彼らの(ベーダ・ウパニシャッド・小乗大乘仏教・唯識論の相似象の)波動量^{レベル}の思想よりも、もっと発達した脳^{フクツク}によって開発された思想の根拠を、(則ち「カタカムナ」を、)知らされたからである。

* 思えば、数万年以来、人間の脳は、宇宙の万物万象の存在（スガタ・カタチ）を見、自分自身の肉体的・精神的な経験を通して、「生命」という概念をつくり、科学をつくり、哲学をつくり、宗教をつくって、「生物」と「無生物」を分け、「生命」の本質と、生命発生の物理を究明し、生命の根源をつきとめようとして来たのである。

科学は、あくまで「現象」のもので説明しようとするから、遺伝子・原子・電子・素粒子までつきつめてきて、行きつまっている。

哲学や宗教は、民族によってニュアンスの違いがあるが、およそ、どの民族の思想も、（原始宗教の類から、キリスト教・イスラム教・仏教・道教・最新のトランスパーソナル・ニューサイエンス・宇宙生命・生命素・宇宙エネルギー等の思想に至るまで、）当人は、自分の思想が最高の真理だと主張しているが、彼らの思想の波動量は、実は、いずれも、『ベータ・ウパニシャッド・小乗大乘仏教・唯識論』の原型の、相似象までである。（人類の思想の整理 前号「感受性について」その三、補遺 4）

* 要するに、彼らは、現象の生命体と、目にみえぬ主体、則ち、一般に「心」とよばれ、精神力・超能力・超常現象・共時性・暗在系等と言われるものの主体として、「靈魂」「氣」「アトマン」「プシケー」「超自我」「宇宙生命」「宇宙意識」「靈的生命体」「神」「仏」「太極」等とよぶものの存在を考え、その思想に基いて、大脳次元で、（自分の感受に基いて考えるのでは無く、）生命の発生や、宇宙の創成、死後の世界や天国・地獄等の異次元世界、再生や転生、臨死体験等の思想をつくり出している。

このことは、人間の脳の機能が、昔も今も、どの民族であっても、普遍的に変らぬものであるからこそ、その脳のつくり出す思想は、（深いか浅いかの差はあっても、）皆、似たりよったりの相似象を呈するわけである。

* しかし彼らは、自分の脳が働いた結果の思想を意識に出して（自分の脳にふりまわされて）いるだけであって、自分が、どうしてそのような思想をもったか？という物理は、全く知らない。

自分の思想が、実は、天然宇宙の真理では無く、感受性の退化した人間の

シ), 「フミ」「フナミ」「アナミ」「ヒトミ」「ハグミ」「ワタツミ」「ソレツミ」「カムツミ」, 「ミソギ」「ミクラ」「クミト」「ミクマリ」, 「オホカミ」「ミシロ」「ウツシツミ」「カミワケ」「ミキリ」等といわれている時の「ミ」は、ただの「三つ」という数詞ではなく、実質の意味のミの思念がこめられている。

「ミ」のつく日本語には、ミ(三・実・身・見・味・箕・魅)・ミキ(幹・右)・ミミ(耳)・ミツ(水・密)・ミツカラ(自)・ミカド・ミソ・ミソカ・ミソギ・ミソレ・ミダレ(乱)・ミチ(道)・ミノリ・ミナミ・ミナモト・ミナト・ミネ・ミノ・ミヤ(宮)・ミヤク(脈)・ミヤゲ・ミヤコ・ナミ(波)・ウミ(海・生・膿)・カミ・トミ・ヒトミ・みがく(磨)・みえ(見栄)・みかた(味方・見方)・みさお(操)・みじかい・みじめ・みせ(店)・みだら・みつぐ(貢)・みつもり・みとる(看取る)・みとれる(惚)・みなしご・みのしろ・みまい・みめよき・みるみる 等がある。又ミタマ・ミカド・ミキなど、敬語の「御」の意にも使われる。

又「ミ」の思念は、アミ・イミ・ウミ…カミ・キミ・クミ…トミ・ナミ…等、四十八のほとんどの声音につけて、使われうるわけである。

* そもそも、自然の動物は、本能として、自分の生命の根拠(根源)を知っている。

脳の進化した人類は、その脳が、生命の根拠を知っていなければ、マツトウに生きることは出来ないものである。

それ故、世界のどの民族も、発祥以来、生命の根拠を求めて来た。

彼らの求めた根拠とは、「カミ」とか「神」とか「仏」とかよばれる思想であり、生きる上の精神的なよりどころであり、民族の文化の度^{レベル}を現わすものである。

発生によって、あらゆる万物万象を発生するのである。

それ故、カタカムナのサトリによれば、あらゆるモノが、(石や金属のような無生物といわれるものも、)すべてイキモノであり、あらゆるモノは、(天体も、動植物も、人間も、人間の精神も、)すべて、カム アマの変遷物であり、カム アマの「相似象」である、という所以である。(三号 64頁~「直観物理の物性論」)

そして又、地球上の生物の多様な発生と進化を分類して、系統樹のようなものを作るとすると、それぞれの系統の根は、現在のように、一本の原生動物の樹から分れるのでは無く、すべての根は、ミツゴのレベルまでさかのぼらなければならぬことになる。

なぜなら、あらゆる生物の共通の根源は、則ちあらゆる生物の本質本性は、この、ミツゴだからである。

そして、さまざまな環境のカカワリに応じて(ムナヤコト)、それぞれのトキトコロ(生命現象)に、変遷してゆくのである。

(人間は、猿から進化したのではなく、人間は、ヒトとして、カムアマの始元量から、発生したのである。)

* ミを図象符にすると、ミト・ミチ・ミキリ・ウミ・ウタ・ウチ・ウキ・ト



ミト
チ、サチ、トサチ
ミチ、サキミチ
ミキリ、トチ、トウ
タチ、チサキ
ウタ、ウキ
ウミ、ウチ、(ウラ)

ウ、トチ・タチ・チサキ・タチサキ・トサチ等の思念が潜在している。(「ト」「ウ」「チ」「ラ」の思念がこもっているからである。)

それ故、カタカムナウタヒの中で、「ヒフミ」「ミト」「ミチ」(コトミチ・クスヘミチ・イヤミツギミチ・ミチタマ・トメミチ・カムアマミチ・ミチチハ・イヤミチ・カムミチ・ミチノナガチハ・カミワケノミチ・ナギウツシミチ・オキナサキミチ), 「カミ」「カカミ」「カラミ」「ミナカヌシ」「タカミ」「カムミ」「ミスマルノタマ」, 「オキミツゴ」「ミツゴシマ」「ミツゴナミ」「ミツハノメ」, 「ミカヒ」「ウミ」(マカウミコ・カハウミワケウミノアナ・イマウミ・ウミイマサキ・ヤホウミ・ウミウツ

左・右のマワリのマリが^ト重合して「フ」のマリとなり、「フ」の左・右のマワリのマリが、「ヒ」の左・右のマワリのマリと^ト重合して「ミ」となったマリであり、潜象のチカラは、形態が構成されると、それなりの機能を発生する。

それ故、ミツゴは、左マワリの「アワ」(マクミ)の磁気素量と、右マワリの「サヌキ」の電気素量と、そしてその「ミ」の中に、サヌキ・アワの^フ重合によって発生した「ヤダノカ」の「カ」の凝集した「カラミ」(力素量)とがあるわけである。

* 我々の環境、則ち宇宙空間には、このような、カからタした「カムツミ」(アマ始元量)の、様々な状態の潜象(スモールヒの左マワリ・右マワリの状態の^{チカラ}潜象のマリと、「ヒ」「フ」「ミ」の状態の^{チカラ}潜象のマリ)が、満ち満ちている。

というより、様々な潜態のアマ始元量の密充填状態(ミクマリ)を、「マ」「アマタマ」(宇宙球)とよんだのである。

(それ故、アマとカムは、潜象であるが、所謂、異次元の世界の思想では無い。我々の現象界とは別に、潜象界が存在するわけではない。)

「アマ」は、宇宙と考えてよいが、その「アマ」の中には、「カムツミ」の様々な状態の潜象が存在し、その中で、「ミ」のミツゴマリは、最小単位のマトマリとして存在している。

「アマ」(宇宙)には、それらの潜象と、潜象過渡のモノが、遍満している。(その状態を「ミクマリ」という。)

その中で、「ミツゴ」は、「モコロ」を形成し、「ヨ・イ」の「トキ・トコロ」のマリと重合して、「イカツ」(電気粒子の^{サヌキ}正・^フ反)となり、「アマナ量」なりに、水素以下のあらゆる原子を構成し、分子・細胞を造り、万物万象の形態を構造する。

宇宙のあらゆる物質の実質は、この「ミ」の「ミツゴマリ」をさすわけである。

言いかえれば、「ミツゴ」(カムアマ始元量の変遷物)が、「場」に応じて(それなりの「トキ・トコロ」のマリの^フ重合によって)、則ちカタカムナの対向

フ

フ

フ

フ
フキ
クサ
ワクサトリ

それ故、「フ」という^{ヒキ}声音は、「フタツ」という数詞の他に、いま述べたように、「ふえる」「ふとる」「降る」「振る」「震う」「吹く」「深い」「ふし」「ふたば」「芝ふ」「ウキフ」等のコトバが生れたわけである。

* 「ミ」という声音符は、「タした潜態」(大円の潜象系)を意味する 右半円と、「ウ」「チ」「ラ」の声音符と同じ位置におかれた 小円一個で造られている。(十号(53)~頁)

ミ

ミ

チ

「ミ」という声音の意味は、「三」という数であるが、その他に、実・身・見・味・箕 等の意味がある。

ウ

* そもそも、カタカムナ人の「ミ」というコトバの思念は、やはり最初から「三」という数詞として造ったのでは無かった。

ミ

ミ

ラ

「ミ」とは、「ヒ」則ち左マワリ・右マワリの潜態のチカラのマリ(スモールヒが、^トラージヒになったもの)が、重合して「フ」となり、その左マワリ・右マワリの「フ」が「ヒ」と重合して、「ミ」となったマリである。

「ミ」は、カム アマの始元量(ヒ)の変遷物であるから、マリ(マからリした球状のモノ)であるが、潜象のチカラの状態である。則ち、左マワリ・右マワリのマリが、(メビウスの輪のように、)三回、重合(ト)されて、「ミツゴ」となり、「モコロ」を形成する。

「ミツゴ」は、^{イカツ}電子・^{ハコフ}原子をはじめとする、あらゆる現象物の実質であり、その内容は、^イイカツミ(電気)マクミ(磁気)カラミ(力)の三素量である。ミツゴは、潜象のチカラが形態をもった最初のものである。(ミツゴ・モコロの分解図象 三号81頁)

ミの実質とは、ミツゴマリ、則ち、カからタしたカムツミの重合体である。則ち、スモールヒの左・右のマワリのチカラが重合して「ヒトツ」のマリとなり、その「ヒトツ」の

造られている。(十号(60)~頁)

㊦

㊦

㊦

エ

日本語の「フ」という声音には、「フタツ」という数詞の他に、「ふえる」「ふとる」「ふくらむ」「降る」「振る」「震う」「吹く」「深い」「フラフラ」「ふし」「ふたば」「芝ふ」「フとした」「ふしぎ」等の言葉になる思念があった。

そもそも、カタカムナ人が「フ」というコトバをつくった時は、最初から「2」という数の意識だったのでは無かった。カムのチカラの、左マワリ・右マワリの「ツ」(スモール ヒ)が、重合して「ヒトツ」(ラージ ヒ)になり、更に、その左マワリ・右マワリの「ヒトツ」が重合して「フタツ」になる。そのように、自由に(ク)、「カ」のカカワリの場に恵まれて(エ)、ヒトツからフタツにふえることが、「フ」の本来の思念であった。

ところが、「ヒフミヨイ」とその生命発生の順序を示してみると、まさしく、「1 2 3 4 5」の意味に通じることになったわけである。

* それ故、カタカムナウタヒの中で、「フトタマ」「フトマニ」「フトナ」「フトヨ」「フトヤ」「フトマリ」「ヌフト」「カタフト」「イハフト」「アナフト」「フカヒ」「フツ」「フミ」「フマリ」「フヌ」「フナミ」「フタネ」「フタハシ」「フタヤ」「フキヲ」「コフ」等といわれる時は、ただの「二個」という数詞では無く、「フタツ」の、(則ち「左マワリの渦」と、「右マワリの渦」の)「カム」と「アマ」の「フ」をさしている。(カタカムナ人が「フト」といえば 93頁)

「フ」のつく日本語には、フタツ・ふえる・ふとる・ふくらむ・ふくろ・ふける(耽・更・老)・ふるい・ふさぐ・ふれる(触)・ふとん・ふすま・ふる(振・震・降)・フク(吹・噴・服・輻・福)・ふかい(深)・ふかす(蒸)・ふくべ・フタ(蓋)・フエ(笛)・フシ(節・藤・不二)・フサ(房)・フデ(筆)・フネ・フミ(文)・フユ(冬)・フケ・ふす(伏)・ぶつ(打)・ふむ(踏)・フロ(風呂)・フロシキ・ふるふき・ふんどし・フワフワ・フカフカ・フツフツ・ぶつとばす・ぶんなぐる・ぶんどり・ブス・プリプリ・ブンブン 等がある。

「フ」を図象符にすると、フト・フタ・フキ、クサ・サク・ワクサトリ・タクリ等の思念が潜在している。

ターン として示している。(三号～六号)

「ヒトツ」というコトバは、このような 最初の一個 の意味であるが、又、同じヒ(根源)から出たものを、すべて集めた統一の「ヒトツ」(全体)という意味もある。

およそ、カタカムナのコトバ(日本語)は、いずれも、おのずから、正・反の(サカ)の意味をもつものである。これも、日本語の成り立ちが、自然現象そのままのものである故であろう。

要するに、「ヒ」という日本語の基底思念は、『カム無限量から発した小さなウツの左マワリ・右マワリの「ヒ」が、「ヒトツ」になったモノ、それは、すべてのあらゆる万物万象の起源の始元量であり、根玄の「ヒ」である』という、カタカムナ人の潜象のサトリの根本を示すものである。

「ヒ」のつく日本語(和語)は、ヒ(一・日・陽・火・灯・氷)・ヒト・ヒトミ・ヒトリ・ヒカリ・ヒル(昼・干)・ヒキ(引・挽)・ヒビ・ヒビキ・ヒジリ・ヒズミ・ヒダリ・ヒサ(久)・ヒコ(彦)・ヒメ(姫・秘)・ヒナ・ヒモ・ヒザ・ヒシ(菱・肘)・ヒタイ(額)・ヒタ(直)・ヒフ・ヒソカ・ヒナタ・ヒラキ(開拓)・ヒラメキ・ヒロイ(広)・ひろう(拾)・ひいき・ひいでる・ひえる・ひかえ・ひがむ・ひけめ・ひしと・ヒソヒソ・ひっそり・ひたす・ひやす・ひたすら・ひたむき・ヒタヒタと・ヒタと・ピツタリ・ヒダ(駭)・ひとしい・ひとしお・ひとでなし・ひととなり・ひねくれ・ひなた・ひねもす・ひっぱる・ひのめ・ひにく・ひょう(氷・雹)・ひょうし・ひらに・ひるむ・ひるがえる・ひもじい・びっくり・びっくりかえる等に、「ヒ」の思念がうつされている。

又、ムスヒ・ムカヒ・サカヒ・ツカヒ等、大事な言葉に「ヒ」がついている。

カタカムナ文献の主なコトバは、「ヒヒキ」「ウタヒ」「ムスヒ」「ヒトツカタ」「ヒコヒメ」「ナホヒ」「ハヤヒ」「イヤマヒ」「ツヒ」「クヒ」「シヒ」「ヌヒ」「ハヒ」「ケヒ」「トヨヒ」「ウヅメヒメ」「ヒネ」「ヒワケ」「ヒノクニ」「ヒトタマ」「ヒトココロ」「ヒトミ」「ヒメチ」

* 「フ」という声音符は、「タした潜態」(大円の潜象系)を意味する 右半円と、「ク」「エ」の声音符と同じ位置に附された 小円一個 とで

スモールヒ



ラージヒ



⑥ + ⑥

サスキ アワ



ヒトツ

カムからアマが生れるといっても、「カ」一個から「マ」が生れることは無い。又それは、いかに極微の、又は巨大な潜象であっても、停止不動の状態である筈は無い。「カ」そのものが、左マワリ・右マワリの状態で存在する。

しかしそれは「カのツ」には違いないが、まだ、一個（ヒトツ）のマリになる前の潜象のチカラの状態であるから、「カムツミ」ともいえない。（それで、私共は、それをヒになる過渡の「スモールヒ」といい、重合して「ヒトツ」になったものを「ラージヒ」とも、いつている。）

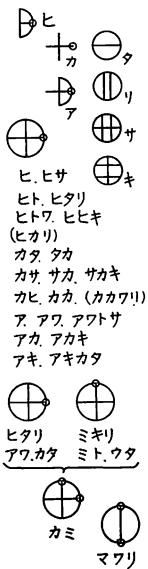
つまり、カムは、「スモールヒ」（左マワリ・右マワリのカのツ）の状態で、無限に、存在しているわけである。

言いかえれば、「スモールヒ」には、左マワリ・右マワリがあるから、それが出合えば、重合（ト）が起きて、「ヒトツ」になる。（第二首 ヤタノカカミ・第三首 フトタモノミ）

則ち、左マワリと右マワリの潜象のチカラの渦は、正・反のマワリがマジリ合い（互換対向）、カタカムナの ^{カカワリ} の場ができて（対向発生）、ヒの重合が発生するのである。（「ヒトツ」とは、一個のカムツミが発生するにも、カ^トの重合がある、というサトリである。）

その「ヒトツ」には、又、左マワリ^{アワ}と右マワリ^{サスキ}がある。なぜなら、左マワリと右マワリのスモールヒが重合するトキ、（同じ強サということはありませんから、強い方のマワリが弱い方を巻きこむ形になり、重合したラージヒ（ヒトツ）は、表面は、強い方のマワリ（ヒタリ又はミキリ）を示しているが、内部には、弱い方のマワリが重合している。（左・右のマワリのものを、ただ合せても、「ヒトツ」にはならない。）それを重合させているモノが、目にみえぬ潜象（カタカムナ）のカカワリであり、重合したマリの中に入って、マリの命を保つチカラとなるのである。

そのことを、次の歌詞で、「マワリテメクル ムナヤコト アウノスベシレ」と説明している。檜崎臯月は、それを、対向発生・互換重合の潜象物理の基本パ



ということは、「ヒ」とは、あらゆる現象の根源(カ)であり、あらゆる現象の始元(ア)である、という思念が、こもっているというわけである。(十号(8)~, (25)~頁参照)

それ故「ヒ」を図象符にすると、ヒヒキ・ヒト・ヒタリ・トヒ・キヒ・ヒカリ、アワ・アカ・アキ・アカキ・アト・アサヒ・アワレ・アヒダ、カタ・カヒ・カサ・タカ、サカ・サカキ・カカワリ等の思念が潜在していることがわかる。

図象符にする、ということは、大円の中に入れてみることであり、「ヒ」を大円に入れてみるということは、「ヒ」が現象界に於て、どういう状態になるか、ということが示されることになるので、それを、感受してみるわけである。

* 要するに「ヒ」とは、カがタした(カタ)、最初の^{ヒトツ}一個のカムツミであり、目に見えぬ潜象のチカラながら、左マワリと右マワリのサカの状態が存在する。

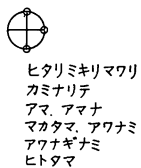
因みに、左(ヒタリ)とは、「ヒからタしてリすること」、右(ミキリ)は、「ヒのミからキしてリすること」という思念であるから、左マワリはアワマワリ、右マワリはサヌキマワリ、というわけである。

則ちカムは、目にみえぬ(形の無い)潜象であるが、それはチカラの状態であり、チカラは、一ヶ所に停止することは無い。動けば、左へまわるか右へまわるかしか無い。

その左マワリと右マワリの極微のチカラが、無限的に充滿している状態を、カタカムナ人は、カムとよんだのである。

そしてその左マワリ右マワリの小さなチカラが、出会い、巻きこまれて(重合して)、一個のマリとなったものを、「ヒ」とよぶわけである。

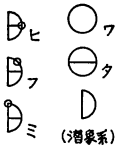
* あらゆるものは、一個から発生することは無い。(第二首 ヤタノカカミ カタカムナ カミ、第三首 フトタノミ ミコト フトマニニ)



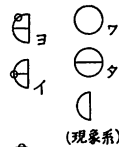
そこで、先ず、榎崎皐月の解説について解説しながら、カタカムナの四十八の声音符と、その凶象符の意味する基底思念について、私共の感得した限りを述べ、読者自身の解説、感受の資としたい。

* それにつけ、改めて、わきまえて頂かねばならぬのは、カタカムナ人は、既にある日本語を使って「ヒフミヨイ……」といったのでは無い、ということである。エジプトギリシャインド等の文化の発祥よりもはるか以前、人類がまだ、言語文字を持たなかった頃、彼らは、初めて「コトバ」を開発したのである。

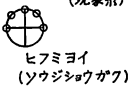
* ヒフミヨイは、我々は、「1 2 3 4 5」という数詞であるとアタマから思いこんでいるが、そもそも、カタカムナ人は、単なる数詞として造ったわけでは無かった。



これは、カという、目にみえぬ潜象の状態のもの(ツ)から、現象の極微粒子(イカツ)が発生する順序(マノスベ)を示すコトバであった。ヒもフもミもヨ・イも、皆、力のツ(上古代語では「カ ム ツ ミ」)である。それがおのずから数の順序を意味するのは、自然現象そのままに造られたカタカムナの「コトバ」の妙である。



カタカムナは生命のサトリであるが、同時に、それは「カツ」のサトリ(数学)であるといってもよい。



しかし、カタカムナの文字が否定され(大和朝に征服され)た後は、「ヒフミヨイ」の、生命発生、サトリの意味も「カツ」の意味も失われ、「1 2 3 4 5」の数詞の意味だけが、童歌などによまれて、伝えられたのである。

* 「ヒ」という声音符は「タした潜態」(大円の潜象系)を意味する右半円と、「カ」「ア」の声音符と同じ位置にある小円一個とで造られている。

イハ(五の正反)

ヒフミヨイマワリテメ
ヨ (クルムナヤコトアウノ)
ソ (スヘシレカタチサキノ)
ヤ (ラニモロケセユエヌオ)

ヤ (ヲハエツ)
ホ (ネホン)

トハ(六の正反)

ヒフミヨイマワリテメ
ヨ (クルムナヤコトアウノ)
ソ (スヘシレカタチサキノ)
ラニモロケセユエヌオ

ヤ (ヲハエツ)
ホ (ネホン)

ヨソヤコト
(四ツヅツ)

ヒフミヨイマワリ
テメクルムナヤコトアウノ
ソ (スヘシレカタチサキノ)
ラニモロケセユエヌオ

ヤ (ヲハエツ)
ホ (ネホン)

イ:「マワリテメ」のイハ、「クルムナヤ」:「コトアウノ」のイハ、「スヘシレカ」:「タチサキノ」のイハ、「ラニモロケ」:「セユエヌオ」のイハ、の四十^ノ字と、「ヲハエツ キネホン」の八字とに分けて読んでみた。

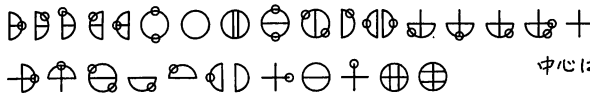

そして又、「ヒフミヨイ マワリテメ」と「クルムナヤコトアウノ」のトハ、「スヘシレカ タチサキノ」と「ラニモロケ セユエヌオ」のトハと、「ヲハエツ キネホン」の八字(四十^ノ字の他の八^ノ字)として、その意味を読みつけ、カタカムナの歌^ノ詞の心^ヲを感受してみた。

更に又、第四首の「ヨソヤコト」とあるのを、正直に(言葉の通りに)受けとって、この歌詞を、「四^ノ字ずつの十^ノ組と八^ノ字」に分けて、則ち、「ヒフミヨ」「イマワリ」「テメクル」「ムナヤコ」「トアウノ」「スヘシレ」「カタチサ」「キノラニ」「モロケセ」「ユエヌオ」の十^ノ組と、「ヲハエツ キネホン」の八^ノ字とに区切って、その意味を感受してみた。

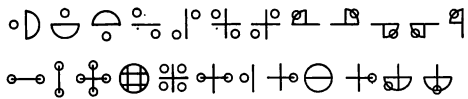

その結果、橋崎皐月の直観の通り、「五・七調」の解説が、カタカムナ人の言わんとしたホントウの意味であったに違いないが、「イハ トハ」で読んで、も、「ヨソヤコト」で読んで、も、カタカムナのサトリの意味の通じること^ニに驚嘆した。

それは、カタカムナ人の発見した四十^ノ八の^{コトバ}が、宇宙に発生したあらゆる生命体(現象)のあらゆる存在の状態を、マ^{ヒヒキ}ットウに抽象^{ワフツカエシ}して、アリノママに表出したものであったから、(我々の目が見たものを、電気信号に変えて伝えるように、自然現象がそのままに「コトバ化」されたものであったから、)そのコトバを、二つ・三つ・四つ・五つ・七つ、とつないだ単語も亦、おのずから、天然宇宙のあらゆる現象の存在の物理(マノスベ)を、マトモに示す意味になる筈である。その為^ニに、どのように読んで、も、意味が通じるわけである。

✠ 第五首


中心は  ヤタノカカミ図象

✠ 第六首

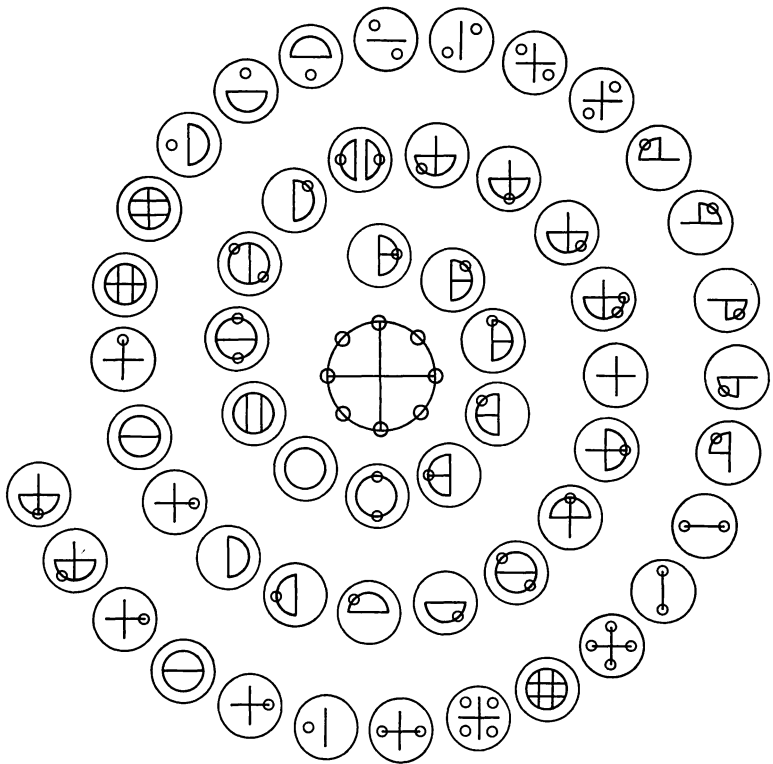

中心は  ヤタノカカミ図象

- * 檜崎臯月解説 ヒフミヨイ マワリテメクル ムナヤコト アウノスヘシ
レ カタチサキ
ソラニモロケセ ユエヌオヲ ハエツキネホン カタカムナ

- * 概要 ヒからフになりミとなり、ヨ イと、マワリテメ
グル、ムナヤの コトは、アウノスベによって、カタチサ
キされたものである。

そのカタチサキ（カからタしたチサキもの）は、ソ
ラニ、モしてロしてケしてセして、ユエヌオでヲ
して発生し、様々にハエ（枝分れ）して発展して個々のツ
（現象物）となるが、そのキネのホンは、カタカムナで
あることを、よく、知りましょう。（第三号53～60頁 参照）

- * 解説 この歌詞を、檜崎臯月は、上記の如く、五・七調に解説し、
その意味を、私共も学んだのであるが、私共は、その他に、
第四首に、「イハ トハニ」とあるのを、正直に（子供のような
気持で）、言葉通りに解釈して、この歌詞を、「五字ずつの
正反」と、「十字ずつの正反」に分けて、則ち、「ヒフミヨ



のがあるものの、やはり、西欧語研究のアタマを出ず、「WA と GA」の指摘はまだしも根元的な特色であるが、「係り結び」の程度のとらえ方が、『驚くべき創見』『新しい規範』などと高く評価されるのは、いかに、今日まで、マトモな日本語研究が無かったか、という証しであろう。(日本語文法 中村真一郎 1993・3・23 毎日新聞, 大江健三郎 1993・2・23 朝日新聞)

その程度の『創見』で、日本語の特色を一つ二つ見つけてみても、決して、日本語の文法が、わかったわけでは無い。

しかし、「は」と「が」の違いや、「係り結び」の特色に気がついたなら、その線突きつめてゆけば、(日本語で育った日本人なら、)カタカムナの思想^{サトリ}につなが^{とどろ}くことは、出来る筈である。

* 要するに、日本語の文法がわかる為には、日本語の起源がわからなければならない。そして日本語の起源は、カタカムナのサトリを知らなければ、わかりようが無い。

そして、カタカムナのサトリをわかるには、カタカムナ人と同等の抽象力^{オジナヒ}(ヒビキ量)を鍛え持たなければ不可能である。

なぜなら日本語は、西欧語のような、人間の脳次元で人工的に造られたものではなく、自然現象の根本原理(マノスベシ)を覚った人間によって、自然現象(ヒビキ)として造られたものであるから、自然現象の根本原理、則ち「カタカムナ」のサトリがわからなければ、日本語の文法を、本当にわかることは出来ないのである。

象度の高い言語 であると言えるのではないか？

とにかく、日本語は、(日本語といっても古文・現代語・話し言葉・書き言葉等、いろいろあるが、) 単語の成り立ちや、文法的な構造^{ナリカタ}については、彼らの文法の観念では、到底、説明のできぬものがある。

日本語の特色の一つである「敬語」も、ただの「ていねい語」では、決して無かった。(生命の畏れを知った人間の文化^{コトバ})

その他、日本語には、他言語に直訳できぬ(しても意味は通じない)コトバが多くあること等、日本語の謎(日本のX)を解明し、その根拠を究明した学者は、まだ無い。

* およそ、「コトバ」というものは、その民族の発祥以来の、ものの考え方の意識構造(抽象能力の高さ)を示すものである。

英独仏伊等の西欧語の起源が、ギリシャ・ローマ・インド等の古代人の思考の形態(文化)によって、作られたように、日本語は、日本民族の発祥の上古代人の思想(カタカムナ文明)によって造られたものであった。

* 要するに、日本語の文法を研究するには、西欧語の研究^{ブツゴ}の脳では、不可能である。

現在まで、日本語学者の研究には、正鵠を得たものが殆んど無きにひとしい有様であったのは、今日まで、日本民族の発祥の歴史が匿されていた 為に、日本語を使いながら、その日本語の起源を、知らなかったからである。

日本語は、他民族の言語のように、自然発生に任せて発達したものではなく、カタカムナの上古代期に、人間のあるべきスガタを人々に教える為に、独自のコトバと図象符が造られ、それが現日本語の起源となり、後に、他民族の言語(漢語や漢字)が大量に入ってきて、その使用を強制されても、カタカムナ以来の日本語の思念と構造は、変ることなく 伝えられてきた、という事実が、知らされなかった からである。(日本民族の起源 十号4~頁、日本のカミ 前号 補遺4 312~頁、日本語の特色 同319~325頁)

その意味で、アグノエル氏や大野氏の説は、目のつけどころは確かに鋭いも

に、気付いたものである。

『私が行きます』『あなたは行かなくてよい』『雨は降らない』『雪が降った』『私が悪いのです』『あなたに罪はない』等という、「は」と「が」の区別は、日本人には何でもないことで、誰でも、アタリマエに使い分けているのだが、西欧人には難しく、よほど日本語に馴れた人でも、しばしばマ違える。中国人は、「は」も「が」も抜きで、(日本人でも幼児の言うように,)『私、好き』』『雨、ふりました』式にやっている。(「日本のx」)

又、最近の 大野晋 氏の「係り結びの研究」(「ハ」「モ」「コソ」「ゾ」「ナム」「ヤ」「カ」等)の説も、やはり、^{アタリマエ}西欧の文化の観念で(日本語の根源を知らずに)考えて、西欧語には無い、日本語の特性をとらえたものである。

* 先に述べたように、日本人でも幼児は、『私 食ベル』『僕 嫌い』式に、主語と動詞又は形容詞をつなげている、というのは、幼児の脳がまだ未発達、(ということは 抽象力が低い、)ということである。

しかし日本人は成長するにつれて、「主語と動詞又は形容詞」という話し方は直され、^{アタリマエ}動詞を後にまわす日本語の話し方を、習得するのである。

因みに、おそらくどの民族も、言語の成立の初期には、日本の子供と同様の状態があったと思われる。

そして、脳が^{カルテベート}開発されるにつれ、その「主語と動詞、又は形容詞」という自然発生的な骨組の上に、それぞれの民族の言語が発達し、やがて、文字が必要となり、現在のフランス語・英語・ドイツ語、又は中国語等に整備されて行ったに違いない。(それ故、言語は、その民族の文化の度を示す、といえるのである。)

しかし、又、よく考えてみると、彼らの言語は、確かに高度に発達したものに違いないが、本質の構造的にみれば、自然発生的な言語の成立の初期のまま(幼児の脳が未発達で、抽象力の低かった頃の状態と、同じ形式)であり、発達したのは、その量がふえ、複雑になっただけである。

それにひきかえ、日本語の、動詞を後におく形式(文法)は、本質的に、抽

大きく言えば、^{イノチ}生命力とは^{ヒヒキ}抽象力である。身体の胃腸肺腎肝等の機能も、^キ脳の精神作用も、あらゆる生命活動は、皆、抽象作用（^ヒ抽いてきて^キマトメて出す）である、といえるのである。（十号 抽象文字 12~16頁、抽象とは 58~頁）

世界のどの民族も、自然発生的に、民族の言語をもっていたのは、人類の脳のもつ抽象力（^ヒ抽いてきて^キマトメて出す能力）のおかげであり、カタカムナ人の脳は、人類のもちうる最高度の抽象力を以て、天然自然のあらゆる現象事象の^{スガタ}状態（イハトハニ カミナリテ）を、^{ヨソヤ}四十八のコトバに^{ホグン}移し変えて、我々に伝達してくれていたのである。

現象のあらゆる^{スガタ・カタチ}状態を、^{ウツシカエ}電気信号に変換するの、それを^{ウツシカエ}コトバに変換するのも、いずれも、自然現象（の、エネルギーの変換の如き）と同じ、^{スガタ}カムアマの変遷（^{ヒヒキ}マノスベ）の^{ハツラク}仕事なのである。（筆者が、「感受した状態をコトバにウツス」とか「コトバ化」などといって来たのは、この意味であった。）

* 現在の文明国のフランス語・イタリア語・英語・ドイツ語等の起源のギリシャ語・ラテン語・梵語、又は中国の漢字の起源等については、よく研究され、文法も整備されているが、日本語の起源については、まだ全くわかっていない。

明治開国以後、日本語の文法が作られたが、それは、^{アガマ}西欧文化の観念で、主として英文法をムリに押しつけ、俄か仕込みで恰好をつけたまでのものであったから、不合理な点が多く、日本人自身にも納得できぬものであった。

それ故、西欧人からみれば、日本語は、合理性の無い、前近代性の、（ということは、未分化・未完成の）ものにつづるのも、やむを得まい。

しかし最近では、外国人のみならず、日本人（西欧的教養を身につけた知識人）の中にも、日本語は未分化な（原始的後進性の）もののように劣等感をもつ者が、今後、国際的に通用しうる日本語に整備しなければならぬという意識が、強くなっている。（前号 感受性について 補遺4 319頁）

* そうした状況の中で、フランス人の日本語学者 ^{アグノエル}氏の「WA と GA の研究」という大著は、彼らの^{アガマ}西欧文化の観念では理解できぬ、日本語の特性

潜象のカム アマ始元量が、現象の万物万象の生命に^{ウツシカニ}変遷し、その現象の様々な状態が、コトバに^{ウツシカニ}表明される、という、この「ウツシカニ」という^{ヘッ}仕事は、どうして起きたのであろうか？

* そもそも、筆者は、我々の^{〇〇}感覚器官（目や耳や鼻や舌や触覚）や、内臓（胃や腸など）の内部感覚が、電気信号で脳に運ばれて「感受」されるということが、フシギでならなかった。

例えば、目に見たもの、耳が聞いたこと、舌が味ったこと等が、電気信号として脳に送られ、脳は直ちにその信号を^{ウツル}解読して、それが何であるかを判断し、『これは花だ』とか『おいしそうなお寿し』などと認識し、『美しいなあ』とか『早く食べたい』などという感情や指令を出す。又は、胃や腸などの内臓の状態の変化も、刻々に、電気信号に変えられて脳に送られ、脳は即座に（光速度で）その信号を解読し、『ムカムカする』『シクシク痛む』『キリキリ刺しこむ』等と、感じたことを表現（コトバ化）する。

どうして、モノの状態が、^{〇〇}電気信号になるのか？

そもそも、人体が電気を伝える、ということが、フシギだった。

そもそも電気とは何なのか？ 全くわからなかったのである。

カタカムナに出合い、ああ そうか？ と、はじめて納得できた。

なぜなら、我々の生命体（目も耳も……胃も腸も…骨も血も髪も、^{〇〇}すべての細胞）の本質は、カム アマ始元量から発生した極微粒子（イカツとよぶ電気粒子の正反）の変遷物であるから、その状態は、それなりの（様々な振動数の）電気信号にうつして（変えて）、送ることが可能な筈である。

脳も、もとより電気粒子の変遷物であり、電気信号を解読する能力をもっている。

殊に、人類の脳は、その能力が著しく進化し、感受したモノを、^{ヒビキ}同等の振動数をもつ^{コトバ} 声音に移して表明し、^{ウツシカニ} 伝達することが出来る。

思えば、四十八の^{コトバ} 声音も、カムアマ始元量の変遷物、（ヒからヒキされた^{ヒビキ} ウツシカエ）だったのである。

人類の進化した脳に発生した能力とは、ヒからヒキする^{ヒビキ} 抽象力である。

しかし、又、それだからこそ、その条件さえかなえば、（ということは、スナホに、カタカムナのコトバに共振する波動量を持ちさえすれば、）我々現代人でも、日本人でなくても、又、学問智識の学歴などなくても、誰でも、その意味をわかることは出来るものである。

* ここで、カタカムナ文献の造られた当時の事情を、読者も、よく考えてみて頂きたい。

我々後代人が、既に、子供の時から教えられて持っている言語を使って、自分たちの意見や、発見したことを表明するのは、全く違って、彼らの上古代期には、まだ、現在のような言語は無く、どの民族でも、日常生活に必要な、簡単な用語しかもっていなかったに違いない。

そのような時代に、カタカムナの上古人は、天然宇宙の万物万象の生成・発展・消滅の、あらゆる状態（スガタ・カタチのナリタチの物理）を直観し、それを表明するコトバを作り、それを示す図象文字を開発していたのである。榎崎皐月のカタカムナ文献の解読によって、はじめて、このことが、判明したのである。

* カタカムナ人が、どうして、上古代に、（世界の他民族の言語の成立よりもはるかに古い時代に、）現在の日本語の原型を造ることが出来たのか？

それは、その当時の上古代期に、日本列島に住んでいたカタカムナ人の脳が、人類の智能の発達度としては、既に進化の頂点に達し、我々現人類の脳と同等の状態であったに違いないからである。

それは、カタカムナ人と限らず、当時の世界のどの民族の智能も同様の状態であったと思われるのであるが、カタカムナ人は、その脳を最高度まで發揮して、天然宇宙のあらゆる現象事象の本質と成り立ちの物理を知った（直観した）のである。しかし、彼らはまだ、それを表明する言語をもっていなかった。

そこで、彼らは、自然発生的に使っていた自分たちの日常生活の言語を整理し、四十八の日本語の原型を作ったのであるが、どうして彼らの脳は、そのような「コトバ化」というシゴトが、出来たのであろうか？

タを示します』という歌詞が、日本語の四十八のコトバの成立をコトホグ（言祝）という、「祝ヒの言葉」（祝詞）の意味に、おのずから（自由に）変換されて通用するとは、まことに日本語の妙である。

（後代に、「言霊」の思想が出たのも、このような日本語の妙の故であろうと思われる。）

現在の我々の使う「なります」「なりまして」という言葉も、このコトバの造られた時の思念は、「カミナリテ」という意味であった。則ち、すべて物事が「成ります」のは、カタカムナのカタワリのおかげである、というサトリから出来たコトバだったのである。（この感受を失った後代人は、「神成りて」という観念（神秘思想）で解釈してしまったのである。）

今、このコトバ（ウタヒ）を読む我々も、このウタの心にのっとり、何をするにも、自由にホグして、（生命のカミの、カムウツシ・アマウツシの授かりを受けられるような判断行為を）すれば、よいのである。

* 第二首で、現象の（宇宙の万物万象の）起源は、潜象のカタカムナのカミである、という宇宙の根本原理を示し、第三首で、現象の生命体（フトタミノミ ミコト）は、フトマニ（正反互換・対向・重合発生）によって、現象界に生存を保つという生命の基本物理を示し、第四首以下は、その生命のあり方（マノスベ）を、示すことになる。

* 日本語は、カタカムナの上古代以来、今日まで連綿と使い続けられて来た。それ故、カタカムナ人の造った図象文字を、榎崎臯月が解読し、その意味を諒解することが出来た。

しかし、それには、日本人であるというだけでは無く、大きな条件があった。『カタカムナ文献の解読は、世界の古代文字（エジプト文字やアソカリピーや殷墟文字等）の解読とは異なる』というのは、榎崎臯月のように、カタカムナ文献を造ったカタカムナ人（の脳の波動量）と、共振波動をもつものでなければ、（たとえ読み方だけは教えられたとしても、）その意味を、諒解することは出来ない、という、大きな条件が必要だからである。

* モノが 発生するには (イハ トハニ), 「カミナリテ」, 則ち, 「ホグシ」がなければならぬ。

相似象でいえば, ものをまとめるには (マトマリ), ホグ しなければならぬ。ものを理解 するにも, 理 を以て ホグ しなければならぬ。

因みに 日本語の「自由」の思念は, 「ク」(自然^{フツナリ}サ)であって, 他国語の, 「権力や奴隷などの束縛状態からの解放」の意味では無い。(第五首「ク」の思念 159~162頁)

日本人の 自由の思想の根拠 は, カタカムナ人の「ホグ」にあった。則ち自由(ク)は, ホ(カム アマの親和^{カカワリ})によって得られる, というカタカムナのサトリである。

なぜなら, あらゆる生命の発生にも, あらゆる生命活動にも, 「ホ」則ちカムのチカラの^{カカワリ}カカワリ(カミナリテ)が無ければ, 何ごとも始まらぬものであるという潜象物理を, カタカムナ人は開発していたからである。人間の真の自由には, 根拠 がなければならぬ。

西欧人は, 現象の人間関係の自由しか考えられないが, 日本人の自由の思想は, あらゆる現象を発現する根元^{キソ}の, 人間の生命^{イノチ}そのものの自由 を, 最高の自由(サチ)と考えた, カタカムナ人の「ホグ」の思念に基いている。

それ故, このような イノチ の カミ の ナリ (カミナリテ) を示すカタカムナの「ホクシウタ」が, 「言祝^{コトノハ}ぐ」(寿ぐ)という思念^{イノチ}を持ち, 「イハ」というコトバが, 「祝^{イハ}ヒ」「白^{イハク}ク」の思念^{イノチ}を持つわけである。

何をするにも, カミナリテ (カムナのチカラがカムウツシ・アマウツシとナリ) 重合^{アウノスベ}してくれるような, 自由^{フツナリ}な (自然サの多い) 生き方の出来ることが, 人間のあるべきスガタ (マノスベ) であり, 最高の幸 (コトホグシ) なのだという, カタカムナ人のサトリの表明 (ウタ) である。

* 要するに, 『イハ トハ のあらゆる現象^{イノチ}は, カム の ミ の ナリ (カタカムナの重合^{アウノスベ}) によって発現する。その様相の, 四十八の コト の ホグ シ ウ

「ホ」とは、正反親和の思念であるが、ヨソヤのコトをホグするとは、どうい
うことか？

* 「イハ」が「トハ」によって定着されるには、「カミナリテ」がなければなら
ぬ。「カミナリテ」とは、カミ（カとミ）、則ち「カタカムナ」のナリ（カム
のチカラの重合、則ちカムウツシ・アマウツシ）が親和すること（カミのお成
り）である。

「カミ」とは、カとミ、則ち、重合する「カ」と、重合される「ミ」であり、
重合する「カ」とは「カタカムナ」のカムミ、重合される「ミ」とは現象の
「アマナ」の「ミ」である。（このことは第七首に「アマノミナカヌシ」として
示されている。）

イハ（イカツのサヌキ・アワ）が、トハ（重合する「カ」のカムウツシ・ア
マウツシ）によって定着されるには、カミのカカワリ（カタカムナの親和）がな
ければならぬ。

その状態を四十八の コトバに ホグシ た、ウタ にした、というわけである。

要するに、「ヤタノカカミ」と「フトマニ」の、カム アマの対向発生によ
って（イハトハニ）、宇宙の万物万象の生命が発現する、そのあらゆる状態を、
四十八の コトホグシウタ にした、というのである。

現代科学は、現象の生命体については、ナノの単位まで研究が進んでいる。
しかし、生命発生の潜象物理はまだ無い。（あるのは、「宇宙生命」「宇宙エネルギー」
「永遠の生命」「靈魂」の類の、理学的根拠の無い 観念的な神秘思想 であ
る。最近では、学術書にも「神秘」という言葉が使われている。）

カタカムナ人は、四十八のコトバによって、生命の潜象物理を示している。
しかしそれは、科学用語に当てはまるものではない。（科学には用語が無いから、
私共は、原語のままを使うしかないのである。）

読者は、科学の用語だけが真理だという先入見を払拭して、カタカムナ人の
つくった上古代日本語の思念を、どうかマットウに 感受 して頂きたい。

カカワリ がなければならぬ（ヤタノカカミ），という彼らの発見した潜象物理を，「ト」「フト」「ミコト」「カミ」「ナリテ」，又は「ノ」「ウツシ」「ヒヒキ」等と言いかえ，後出の「アウノスベ」「ミナカヌシ」等というコトバに示して，教えているのである。

そして，その発生の様々な状態は，それぞれ，他をヨソとして（自由に存在して），ヤまでのヒヒキ（波動量）がある。

「そのヒヒキを，分類し，ヨソヤ（四十八）の数のコトとした。そのコトワリを，次のウタで示す」というのである。

「ヨソヤ」とは，現日本語の「四十八」と，スナホに読める。

なぜなら，四十路・五十路・三十一文字等の如く，「十」をソとよむからであるが，十をソとよむのは，「十個を一束にしておく」という気持であろう。ヨソヤとは，四個の「ソ」，則ち，「十個を一マトメにしたもの」が「四個」と，その上に「八個」とで，「四十八個」ということになる。

則ち，カタカムナ人は，宇宙の万物万象の，大へんな多様性を示す，あらゆるスガタ・カタチを，抽象して，「四十八のコトにホグシた，」というのである。

「コト」とは，くりかえし重合されること，又，くりかえし重合されたモノ，という思念で，ここでは「コトのハ」，則ち四十八の「コトバ」である。

「コトバ」といっても，我々現代人の「言葉」の概念では無い。カタカムナの上古代期には，我々の持っているような言葉は，まだ無かったのである。

彼らは，自分たちの感受に基く直観によって開発した，宇宙の万物万象の生命の発生の物理を，表明する為に，四十八のコトをつくり，次のウタに示します，といっているのである。

* 「ホグシ」とは，「親和によって（ホ）自由に（ク）示される（シ）」という思念である。

「ホグシ」といえば，現代語では，解く，分解してほぐす，という意しかないが，上古代語の「ホグ」とは「親和して自由になる」という思念である。

自由（ク）になるには「ホ」がなければならぬ。

「イ」は、現象物の最小単位の粒子で、「イカツ」(電気粒子)に当り、右旋・左旋(サヌキ・アワ)の正反があるから、イハである。

又、現象物の発生の物理(順序)を示す「ヒフミヨイ」(第五首)の「イ」では、おのずから五(イツツ)という、数を示すことにもなる。則ち、その五(イツツ)の数とは、三素量(イカツミ・マクミ・カラミ)と、トキ・トコロの五(イ)である。(生命体構成の最小単位)

* その「イ」が、おびたしい数の発生「ムナヤコト」をくりかえして、原子・分子・細胞となり、生命体を構成し、様々に変遷してゆくことを「イ」の「ノ」の「チ」則ち「イノチ」(命)という。そしてそれは、「フトマニ」としてニされたモノである。

そして「イ」の存在する、最小の時間が「イマ」(今)である。

それ故「イノチ」は、おびたしい数の、「イマ」「イマ」に発生する「イマタチ」のものであり、その発生の持続されることが「イノチ」なのである。

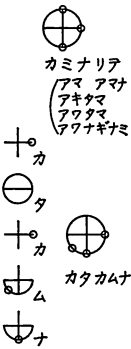
そして、そのように、イがノして「イノチ」になるのは、「カタカムナ」のト(重合)によるのであり、「ト」とは「フトタマ」のト、「フトマニ」のト、である。

「イハ」とは、イの正反、則ちイカツの「サヌキ・アワ」の「ミ」であり、「トハ」とは、重合する「カ」の「正反」(カムウツシ・アマウツシの「カ」のチカラ)であり、その「カ」と「ミ」の重合によって、生命が発生し、持続されている、則ち、「カミナリテ」ということになるわけである。

* なお、「イハ トハ」の解釈については、「イハ」は「イ」(現象の最小物質イカツ)の正反、とするのは同じだが、「トハ」は、「ト」(統合されたもの)の正反、とすることも考えられる。

則ち「ト」の基底思念は、潜象の重合、(カムウツシ・アマウツシのフト)であり、「ト」には、そのフトによって「統合されたもの」という意味もあるからである。

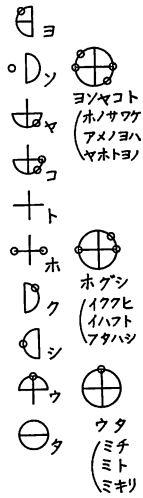
要するに、生命が発生し、その生命が持続(イノチ)される為には、カムの



カタカムナ人の宣言である。

ヨソヤコト とは、四十八のコトバ、則ち、現日本語の四十八は、カタカムナ人が、カタカムナのサトリによって、造ったものである、というのである。

「ウタ」とは「ウからタする」、則ち、潜象状態から、発生して外へ、生み出す、という思念から、「歌」の意になった。コトバにならずにウヅキ、ウメク状態でウツウツしていた胸の中の思いを、ヤッと、ウタに出す、というのが、「歌」というコトバの本来の意味であった。



* イハとは、イのハ（正・反）をいうが、イとは、「カタカムナウタヒ」に於て、はじめて出た声音である。

しかし第三首に、「フトタマノ ミ ミコト フトマニ ニ」といわれているように、フトによってミとしてミコトされる、則ち、生命の^{イコト}実質を得て、マに定着しうるレベルに達し、更に、定着が確かなものになって現象物として発生する。その最初の、最小の、ハジマリ^イのものを、「イ」と名づけたのである。

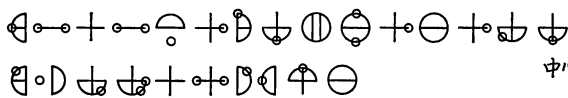
「イ」は、あらゆる生命体を構成する最小単位の粒子である。第四首の「イ」は、第三首の「ミ ミコト」のイミを、受けついでいるわけである。

* 「イ」がマ（現象界）に発生した最初の状態が「イマ」であり、イマは最小の時間である。そしてこの「イ」の状態が持続的に存在していることを「イチ」（位置）といい、科学で「位置エネルギー」という時の実質は、この「イ」の「チ」なのである。

それ故、「イ」は、最小の位置、則ち「トコロ」であり、同時に、最小の「トキ」である。

科学でいう「時間・空間」「場・位置エネルギー」の本質は、「トキ・トコロ」であり、「時空の元」の原点は「イ」である。（第八・九首）

✠ 第四首

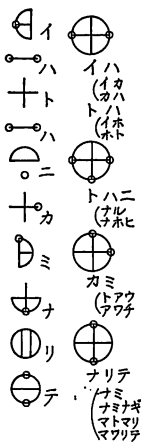


中心は ヤタノカカミ図象

* 稲崎臯月解説 イハトハニ カミナリテ カタカムナ ヨソヤ コト ホグシ
シ ウタ

* 概要
極微の粒子が重合されて、あらゆる現象が発現するのは、カタカムナの カミ によってナリナス のである。その、あらゆるスガタ カタチを、四十八の コトバ にホグシ たウタ を示します。

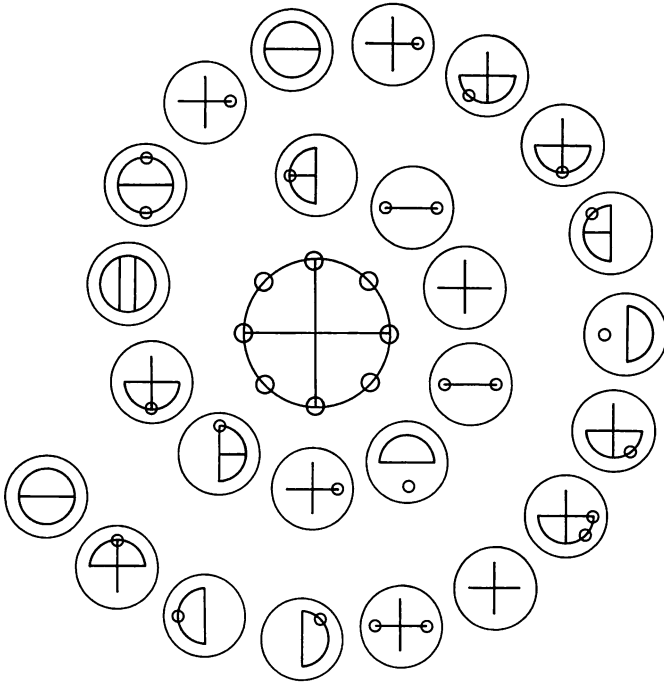
* 解説
イハ（生命体を構成する最小単位の極微粒子の正反）が、トハ（重合するモノの正反）によって、ニ（定着）されるのは、カミ（ヤタノカカミの力と、フトタマノミのミ）がナリテ（夥しい数の対向発生によってヒタリ・ミキリの正反の現象として）成立つのである。



それは、カタカムナが、その力とミの根源であるからであり、そのヒから発生するヒビキのしかたによって、宇宙のあらゆる万物万象が発現する。

その様々な現象の状態（あらゆる生命体のあらゆる状態）を、四十八の コト にホグシ（分類）して、人間の声音に示し、声音符にうつして示すのが、次のウタであります。

要するに、四十八の日本語の成立の根源は「カタカムナ」であること、則ち、カタカムナのサトリ（カムアマ始元量の発現の物理）によって、四十八の日本語がホグシされて成立した、という、



刻々の、その時の自分自身の感受性（アワの心）を起励して（カムウツシをよんで）、マノスベに照して、生きることである。

感受性が劣化し（アワの心を忘れ）、人のコトバや出来ごとを、もっぱら脳のサヌキ（先入見や感情や欲望）で受けて出すしかない現代人の生き方は、脳の進化した人類の陥る過ち（脳の落し穴）であったことに気づき、カタカムナのサヌキ・アワの（生命の）物理を、本気で理解し（受けいれて）、日常生活の何をするにも、何を考えるにも、アワの心（感受性）を励発して（カムウツシをよんで）、よいサヌキ（マノスベの判断行為）を出すようにつとめる、という生き方を、読者も、正直に、続けて行かれたなら、必ずや、カタカムナ人の「ヤタノカ」といい、「フトマニ」といった、カム・アマのカカワリ（カムウツシ・アマウツシ）を、実感として感受されるに違いない。

その実感こそ、カタカムナが本当にわかった証拠であり、それは、今までの、カム・アマのサトリを知らずに生きた人間には、知る由もなかった、真実の生命のよろこびの実感であり、マノスベに生きる自然の生物に恵まれる天与の幸を、脳の進化した人間も享受しうる、真実の救いに他ならないのである。

それ故に又、鍛えれば、誰でも、(子供や若者はもとより、老人でも、病弱者でも、頭のよくない者でも、昔の人も、現代人も、誰であっても、マトモに鍛えれば、)正直に、向上するものである。

筆者ほどに、生命カンを失い(感受性が悪くなり、アタマでっかちで)、脳の落し穴にはまりこんで、悩み苦しみ病んでいた者でも、しかも、七十歳を過ぎただけの女であっても、一たび、サヌキ・アワのサトリを知って、日々刻々、何をするにも、何を考えるにも、アワを鍛えて(ヒラメキを入れて)生きることにつとめていたら、自分の生命が、サヌキ・アワのフトのカカワリ(カムウツシ・アマウツシ)によって生かされている実状が、実感として感じられ、一つ一つに、『ああ 生命活動をしているな』という実感があって、自分が、何となく、自然の動物になったような、おだやかな、イキイキとした、生命のよろこびの実感(マイナスエントロピーの恍惚感)が、感受できるようになって来た。

それこそ、脳の進化した人間が、病気や争いや悩みを免れて、健康的な心身を恵まれる、真実の救いであり、カタカムナを本当にわかる、ということであると思われ、生きるとは、感受性を鍛えることだと、つくづく実感しているのである。

読者も、今、「ヤタノカカミ」や「フトマニ」の解説を読まれただけでは、^{アタマ}脳で理解されるしかないであろうが、どうか、(観念の理解だけで満足せず、)日々刻々、自分のアワ(感受性)を鍛える生き方をつづけ、カタカムナ人の教えてくれた「ヤタノカ」の「フト」の真実を、感受によって、本当に、わかって頂きたい。

* 感受性を鍛えるといっても、何も、難行苦行ではない。

アワの心を忘れ(感受性が悪く)、サヌキ(欲望や感情の高まり)のチカラだけで、人のコトバや出来ごとを、受けて出すしかなかった、今までの自分の状態を、そのままにさせず、パッとヒラメキを入れて、アワの心を起励してやるのである。

ヒラメキを入れる、というのは、アタマで考えるのではない。実際の、日々

感受性も、思念も、生命のチカラである。

「思念を入れる」ということは、生命のチカラを、起励すること（カムウツシをよぶこと）になるのである。（犬や猫でもどこか悪いところがあると、そこに思念を入れて、ものも食わずに、じっとうずくまっているものである。）

* 我々にとって何よりも大事なモノ、ソレを感受することによって生かされているモノ、その、最もアリガタイモノを、我々のミは、感受していながら、我々の脳は、それを認識に出すことは出来なかった、そのモノを、カタカムナ人の脳は、コトバに出して、示してくれていたのである。

ソレこそ、我々が、「生命」とよんで、求めていたモノの真実なのであった。

榎崎皐月のカタカムナ文献の解説によって、はじめて、このことが明らかになったのであるが、しかし、今、いかにソレを、現代人にわかる言葉にして公表しても、その真意を、現代人に、正しく伝えることは、あまりにも難しい、ということ、思いしらされているのである。

「カタカムナ」が、いかに真実のサトリであることが明らかになっても、もはや、我々はカタカムナ人のように、生れてくる子供はもとより、すべての人々に、このサトリの真実を感受させ、人間として生きる幸を享受させることは不可能である。

辛うじて、縁あって会誌を読まれ、カタカムナをわかりたい、と思って下さる読者だけを頼りに、筆者の知り得た限りのことを書いておくまでである。

* 現代人は感受性が劣化し、サヌキのチカラしか知らない、といっても、しかし、生きている以上、感受性（アワ性）の無い者は無い。（どんなサヌキも、アワから出るものである。）

又、我々現代人も、上古代人も、人類の種として生れた以上、同等の潜在能力を持っている筈である。

しかし、アワ性は潜在能力であるから、持っても、鍛えなければ発揮しない。つねに鍛えていなければ退化する。

懸命勉強したつもりでいたが、実は、カタカムナ人のような感受が無かった、
ということは、まだ、本当に、「ミが入って」は、いなかったのだ、というこ
とに、ハッキリと気がついたのである。

* 「思念を入れる」ということは、(思考することでは無く,)「ミを入れる」
ことである。

「ミを入れる」とは、自分の感受した情報を、脳が、シッカリと感受すること
であり、それに基いて、脳に、マトウな判断行為を出させることである。

それ故、カタカムナの勉強は(カタカムナをわかるには)、何よりも、自分
の感受性を鍛える(ミを入れる)ことであるということに、ハッキリと、気が
ついたのである。

「カタカムナ」を「難しい」といい、「カタカムナ」をわかろうとする人が極
めて少いのは、現代人の感受性が劣化し、「カタカムナ」に出合っても、マ
トモに感受することが出来なくなったからに違いない。

自分で、「難しい」とか「わからない」と感じる者は、まだよいので、(感じ
るからこそ、何とかしてわかろうと、努力することが出来るからであるが、)
大ていは、自分の わからないことに気がつかず、わからなくても気にならず、過
ぎてしまう者が多いのである。

* しかし、本来は、現代人も動物である以上、五感の(目耳鼻舌肌、及び内
臓や全身の)感受した情報を、脳が、感受する生命力(感受性)の無い者は無い
のだが、それは無意識になされるから、よほどその情報が異常でなければ、
(例えば胃がムカムカするとか、腸がシクシク痛むとかしなければ、)気分
(^{オキヒ}思念)に出ることは無い。

ということは、胃がムカムカする状態の時は、ひとりでに、^{オキヒ}思念が、胃の方
に行っている。腸がシクシク痛む状態の時は、しらぬマに、^{オキヒ}思念が、腸の方
に行き、手をあてたり、さすったりしている。

「思念を入れる」ということを知らぬ人でも、生命が必要とする時には、ひとりでに、
思念が入っているものである。

要するに、カタカムナ人の脳がカタカムナの思想^{キソウ}を出したのは、カタカムナ人の感受性が、ソレを感受したからである。我々には、その感受性が無かった、ということである。

ソレとは……、我々は皆、立ったり、歩いたり、食べたり、アクビをしたり、子供を産んで育てたり、米や野菜をつくったりして生きているが、その際に、感受しているモノがある（というより、ソレを感受することによって、生かされているモノがある）ということである。（ヤタノカ フトマニ、互換重合 対向発生の「カ」）

その、我々が皆、感受して生かされているモノを、カタカムナ人の脳は、判断^{トウ}に出して知っていたのである。

我々も、彼らと同じように、ソレを感受して生きているのだが、我々の脳は、他のことに（脳のもつ感情や欲望の方に）気をとられて、自分の感受性が感受しているモノに気がつかぬまま、生きてきたのであった。

その為に、突然、カタカムナの潜象物理を教えられても、理解できるわけが無かったのである。

* 「ミを入れる」とか「ミを以て」という日本語があるから、筆者も、世には、「ミを入れない」人はあるにしても、「ミを入れる」ということを知らぬ人は無いと思っていた。

又、会誌では感受性の鍛練として、「思念を入れる」ということを、しばしば言って来た。

又、カタカムナの「ミ」と「イ」の意味の違いが、わからない人があることは以前から気付いていたが、相似象会誌を読むほどの人は、「思念を入れる」といえば、わかるものと思っていた。

ところが、長年、読者から質問をうけてきて、『思念を入れるとはどうするのですか?』といわれ、「ミ」と「イ」の意味がわからない人は、「思念を入れる」こと、則ち感受性を鍛えることは、出来ないのだということに、ハッキリと気付かされたのである。

そして、「ミを入れる」という言葉は知っていても、（「思念を入れる」ということも知っているつもりであっても、）筆者自身、カタカムナの潜象物理^{ソトゾウ}を一生

チカラを知った、フトのサトリであることである。

したがって、カタカムナの勉強は、今までのように、^{タマ}アタマでわかり、観念的に満足する状態では、本当にわかったことにはならない。

本当にわかるということは、「アワ」がわかることである。

「アワ」とは、カムからうつされた自分の生命の力そのものであり、要するに「感受性」といっているもののチカラである。

「ミを入れて」とか「思念を入れて」「心をこめて」「ヒラメキを入れて」等というのは、アワのチカラを起励して、ということである。

「サヌキ」(判断行為のチカラ)は、その、アワ量なりのレベルで出るものである。

どんなに優れた才能のある者でも、病気や精神的ストレスで、生命力が落ちると、才能を発揮する(よいサヌキを出す)ことが出来ない。

又、もし身体のどこか、たとえば胃腸が悪くなると、胃腸の生命力が低下するだけでなく、全身の生命力が衰弱する。

しかし又、アクビや伸びをしたり、歩いたり、マワリテメグルをしたりして、そこに発生した「カ」(イノチ)は、その部分だけではなく全身のアマナに受けるので、^{アハハキ}ただちに、全身に元気が出るわけである。

* 筆者はカタカムナに出会い、はじめて、楯崎皐月からカタカムナの^{サトリ}潜象物理を教えられた時、それは、今までの自分たちの学修した智識・思想とは、全くケタ違いのもので、トテモ、自分たちの脳では理解できない。人間の脳に、こんな発想(考へ方)があったとは、^{アツク}呆氣にとられる思いであった。

しかし、これこそ真実のサトリに違いない、という、強い予感があった。

それ故、何としてもわかりたい。どうすればわかるか? と必死になってとりくんだ。

そして、二十年、カタカムナのサトリは、カタカムナ人の感受に基いて、脳が判断(直観)したものであることを、筆者自身の感受に基いて、わかることが出来たのである。

そうすることによって、もしこのことを知らなければ今まで通りに、何を
するにも、何を言うにも、何を考えるにも、^{***}脳^{***}の感情や欲望のままに、コトバや
行動を出してしまうところを（人間の脳^{***}の落とし穴^{***}）、そのような脳^{***}のサヌキの
出しゃばる前に、ヒラメキを入れて、（ということは、自分の感受に基いて^{***}正直^{***}
に、アワの心で、）^{***}マノスベ^{***}の判断行為^{***}を出す、という、生物^{***}の本来^{***}の生き方^{***}を、
進化した脳をもつ人間として、全うすることが出来るようになる為である。

* 今まで、我々は、自分の生命の力が、アワとサヌキのフトであることを知
らなかつたから、自分の感受性が、アワの^{***}生命力^{***}であることを知らず、アワ
（感受性のチカラ）を鍛えることを知らず、もっぱら、感情や欲望（サヌキの^{***}生命力^{***}）
を、ふりしぼるばかりであった。

しかしながら、実際の人間の場合、サヌキのチカラを本当にふりしぼって苦
しみ抜けば、（もともと、サヌキのチカラは、同じ^{***}生命力^{***}から出て、互換重合
するものであるから、）サヌキの^{***}能力^{***}を精一杯鍛えれば、（無意識のうちに、）当然、
アワのチカラも高まることになる。

釈迦やゲーテのような天才は、それを成しとげたわけであり、それを、釈迦
は、みずから「ブッダ」（目が覚めた）といっている。

ゲーテは、「ベンドング」（転換）といっている。

しかしそのような天才ならぬ凡人は、彼らほどにサヌキを鍛えぬくことは出
来ず、進化した脳^{***}の機能^{***}にふりまわされ、その為に病気や争いを起し、悩み苦
しみに陥り、救いを求めても科学や宗教しか無く（特効薬や手術、又は神仏の
信仰、社会福祉制度等の異常バランスの方法にすぎるしか無く）、真の救いは、
（アワを鍛え養う方法は、）わからなかつた。

真の救いは、自分のアワをこそ、大きく、強く、鍛え高めることであったの
に、我々は、自分の^{***}心^{***}が「アワ」（カム）のチカラであることを、知らなかつ
たのである。

* カタカムナのサトリが、今までの宗教や哲学や科学の真理といわれるものと異なるの
は、今までの、サヌキのチカラしか知らぬサヌキ的^{***}な一方的な真理^{***}では無く、アワの

になってきた。

* 今まで、我々の意識は、自分の生命の^{アワ}もサヌキも何も知らないで、勝手な生き方をしてきたものだが、まことに、我々の生命活動は、(何一つ行為するにも、何一つ思想するにも、つまり、生きているということは、) サヌキとアワの互換重合ならざるは無いのである。実際に、その場その場の、(右手・左手の^{フト}、右足・左足の^{フト}、そして呼吸のサヌキ・アワ、脳のサンカーラーのサヌキ・アワ、もろもろの内臓のサヌキ・アワ等の、) それぞれの場の^{フト}のチカラの^{波動}が、何重にも重なり合い、総合された^{共振}波動となって、新しい^{生命}の「カ」が発生され、そのおかげで、我々は、今、今、の生命を、生かされているのだ、ということが、実感として、感受できるようになってきた。(第四首 イハトハニ)

則ち、我々の^{生命体}のあらゆる細胞から発せられる、サヌキ・アワのチカラの^{対向}発生によって、一刻一刻に、アマウツシ・カムウツシされて生きている、その^{生命}賦与の^{真実}の実感である。

* そして、^{生命}の^{賦与}ということが、このような^{潜象}の^{微波}動次元の、ものすごい数の^{フト}によってなされている、ということが、本当に感受によってわかった時、それが、どんなに「アリガタイコト」であるか、という^{感動}が、フツフツと湧いて来た。

日本語の「ありがとう」は、サンキュウやメルシーのような、単なる感謝の言葉ではないことは知っていたが、外国人にとっては「あることが難しい」というだけの言葉が、我々には、「アリガタイ！」という^{心情}がこめられるというわけが、本当にわかったのである。

カタカムナ人は、この心に基いて、生活をいとなみ、子供を育て、生業にはげみ、人々と交り、生命を尊重する文化をつくりあげていたのであった。(アリカタイということ 78頁、アリガタイ・モツタイナイの思い 感受性について補遺2 24~頁)

今、私共は、何をするにもつねに、^{カム}に^{照ら}して(ヒラメキを入れて^{感受}性を^起励して)生きることを、^{感受性}の^{鍛練}として実行しているのである。

常生活でよくあることだが、しかし、今思えば、疲れた者が歩いたり働いたりすれば、もっと疲れる筈であるのに、どうして元気が出たのか？ …大きな伸びやアクビをしたら、どうして元気が出たのか？ ……

実際に経験していながら、それをフシギと思って、そのわけを考えたことは（そういう正直な脳の感受性は）なかった。

又人間は、元気だった者も年をとれば、足腰が悪くなり、頭も呆けるのに、自然の動物は、例えば、年老いた鳥が、神経痛で飛べなくなったとか、老いた桜の木から咲く花は、しわがよっていた、等ということが無いのは、どうしてか？ ……

そもそも病気や怪我が直る、という現象も、薬をのんだり手術や注射をしたりして、どうして直ることが出来るのか？ ……

又、運動やヨーガや気功、又は指圧やハリ灸、操体、整体等、様々な健康法、治療法、心理療法があるのは、要するに「アマウツシ」の利用をねらっているのだということはわかっていたが、しかし、アマウツシでどうして直るのか？ そのアマウツシは、どういう状態でなされるのか？ その実際の感受はまだなかった。

身のまわりの人間の現象、あらゆる生物や自然の現象、つまり現実の宇宙に存在している現象のすべてが、互換重合・対向発生ならざるは無い、という物理を、まだ本当にわかっては（感受しては）いなかったのである。

しかし、二十年前、本気で、心の底から驚き、それ以来、何をするにも、感受性の鍛練に努め、脳の理解した物理に照らして、自分の感受性を逆序して来たオカゲで、カタカムナ人が、「ヤタ」「ノ」「カ」の「カミ」と言ったモノを、少しずつ、ハッキリと、感受によってわかることが出来るようになり、カタカムナ人が、「フト」といったモノが、本当に、カムとアマ、アワとサヌキの重合であることを実感としてわかるようになり、カタカムナ人が、「ヤタノカカミ カタカムナ カミ」といい、「フトタマノ ミ ミコト フトマニ ニ」といった生命発生の原理を、自分自身の直観として、わかることが出来るよう

かなりよく学習して、生きているつもりであった。

しかし、今、カタカムナに出会い、「ヤタノカカミ」といわれ、「フトマニ」といわれ、その意味を、榎崎臯月から伝えられた時、筆者は、しんそこ、度胆を抜かれんばかり驚いた。

自分の脳は浅智慧のみ働き、感受性は鈍く、生命の真実に対して、全く無知であったことを、思いしらされた。

しかし、今にして思えば、その当座は（二十年前）、まだ、「ヤタノカカミ」「フトマニ」の物理を、脳が理解し、「マノスベ」の意味を、観念として、認識するのが精一パイ、という程度のわかり方であった。

というのは、「ヤタノカ」の「フト」のカム・アマの物理を、観念ではうけいれて、わかったつもりであったが、実感的な感受は無く、まだ、本当にわかってはいなかった、ということである。

たとえば、互換重合の物理の例をあげるにも、(三号 156~頁、六号 134~頁のように、)多分に観念で、一生懸命難しく考えていた。

生物の生命現象も、自然現象も、互換重合の相似象であることは知っていたので、その中の、わかり易いと思う例をあげたのであったが、そしてあの記述そのものは、何ら間違っていないのだが、しかし、互換重合の例としては、あのような特別の例をあげるまでもなく、自分自身の日々刻々の生命現象、精神現象のことごとくが、サヌキ・アワの互換重合によって生かされている、という実感は、まだ無かった。

(おそらく、カタカムナ人のサトリも、三号、六号にあげたような観念によるものではなく、自分たちの生命現象・精神現象の感受に基く直観であったに違いないのである。)

我々が、たとえば、くたびれた時、大きく伸びをして、せいーぱいアクビをしたら、スーと元気になったとか、朝起きて何となく疲れた気分だったのに、外に出て歩き出し、働き出したら、元気になって頭痛も直ってしまった、とか、又、机に向って書きものをしていたのが、疲れたので、外に出て森の小道など歩き出したら、元気が出て来て、よいアイデアが浮んだ、等ということは、日

アワとサヌキのフト（対向・互換）と力の発生は、即時（アマハヤミ）である。「カ」の発生とは、ヒトツのイノチの賦与である。

生命発生の条件は、ヤになったフ（アワとサヌキのチカラ）のトである。卵子と精子も、ヤになってトする場が出来た時、新しい胎児の力が発生する。

摩擦によって電気が発生する現象も、稲妻や落雷の現象も、皆、よく知っている。

我々は、「ト」という現象は、よく知っている。

しかしトしてキする場（界面）のことは、全く知らなかった。（それを考える感受性が無かった。）

科学者も、物質の化合や結晶、発電や、核融合、原子の転換、鉱物の精練、又は生物の発生、極微の次元の遺伝子の発現、ポリペプチド結合（蛋白質重合体）などの、「ト」の現象はよく知っていて、人為的に、様々な「ト」の状態をつくっている。（六号134頁）

則ち、熱や、圧力や、電気や、又は様々な触媒を用いて、「ト」の条件をつくり出している。

しかし、その「ト」の物理は、まだ開発されていないのである。様々な触媒が見つけられているが、触媒を用いれば、どうして「エネルギー障壁」がとれるのか？ その物理はわかっていない。

* 因みに、ゲーテや釈迦は、体験（波動量）としては、カタカムナ人と同等の覚作用（正覚）に達した人であったが、しかしそのコトバは、「根源現象」「生の秘奥」、「ヴァダムマーサンカーラー」等、やはり、観念の次元の表明であり、実際の「生の秘奥」そのもの、ヴァダムマーサンカーラーの「根源」そのものが、何であるかをつきとめ、その感受を、コトバにしたものでは無かった。

「ヤタノカ」「フトマニ」のようなコトバ（考え方）は、今まで、我々は、聞いたことも無かった。

我々は、現代人として文化をもち、宇宙のこと生物のこと人間のことなど、

まだ、時間・空間の物理はわかっていない、ということである。

その為に、「今見る星の距離は、〇〇光年である」ということはよいが、「今見る星の光は、〇〇億年前に放たれて宇宙空間をとんできたものである」というような、トンデモナイマ違いを、現代のトップの科学者が、広言して憚らぬ有様である。(光速突破 八号163~頁、トキ・トコロ 第八首・第九首)

* 思えば我々は、今まで、カタカムナ人のような「ヤタノカ」とか、「フトマニ」などという考え方を、したことが無かった。

時間・空間といっているものの本質が「トキ・トコロ」であったことなど、まして、「マノスベ」などという発想は、思いも及ばなかった。

「ヤ」という日本語は使っていたが、「ヤ」とは何か？ など、考えたこともなかった。「フ」といえば「二つ」、「ト」といえば十、くらいの意味は浮ぶが、そもそも、最初に、「フ」というコトバを造った人は、何と何を「フ」とよんだのか？ 考えたこともなかった。

例えばフトマニの「フ」は「対向・互換」、「ト」は「統合・重合」と訳すしかないが、実は、科学にも無い概念である。

正反の互換がなければ重合は起きず、「フト」がなければ「マニ」にならない。

現象の物を、ただくっつけても「ト」は起きない。(白豆と黒豆をいかに密着させても「ト」は起きない。男と女がただ接合しても、子は生れない。)

「ト」という声音符は、単なる数詞では無く、「マニ」則ちタテ線とヨコ線の「ト」を示している。(タテ線は、生命のカムウツンを、ヨコ線は、生命のアマウツンを意味する。)

* 要するに「ト」とは、生命体のアワとサヌキのチカラが、ヤの状態に対向・互換しなければ、「ト」(力の重合)は起きない。トするということは、力が発生する、ということである。

アワとサヌキが対向(互換)してから「カ」が発生するのではなく、「カ」が発生してからサヌキとアワが対向(互換)するのでもない。

「時空の互換重合の自然則」の意味が、わからない』というのである。

「十字象」のヨコ線は、物質系（アマウツシ系）を、タテ線は、生命質系（カムウツシ系）を、表わしている。

それ故、十字象は時空量を表わし、タテ線は「トキ」（則ち時間といわれるもの）の本質を、ヨコ線は「トコロ」、則ち空間（場）を占めて、時間をもつものの状態を示すもの、と考えられる。

時間量とは、重合して発生する「ヤタノ力」であり、発生して生命質（アワの心）となるモノである。

それ故、トキした生物の持続する間、則ち「トキのマ」が、文字通り時間である。

空間量とは、「フトタマノミ」のアワとサヌキで「場」をつくり、「フトマニ」として、生命体となる量である。

それ故、宇宙空間も、天体も、我々生命体も、空間量（トコロ）である。

「フトマニ」とは、カムの変遷したアワのチカラと、アマに出たサヌキのチカラとの重合したタマの変遷したミが、現象の生物（生命力と生命体をもつ）として、マ（天然宇宙界）に、発生し存在する、という意味である。

「時間量と空間量とが、非常な高速度で、交番に現れる」（37頁）というのは、アワとサヌキのチカラが、互換重合して発生の間、則ち「トコロ」が出来て、新たな力が「トキ」する、その速度は、アマハヤミ（超光速・即時）である、という意味である。（アマ始元量の物性論、時空互換量子 三号68～頁、四号120～頁、六号38～頁）

あらゆる生命活動は、トキ・トコロ（アワとサヌキ）の互換（働き合い）ならざるは無い。

その互換重合がうまく合った時、対向発生によって、イノチのカガ、ヒトツヒトツ発生するわけである。

* 時間・空間の問題は、科学では二つの元とされているが、時間とは何か？ 空間とは何か？ という納得のゆく説明（定義）は無い。つまり、現代科学は、

生の場)が出来たからである。

* 何ごとであれ、すべて、生命活動は、決して、現象^{キョウゾウ}のチカラだけで為されるものではない。必ず潜象^{センゾウ}との対向発生が無ければ、持続されることは無い。

榎崎皐月が「互換重合・対向発生」と訳した「フトマニ」のサトリは、生物の生命現象、人間の精神現象のみならず、地球・天体の自然現象の、すべてに通じる物理である。

カタカムナ人は、その生命発生^{サトリ}の根本原理を発見し、認識^{コトバ}に出して、示してくれていたのである。

なお、「ヤタノカカミ」「フトマニ」の物理^{サトリ}については、(三号34~頁に,)「互換重合」の物理については、物性論として、(同 64~, 156~頁に,)榎崎皐月の直観物理の概説がある。

しかし三号の概説は非常に難しいといわれるので、改めてここに、解説を述べているわけであるが、折しも、読者から質問があって、『「心(アマの微粒子)の正反配偶の交り(三号37頁)」とある「心」とは、我々が感情や意志をもつものを「心」といっているものと、違うのか?』というのである。

それこそ、(我々が、「感情や意志をもつもの」があると考えて「心」とよんでいるものこそ,)実は、「アマの微粒子」(始元量^{アヲ}の凝結したタマ)なのである。(アワのココロ)

しかしそれは潜象であって、一般に考えられている「心」のような主体的なものではない。

その物理^{アヲ}を、示すのが、「ヤタノカカミ」「フトタマノミミコト」のサトリである。

しかし、「心」の本質が「始元量^{アヲ}の凝結したタマ」であるという、この物理^{アヲ}がわかるには、「始元量^{アヲ}」というモノがわかっているなければならない。

「始元量」がわからなければ、いかに直観物理を勉強しても、『難しくてわからない』のである。

* 又、質問者は、『「時間量と空間量が非常な高速で交番に現れる」(37頁)という

働き合いがうまく合わない。そうすれば、「カ」の対向発生は起きない。

そういう状態がつづく、(天然給与のイノチが入らないから、)足は疲れ、つまずいたり、転んだりする。

長年、そういう状態で生きていると、足腰は変形して痛み、内臓にも病変を来し、不健康な生命体となる。

我々は何も知らず、平気で(迂闊にもいいかげんに、でたらめに、立ったり歩いたりたべたり話したりして)生きていたが、我々の生命活動の実際の現場は、このような小さな細胞単位の(感受と判断行為のチカラの)働き合いによって、イマ・イマに、いとなまれているのである。

* 身体の生命活動が、カとミ(サヌキとアワ)の対向発生によって、イマイマの生命が発生するように、脳の生命活動(精神作用)も、感受性と判断力の互換重合の対向発生(積み上げ)によって、新しい思想(カ)が発生する。それが精神の新しい生命(成長)であり、「ヒラメキ」とか、インスピレーションとか、高度の直観といわれるものの発生も、このフトマニの物理に他ならない。

ということは、いかに前頭葉の智識的な経験の能力を鍛えたとしても、思想は高まらない。新しい生命の発生する場がつかれなければ、つまり、精神作用のサヌキとアワの互換重合の、よい対向発生(場)が出来なければ、高度の直観は発揮されず、ヒラメキもインスピレーションも独創も、発生することは無い、ということである。

それ故、つねに感受性を鍛えて、脳が、マノスベの判断行為を出す為に働いていて、その上に、サヌキとアワの対向発生(場)がつかられれば、新しい直観の「カ」が、天然的に、瞬時に(アマハヤミ)、発生するわけである。

古来、科学者や芸術家が、天才を発揮し、最高の芸術や真理の発見をもたらしたのも、芸術家や科学者の、固有の、個人の能力ではなく、新たな「カ」(カムウツシ)の発生によるのである。

則ち、長年の感受性の(サヌキ・アワのチカラの)鍛練の蓄積の上に、新たな生命の「カ」の(カムウツシ)の発生(場)より高度なサヌキ・アワの対向発

に、気がつく筈である。

脳の使命は、感受した情報に基いて、生命をよりよく生かす為に、マノスベの方法を選び、その方向へ指令を出す為である。

脳が、その肝心の感受性を無視して（生命のアワの心を忘れ）、脳（のつくり出す欲望や感情のサヌキ）の為にばかり働くのは、（無知の故の）脳の、悪い副作用の現象である。

カタカムナのサトリは、マサに、このことを、自覚したものであった。

現人類の文化は、その自覚のないまま、進化した脳にふりまわされてきたものである。

* 要するに、直観を鍛えるということは、感受性を鍛えることであり、感受性を鍛えるということは、アワ性を鍛えることであり、アワ性とは、生命力の「カ」のチカラである。

感受性の鍛練とは、その生命力（のサヌキ・アワの生命活動）が、「ヤタノカ」（天然給与の「カ」）を発生させる場を、感受することである。

言いかえれば、例えば我々が、歩く（という生命活動をする）時、その姿勢の（足の出し方、腰の支え方、体重移動のしかた等の）ヒトツヒトツに、サヌキとアワのチカラが、丁度必要なだけの互換重合をすれば、「カ」（の生命力）がヒトツヒトツ発生して（イマのよい生命をいただいて）、よりよく、生かされることになるわけである。

その際、例えば歩く時、我々の目が、道の凹みを見て（感受性）、脳がその状態を判断して、適切な指令（足のどの筋肉をどの位縮めるとか、ゆるめるとかの、必要な指令）を出せば、アワとサヌキの力の互換重合による対向発生によって「カ」（イノチのヒトツ）が発生する。このような感受と判断行為の互換重合がつけば、我々は、（天然給与のイノチをヒトツヒトツいただいて、）気持よく、疲れをしらずに、歩くことが出来るのである。

ところが、もし、その際、目からの情報が、脳にマトモに感受されぬと、（というのは、我々がその時、何か考えごとでもして、歩く方の感受性は、ウワノソラの状態であると、）脳からの指令もウワノソラになり、アワとサヌキの

とである。

(これは、筆者の実体験である。)(感受性について 補遺4 173~頁)

* 感受性を鍛えるということは、要するに、アワのチカラ(生命力)を高めることである。

内外環境の刺激^{カカツリ}や変化を、五感(眼耳鼻舌身)の感覚器官によって鋭敏にと^{ツツ}らえて、(脳の先入見に邪魔されずに、)正しく脳に感受させ、その感受に基いて、(マノスベに照して、)判断行為^{ハツダン}を出させる、ということである。

このコースは、自然の動物たちが、皆、自然^{アタリマエ}にやっていることであり、人間には進化した脳があっても、自分の生命の感受性をマツトウに鍛えつづけていけば、脳(の欲望や感情)にふりまわされることは無くなり(脳の下剋上にまかせ^{マカセ}るのでは無く)、脳の能力は、自分の行動をマノスベに照して出す方に働かせて(生命の為によい判断^{ハツダン}行為^{ケイ}を出す為^{タメ}に働かせて)、生存を全うすることが出来るようになる。

そうすれば、人間も、自然のコース(生き方)にかない、フトマニによって、天然^{サチ}給与^{キョ}の幸(カムウツン・アマウツン)を豊かにいただけるようになる。

これが、人間の生きる根本態度なのである。

* そもそも、脳が進化したのは、感受性を退化させる為では無かった。

しかし、脳の進化という事実は、必然的に、感受性の退化と、脳の下剋上という現象を、もたらしたのである。(脳の落し穴)

それは、進化した脳をもった人類が、その脳^{キタマ}を働^{ハたら}かすことに夢中になり、生物にとっては至上命令であった感受性の鍛練^{アタリマエ}という、生物の自然^{アタリマエ}の生き方を、忘れてしまったからである。(現代人はその落し穴に、まんまと陥ってしまっている。)

人間の脳が本当に進化したのなら、生物の生き方(人間のあるべきスガタ)を、正しく自覚^{キタメ}することが、出来る筈である。進化した脳を充分に働^{ハたら}かすことは勿論よいのだが、その働きをマツトウにさせる為に、自分の感受性を、つねに、(自然の動物たちのように、)鍛えつづけていなければならぬ、ということ

又、老人痴呆の問題 についても、科学は、まだその原因を知らず、『前頭葉の働きが悪くなったのだから、前頭葉を刺激して、活性化させればよい』と考えている。

しかし、『手仕事や運動をさせて（前頭葉を刺激して）、症状がよくなった者は、まだ、自分に、やる気（生命力）があったからである。痴呆の度の進んだ者は、「やる気」が無く、無理に（リハビリテーション）やらせようとしても、嫌がって拒否するばかりである。

もともと痴呆になったのは（前頭葉の機能が欠落したのは）、「やる気」（生命の感受性の元気）が無くなったからである。

その本当の原因を改善せずに、前頭葉を刺戟（活性化）しようとしても、痴呆が直ることは不可能である。

老人痴呆の現象は昔からあったが、現代人に多発し、高度の知識人にも起きている。

老人痴呆の原因は何か？

カタカムナのサトリにより、その原因は、その人の生き方にあることが判明した。

長年、自分の感受性の鍛練を忘れ、（その為に、対向発生の場がつかれず、天然給与の生命の乏しいまま、）ひたすら、脳を酷使してやまぬ生き方を続けて来た為に、遂に、その脳が、ヤになってヤブレるに至ったのである。

痴呆の治療と予防は、自分の感受性を鍛練して、生命力を賦活する（カムウツシ・アマウツシを受ける）生き方をすることである。

老人痴呆の問題は、老人痴呆の人だけのことではない。

我々現代人は、皆、感受性の鍛練という生物本来の生き方を知らずに（進化した脳にふりまわされて）生きてきたから、多かれ少なかれ、早かれおそかれ、（中には若いうちから、）呆けの症状を呈する者があるのも、やむを得ぬことである。

少しも早く、このことに気づいて、呆けの軽いうちに、生き方を一変するこ

我々現代人は、日常の生活に於て、どんなものごとでも、言葉でも、それを、動物本来の感受性（アワの心）で感受して、スナホな判断行為を出す、という自然の生き方をしていない。そうではなくて、感覚器官が感じたものごとやコトバを、脳が、感受して判断行為を出す前に、というより、それを脳が感受するセツナに、脳のもっている先入見や感情が飛び出してきて、勝手な判断行為を出してしまうのである。

それだけではなく、脳は、更に、今何も感覚していなくても、（例えば今、おなかが空いているとか、今、誰かと会っているとかというような、実際の感受がなくても、）次々と連想したり過去の記憶や経験を思い出ししたりして、大脳次元で発生する好悪の感情や、欲望や好奇心の為に、様々な判断行為をつくり出してやまぬのである。

その結果、四苦八苦に悩み、心身を害い、生命を亡ぼすに至っていても、現在の我々人類は、その原因が、自分自身の生き方のマ違ひにあったことに、則ち、進化した脳の下剋上をゆるした、自分自身の感受性の退化にあったことに、まだ、気がつかないで（相手が悪い、社会が悪い、としか考えられないで）いるのである。（脳の落し穴）

その為に、「直観」ということが特に問題になり、直観を高めるにはどうすればよいか？ と、いわねばならなくなったのである。

* 一般に、独創や発明を発想する高度の直観やインスピレーションとよばれるものは、脳の前頭葉から出るらしいといわれているが、では、どうすれば、その直観を鍛えて高めることが出来るか？ という事については、科学は、まだ、全くわかっていない。

今、私共は、カタカムナのサトリにより、直観とは、何であるか？ ということが、ハッキリとわかった。そして直観を鍛える、ということは、感受性を鍛えることである、ということもわかった。

なぜなら、感受性とは、生命の アワ のチカラであり、アワは、サヌキの判断行為を発するチカラであることがわかったからである。

のである。

このように、カタカムナのコトバは、まことに正確で、少しのごまかしも、あいまいさも無く、極微の潜象の物理をアリノママに直観した表現である。

*** 直観を高めるにはどうすればよいか？** と、しばしば言われるが、「感受性の鍛練」という意味を、どうか真剣に受けとめて頂きたい。

五感の身体的な感受性を鍛えることが、とりも直さず、脳の感受性（直観）の鍛練向上に、直結して連動するのである。

なぜなら、脳の判断力（直観）の働く素材は、眼耳鼻舌身の五感的な身体的な感受性が、とらえてシナプスに結んだ情報であるから、その情報を鋭敏にとらえて脳に送り、それを脳に正しく感受させるという感受性の鍛練が、直観力を鍛えることに、直結するわけである。

直観とは、単に、物ごとを分析したり総合したりする、大脳の智識や経験のことをいうのではない。

直観とは、鋭敏な感受性に基く高度な判断でなければならない。

それは一般に、独創や発明を発想する能力であり、インスピレーションともいわれるものである。

そもそも自然の動物は、皆、感受に基いて脳が働き、判断行為を発して生きている。

それが食べてよいものか？ 悪いか？ を判断するのも、相手が敵か味方か？ を決めるのも、皆、目が見た瞬間、鼻や耳の感覚を脳が感受した瞬間に、判断行為を発している。

いわば、すべて「直観」で生きているわけである。

（動物の場合は、それを直観とはいわず、単なる「カン」である。人間にも、そういう「カン」のよい者はある。）

しかし、人類は、脳が進化した為に、そのような動物的な直観の能力（脳の感受性）は退化し、もっぱら、脳のもっている智識や経験に頼って、判断行為を発するようになってしまった。

ら、「フトマニ」（対向発生）というのである。現代科学は、「フトマニ」則ち、互換重合・対向発生の物理も、「アマハヤミ」則ち超光速の物理も、未開発である。

カタカムナ人は、「力」という潜象の存在を発見し、「力」が、現象粒子を発現する「フト」のチカラをもっている、という物理を、開発した。潜象から現象が発現する、生命発生の根本原理である。

我々の生命体（ミコト）は、このカム（アワ）と、アマ（サヌキ）の、フタツのチカラの重合によって発生した「ミ」の繰返し重合されたモノ（ミコト）である、という、生命発生と生命活動の物理である。

則ち、我々の生命体は、カムアマ始元量（フトタマ）の変遷物（ノミミコト）であるから、そのチカラ（生命力）の根源はカムであり、我々の生命力の根本は、カムのチカラ（則ちアワ）であり、絶えずカム（環境）から、対向発生によって、補給されている。

我々（生物）の生命体は、このカムのウツシを受ける能力（感受性、則ちアワのチカラ）と、感受したものを判断し行為する能力（脳の判断行為力、則ちサヌキのチカラ）とで、生かされているので、つねに、この感受性（アワのチカラ）をマトモに働かして、（十分なカムウツシを受けて）いなければ、マトモな判断行為（サヌキ）を出して生きることが、出来ないわけである。

つまり、我々の生命力の基本はアワであり、我々の生命活動（サヌキ）は、そのアワの量だけ（のアマウツシ）によって、いとなまれるものである。

（カタカムナの八十首のウタヒは、この、生命の物理（マノスペシ）を示すものである。）

我々は、様々な科学・哲学・宗教・道德等の学問智識を学ぶよりも、先に、自分自身の生命の根本の物理を、知らなければならなかったのである。

カタカムナ人には、後代人のような「天地創造神」というような観念は全く無く、現実の生命体の、発生と存在の現象の事実を、ありのままに感受し、その感受を抽象して判断し、それを、コトバにうつした（物理として認識に出した）

象である。

* 「フトマニ」という言葉は、「八咫の鏡」と同様に、現在でも、神道などで、わけのわからぬ神秘思想で使われているが、今、カタカムナ人の思念した意味を、スナホに感受してみると、何ら特別な、超能力的・易占的な思想では無く、『カムとアマのフトツのチカラの重合によって、現実の生命（ミ）が発見し、『フトマニ』として定着的に持続される（ニ）』という、カタカムナの潜象物理の基本を示すコトバであったことが、わかってくる。

「ニ」とは、その存在が定着的になる思念であるが、「フトマニ ニ」と、ニがくりかえされているのは、フトタマ（潜象過渡のタマ）のミが、夥しいくりかえしによってミコト（生命の実質）となり、カムウツシ・アマウツシのフトによって、現象物質の生命体（フトマニ）として、定着的に存在する、という意味のニである。

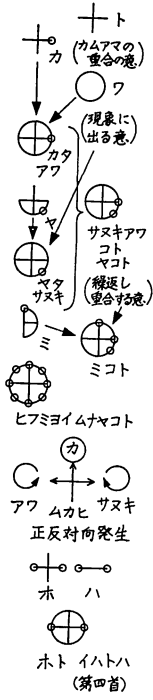
カムアマ始元量のフト（重合）した微粒子（フトマリ）が、原子・電子や遺伝子等の現象に定着するまでの潜象過渡の物理が、科学にはまだ無いのであるが、カタカムナ人は、物質・生命質、又、精神現象もこめて、あらゆる現象が、潜象から発生する、その根源の潜象の存在をつぎとめ（発見し）、潜象から現象に現れる潜象過渡の物理を、解明（直観）していたのである。

* カタカムナ人がフトといえば、カムとアマのフトであり、アワとサヌキのフトである。ここは、ヤタのカカミの「カムナ」（カムのチカラ）と、カムから発生したヒフミのミの「アマナ」（アマのチカラ）のフトを示している。

カムとアマ（アワとサヌキ）のフトによって発生したモノを「フトタマ」と言う。（最初の左旋の「力」と右旋の「力」の重合したモノを「ヒ」とよぶ。「ヒ」は最初の「フトタマ」であり、「フトマリ」ともいう。）

このフト（正反対向）の物理は、アワとサヌキが対向してから「カ」が発生するのではなく、「カ」が発生してからアワとサヌキが重合するのでも無い。アワとサヌキの「フト」（互換重合）と「カ」の発生は、同時（アマハヤミ）であるか

その感受によって、カタカムナ人は、ヒフミヨイに始まる四十八のコトバを示していたのである。



* そのウタに基き、筆者の感受によって直観したところを述べれば、フトタマの「フ」、則ちカムの微分の「カ」の正反とは、左旋・右旋の極微の渦状の、潜象のチカラの状態のモノである。(その大きさは、マイクロもナノも及ばぬ、アマハヤミである。)

その「フ」が「ト」(重合・対向・統合)した「タマ」が「ヒ」であり、カムアマの「始元量」である。

我々の宇宙環境には、潜象の「カ」の「フ」(左旋右旋の正反のチカラ)や、「ヒ」(始元量)の潜象の渦状のマリが、無限に(密充填的に)、存在しているわけである。

その中から「フト」によって「タマ」が発生し、「ヒフミヨイ」「ムナヤコト」と、現象のイノチを構成する原子(ハコクニ)が発生するのである。(第五・六首)

カム一般の中からヤでタしてノした力は、現象の生命体のアマナの力となる。(それは、我々の生命体のアワのチカラ性(生命力)であり、感受性のチカラである。)(第七首)

潜象であれ現象であれ、物質であれ思想であれ、何であっても、マトモに発現するものは、ヤで出るわけである。(もしヤにならずにムリに出れば、癌や奇形になり、又、ムリに出ても、やがて空しく崩壊してしまう。)

現象の生命体(我々人間をはじめあらゆる生物)の生命力は、「ヤタノカ」の「アワ」と、アワから出る「サヌキ」のチカラのフト(重合)の対向発生によって、「フトマニ」に発現されるのである。

我々の生命活動(衣食住の生活のイトナミ、思想・宗教・科学・芸術・経済・運動・性-殖等の文化のイトナミ)は、すべて、アワとサヌキの対向発生(フトマニ)の相似

する、則ち、アワのココロが本当にわかる) というのでなければ、ダメだということである。

その代り、一たびこの物理がわかって、正直に実行すれば(自分の感受性を鍛えれば)、実に、その場から、イヤシロの生命が与えられる。それは、妙薬が病にきくような、あらたかな効果である。

過去に何があったとしても、年をとっていても、才能も体力も乏しい者でも、たとえ、今、どんな癌に犯されている者でも、誰であっても、今、今のヒトツヒトツに思念を入れて(自分の感受性を起励して、正直に「マワリテメグル」を実習し、) 何をするにも、アワの心でサヌキ(判断行為)を出す、という生き方を実行すれば、天然給与でヒトツ、ヒトツに、「カ」(イノチ)が発生し、イヤシロに生かされるのである。

今まで無意識にやっていたが、何をするにも(一寸立つにも、一足歩くにも、呼吸をするにも、食べるにも、考えるにも、) この物理(ヤタノカ・フトマニ)を知って、正直に、一步一步、一息一息、しっかりと感受してやれば、明らかに、イキイキと元気になるのである。(ということは、ちょうどよいサヌキアワのフトのチカラでやれば、則ちマノスベの生命活動には、ヤタノ「カ」(イノチがヒトツ)発生する、という感受性の鍛練になるわけである。)

＊ カタカムナ人が「力」と言い、檜崎臯月がカムアマの「始元量」と言ったモノは、潜象であるが、確かに存在するモノであるから、カタカムナ人は、(自然の動物たちのように、) そのカカワリを感受し、進化した脳がマツウに働いて、それが、「ヤタノカカミ」であり、「フトタマ」である、という物理を、開発することが出来たのである。

「潜象」というのは、人間の目には見えない、というだけのことで、あらゆる生物は皆、それを感受して生命を保っている。

カムアマ始元量は、目に見えぬ潜象であるから、科学的手段で客観的にとり出して見せることは出来ないが、実際に、確かに対向発生してくるのであるから、我々生物の感受性は、そのカカワリを感受しているのであり、我々の脳も、それを感受し、認識に出すことが、出来る筈なのである。

感受性の鍛練とは、その、脳の感受を、正しく明確にし、脳が、マトモな判断行為を出せるようにすることである。

* 我々は、環境のあらゆる刺激を感受して生きているが、我々の感受性が最も感受すべきモノは、我々の生命活動がマトモに行われて、天然給与の（対向発生）の「カ」が発生する、その潜象のイノチである。

我々の感受性は 何の為に あるのか？ ということをつきつめれば、この潜象の「カ」のカカワリを感受することが、最高の目的だ、ということになる。（生命カン・潜象カン・カミ感覚）

則ち、そのような感受性（生命カン）をもつ生き方をすることが、よりよき生命を全うすることになるからである。

脳の進化した人間は、もはや、自然の動物たちのように、自分の感受性を一生懸命に働かせ、スナホに、せい一杯の判断行為を出して、豊かな天然給与のイノチを受ける、という生き方が、出来なくなってしまった。

日常生活に於ても、何かをする時にも、自分の感受性（生命カン）はお留守で、脳のサヌキにふりまわされている。（ということに気がつかず、人間性とはこういうものだ、と思っている。）

脳の進化した人間が、病気や痴呆にならず、健康な心身を保って、寿命を全うするには、つねに、自分の感受性を鍛え、脳を出しっぱらせず（下剋上をゆるさず）、自分の脳をマットウに働かせる生き方をしなければならないのである。

殊に、進化した脳が、本当によい判断行為（高度な直観や発明発見の独創やインスピレーション）を出すには、自分の精神作用のアワとサヌキの対向発生による、新たな「カ」の発生（カムウツシ）がなければ、不可能なのである。（直観 14・95頁）

* 大事なことは、このことを、アタマで理解しただけでは、わかったのではない。あくまでも、自分の感受性のアワのチカラを起励して、実際に、新たな「カ」の発生の場をつくる（自分の生命力のアワとサヌキの対向発生を実際に感受

である。なぜなら、感受性は、我々の生命力そのものであるから、いつも鍛えていないと、衰える。感受性が衰えれば、脳にふりまわされてしまう。

我々は、あくまでも、自分の感受性をいつも鍛えつづけ、進化した脳は、その感受に基いて（アワの心によって）、よい判断行為を出す為に、精一杯、働かせばよいのである。

脳がたくさんの良い情報（智識・経験）をもっていることはけっこうなことで、それは、よい対向発生（高度の思想、直観）の発生条件となる。

脳が進化したことを悪いというのではない。

我々は、進化した脳を精一杯使って、多くの智識や経験、豊かな思想や感情を、いくらでももつべきである。

ただ、その脳の使い方の根本態度を、マ違えてはならぬのである。

脳が迷妄我執を起すからといって、脳を悪者にして否定し、無心になれ、というのは、この物理を知らぬ為の錯覚である。

脳が働けば悪いことをするから働かすな、と、いかにいわれても、生きている以上、脳が働かぬということはありませんし、無心になれ、といわれても、生命がある以上、心を無くすことはできない。

進化した脳の落とし穴に陥り、感受性の鍛練を忘れ、判断力をふりまわすことしかしらぬ人間は、自分の錯覚に気がつかず、できないことをできるとして観念の陶醉に殉ずるしか無いのである。

* 感受性が衰える、ということは、五感の感覚器官の機能が衰えるということでは無い。

感受性を鍛える、ということは、五感の機能を、(体操やジョギングのように、)鍛えるというのでは無い。

「感受」とは、五感の感覚した情報を、脳が感受することであり、脳は、その感受に基いて情動や判断行為を発するものである。

感受性が衰えるということは、感覚器官のとらえた情報を、脳に感受させる、そのチカラが衰える（上の空になる）ことである。

(これが、諸悪の根源である。)

なぜなら、人間の脳が、(進化した為に、動物たちのため)過去の経験や情動の情報をたくさん持っていて、感受したセツナに、その方が、いち早く、電気的に結合されてしまうからである。

よほど、アワ性(生命カン)が強くなければ、脳は、自分の感覚器官の情報を正直に感受できず、どうしても、脳のサヌキ(好悪の感情や先入見)に基いて、言葉や行動を発することになってしまうのである。

それ故、知能のよい者ほど、自分の感受性を無視し(劣化させ)、進化した脳のサヌキに、ふりまわされることになるのである。

自分の脳がそのようなことをしている、ということ、感受(自覚)し、自分の感受性(アワの心)を起励して、悪いサヌキを出さぬよう、自分自身を教えかえすのが、逆序のサトリである。(それをするのが、感受性の鍛練である。)

といっても、このコースは、無意識領域であるから、自分自身を教えかえすことは極めて難しい。実際は、悪いサヌキを出してしまい、悪い結果が出てから、気がつく有様である。

何としても、脳が、自分の本性のサヌキとアワのハタラクをよく知って、何をするにも、自分のアワにヒラメキを入れて(起励して)生きるクセを、つけなければならない。

このクセは、人類は忘れてしまったが、実は、自然の動物たちは、皆、一生持ちつづけて(要するに自分の感受性を鍛えつづけて)、それによって、生きているものなのである。(筆者も、このことに気がついて以来、はじめは、意識して、何かをする度に、パッとヒラメキを入れて、自分の感受性を起励するようにしていたが、今では、入れようと思わなくても、ヒトリデに入っている、というようになってきた。(後書 280~頁)

人類には、進化した脳をもつという宿命があるが、しかし、我々人間も、生物なのだから、生物の本来の根本態度を忘れては、マツトウに生きられない、ということ、我々は、自分の脳に、しっかりと、自覚させなければならない。

我々人間は、脳が進化したからこそ、一そう、感受性を鍛えねばならないの

の情報^ヲを脳に送り、脳^ノの感受性^ヲは、その情報を受けたセツナに、取舍^ヲの判断^ヲ（自分の生命にとって、よいか悪いか）を定めて、悪いものは受けず、よいものは受け、適切な行動^ヲ（拒否して逃げ出すとか、近づいて手を出して食べるとかの）指令を発する。

ところが、人間の場合、この感受と判断行為のコース（アワとサヌキの互換重合）が、正直^ニに行われ^{ない}のである。

脳^ノの進化した人類は、幼児期をすぎると、脳が、感覚器官の情報^ヲを感受したセツナに、脳のもっている過去の経験^ノのサヌキ（感情や先入見）がとび出して来て、自然の動物たちのように、本来の感受性（生命カン）に正直に、つまりアワ^ノの心で、適切な判断行為^ヲを出す、ということが、出来なくなってしまった。

（昔の日本の親は、幼児が食事中おしゃべりやよそ見をするのさえ禁じ、行儀よく、よく噛んで、食べることに専念するように、しつけたものであったが、現在は、食事をしながらテレビを見て、食べる行為の止っている子供は叱られて、無理に食べさせられている。ここでも、感受性を悪くする練習をしているようなものである。）

* アワ性（アワの心）とは、アワセる性^{（アイワノセリノセウ）}（調和する性）である。「感受した」ということは、「アワセた」ということであり、脳は、その感受^ニに基いて、適切な行為^ノの指令と、「よい気持」とか「好き」とか「嬉しい」とか（又は「恥しい」とか「テレる」とか「あがる」とか「うっとりする」とか「誇らしい」とか、又は「なつかしい」とか「淋しい」とか、「美しい」とか「きたない」とか「悩ましい」とか「畏しい」とか「難しい」等）の、情動^ヲを発する。

もしアワセたくない時は、動物の場合は、感受性が拒否して受け^{ない}だけである。

拒否しても無理に迫られれば、脳は、その感受^ニに基いて、逃げるとか攻撃するとかの行動の指令を出し、「嫌」とか「驚き」とか「悲しみ」とか「恐怖」等の情動^ヲを発するだけである。

ところが人間は、まず脳^ノの感受性が、感覚器官の情報^ヲを「感受」する段階で、受けるか 拒否するか を判断する脳が、マトモに働かないで、あいまいに受けてしまう。

に感受性があるのか？ ということ、明確に、認識している人は、果してあったであろうか？

カタカムナに出会い、私共は、はじめて、我々の生命のチカラは、カムアマからうつされる アワとサヌキ であることを知った。

則ち生物は、感受するチカラ と、判断行為を出すチカラ によって、生かされている。

アワとは、感受する生命のチカラ であり、感受性に基いて判断行為を出すチカラがサヌキ である。(ヤタノカカミ カタカムナカミ)

単細胞のアメーバから、人類に至るまで、感受性(アワ)と判断力(サヌキ)の無いものは無い。(十号60～、77～頁)

我々の生命力(生命活動をする命のチカラ、則ち我々が「イノチ」や「ココロ」といっているもの)は、感受性と判断力、則ちアワとサヌキのチカラに分けられるが、しかし、この^{カハラヒ}互換は、実際は、別々に働くものでは無く、同時に働き合うものである。(生命活動は、すべて、サヌキとアワのチカラが別々に働くのではなく、サヌキとアワの^フ互換^マ重合、則ちサヌキとアワのチカラが^ト換り^キあり、カムと重合することによって、無意識のうちに、なされるものである。)

* 自然の動物 の場合は、(人間でも ^{ミツゴ} 幼児期の子供 はそうだが、) 今、感受したことしか考えられない。ものを食べている時に、何か聞こえたり見えたりすれば(感受すれば)、食べる行為は止ってしまう。歩いている時に、何かを見つければ(感受すれば)、歩く行為は止んでしまう。

一どきに、他のものを感受できないから、脳は、今の感受の為にしか働かない。過去のことや未来のこと、他のことを、今、考え合せることはできない。そして、「感受^アした」ということは、それが、自分の生命にとってよいものだという「判断^サがあった」からである。(ここでも、無意識のうちに、同時に、アワとサヌキのチカラの「^フ互換^マ重合」が、正直になされている。)

感覚器官の認められぬアメーバでも、このような、アワとサヌキの^{ヘツラカ}チカラはもっている。

感覚器官のあるものは、その機能によって(色や臭いなどを感覚して)、そ

ウノミにするしか無かったのである。

しかし、最初から、この、檜崎臯月の直観したカタカムナの潜象の物理（カムアマの始元量）は、疑う余地の無い真実である、という自覚（予感的確信）があったので、ただ、ひたすら、その物理を理解することに、精一杯であった。

ところが、少しずつ理解が進むにつれ、そもそも、「フト」とは、正・反のフタツの重合であり、「フ」とはカムとアマの正反対向であり、「ト」とは単なる加算や重畳ではなく、正反の対向がマになることである、と、物理的には理解しても、しかし、実際に、その正・反のカムアマの「フ」とは、どういう状態のもので、それが、どのようにしてマに重合するのか？ ……カタカムナ人は、それを、どのように感受していたのか？ ……ということが、しきりに気になってきた。

それと同時に、一方では、日常生活の基本態度として、感受性の鍛練につとめていたので、自分の心身の生命活動のしかた（生き方）によって、潜象のカカワリ（カタカムナ人がアマウツシ・カムウツシといったものが実際に発生すること）を、少しずつ、感受できるようになって来た。

カムナガラの「アマウツシミチ」（五号216～頁）や、「タケンタシミチ」（244～頁）を実行する時、又、日常生活に於て、立ったり歩いたり、何かをしたり、話したりする時、それをする自分の生命の「アワとサヌキ」のチカラを知って（ということは、そこに思念を入れて）マノスへの行動になるようにすれば、新たな「カ」（カムウツシ）が発生する（よい「イノチ」がいただける）、という、カタカムナの「フトマニ」（生命の対向発生）の物理が、実際の体感として、実感できるようになったのである。

ことに、「マワリテメグル」や、カタカムナの太極拳の実習を本気でやれば（手足や身体の姿勢や呼吸作用のヒトツヒトツに思念を入れて（アワを起励して）、よい行動を出すようにつとめれば）、積極的に、大きな「カ」の発生を促がす（カムウツシ・アマウツシを十分にいただける）ということが、わかって来た。

＊ 我々は、感受性がよいとか悪いとか、大マカに言っていたが、そもそも、感受性とは何か？ 我々の感受性は、何を感受するのが最高の目的か？ 何の為

しかるに、自分がわからないのは、我々現代人が、カム・アマの思念（感受）を失っているからだとは、誰も、知らぬから、^{アマ}大脳次元（観念）で、自分たちのもっている、異次元世界や輪廻転生、宇宙生命・ブンケー・靈魂等の思想に無理にこじつけて解釈して、わかったつもりになる者が多いのである。

* カムとアマは、潜象と現象であるといっても、別々の世界として存在するのでは無く、「カ」は、^カ無限の環境の中に存在し、^{アマ}宇宙のあらゆる現象物の中にも存在する。

このようなカム・アマの状態というもの、現代人の常識の^{アマ}脳では、どうしても理解できるものではない。

ことに、その^{フト}フトによって現象の生命が発生する、^{アウノスベ}対向発生（アウノスベ）などという物理は、科学にも、全く無いものである。

それ故、ここでは、カタカムナ人の^{コトバ}コトバを、出来るだけ正直に解説するから、どうか、直観を鍛えて、（自分の感受性をスナホに起励する気持になって、）読んで頂きたい。

このカタカムナ人の^{コトバ}コトバ（^カ潜象の^{サトリ}物理）を、^{オシヘ}榎崎皐月から、はじめて伝えられた時、筆者は、「潜象」という^{コトバ}コトバに、^{サトリ}霹靂のような衝撃を受け、このような、（生命発生の）物理があったことに、心から驚いた。

現代の若者たちは、なまじ、オカルト科学やマンガ的神秘思想の流行で、脳が悪くすれからされているので、カタカムナの「潜象」という^{コトバ}コトバに出合っても、本当に驚けない者が多いようである。

筆者も、もちろん神秘思想もオカルト科学の類も知ってはいたが、というより、知っていたからこそ、（知って、それらの限界を見すえていたからこそ、）カタカムナの「潜象」という^{コトバ}コトバに出合って、身が震える程の、感動を受けたのである。

このサトリは、非常に難しいので、というより、今まで、全く考えたことも、教えられたことも無いモノであったので、このサトリが、真実であるかどうかを批判するどころでは無く、全く、何も知らぬ子供のように、目を白黒させて

カカミ」の「カミ」(カムアマの始元量)に他ならない。それ故、「フトタマノミ」とは、フタツの「カ」が重合したタマが、「ノ」して「ミ」になるというわけである。

要するに、「フトタマノミ ミコト」とは、フトタマが次々とノ(変遷)してミとなり、そのミがくりかえし重合(コト)されて、生命体として、現象界に(フトマニ)、定着(ニ)される、という意味である。

フタツの「カ」(潜象)が重合した最初のカタチを、第五首では「ヒ」として、現象の粒子の発生のはじまりの物理を示している。

カタカムナ人は、「フトタマ・フトマニ」のサトリを、「アウノスベ」ともいっている。(第五首)

榎崎卓月は、このサトリを、サヌキ・アワの対向発生、互換重合と訳している。(三号 物性論)

* 現代語には潜象(カタカムナ)の思念が無いので、カタカムナ人のコトバを正しく訳すことが、非常に難しい。

カムは潜象、アマは現象と訳し、アマはカムから発生する、と訳すしかないが、しかし、カタカムナ人の直観した生命のサトリは、『神がすべてを創り給う』とか『もろもろの生命は神から与えられる』等という類の、原始人的な神話のレベルのものではなく、最も正確な、最も理学的な物理であるから、カタカムナ人のコトバの思念を、よくよく感受しなければ、わかりようがない。

なぜなら、カムとアマは、現代語の宇宙の現象界(この世)と、死後の霊の世界(あの世)の如き、異次元の世界というような、多次元の世界(感受の無い観念)では全く無いからである。

それ故、我々の生きている宇宙の環境、^{*カミ}則ち現象界を「アマ」ということはわかるとしても、あらゆるものの生命は、カムから発生する「ヤタノカ」であり、「フトタマノミ」である、という意味は、全くわからない。

まして、カムから発生したあらゆる現象物は、やがて、カムに還元する、という意味も全くわかりようがない。



いう意味であるが、「フトタマ ノ ミ」が「ミコト」になる
とは、どういうことか？

それは、後に「ミコト」というコトバが、漢字の「命」に当
てられているものがあるのをみても、それは、物のカタチ、則
ち個体の生命を意味するものと思われる。

則ち、ミの重合がくりかえされて生れた生命体は、「フトマ
ニ」として、生命が安定的に持続される、というサトリである。

第二首では「カミ」が図象符になっていたが、第三首では
「ミコト」が図象符で示されている。「カミ」について、重要な
コトバだからであろう。



* カタカムナのサトリでは、宇宙のあらゆるものは、すべ
て、カムから発生し、発生したものはアマである。

カムとは、「カ」とよぶ潜象が、六方環境に無限に存在する
という、カタカムナ人の感受に基く直観のコトバで、「カ」の総
称である。

「フトタマ」とは、カムの微分の力（則ちカタの力）と、ア
マに出る力（則ちヤタの力、アマに出た力は「ミ」とよばれ
る）のフト（フタツの重合）したタマである。（フトタマは、
マカタマとも、アマタマともよぶ。）

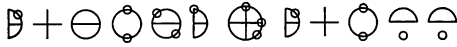
ここでは、それを「フトタマ」というのは、潜象から現象が
発生する実際の状態を、物理として示す為である。

「フトタマノ」とは、第二首の「ヤタノ」（ヤでタしてノしたも
の）といったものである。



則ち、第一首に「カタカムナ」の「カタ」と言い、第二首に、「ヤタノカが
カミである」と言った、その「カとミ」（則ち、カタの「カ」と、ヤタして
「ミ」になる「カ」）が、フトタマのフであり、そのフタツの重合した「フト
タマ」は、あらゆるものの始元・起源・根源（カミ）の粒子であり、「ヤタノ

✦ 第三首

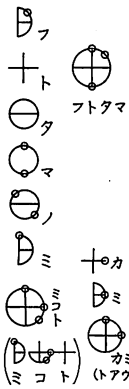


中心は  フトマニ図象

* 檜崎卓月解説 フトタマ ノ ミ ミコト フトマニ ニ

* 解説 ここでも、一字一字の歌詞を、一応、適当に切って、「フトタマ ノ」「ミ ミコト」「フトマニ ニ」とし、平列的に、つなげて解釈してみるが、それだけでは、カタカムナ人の思想は、くみとることは出来ない。これらのコトバを、重合的、融合的に合せて、カタカムナ人の思念に共振するように、スナホに感受する気持で、よんでみよう。（「フ」「ト」「タ」「マ」「ノ」「ミ」「コ」「ト」「ニ」等の声音思念については、十号59~64頁、及び第五・六首に詳述）

* 概要 * 宇宙（アマ）のあらゆる万物万象（タマ）は、カムとアマの、フタツの重合によって発生し、次々と変遷してゆくものである。そのノしたミの實質は、ミコトであり、フトマニとして、安定して定着されるものである。

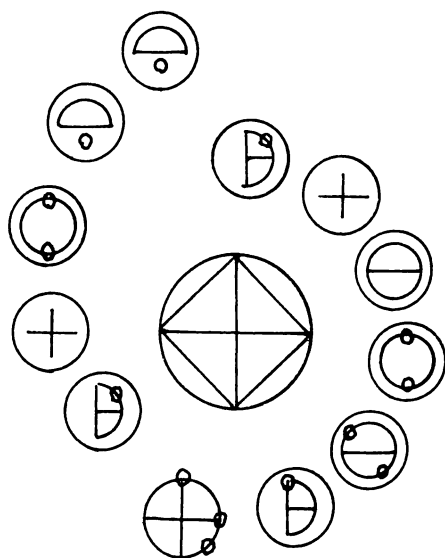


「フトタマ」とは、「フタツの重合のタマ」, 「タマ」とは「タしたマ」(球)の意味である。

「フタツの重合」とは、フタツの「カ」, 則ち、カムからタした「カ」と、アマの「ミ」になる「カ」との重合である。

「ノ」とは、フトタマの発生が、次々とつづいて変遷してゆくこと。

「ミコト」とは、そのミのくりかえし重合されたもの、と



「アリガタイ」「モツタイナイ」「オカゲサマ」等の思念^{コトバ}を持ちつづけていたから、他民族の文化とは異なる、日本の文化を、つくって来られたのである。

* 今、カタカムナの解説をしていて、つくづくと思うのは、カタカムナのサトリを、現代人にわからせることは、やはり、極めて難しい、ということである。

しかし、これこそ、人間にとって最も必要な、「人間のあるべきスガタ」の真実のサトリであるから、（それを知らなければ、生存を全うすることが出来なくなることを覚^{サト}った我々の祖先のカタカムナ人の伝えてくれた、人類の最高の思想^{サトリ}であるから、）このサトリに出合った者は、先ず、自分がその思想をわかり、実行^{ツツ}し、そして、他に、伝え^{ツツ}なければならない。

カタカムナ人は、表象物を造って教えたが、今筆者は、何とかして、わかる能力のある人を求め、わかるチカラを育成し、（極めて少数でも仕方がないから）わかる人に、わかって頂ける会誌を、書かなければならぬと、微力をつくしているわけである。

カムナ文献は埋没 してしまった。

そのわけは、天孫族の征圧により、カタカムナの伝承（図象符）が否定され、仏教や儒教や漢字を採用したことが、最大の理由であるが、そもそも、カタカムナのサトリは、人類の思想の最高度の物理であるから、それを正しく受けいれうる者は、いつの世にも極めて少いのである。それ故、カタカムナ人は、わかる者（少数者）を育成して、伝達したのであったが、そのカタカムナの図象文字を否定され、少数者を育成する文化を失い、仏教・儒教・漢字文化の中にあつて、カタカムナのサトリを正しく伝承することは、不可能になってしまったのである。

後代の古事記や神道の祝詞や、敗戦後発見された古代文字の書を見ても、「カタカムナウタヒ」は、神の名や、島や国の名として、単なる神話の類に変えられてしまい、表象物も、三種の神器として今日まで伝えられてはいるが、表象物の意味（カタカムナのサトリの本意）は、全くわからなくなってしまっている。

しかし、そのような後代の日本人の中にも、カタカムナのサトリの本意を正しく直観していた人があったと思われるのは、紀元800年代、齋部家所蔵「祝古詞、古世言見、比々軌真之統示」という、漢字の書があったからである。（前書7頁）

この書は、榎崎皐月が、戦後の、神田の古本屋街が、まだ露店であった時に、発見したものであるが、この種のもの、おそらく、全国的に探せば、必ずみつかるとは違いない。

この書は、漢字で書かれているが、その内容は、カタカムナのサトリの真意が正しく伝承されていたと思われるものである。

しかし、一たび漢字にうつされると、漢字の意味に引きこまれ、例えば、「カミ」は「神」に、「カムナガラ」は「惟神」に、「アマノミナカヌシ」は「天之身中零占」になり、カタカムナのカムナ・アマナの思念は消えて、伊邪那岐・伊邪那美・天之身中主神の神話と、なつてゆくのである。

しかし、カタカムナの文字は否定されても、カタカムナ人の造つた日本語を使いつづけて来た日本人の心には、カタカムナの本意が、何となく伝えられて、

しかし、ヤー、ホー、イヨー、オンヨー、ハッ、等の^{ヒトバ}コトバも、これらの声音の思念を知れば、何の違和感も無く、スナホに、ハヤシとして、楽しく観賞することが出来る。

(彼らの ヤー や ホー 等の^{ヒトバ}声音の^{サビキ}ヒビキを、我々がアワの心で受けとると(フト)、新しいイノチが発生(マニ)し、ヨイ気持になれるということである。)(四号「カムヒビキ」228頁)

＊ ヤタノカカミ、マカタマ、フトマニノツルギ は、「三種の神器」として、天皇家に伝えられた最も大切な秘宝であるが、なぜそれが大切な秘宝であるのか？ そのわけは、全くわからなかった。

カタカムナ文献の解説により、それは、カタカムナの表象物であったことが判明した。

カタカムナ人は、自分たちの開発した^{サトリ}思想を、何とかして子孫に伝えようと思ひ、(当時は、まだ、^{文字}文字という概念は無かった。)彼らはそのサトリの^{コトバ}コトバを示す図象符をつくり、「カタカムナウタヒ」とした。

しかし、そのカタカムナの^{サトリ}思想の物理は、(則ちカタカムナウタヒは、)一般大衆にわからせることは難しいので、^{指導的}指導的な少数者を育成して、^{伝えるもの}伝えるものであったのだが、しかしこのサトリの本意は、人間なら、誰でも知っていなければ生存を全うすることが出来なくなる、何よりも大切な^{マノスベ}規範であるから、一般大衆にも、何とかしてわからせなければならない。

そこで、最も根本的な大事な物理を、則ち、^{万物万象のすべての根源}万物万象のすべての根源を示す「ヤタノカカミ」と、そのカミが^{アマとカム}アマとカムであることを示す「マカタマ」と、そのマカタマからいただいた我々のイノチのチカラが、^{サヌキ・アワ}サヌキ・アワであり、^{その正反・親和の対向}その正反・親和の対向によって、我々の生命が完全発揮されることを示す「フトマニノツルギ」とを、^{表象物}表象物として、最も貴重な^鉄鉄を用いて造り、人々に、それを示しながら、オサが、その意味を教え、伝えたのであった。

＊ しかし、カタカムナの祖先の人々が、このような深い配慮によって伝えてくれたカタカムナのサトリの伝承のすべも、やがて、空しいものとなり、カタ

⊕ ダーレ
(トリサトリ)

目かくししたオニに、当てさせるのである。

⊖ D
ダレ

実に、ウマイ遊びを考えついたものである。

難しい説教では無しに、子供がよろこんで遊んでいるうちに、

人間にとって最も大事なサトリを（自分たちのイノチのカミの存在の^{ヨロコビ}畏しさと^{ナツクサツ}有り難さを）、おのずからに、感得させるものがある。

* 又、因みに、新年の能の「翁」の、一番はじまりに謡われるコトバに、次のような文句がある。

とうとうたたりたたりら、たたりあがりららりとう。

ちりやたたりたたりら、たたりあがりららりとう。

又、たえずとうたり、ありうとうとうとう、とんどや、そよや、りちやんや、等の文句もある。

この一聯の言葉は、一般には意味不明だが、舞楽の開幕曲の笛の譜の吟誦だとか、陀羅尼の誦文だとか、何かの呪文だ等といわれているが、そのようなものでは決して無い。

カタカムナの四十八のコトバの思念を知り、カタカムナ人が「ヤタノカ」「フトマニ」といった^{マコト}真意がわかってくるにつれ、能の最も古いカタチの中に残されたこれらのコトバの意味が、何らの理屈もなしに、スナホにわかって来たのである。

これは、マサしく、カタカムナ人の^{サトリ}感受した^{フトマニ}生命^{スガタ}発生の物理を、アリノママにウタったものに違いない。

現在でも、日本の民謡には、「ヨイヤサ」とか「ヤートナーソレヨイヨイヨイ」とか「ヤレマカショー」とか「ナンジャラホイ」とか……、漢字にならず、字引にもないが、しかし誰でも知っているコトバが、たくさん使われている。

日常の言葉にも、トツオイツ・シンドイ・アッケラカン・ヤットノコト・ウンザリ等々、漢字にできず、字引にも出ていない日本語が無数にある。

能のハヤシのカケ声も、西欧的な音楽や演劇の観念では、全く、わけのわからぬ奇妙なものである。

そしてその三角形を スベラセ て、マワシ て、メグラセ てゆくと、立方体 (カゴメ) が出来上る。

フトマニ図象の三角は、このことを表象しているわけである。

なお、「カゴメ」とは、籠の目をつくることだが、「カゴメカゴメ」と歌うのは、オニになる子をまん中にしゃがませて (カゴマセて)、そのまわりを、皆で手をつないで廻りながら、「囲みましょ」 「カゴミなさい」と歌う意味にもなるのである。

「カゴノナカノトリ」の「トリ」とは、『重合して離してゆく (分裂発生する) もの』、わらべ歌では「籠の中の鳥」である。

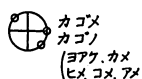
「ヨアケノバン」とは、『夜が明けて朝になったものの、まだ晩だ』ということで、その「トリ」(発生^{ツル}の場) は、ハッキリ見えぬ 潜象過渡の状態 である、という意味。「ツルとカメがスベッタ」の「ツル」と「カメ」とは、フトマニ図象の三角形を表現している。「ツル」とは、フトタマの サヌキ、カメとは、アワを意味する。

古来、日本の文化では、ツルとカメが、おめでたい時の象徴として使われているが、その根源の根拠は、ここ (フトマニのサトリ) にあったのである。

「スベッタ」とは、発生したもの (トリ) の進行方向 (スベ) は、四方に個々に出る、則ち「スベッタ」というわけである。(カタカムナウタヒ第五首では、「マワリテメグル」といっている。)

「ウシロノショウメン ダーレ」とは、『後向きになって見えないけれども、本当は、自分のマ正面にあるモノ、それは何か?』ということである。

実際の遊びでは、じゃんけんに負けて、オニになり、目かくしをして中央にしゃがんでいる子の囲りを、皆が手をつないで廻りながら、丁度、「ダーレ」と歌い終った時、一せいに止ってしゃがみ、オニのマ後ろ^{ウッロ}の位置にしゃがんだ子の名前を、



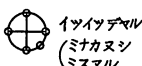
カゴメ
カゴノ
(ヨアケ、カメ
ヒメ、コメ、アワ)



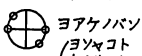
ナカ
(アナ)



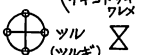
トリ



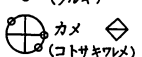
イツツデマル
(ミナカヌシ
ミスマル)



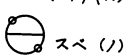
ヨアケノバン
(ヨソヤコト
ホノサワケ
イキコトサキ
アワ)



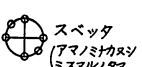
ツル
(ツルギ)



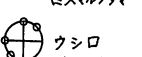
カメ
(コトサキワレ)



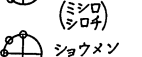
スベ (ノ)



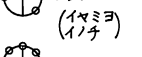
スベッタ
(アマノミカヌシ
ミスマルノタマ)



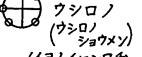
ウシロ
(ミシロ
シロチ)



ショウメン
(イマミヨ
イノチ)



ウシロノ
(ウシロノ
ショウメン)



(イヨノイマシロチ
イマミンギサネ)

* 日本には、古来、多くのわらべ歌が伝えられて来たが、それらは、単なる遊びというよりも、子供の心に、ただならぬ コワイ思いを感得させる為の配慮があった、と思われるふしがある。

コワイといっても、西欧的な怪奇惨虐の恐さではなく、^{オソ} 生命的な畏れである。「通リゃんせ」とか「花いちもんめ」とか「子をとろ子とろ」とか……殊に「カゴメ カゴメ」は、昔から、全国的に歌いつがれ、今の現代子でも、ほとんど知らぬ者は無いほどである。

しかし、その歌の意味は、誰もよくわからない。わからないながら、何となく、心にとどまるものがある、忘れられないのである。

それはなぜだろう？「カゴメ カゴメ」とは、「カゴノナカノトリ」とは、何だろう？「ヨアケノパン」とは？「ツルトカメ」とは？「ウシロノ^{ジヨウメン}正面」とは？……思えばフシギなウタである。

カタカムナに出会い、四十八の日本語の思念の意味がわかって来て、このわらべ歌をつくった人の気持がわかる気がして来た。

日本のわらべ歌は、子供たちの単なる遊びの中で、子供自身が作ったものではない。^{オトナ} 親たちが作り、教えて、歌わせたものである。

筆者は、カタカムナを教えられ、カタカムナ人の生き方、子供の育て方の心を知らされ、そしてその心が、日本の文化となり、そのヒトツが、わらべ歌になって伝えられた、ということがわかったのである。

* カゴメカゴメのわらべ歌は、カタカムナの「ヤタノカカミ」と「フトマニ」のサトリの心で、作られたものに違いない。

「カゴメ」とは、三本の竹で、籠の目をつくることであるが、「三本」とは、フトマニの「フ」(^{サキ}正と^{アサ}反の「カ」)と、「ヤタノカ」の^ト重合によって、フトマニの「ミ」が生れるというサトリを表している。

則ち、^{カゴメ} 籠を作るにも、一本の竹では、何もできない。

二本が、ただあっても、何もマトマラない。

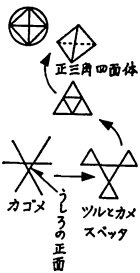
二本が^ト十して、そこに、もう一本が^ト重合した時、^トはじめて、^ト三角形のカタチが作られる。

ヤタノカカミ図象は、第二首と、あとの大部分（七十一首）の渦巻の中心におかれている。

カタカムナの 四十八の声音符の原型 であり、カタカムナのサトリを象徴する表象物図象である。この図象の形をカタカムナ人は、鉄で造っていたものが、後に「八咫の鏡」になったのである。

フトマニ図象は、八十個の渦巻のうち、第三首を含む七個の渦の中心に置かれている。

この図象符は、フトマニ、則ちカミの力とミ（カムとアマ、アワとサヌキ）の対向発生（正反親和）の物理を意味すると思われる。



「フトマニ」の表象物が、三種の神器の「ツルギ」（剣）となったのは、対向によって発生する、というコトバの意味からであろう。

対向とは、相対する、向いあう、という意味であるが、物理的にいえば、対向にも正と反があり、敵として対するか、味方として対するか、がある。

相対して重合するのは、サヌキとアワの最高の親和を意味する。

（現代語でも、男女の親和の状態を「ツルム」という。）

剣を、その正反親和の表象物としたのは、剣は、片刃の（切る為の）太刀とは異り、両刃である。両刃の剣は、相手を切る為では無く、最高の親和・平和の象徴とされたのである。

フトマニ図象は、その剣の断面（正反對向のカタチ）を示すものと思われる。

古事記の頃には、もう太刀と剣の区別は失われ、混同して使われているが、三種神器の宝剣は、本来は、この「フトマニのツルギ」の象徴物であったと思われる。

因みに、フトマニの図象をよくみると、物質の最小の立方体、則ち正三角四面体 が示されている。

又、カゴメカゴメのわらべ歌の ツルとカメ の原形は、ここにあったと思われる。

受されなければならないのである。(現代科学とカタカムナの「直観物理」三号～六号)

カタカムナの証明については、カタカムナ人が力とよんだ^キ潜象^{カクワリ}の存在を、我々も感受し、それが、我々のイノチの授かり(カムウツシ・アマウツシというもの)であることを実感し、要するに、我々読者自身が、それによって、心身ともに健康で豊かな寿命を享受できるようになることが、とりも直さず、科学的手段では証明できぬ、カタカムナの、真実の証明に他ならぬのである。

＊ カタカムノウタヒの第一首は、カタカムナの根本原理(マノスベシ)を示し、第二首は、カタカムナの「カミ」、則ち潜象「力」のサトリを、第三首は、潜象過渡と現象のサトリ、則ち「フトマニ」の「ミコト」(命)のサトリを示している。

「マノスベシ」と「カミ」と「ミコト」と「フトマニ」は、カタカムナの最も大事な^{コトバ}命題であり、第四首から、その物理を、述べることになる。

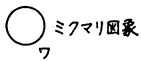
なおカタカムナ人は、いくつかの表象物をつくっていたが、図象符としては、ミクマリ図象、ヤタノカカミ図象、フトマニ図象があり、八十首の渦の中心に、そのいずれかが置かれている。

又、表象物としては、マカタマ、ミスマルノタマと、フトマニのツルギがある。(三・四号、カタカムナ人の表象物 ヤタノカカミ 三号32頁～、フトマニ 42～頁、図象文字と数字記号 50頁～)

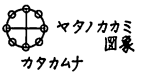
因みに、第一首の渦巻の中心は「ミクマリ」図象であり、第二首は「ヤタノカカミ」図象、第三首が「フトマニ」図象である。(十号 28頁)

ミクマリ図象は、第一首と第十五首のみであり、声音符では「ワ」である。

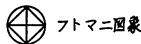
これは現象^キに出^スること、又、出たもの。則ち、アマ宇宙球全体、又はアマに発生したあらゆるものが、全体としてワしている、(科学でいえばコロイドの、)状態を意味する。



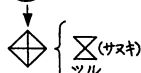
ミクマリ図象



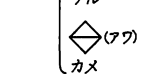
ヤタノカカミ 図象
カタカムナ



フトマニ図象



(サスキ) ツル



(アツ) カメ

(ツルギの断面)

「発見」といってよいであろう。

しかし、「大変な発見」であることがわかったといっても、今は、解読者 檜崎卓月の仮説（独断）にすぎない。

檜崎卓月は、カムアマの「始元量」といつている。（三号 直観文明カタカムナ 直観物理に於る物性論）

それは、潜象であるから、直観の潜象物理によって、その存在が証明されるしかない。

潜態ながら、正孔や原子核のような、「ミ」の状態のものは、現代の科学的手段では検出することはできぬが、その存在を、理論的に証明することは出来る。

しかし、「ヤタノカ」（カム・アマ始元量）の存在を証明することは、現代科学の能力では、不可能である。

カタカムナ人の開発したカムアマ始元量の潜象物理が真実の物理科学であることを、どうすれば、現代人にわからせることが出来るか？

* 『力 というものは、我々の生命の根源であり、そのチカラを受けなければ、我々は生存できぬという、何よりも大事な（アリガタイ）モノである』といっても、しかし、そういう感じだけならば、『神がすべてを創り給う』という宗教でも、又、現代のニューサイエンスの「宇宙生命」という思想でも、何となく、似たような気持をもっているかもしれない。しかし、その程度のものであれば、物理的発見とは言えない。

カタカムナ人の 力 の認識は、所謂原始人的な、神話的な、神秘思想的なレベルのものでは全く無く、最も正確な、理学的な、潜象物理として究明されたものであるから、科学の発見と同じ価値があるというのである。

しかし、その 力 の潜象物理の 真実であるという証明は、現象科学の物理法則のように、客観的に示すことは出来ない。

それだからこそ、檜崎卓月の解読したカタカムナ文献を読者が読んで、カタカムナ人の開発した四十八のコトバで示された思念を、読者自身の感受性で、感

今にして思えば、それほど、何度も繰返した、ということは、それが、よほど大事なコトバであり、そのコトバの意味を、何とかしてわからせようという、カタカムナ人の思いがこもっていた、ということだったのである。(「カタカムナ」とは何か? 23~頁)

カタカムナ人が発見して「カム」といい「カミ」といい、「カタ」といい「カムナ」といい、そして又、「チカラ」「カタチ」「スガタ」「カシラ」「カヅ」「カゲ」「カゼ」「カホ」「カビ」「カエシ」「カン」等という日本語を造り出した、そのモトにあった力 というモノは、実は、あらゆる生物が、それを受け、それによって生存を保っているモノであって、自然の動植物も皆、それを感受し、刻々に、それを受け場をつくることで生きている、という、生物にとって最も大事なモノである。

その大事なモノを、動物たちは皆、本能として知っているが、それを認識に出し、コトバに表現することは無い。

しかるに、カタカムナ人は、人類のみに進化した脳の能力を最高度に発揮して、自分たちの感受しているモノを認識に出し、それを力と称し、「カタカムナ」というコトバを、つくり出したのである。

そして、「カム」(無限量の潜象)が、「カミ」(カム^マア^マの始元量)として発現し、様々に変遷する状態を、直観し、抽象し、分類して、四十八のコトバを、造っていたのである。

* 現代科学はチカラの個々のカタチ、則ち電磁力・万有引力・位置エネルギー、又は力学的・運動・熱・化学的エネルギー等とよばれるものについての研究は進んでいるが、力の統一場の原理は、則ち、カタカムナ人が力とよんだモノの潜象物理は、未開発(まだ発見していない)のである。

それ故、カタカムナ人が、力とよんだモノの存在を認識に出した(気がついた)ということは、まさに、大変な発見というべきである。(これは、『宇宙の万物万象は神が創り給うた』というような、後代人の神話の次元のものでは決して無い。)

潜象であっても、確かに存在するものを物理量としてみつけたのであるから、

科学のまだ知らぬことまで、則ち、組織や器官や、遺伝子の生命活動の現象のチカラのメカニズムを解明したのみでなく、その生命活動を起させているモノ、則ち遺伝子を発現させ、制御させ、それぞれの組織や器官を構造させ、調和的に働かせるに必要な酵素やホルモンや栄養物質や免疫作用を発生させる等の潜象の生命活動の物理まで、直観していたのである。

脳は、感受に基いて働くものであり、カタカムナのサトリは、カタカムナ人の鋭い感受性が、精妙に感受したものを、彼らの脳が、正直に、抽象して、判断したものである。

彼らの直観は、地球物理や宇宙天体の天文学の分野にも発揮されている。
(古世言見 比々軌 真之統示 四・五号)

顕微鏡も望遠鏡も測定器も無かった時代に、どうして、彼らは、ここまでわかることが出来たのか？

それは、ひとえに、彼らの感受性が、マツトウに鍛えられたからである。

感受性とは、生命のチカラであり、アワの性である。脳は、感受に基いて、それを抽象し、判断するサヌキのチカラである。

サヌキは現象に出るチカラであるから、科学も、現象の物理は微細に解明することが出来る。しかし潜象のアワのチカラの方は、気がつかない。

生命の物理は直観によらなければ解明出来るものではない。

直観とは、生命のチカラのアワの感受に基く脳のサヌキの判断である。

「カタカムナ」は、上古代人が直観した、生命の潜象の物理である。

＊「カタカムナ」というコトバは、「カタカムナウタヒ」には、しきりに出てくるので、私共も、勉強をはじめた頃は、まるで、後代の民謡の間の手かお囃子のような気がした。

私共が、上古代の日本列島の先住民を、「カタカムナ人」とよぶのも、彼ら自身が自分たちのサトリを「カタカムナ」と称し、しきりに「カタカムナ」というコトバを繰返していたからである。

のか？ という理解は求めず、子供が親に教えられて、スナホに、神の前に手を合せて拝むような気持で、又原始の人々が、何も理屈をいわず、無心に神を祈るように、「神」の存在を信じるのが、最善の態度とされている。

もし、それが出来れば、けっこうである。

しかし、実際には、^{アタマ}観念では子供の心のように無心になればよいのだ、とわかっていても、生物的なカミの感受性を失った現代の知識人が、「神」の存在を、理屈なしに信じて、信仰を全うするということは、極めて難しいことである。

彼らの宗教には、「神」とはどういうものかという、カミの感受の説明が無く、「神」の物理を知ろうとすることは、むしろ、信仰の妨げとされている。

それ故、^{スナホ}純粹に「神」の存在を信じ抜こうとすれば、たえず自分を責め、懺悔し、^{サンマイ}観念の陶醉（瞑想）によって、救いを得るしか無いのである。

カタカムナのカミの救いは、そのような（懺悔や観念の陶醉のような）無理な努力をする必要は全く無く、あべこべに、自分の感受性を鍛えて、（観念を陶醉させるのでは無く、逆に、）カミの存在を、ハッキリと、正しく認識に出させることにある。

カタカムナ人は、何よりも先に、生命のカミの存在を示し（ヤタノカカミカタカムナカミ）、自分たちの知り得た、生命のカミを受けるサトリ（フトタマノミ、アマウツシスベ・カムウツシスベ・マノスベシ）を、教えてくれていたのである。

これこそが、真の救いではないか。

* 私共は解剖学を勉強して、現代科学が、生命体の器官や組織の生命活動の状態を、細胞レベルで解明し、遺伝子の発現のメカニズムまで、つきとめていることを知らされ、その精妙さに、そして科学者がここまでつきとめたことに、驚いたが（ゲーテは『神の仕事場』といていた）、しかし、今、カタカムナを勉強して、カタカムナ人が、その精妙な物理を、自分の感受に基いて、正確に直観していたことを知らされ、真に驚嘆している。

しかも彼らは、現代科学の解明したレベルの精妙な物理を直観したのみでなく、

* 後代人の「神」という観念も言葉も、まだ、何も無かった時代に、カタカムナ人は、最も大事な生命の根源を、「カ」と「ミ」則ち「カタ カムナ カミ」と、表明していた。

それは、後代人が^{アタマ}観念で考えた、実質（根拠）のない「神」では決して無い。

彼らは、実際に、自分たちの生命に力カワリ、自分たちの生命を生かしているモノの存在を感受し、その感受に基いて、あらゆる自然の生命活動のsgataから、相似象的に、カム アマの 潜象の物理を直観したのである。

それ故、神の属性は様々に並べたてるが、神の本質についてはマトモな物理（根拠）をもたぬ、後代人の「神」は、同じカミというコトバであっても、カタカムナの「カミ」とは、根本的に異なるものである。

カタカムナの「カミ」は、『神はすべての創造主である』というような、ぞんざいな言い方と、ギリシャ神話や聖書やベーダウパニシャッドのような内容しかもたぬ「神」では無い。四十八の物理^{サトリ}と八十首のウタヒ^{マノスベ}をもつ、「カタカムナ カミ」なのである。

* このように、民族の文化としては、「神」の思想は、カタカムナのカミの思念とは違うといわねばならないが、しかし、実際の個人の感受性としては、カタカムナ人と同じような気持で神様を拝んでいる人はあると思われる。

キリスト者の中にも、仏教者の中にも、又は様々な宗教や思想をもつ人々の中にも、例えば、病や精神の悩みの絶望の極、危うく死にかけた時、自然の景色や植物の姿を通して、生命の根源のカミの力カワリを、深く感じとって生きついで、というような経験をもつことがあって、カタカムナ人の発見したカミ、則ち、自然の動物たちが、皆、感受して知っている、自分の生命の根源^{カミ}に対する^{メナカ}純粋な感受性をもって、神を信じ、神に祈る心で生きているという人が、あるに違いない。

このような生物的な生命のカミの感受があれば、^{アタマ}脳がカタカムナのサトリを知らなくても、カミを畏れ敬うアワの心（感受性）を鍛えて、マノスベに生きる救いを得ることが出来る。

それ故、キリスト者でも仏教者でも、神道者でも、「神」とはどのようなも

ま」といわずにいられないのである。

「心」という字にしても、「心中」「心配」等と言いながら、どうしても「ココロ」といわずにいられないものがある。

「命」も、「生命」と言いながら、どうしても「イノチが大事」「イノチがけ」等といわずにいられない。

ほとんどの文字に、オンとクンの二つのコトバがある、という、日本語の不思議の原因は、まさに、ここにあったのである。(日本語の特殊性 感受性について補遺 4 319 頁～)

* 則ち、「カミ」というコトバには、「神」だけではなく、起源・根源の意味があるのは、あらゆる現象物質(宇宙の万物万象)の発生・変遷の「カ」(生命力)は、「カ」と「ミ」(カムのカとアマのミ)であるという、カタカムナ人の造語の思念から出ている。

「カミ」とは「カ」の「ミ」であるが、それは、「カ」と「ミ」である、という思念である。(具体的にいえば、カムナとアマナのチカラである。)

「カ」とはカムの「カ」であり、「ミ」とは、「カ」の実質、則ち、カからタしたマの、ヒ フ ミの、フトの「ミ」である。(第三首フトタマノミミコト)

要するに、「カミ」とは、カムとアマの「カ」であるから、すべての起源なのである。

我々の生命体に、天然給与でカムウツシ・アマウツシされる生命力の根源の実質は、カムとアマのチカラである。

則ち、我々の生命力の アワとサヌキのチカラのモトは、カタカムナの「カミ」(カとミ)である。というサトリの表明である。

我々現代人は、「カミ」といえば、「神」という先入見があるから、カタカムナの「カミ」というコトバも、その通念で読んでしまうが、カタカムナ人には、「神」の観念は全く無く、後代人のような、天地・万物の創造神のような観念の思想とは、全く次元の違う発想をしていたことを、スナホに、考え直さなければならない。

今、筆者は、自分のわかり得たことを、出来る限り書いてあるが、しかし、いかに懇切に説明しても、読者に、今直ちに「カ」を感受して頂くことは出来ない。

それ故、「カ」を感受できるようになる為の方法を、(筆者の経験の限りを、)述べているのである。

私共は、カタカムナに出合ってから、気がついてみたら、はや十年、二十年、経ってしまっていた、と、おどろく有様であったが、読者の中には、十年も二十年もかかるのでは、と、イヤになる感情を持つ方もあるかもしれない。

しかし、どうせ十年・二十年は生きるのだから、その日々を、(イヤなサヌキは出さず、)カタカムナの思念を勉強する気持ち(カタカムナ人の教えてくれた「カ」を、自分も、ホントウに感受したいと思うアワのココロ)を起励して、自分の感受性を鍛えて、生きてみて頂きたい。

＊「カミ」というコトバは、後に、(大和朝成立後)、漢字を採用し、「神」という字が当てられた為に、「カミ」という上古代語の思念は薄れ、「神」の意味が混入した。

しかし、当時の日本人は、「神」という字を、「しん」とだけよむことに満足せず、「神」の意味の他に、「カミ」という声音を保って、ものの起源、則ち、川上・水上、その祖先は、生命のカミ、等と、使ったのである。

そもそも、ほとんどの文字に二つのよみ方(オンとクン)がある、という例は、他の民族にみられぬ、日本語の特色であるが、そのわけは、他の民族の文字を採用した為に、その民族のもつ思念と、日本人のもつ思念とが、微妙に違うものがあつたからである。

オンは漢字の発音、クンはその意味の翻訳であるともいえるが、もし、その意味が全く同じものなら、コトバにして二つ持つ必要は無い。

異なるものがあるから、例えば神道と言いながら、一方で「カミのミチ」(カンナガラ)「カミ頼み」「カミがかり」「カミわざ」「カミかくし」「カミ代」等といわずにいられない。神社におまいりしても、神様とはいえず、「カミさ

も考えるも、内臓も手足も^{カタチ}身体^{フタトモ}のすべてが、生きているということは、ヤタノ
○カと、アワとサヌキとの対向発生ならざるは無いのである。

宇宙の万物万象は、すべて、この「カタ カムナ」の相似象である。

カタカムナの先人は、よくぞ、「カ」という^{サトリ}もの、「ヤ」という^{サトリ}思念、「タ」という^{サトリ}思念、「ノ」という^{サトリ}思念を物理として認識に出し、コトバにして示してくれたものである。改めて驚嘆の念を深くするばかりである。

* このように、カタカムナ人の^{ウツヒ}コトバが、自分の感受によって、少しずつ、
読めるようになってくると同時に、憚りながら、筆者自身の^{カガチ}生命体^{チカラ}の生命活動
の状態が、則ち心身の健康状態が、(体力は、年令相応の衰えを感じるのは当然の
ことだが、そしてその為に、時折、^{カガチ}生命体のどこかの「チ」が、正常に発
生せず、イマのイノチがうまく続きにくくなるのを、感じることもあるが、そ
して又、現在も、昔の古傷(骨折や肺炎や心臓など)の^{イタデ}名残りをあちこちにか
かえてはいるものの、)全体として、現実の心身の体調の健康度は、かつて経
験したことの無い^{スココカ}快的さを、かみしめている。世間では、年をとれば身体^{カガチ}のあ
ちこちは痛み、病気がちになるもののように思われているが、全く逆である。

そしてこのことは、筆者と共にカタカムナの勉強をしている、(師のバトン
を受けつぐ、)一人、二人・三人・四人の上にも、生じている。

たとえ一人でも、(檜崎卓月ひとりから、筆者ひとりへでも、)カタカムナを、
ミを以て(感受によって)わかる者が出た、ということは、しかもそのパト
ンが、一人二人三人四人、の上にもうけつがれているということは、現代人でも、
やればできる、ということの証明である、といっただいである。

釈迦・孔子のような聖人でも、自分と同等の^{サトリ}体験を、ただ一人の弟子にも、
わからせることは出来なかったことを思えば、このことは、非常に有り難いこ
とである。

カタカムナ文献解読の書に、一般常識に反して、このような個人のうちわの
ことまで書くのは、カタカムナは、一般常識の^{サトリ}観念の書では無く、あくまでも、
ウツシ マツル べき(生命の直観鍛練の)書であるからである。

現実の判断行為を出す サヌキの^カ生命力のことは、誰でもわかり易いが、(と
いうより、何となく、我々の生命力はそれだけだと思っているが、) そのサヌ
キを出させる アワの^カ生命力のことは、最もわかり難いものである。

まことに、生物は皆、自分の アワのチカラだけのサヌキを出して、生きてい
るものであるのに、だから、自然の動物たちは皆、自分の アワ(感受性)を一
生鍛えつづけて生命を全うしているのに、人間だけが、その、最もアタリマエの
本能(生物の基本態度)を、^{アツレ}失ってしまったのである。

しかし、そんなことが、無事に ゆるされる筈が無かったことは、現在の人類
の 困った状態(心身の病弱)に、明らかに示されている。

しかるに科学者も宗教者も、誰も、その 真の原因に、気がついていない。

それ故、その困った状態(病気になったり、四苦八苦の状態になったもの)
を直すにも、真の原因を知らぬから、応急処置をするだけで精一ぱいで、対象
療法的に、異常バランスをはかることしか出来ないのである。

現代人にとって、「アワ」は、それほど、わからない^カものである。

それというのも、アワは^カ生命力そのものであり、生命力とは、「カ」から発生
した我々の^カ生命体に与えられる「カ」のチカラ(ヤタノカ)である。それ故、
「カ」の感受性を失った現代人には、最も気がつかない(わからない)ものにな
ってしまったのも、無理も無いわけである。

カタカムナ人は、その「カ」の存在に気がつき(発見し)、「カ」の物理を示
してくれていたのである。

「カ」とは、我々の生命の^カ根源であり、今日まで、宗教も哲学も、説明でき
なかつた真の「神」の正体である。

カタカムナに出合った者は、(カタカムナを勉強するということは、)「カ」
をわかつことが、根本である。

則ち「カ」を感受する感受性を^{ロミカエツ}鍛えもつことがなければ、意味が無いのである。

* 我々の 生命活動は、すべて、立つも歩くも食べるも寝るも、感じるも思う

た現象粒子によって、構成されている。

そして、ヤでタした「カ」は、現象の生命体の中に入っても、潜象のままの「カ」(アマナ・カムナ)として存在し、「生命力」(アワ性・感受性のチカラ)となっている。(生命体は現象だが、生命力は潜象のまま存在する。)

「カ」というものが、このような物理としてわかった時、筆者は、はじめて、カタカムナ人が、「ヤタノマ」とは言わず、「ヤタノカ カミ」といったわけが、明らかに、うなずかれたのである。

「カ」は、現象に出ても、「カ」(潜象)である。

* 「カ」が「マ」に変遷して(ヤタノカ)、「カタチ」が構造されると、その質量(オモダル)なりの機能(生命力)が発生する。

則ち、「カ」が変遷して「イカツ」が構成されれば(イカツミ・マクミ・カラミ)、電気粒子の機能(カタチ)をもち、更に、「ハコクニ」が構成されれば、その質量によって、水素・ヘリウムから炭素・窒素・酸素……等の原子・分子になり、更に構成されて糖・リン酸・脂質・アミノ酸・核酸等となり、遺伝子・蛋白質・酵素になり……それなりの機能(カタチ)をもち、様々な生命体を構成し、それなりの生命力をもつわけである。

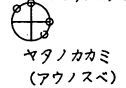
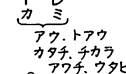
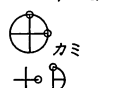
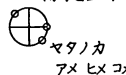
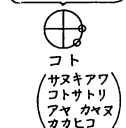
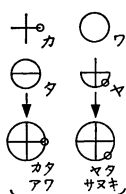
したがって、その生命体(カタチ)の構造は、無限的に多様性であるが(実際、アメーバから人類まで、地球の自然現象から宇宙の天体まで、その多様性は驚くばかりである)、相似の構造のものは、相似の性質(ナリ)をもち、相似の機能(カタチ)をもつ。

生命現象は、生命活動の現象の持続(カタチ)であり、「カ」の変遷のすがたである。

要するに、生命現象とは、「カ」の変遷物(生命体)の構造(カタチ)が、機能(カタチ)をもつ、というだけの物理であるものを、その根源の「カ」の物理がわからない為に、科学は、現象(生命体)の構造(カタチ)と機能(カタチ)を、分析的に極微の次元まで、つきとめるだけで精一杯であり、哲学思想では、現実の生命体(カタチ)と生命力(カタチ)の根源を、主体的なものとして求めて、霊・魂・アートマン・プシケー、オーム、神・仏・天・太極・宇宙生命、プラナー、気、等がソレだ、と錯覚しているのである。

よようになったのである。

* カムからタしたカムナの「カ」は、^{チカツ}潜象のママであるが、「カ」がタして持続すると、「カタチ」(現象の形)をもつ。則ち、「ヤタノカ」(現象に出ても潜象のままの「カ」)は、「カタチ」(現象の形態)の「カミ」である、というのが第二首である。なぜ、タした「カ」が「カタチ」(現象の形)をもつのか？



それは、「ヤタノカ」の「カとミ」の「カ」(潜態のチカラ)のフタツが重合して変遷すれば、(則ち正反対向発生を続けられれば、)現象粒子の「ミ」(ミツゴ状態)となり、更にそれが対向発生をくり返せば(カタチ サキ)、生命体として現象界に定着される、というのが第三首である。

カタカムナ人は、「カ」(潜象)が「カタチ」(現象)になった最初のモノ(フトタマ)を「ヒ」とよび(すべてのハジマリのカムアマ始元量)、第五首で、「ヒ」から現象粒子の発生の物理を示している。

* 我々の生命とは、(靈魂のような観念のものではなく、)命の「チカラ」の^{イノチ}アワと、命の「カタチ」の^{イノチ}サヌキである。「カ」が、現象界に出て、「カタチ」(生命体)と、「チカラ」

(生命力)になるのである。

「カタチ」というコトバの思念は、カがタして持続すること。

「チカラ」は、持続する力のあらわれである。(「カタチ」も「チカラ」も、直訳できる外国語は無い。なぜなら、「カ」の認識が無いからである。)

「カ」は、ヤタノ「カ」則ちアワのチカラとなり、現象の「カタチ」の「ミ」をつくり出すサヌキのチカラになる。

その「カ」(アワ)と「ミ」(サヌキ)のフトマニが、命なのである。

要するに、我々の現象の「生命体」は、カムからタして、次々と変遷し

ということは、実際の身近かなことでいえば、例えば、自動車の運転一つでも、水泳や、又はピアノやバイオリンをはじめ、あらゆる芸術や技能の習得についても、それに関する智識や理論を、^{アタマ}観念がいかによく学習したとしても、実際の感受性の鍛練がなければモノにならないことは、誰でもよく知っている。

ところが、最も大切な、自分自身の実際の日常の生活に於て、生命活動や精神活動をマッソウに行きたくするには、何よりも大事な生命の根源の^{カミ}感受性の鍛練がなければならぬ、ということに、今日まで、我々は、気がついていなかったのである。

カタカムナの先人は、それをこそ、教えてくれていたのに、現代人は、その感受性を失ってしまっていたのである。(フトタマノ ミ ミコト フトマニニ)

しかしながら、現代人の感受性は劣化したといえども、感受性の無い者は無い。

それ故、その気になれば、(教えられて自分の脳がこのことに気がつけば、)自分で自分の感受性を教えかえして、その大事な感受性を、よみがえらせることは、決して不可能では無い。

榎崎皐月が、その実証の第一人者であり、私共はその実験のバトンを受けつぐ者である。

私共は、師の説明をよくきいて、先ずその物理を^{アタマ}脳で正しく理解することに努めると同時に、^イ脳から感受性を教えて、自分の感受性をせいーばい鍛えていたら、十年二十年経つうちに、筆者のような者(戦前の女学校しか出ぬ、ただの主婦)でも、カタカムナ人の示してくれた潜象(カ)の物理が、少しずつ、自分自身の感受(直観)によって、わかるようになって来た。

そして、最初に、不思議でならなかったこと、則ち、「カ」からタしたもの、現象界に出て、どこまでも潜態であるものと、現象粒子に遷遷するものがある、という物理は、「カタカムナ」(第一首)、「ヤタノカカミ」(第二首)、「フトタマノミミコト」(第三首)として、カタカムナ^{カミ}文献のはじまりに、最も大事な根本原理として示されていたことを、明らかに、読みとることが出来る

どうしても、不思議でならなかったのである。

要するに、「カ」というモノが本当にわかっていなかったからである。「カ」は、いくらコトバで説明されても、(観念では理解しても、)自分の感受性がそれを感受できぬ限り、わからないものである。それ故、観念の理解で満足する(わかった気になる)者は、自分が「カ」をわかっていないことに気がつかない。

しかし、「カ」は、本当に実在し、イマ・イマに、現実の我々の生命体に、かかっているモノであるから、カタカムナ人はそれを感受し、その物理を知り、そのサトリに基く文化を造っていたのである。

しかし現代人には、カタカムナ人のような感受性は無い。

潜象(カタカムナ人が「カ」とよんだモノ)の存在は、科学もまだ発見していない。

しかし「カ」は、人間のみならず、いやしくも生物は、それをマトモに感受しなければ、生存を全うできぬものである。

我々も、(犬も猫も……あらゆる生物は、)今も、つねに、それを感受して生きている。

ただ、人間の脳が、認識に出していないだけである。

* 今、筆者が、感受が大事、感受がなければ本当にわかることが出来ない、感受性を鍛えることが生きることだ、等と、繰返し言わねばならぬのは、我々現代人が、進化した脳に邪魔されて、この、生物にとって何よりも大事な「カ」を感受する感受性を、甚しく失っているながら、そのことの危険さに、脳が、気がついていないからである。

凡そ、我々人間が、ミを以てする現実の生命活動の、(親子・夫婦・家族・友人をはじめとする様々な人間関係や、職業や才能や、日常の私生活や家事等に関する、)あらゆる問題を、うまく解決し処理して生きてゆく為には、進化した脳の能力(知識や宗教や健康・道徳の教訓)を鍛えただけでは、マトモな判断行為を出して生き抜くことは、不可能である。

アマハヤミとは、「カ」のカカワリの早さである。

榎崎臯月は、「カ」の伝達には、方向性はあるが、速度は、光速以上の、累乗指数的な超光速で遠達するから、ベキの数は、(8・9どころか、)百・千・万をつけてもよい。則ちどんな早い速度よりも早い、即時だから、対向発生(フトマニ)というのだ、といていた。

なお、「カ」の伝達はアマハヤ(即時)であるが、その途中に、発生があれば、「イカツ」(電気粒子や光粒子や電磁波)を発生し、その速度は光速となる。(光速の突破 今、見る星の光は何億光年前の光では無い 八号 163頁~)

(「カ」はもとより、「アマハヤミ」の物理も、科学は、まだ、開発していない。)

* 因みに筆者は、榎崎臯月から「カタカムナ」というコトバの意味を教えられ、「ヤタノカカミ」という潜象と現象のサトリを教えられた時、生れて始めて潜象の存在を知って、いたく驚いたが、そして、その潜象から、現象が発生する対向発生の物理は、今までの人類の思想経験には無いことであり、現代の科学の最高度の智識でも、理解できぬものであるから、筆者の如き凡人には、全くハのたたぬ、取りつくシマもない、途方にくれる思いであったが、しかし「難しい」とも、「わからない」とも、言っているスキは無かった。

なぜなら、最初から、カタカムナのサトリの正しさの(マ違いなく本ものであるという)予感(共振を感じるもの)があったからである。それ故、全くわからなくても、いささかも疑うことはなく、ひたすら、榎崎臯月の伝受(至上命令)を信じて(八号)、「カタカムナ」をわかることに、(直観の鍛練に、)つとめたのである。

しかしながら、一通り、カタカムナの潜象物理(三号~六号、概説)を教えられ、アタマでは整理(理解)したものの、どうしてもわからないことがあった。

それは、潜象が、現象に出ても(カタ)、潜態のままであるもの(カムウツツミ・カムナ・アマナ)と、「カ」から次々と変遷して(ヤタノ)、現象の粒子(ミツゴ・イカツ・原子、そして生命体)になるものがある、というわけが、

条件にあい、正常なヤタが発生しられなくなれば、例えばサリドマイド児のようなことが起き、又、もし条件が調わず、対向発生が絶えれば、死（流産・死産）ということになる。

精神作用の場合も、十分に高まったアワのチカラで対向発生を続ければ（ヤタノカ）、よいイノチ（判断行為）が発生するが、充分な用意の無いアワの心で、一方的な（対向発生のない）判断行為を出せば、満足な結果は得られないから、ことごとに悩み、苦しみ、行きつまり、遂には自殺、ということになる。

およそ、生命活動は、（立つにも歩くにも食べるにも呼吸をするにも、考えるにも、すべて）サヌキとアワのチカラが、ヤの状態で働けばヤタノ「カ」が、則ち生命のチカラが発生する（生かされる）ということである。

* 「カ」は、現象の場が出来た時、即時に発生するものであって、遠い潜象界から、はるばるやってくるようなものではない。

「カ」の発生の速度は、アマハヤミである。

アマハヤミとは、「アマの速さのミ」であり、アマの速さとは、対向の場が出来た時が、即ち発生場であるから、即時である。

発生場は、則ちその発生の界面（トコロ）は、アマハヤミであるから、時間を要しない。

このことについては、我々は、今まで、「カ」の対向発生の物理は知らなかったが、しかし、その現象の事実は、日常、誰でも、よく知っていたことである。

例えば、水が沸騰して湯になり、気体になる界面は、アマハヤ（即時）である。

風船を針で突いて、割れる界面も、どんな高速のカメラを以ってしても、つかまえられぬアマハヤである。

酸素と水素が結合して水になる界面も、アマハヤである。

（そもそも、水も、酸素と水素が、ただ存在しても結合はしない。両者が「ヤ」の状態になった時、「カ」が「ヤタ」して「水」となる。）（第三首 フトタノミ）

「カム」と言い、「カミ」と言い、「カムナ」と言う、「カ」というモノが存在することを、カタカムナ人は、物理として、始めて発見したのである。

＊「カタカムナ」「ヤタノカカミ」というコトバは、「カム」（潜象）から「アマ」（現象、^{イノチ}則ち生命）が発生する物理をサトったカタカムナ人の造ったコトバである。

（彼らが、「カタ」といい「ヤタ」といったコトバの意味を、私共は、感受できているか？）

「カタ」とは、カム一般から「カ」が独立的に出ることであるが、「カ」がどのようにして出ることか？ それを、カタカムナ人は「ヤタ」といっている。則ち「ヤ」という状態（場）になった時に出る（タする）のが、^{ノミ}順当（マノスベ）だということである。

「ヤ」というコトバの思念は、ヒフミヨイのヤであり、潜象と限らず現象物でも、又は精神作用でも、何であっても、マトマリとして出現するのは、ヤになった時であることが、正常態であるという、カタカムナ人の直観を示すコトバである。（「ヤ」の思念 第十号（48）頁～）

「ヤ」とは、^{チカ}極限・飽和、安定又は破れ、の思念であり、「ヤ」になるとは、（出るものはサヌキであるから、）^アサヌキを出すアワの場が、「ヤ」（^{チカ}極限）まで達した時、という意味になる。

それ故、もし、「ヤタ」にならずに、^チ則ち充分にアワの用意が出来ぬうちに、サヌキを出せば、^ア出された生命は、障害や奇型を生じ、精神作用なら、悩みや不安や生命の危険を伴うことになるわけである。

「ヤタ」という意味は、例えば、卵子が、環境条件にめぐまれ、成熟して、精子と出合う、^チという場が出来た時、則ち、^チサヌキ（精子）とアワ（卵子）の^チ対向発生^チの場が調った時、^チ新しい生命（カ）が、ヒトツ、「ヤタ」するわけである。

そして、その後も、アワが充分に用意されて、よい「ヤタ」が^チ繰返し^チ続けば、^チイヤシロ^チの生命がもたらされることになる。

しかし、このようにヤタして、次々と^チ変遷して行くうちに、もし、何か悪い

しかも、それらが 天皇家の「三種神器」として伝えられながら、そのいわれはわかっていなかった ということは、それらが、天皇家固有のものでは無く、おそらく、先住民の大事にしていたものを、(戦利品として、) その意味はわからぬまま、貴重な宝物ということにされて、伝えられたものと考えられる。(十号5~頁)

* 第一首は、34字の全部が、一字一字の声音符でつづられていた。

第二首は、最後の「カミ」だけが、図象符になっている。

おそらく 最も大事なものを、先ず第一に、ハッキリとわからせる為に、その大事な単語を、特に図象符にして、示したものであろう。

又、声音符と図象符の作り方を、人々に教える意味もあったのかもしれない。

最も大事なものは、『あらゆるものの根源が、カムの微分のカムナの「カミ」(カム・アマ始元量のカミ) である』というサトリの、「カミ」というコトバの意味するモノである。

カタカムナの「カミ」こそ、人間(生物)にとって、何ものにもかけがえの無い、最も大事なモノである。

それ故、その最も大事なモノを感じるこそ、何よりも、人間(生物)にとって最も有り難いことである。

その最も大事なモノを求めて、畏れ、親和する感受性こそ、何よりも大事な生命力(アワの感受性)なのである。(日本の心の根拠、日本語の根拠、日本の文化の根拠、ミツゴの魂を育てる根拠)

それ故、我々(動物)が生命を全うする為には、自分の感受性をマツトウに、鍛えつづけなければならない。

我々が「生きる」ということは、感受性を鍛えることである。感受性を鍛えることが、生きる者への至上命令なのである。(自然の動物は、というより人間以外のあらゆる生物は、この至上命令(根本態度)を、一生懸命につらぬいている。)

このように、我々(生物)にとって、何ものにもかけがえの無い、最も大事なモノを、カタカムナ人は、直観によって知ったのである。

ウツシ・アマウツシの「カ」である。

したがって、現象に生れ出た我々個体の生命力とは、カムからうつされるアワの「カ」と、アマからうつされるサヌキの「ミ」(アマナのカ)との、「カとミ」であり、それが生命の根源である。

カタカムナ人は、自分たちの生命の根源を、このように感受し、そのサトリを、親から子へと教え伝えていたのである。その「カ」(カとミ)の感受を、我々現代人は、失ってしまっていたのである。

* カタカムナ人は、自分たちの知り得た生命のサトリ(マノスベシ)を表示するに当り、先ず、宇宙の万物万象の生命が、どのようにして、何から発生するか? その根源は、「カ」と「ミ」である、ということ、八十首のウタヒの最初に、明示している。(第一首は「マノスベシ」を、第二首は「カ」を、第三首は「ミ」を、示している。)

要するに、「ヤタノカカミカタカムナ カミ」とは、宇宙の万物万象は、(原子も電子も、物質も生命質も、地球も太陽も、宇宙のあらゆるものは、)ヒから始まり(ヒビキ)、ヤで独立して変遷したものである。そのチカラ(ヤタノカ)は、「カ」と「ミ」であり、それは、カム無限量から「タ」した「カムナ」の「カミ」(カムアマ始元量)である、というサトリの表明である。



カタカムナ図象
(ヤタノカカミの
表象物)

そして、カタカムナ人は、そのサトリを示す図象を、彼らの最も貴重な鉄で、「ヤタノカカミ」の表象物として造り、人々に示し、教えていたのである。(ヤタノカカミ・ヤサカマカタマ・イホツミスマルノタマ 三・四号)

因みに、後年、天孫族の来襲により、カタカムナの文化は亡ぼされ、僅かに、漢字によって、(神道の祝詞として)部分的に伝えられ、「ヤタノカカミ」というコトバも、万物万象を照らす「八咫の鏡」になった。そして、中国から銅製の鏡が伝わるに及んで、カタカムナ図象の「ヤタノカカミ」が、「八咫の鏡」に、結びついてしまったのである。

(同様に、マカタマやミスマルノタマは、アクセサリーの曲玉や勾玉に、変えられてしまった。)

しかし、そもそものカタカムナ人のいわんとした意味は、そのような観念では無く、宇宙の万物万象の生命の発生の起源とか根源とかということの、本当の状態である。彼らは、自分たちの知ったその状態を、「ヤタノカ」「カミ」というコトバにして示してくれたのである。

それ故、今、そのカタカムナ人のコトバを読む者は、自分の先入見（の神や鏡）でよむのではなく、このコトバを造ったカタカムナ人の「カ」と「ミ」の思念を知ってよむのでなければ、『すべての根源はカタカムナのカミである』と、脳で読んでみても、（自分では、わかったつもりでも、実は、）カタカムナ人が「ヤタノカ」といい「カミ」といった気持は、何もわかりはしない。

自分に、本当に「カ」と「ミ」の感受が無ければ、カタカムナ人が、ヤタノカミとはいわず、「ヤタノカカミ」といった気持がわかる筈がないのである。

（筆者も、「カ」の思念が、自分の感受によってわかるまでは、則ち、「カ」と「ミ」、「カム」と「アマ」、「サヌキ」と「アワ」と、言いかえているカタカムナ人の気持がわかるまでは、「ヤタノ」までは読めても、「カカミ」が、なかなか読めなかった。

「ヤでタしてノする」ことが「鏡」である、とカタカムナ人が言う筈は無い。又「カミ」が起源・根源の意味だけならば、なぜ、「ヤタノカミ」ではなくて、「カカミ」といったのか？

又、カタカムナ人は、現代語のようにテニヲハ（接続詞・助詞）を入れて言うのではなく、一字一字のコトバの思念でつないでいるから、カムがヤでタしてノすればアマになる筈なのに、なぜマといわずカというのか？

現代人が、このように、カタカムナのウタヒを正しくよめないのは、というより、観念では読めたつもりでも、実はその意味がわからないのは、我々の現代の文化が、カタカムナの祖先のサトリ（「力」の感受）を、失っていたからである。

我々をはじめ、あらゆる生物が、生れて、様々に生成・変遷して生きている、その生命のチカラは、（いかにカムから変遷して現象に生れ出たとしても、その我々生物の生命の「力」は、）潜象のママである。則ち「ヤタノカ」は、カム

* 「カタカムナ ヒヒキ マノスベシ」のサトリは、「アシアトウアン」が、「ウツシ マツル」,「カタカムナ ウタヒ」として伝えられ、(無意識のうちに,) 今日まで、日本人の心を養い育てて来たのであるが、しかし、その間に、そのサトリの認識は薄れ、忘れられ、「ヤタノカカミ」は「八咫の鏡」になり、「アマテラス」や「イサナギ」などのサトリは、神の名になり、「カタカムナ」の意味を確かに認識している者(アシアトウアン)は、遂に絶えてしまっていたのであった。

今、^{オミカマリ} 榎崎皐月という現代の「アシアトウアン」が復活して、カタカムナを、マツトウに解読することが出来た。

私共も、何とかして、このサトリを、カタカムナ人の思念になって(習い馴れて)、出来るだけ無駄な先入見を出さず、スナホな^{アツク}気持で、読んでみよう。

* ヤタノカカミ カタカムナ カミ

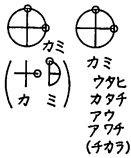
「ヤタ」(ヤでタする)とは、「ヒフミヨイ マワリテメグル ムナヤ」のヤで、カム無限量から離れて宇宙に発生する、あらゆるヤホヨロヅのもの、則ち万物万象のことであり、「ヤタノカ」とは、「ヤでタしてノするモノのカ」、則ち「ヤタ」で発生し、様々に変遷し変化する物質生命質の「カ」(生命のチカラ)のことである。

「カ カミ」とは、その「カ」の「カミ」、則ち、カム無限量から、「ヤタ」して「ノ」した^{ヤホヨロヅ}万物万象の、その生命のチカラの「カミ」は、「カタカムナ」の「カミ」である、というのである。

「カミ」とは、「カ」と「ミ」であり、その「カ」と「ミ」が、宇宙のあらゆる万物万象の 始元・起源・根源となるモノである。

それ故、「カミ」といえば、始元・起源・根源、又はその^{ミツ}主、を意味するコトバとなったのである。

* 我々は、カミといえば「神」とか「上」「源」とかの先入見があるから、「カタカムナ カミ」といえば「カタカムナ神」、「ヤタノカカミ」といえば「やたの鏡」と思ってしまう。



るのであるが、しかし、同じコトバであっても、その意味が様々に変化していることが多い為に、カタカムナの真意をくみとることが、かえって難しくなっているのである。

榎崎皐月の解説によって、今は死語と化しているコトバの、本当の意味を知り得ては、愕然たる思いに打たれる。

私共は、部分的な個々の解釈ではなく、カタカムナウタヒ全体の思念を通して、「ヤタノカカミ カタカムナ カミ」といった、カタカムナ人の真意に迫りたいと思う。

* 「ヤタノカカミ」とは何だろう？

敗戦前の日本人は、前述の如く、「八咫の鏡」と書いて、知らぬ者は無かったが、しかし、その実物を見た者は無く、なぜ「三種の神器」なのか？「八咫」とはどういう意味か？誰も、(天皇家の人々も、)知りはしなかった。古事記にも、何の説明も無い。

榎崎皐月が、満州で 蘆有三老師 に会い、「八鏡文字」というコトバを知らされた時、それがどんな文字かということは、蘆有三自身も知ってはいなかったが、『日本の上古代に極めて高度の文明が存在し、「八鏡文字」というすばらしい文字をもっていた』ということ、老子教の古伝として教えられた。

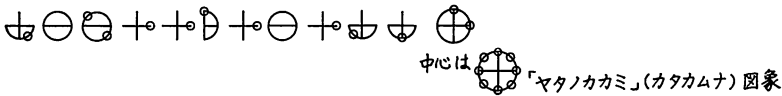
古伝には『アジャ人唯々トシテ八鏡を觀ジ、易々トシテ万理ヲ弁ズ。八鏡カミツ文字、整贊ニシテ、換語アリ、理ヲ弁ジ、便ヲ生ジ、名第ヲ利シ、命題ヲ明ニス。是正ニ八鏡ノ文字』とあり、『噫、羨シイカナ』と讚えている。(三号 51頁、八号83~89頁、十号 8頁)

榎崎皐月は、後に、金鳥山で平十字氏から古い巻物を見せられた時、その巻物に書かれた、たくさんの渦巻き図象の中心におかれていた図象符に目がとまり、これが「八鏡文字」ではないか？というヒラメキがあった。

それで、何としても解説しなければならぬと思った、と、語っている。

そして、苦心の末解説してみたら、まさしく、それは、彼のヒラメキ(直観)の通り、「ヤタノカカミ」の表象図象であり、それを、老子教の古伝では「八鏡文字」とっていたものであることが、明らかになったのである。

✖ 第二首



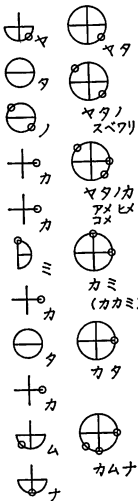
✖ 榎崎皐月解説 ヤタノカカミ カタカムナ カミ (十号 第二首 (47)~(57)頁)

✖ 概要

ヤでタしてノして行く力は、(現象界に発生して、様々に変化し展開して行く、宇宙の万物万象の、その生命の力は、) カミ(カム・アマ始元量の根源)であり、カタカムナが、そのカミ、則ち、生命の根源の、カムウツシとアマウツシの実質である。

✖ 解説

(一字一字の思念や図象の説明は、十号の(47)~頁(53)~(57)頁に詳しく述べてある)。

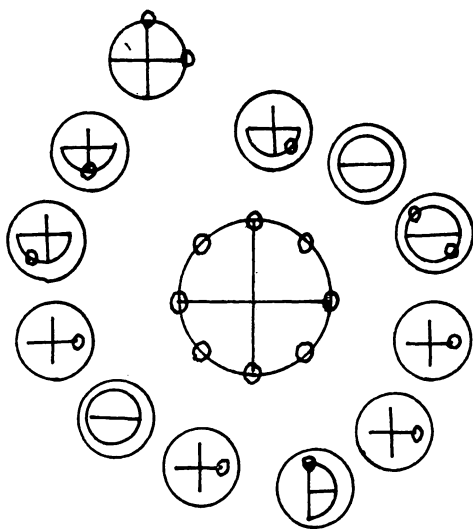


「ヤタノカカミ」とは、榎崎皐月が苦勞して解説した重要な上古代語に違いないのだが、しかし、「八咫の鏡」という言葉は、敗戦前の日本人なら知らぬ者は無かった。

つまり「ヤタノカカミ」という上古代語の意味が、三種の神器の「八咫の鏡」という神秘思想のものに変化して伝えられ、そして、敗戦後の日本人からは忘れ去られ、今は、無用のものとなってしまったのである。

カタカムナの解説の難しさの一つは、カタカムナのコトバの中に、なまじ、現代語で知っている同じコトバがあることである。

カタカムナの上古代語の思念が現代の日本語にも伝っているものがあるからこそ、我々にも、カタカムナのウタがよめ



うに なるて下さるのでなければ、今の世に、カタカムナの解説を伝達する意味は無いのである。

結局、カタカムナ ウタヒの解釈は、読者自身の感受性を高めて、めいめいの波動量によって、読んで（感受して）頂くしか無い。

それ故、読者自身の感受性を高めて頂く為に必要な勉強のしかたを、筆者の知り得た限りをつくして、披瀝している次第である。

あるが、有史以降の現人類は、いかに努力しても、開発することはできなかった。

しかし、我々現代人でも、それを示してもらえば、(カタカムナ人の脳も、我々現代人の脳も、本質的には同じ潜在能力をもつ筈であるから、)自分で自分を教えかえして、逆序のサトリを実現することが出来る、ということがわかった。

* 今、筆者は、榎崎皐月よりカタカムナのモノスベの解説を伝えられ、それを、何とかしてわかり、一生懸命に実践して自分の身につけ、そしてそれを、相似象会誌に、精一杯書きながら……共に、カタカムナの子孫に生れた読者が、どうか、自分たちが、人間の脳の落とし穴に陥っていたことに、ハッキリと気がつき、私共の遠い祖先の親たちの示してくれたサトリを、自分の生命の感受性を以て感受し(アタマの理解に止らず)、自分自身の感受性を起励して、実践するようになってほしいと、切に願っている。

このことは、憚りながら、「アシアトウアン ウツシ マツル」といった、カタカムナ人の気持の、相似象のように思われる。

カタカムナのサトリとは、そういうものなのであろう。

* 私共は、榎崎皐月の解説を、出来るだけ正しく解説することに微力をつくしているが、筆者自身、未熟であり、その上、感受したことを言葉に表わすことが極めて難しいので、どんなに苦勞して書いてみても、容易に読者に通じるものではない。

要するに、カタカムナは、(科学では未開発の物理であるから、)科学用語で説明することは出来ない。とあって、榎崎皐月の解説を筆者がいかに解説してみても、カタカムナ人の感受し、実行していた、アマウツシ・カムウツシの実質を、読者に伝えることは出来ない。

カタカムナの解説(伝達)は、単に、上古代語の意味を理解すればよいのでは無く、「カタカムナ ヒヒキ マノスベシ」の思念を、読者自身が、実感として感受し、アマウツシ・カムウツシの恩恵を、読者自身が豊かに受けて生きられるよ

のせいだとは、気がつかない。

人間とはこういうもの、と思いこんで（落とし穴に落ちこんで）しまっているからである。

それ故、落とし穴から脱出した者が、（釈迦の正覚体験、ゲーテの^{ペンソング}轉換の心理を説いて、）落とし穴の事実（アーユサンカーラ、フェルヌソフト）を教えても、弟子たちは、アタマではわかったつもりであったが、自分の脳の落とし穴から、脱出することは、出来なかった。

又、この^{イナツツ}経緯を究明して、人間の真の正覚（ブヤダムマーサンカーラーの実習）を説いた富永老師も、三十年教えても、弟子たちを変えることは（落とし穴から脱出させることは）出来なかった。

今、人類の歴史の中で、人間の脳の落とし穴に陥ることの無かった人々の文化があったことが判明し、人間の最もアタリマエの生き方を示すカタカムナのサトリが知らされ、筆者が、そのことを、いかに死力をつくして述べてみても、脳の落とし穴に陥っている（ことに気がついていない）人々には、おそらく、^{ヒビキ}通じようが無いであろう。

* 「マノスベ」というコトバは、カタカムナウタヒ第一首と第七十九首にある。「マノスベ」とは、「マのノするスベ」であるから、「カタカムナ」であり、「ヒビキ」である。

観念的に訳すとすれば、「天然宇宙の法則」ということになる。

しかしそれでは、（観念的にしか）わからない。

「天然自然の変遷する方法」とは、始元量の「カ」が、宇宙環境に於て、^{マノスベ}順順に、^{マノスベ}序を通して、発生し、分化し、変遷し、還元するスガタである。

それ故、天然宇宙の現象は、「^{マノスベ}順序のサトリ」なのである。

そして、人間がそれを知って、^{マノスベ}順序のサトリにテラシテ（アマテマス）、自分自身の感受性を^{マノスベ}教え、自分の生き方をマノスベにすることを、「^{マノスベ}逆序のサトリ」というわけである。

上古代人のカタカムナ人は、よくぞ、「マノスベ」の^{マノスベ}物理を開発したもので

* 進化した脳を使いまくって、人間がいかに変化しようが、何をしようが、天然自然の環境は、昔も今も、変りなく、つねに、アタリマエに（マノスベに）存在している。

しかるに現人類のみが、この生物の根本態度（感受性の鍛練）を忘れ、アタリマエの生き方を、アタリマエに行えなくなってしまうている。しかも、現人類は、その事に気がついていない。（気がつかないから、カタカムナに出合っても、驚かないわけである。）

私共の遠い祖先のカタカムナ人は、上古代期に、最高度まで向上した脳カマナによって、人間の脳の潜在能力と、人間の脳の落とし穴の危険に気がつき、進化した脳をもつ人間の「あるべきスガタ」（生物の根本態度）を覚った。

そして、自然の動物が、アタリマエに実行しているこの生命の物理を、コトバに出して示し、人間も、アタリマエに実行出来る為の教え（マノスベシ）を、伝えてくれていたのである。（アタリマエに生きる「マノスベ」のサトリ）

カタカムナ文明は、このアタリマエの思想サトリを社会的に実現したものであり、日本文化の伝統の起源は、そこにあったのである。

* 進化した脳のおかげで、人類は、現代の文化を造ることが出来た。

しかし、この現代文明なるものは、人間としてアタリマエに生きるものには無い。

今日まで我々が、最高の悟りだ、真理だ、哲学思想だ、と思わされて来たものは、皆、アタリマエでない方向へ外れて、人間の脳の落とし穴に陥った人々の、大脳次元の操作で作り出したもの（その中での優劣・善悪・強弱までのもの）であった。

そして、その落とし穴の文化の中から、あくまでも、アタリマエの方向性を貫いて苦しみ求め、遂に自分の脳の落とし穴アムサンカーラーから脱出ワカダムマサンカーラー（真正覚、転換）したのが、釈迦・ゲーテ・富永老師であった。ということ、私共は、はじめてハッキリと、認識することが出来たのである。

しかし、人間の脳の落とし穴の中で、親子代々暮して来た者は、自分たちが、いかにアタリマエでない状態アタリマエになっても、それが自分の脳の悪いクセ（落とし穴）

一テのような人が出たことも、その人類的な証明といえるであろう。

そして又、その一方では、同じ潜在能力をもっている、マツウに（向上的に順序よく）開発せず、現実の生活の為の欲望次元で、ひたすらこき使うという方向へ反れて行けば、現代人の文化、則ち科学や宗教や哲学、経済や、芸能等の方面が発達し、現代文明なるものを現出するわけである。

現在の我々は、この後者の、現代文明なるものの社会に生れ、いや応なしに、欲望次元のサヌキ型の文化（科学や宗教や経済などの思想）で育てられて来た。

それ故、今、カタカムナ人の思想に出合っても、その意味が全くわからない有様であるが、私共は二十年、一生懸命にカタカムナを勉強して、ようやく彼らのいうカム アマの始元量の力カワリのマノスへの実感を、感受できるよ
うになり、彼らはよくも、こんなところまで、わかったものだ！ と、心の底から驚いているのである。

* しかし、よくよくわかってみれば、このカタカムナ人の教えは、実は、人間にとって最もアタリマエのことである。現代人の科学や哲学や宗教等の思想とか理念とか主義とかのような特別に思考されたものでは無く、又、古代人とか日本民族のみのものでも無く、人類の文化として、最もスジの通ったあまりにも、アタリマエの思想である。（マノスベシ）

『生命の根拠（カタカムナ）を知って、せい一杯、自分の生命を鍛えてマノスベに生き（ウツシ）、次の生命を育てる（マツル）』というこのことは、よく考えてみれば、自然の動物は皆、アタリマエに実行していることである。（それを認識に出して表明する脳が無いだけである。）

自然の生物が、鮭が鮭としてアタリマエに生き、白鳥が白鳥としてアタリマエに生きているように、人間も、いかに脳が進化しようが、しまいが、生物として生きる根本態度はヒトツでなければならない。

人間は進化したから、どんな生き様をするも（どんなサヌキの生き方をするも）自由であるとしても、人間としての根本態度（アワの感受性）は、生物のアタリマエの生き方を通さなければ、生存を全うすることが出来ない。

* 思えば、現代科学は、まだ、原子・電子・素粒子・遺伝子までしかわからず、「生命」の本質や起源は、全くわかっていないのに、カタカムナ人は、カムアマの始元量 という、潜象物理を示している。

現代の我々の知っている科学の物理や定理や、哲学や宗教の思想や神話などの文化が、まだ、何も無かった上古代期に、(古事記・日本書紀よりもはるかに古い時代に、) 日本列島に先住したカタカムナ人は、カム アマの潜象物理を発見し、それを、八十首のウタにして示していたのである。

カム アマとは何なのか？

どのようにして、生命質や物質が発生し、生存を持続して行くのか？

そのスガタを、彼らは、マノスベ と言い、それを説明する コトバ を造った。それが、現日本語の起源である、というのである。

どうして彼らは、そんな大変なことが、わかったのか？

今、私共は、カタカムナを勉強し、彼らの思念が少しずつわかり、彼らのわかった(感受した)ものを、私共も少しずつ感受できるようになり、彼らのカム アマの物理が、本当に 真実のものであることを、少しずつ実感するにつれ、よくも、彼らは、これほどのことが、わかったものだ！ しかも、わかっただけでなく、それを、よくも コトバにして 残してくれた！ と、感嘆の念を深くするばかりである。

日本語は、現在では、他民族の言語と同じように使われ、訳されているが、そのナリタチには、このような起源があったことに、心から驚かずにいられないのである。

* しかし、又、よく考えてみれば、人間の脳の能力 としては、進化の度が、現代の人類と同じ状態になった場合は、上古代人でも現代人でも、生れてくる子供は、同じ潜在能力 をもっている筈である。それ故、我々現代人も、その脳を、正直な感受性のもとに、マツトウに開発して行けば、(生命の感受性の向上性のママに、順序よく、スナホに働かして行けば、)カタカムナ人の思想と同等の波動量 に達することが出来る筈である。

事実、檜崎臯月がその証明であり、又、日本人でなくても、釈迦・孔子・ゲ

その人の特長とか上手な特技とか、巧みな仕事ぶりとかを、名によぶことが多かったと思われる。

又、その人が死んだ時、人柄や業績のすぐれたことを讃えて、おくり名にすることもあった。(アマテラス やイサナミ、ミナカヌシ等の物理用語が、神名になった例もある。(前書6頁))

「アシアトウアン」というコトバは、カタカムナのサトリをミにつけた(カシラ)、すぐれた(ウルハシ)人、という思念がある。もし「アシアトウアン」と呼ばれる人があったとすれば、その人は、まさに、「アシアトウアン」という人柄だったのであろう。又生前、自分自身、常に「アシアトウアン」でありたい、と努力していたから、そのような生き方を、自分の名とした、ということもあり得たかもしれない。

このようなわけで、「アシアトウアン ウツシ マツル」というコトバの意味を、読みつけたのである。

(「アシアトウアン」を図象にすると、「カシラ」の図象と同じであり、「ウルハシ」の図象とも同じになる。このことに気がついた時、私共は、心から感動したものである。)

* 要するにカタカムナ人の言いたい気持は、次のようなものであろう。

『人間のあるべきスガタは、「カタカムナヒヒキマノスベシ」という天然宇宙の根本原理を知って、自分の生命をマノスベに生き、そしてそれを他に伝えることである。伝えられた者は、又自分がアシアトウアンになり、ウツシ マツル。このようにして、親から子へ、人から人へと、めいめいが、カタカムナのヒヒキとなり、マノスベの生命をウツシ マツル。これが、人間(ヒト)の生命の、本当の、あるべきスガタである。』

このサトリを知った「アシアトウアン」が、マノスベの「カタカムナウタヒ」を示しますから、それに照して、めいめいの生命力を養い、感受性を鍛えて、よいおマツリをして下さい。』

私達の遠い祖先のカタカムナ人は、このような気持で、私達に、カタカムナのサトリをコトバにして、教えてくれていたのだ、と思われるのである。

カタカムナを、「ウツシ」「マツル」ことが出来る。

「ウツシ」とは、「発生して、個々に、示されること」。カム(カタカムナ)から移すこと、ヒからヒキしたヒヒキを伝えること、である。

その思念から、「ウツシ」というコトバは、移し・写し・映し・遷し・変換・現し・美し等の意味が出た。(後出)

「マツル」とは、「マが個々にあること」。ウツシされた者が、それを個々の身にしっかりとつけて生きること、則ち、カムからうつされた生命のサトリを、充分に実践して、又、人に伝えて、おカエシをする、ということである。

「マツル」というコトバは、この思念から、祭・奉る・政・纏、等の意味が出た。

* 「カタカムナ ウタヒ」とは、ウからタするヒ、則ち、潜象の^{ウタヒ}状態から発生する「ウタ」の^{ウタヒ}根源は、「カタカムナ」である、という意味である。(ウ・タ・ヒの思念については第五首)

「ウタ」とは 心の中に一ぱいある^{ウタヒ}思いを、コトバにして、ウから外へ出すことである。

カタカムナ人は、八十首のコトバを、アシアトウアンのウツシ マツル「ウタ」といい、そのウタの心の「ヒ」(^{ウタヒ}根源)は、「カタカムナ」である、と、いっているのである。(後出 コトホグソウタ 第四首)

要するに、「アシアトウアン」「ウツシ マツル」「カタカムナ ウタヒ」とは、『アシアトウアン という「ヒヒキ マノスベシ」を体験した(ウツシ マツル)者が、この(八十首の)「カタカムナ ウタ」を示します。そのウタのヒ(根源)は、カタカムナ なのです。』という表明である。

それ故「アシアトウアン」を、人名ととってもよい。

というのは、そもそも名前というものは、人間の間で、何度もそう呼んでいるうちに、名として定着するものである。今では、生れた子に必ず親が名をつけるが、その際、日本人は、自分の理想とか、こうあってほしいと思うものを選んでつける。

おそらく、昔は、普通の人には特別な「名」というほどのものは無く、何か、

たカムナ」「ヒがヒキするヒヒキ」「マからノするスへ」等のコトバをつなげて
(コンパウンドとして、)我々に示してくれていたのであった。

* 要するに「カタカムナ ヒヒキ マノスベシ」とは、『宇宙の万物万象の
存在(イノチ)は、カタカムナのヒヒキであり、そのスガタは マノスベに示され
ている』という意味であり、まさに、人間の知るべき 根本原理の発見 である。

しかしなお、カタカムナのサトリは、それだけでは無い。

「カタカムナ ヒヒキ マノスヘシ」と、「アシアトウアン
ウツシ マツル」と、「カタカムナ ウタヒ」とが、三つ揃って、
感受されるのでなければ、カタカムナのサトリでは無いので
ある。

その意味でも、今までの我々の知っていた、聖人賢者の悟り
や、宗教哲学のいう真理、科学のいう物理法則理論との、決定
的な違い がある。



カタカムナ



ヒヒキ



マノスヘシ



ヒヒキマノスヘシ
アマノミナカヌシ
ミスミノタマ

* 要するに、カタカムナのサトリとは、「カタカムナ ヒヒ
キマノスベシ」という天然宇宙の根本原理を示すものであるが、
(それを伝えられた者が、そのサトリのコトバを アタマで理解
しただけで終ることのないように、)「アシアトウアン ウツシマツ
ル」と、「カタカムナ ウタヒ」とを、同時に示さなければ、カ
タカムナのサトリとは、いえないのである。

「カタカムナ ヒヒキ マノスベシ」というサトリは、カタ
カムナの側からの表明であり、「アシアトウアン」というのは、
それを教えられた側が、そのサトリをわかること、則ち 自分自
身が「アシアトウアン」になる、という意味である。



アシアトウアン



ウツシマツル



カタカムナ



ウタヒ



カタカムナウタヒ
カムナカウ
カムアマ

* 「アシアトウアン ウツシ マツル」というのは、「カタカ
ムナ」によって「マノスベ」に生きれば、「アシアトウアン」に
なる。アシアトウアンになれば(カタカムナが本当にわかれば)、

トバを図象にして、そのコトバにこもる、カタカムナ人の思念（感受した思想）を、何とかしてわかろうと努めた。（十号 アシアトウアン(29)～、(37)～頁参照）

相似象会誌を書き出して二十年が経ち、今、私共は、ここまでわかったというものを、述べているのである。

＊ そもそも人類の脳は、自分の見たもの、感じたことが、何であるかを判断し、自分の生命をよりよく生かす方向へ 行為 する司令を発する能力が、最高度まで進化したものである。

宇宙にはあらゆるモノ（現象）が存在している。

人間の脳は、自分が存在 していることを意識し、あらゆる現象の存在 を見て、それが何であるかを考え、それに名をつけ（コトバを造り）、その存在の変化や消滅を見て、その理由（コトワリ）を考え、そして、遂に、カタカムナの上古代期に於て、万物万象の発生・消滅の根源を解明し（認識に出し）、文字を造って、自分たちの解明したサトリを表明し、それを伝達することが出来るまでに、高度に、向上した能力をもつ者が出現するに至った。

「カタカムナ ヒヒキ マノスベシ」というコトバが、そのサトリの表明である。

現代科学も、それを志し、こころみている途中である。

世界の聖人・賢者といわれる人々の「悟り」や民族の文化も、それを、どこまでわかっていたかを、示すものである。

「カタカムナ ヒヒキ マノスヘシ」則ち、「カタカムナがあらゆる存在の起源である」という解明は、カタカムナ人が、人類の文化として、始めて発見した、生存の根本原理 であった。

それは、あらゆるチカラの統一場の原理、則ち時間・空間の根本原理であるといってもよい。生命の物理である、といってもよい。現代科学が未開明の潜象物理 である。

彼らは、自分たちが、これ程のサトリをわかることのできた 大きな感動 と、それを知ることの 生命のよろこび を、後の人に伝えようと考え、「カからタシ

時、何かに気がついた時、「ア！」という声音（ヒヒキ）を発するのは、日本人と限らず、万国共通である。

その「ア」という声音を、カタカムナ人は、「現象界にアられた、アらゆる存在の、アることの示し」という思念をもつ「ア」というコトバにした。

それ故「ア」という思念は、何でも、そこに、アルもの、あることの、その存在をさすと共に、それを自分の認識に出して納得する（安定する）思念がある。

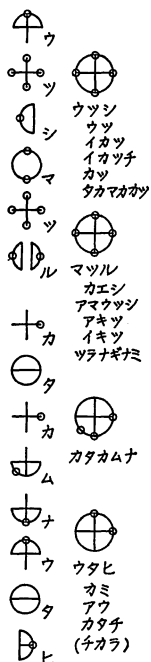
トは重合の思念、ウは、潜象の状態から「ア」が生れる思念、アンは「アのン」であり、ンとは、刺激され励発されたものが定着する思念。（「ン」は四十八のすべてにつけられるから、自分でアン、ウン、トン等と「ン」を発音してみると、その思念がわかる。「アン」なら「ア」という刺戟を受けとり、自分の中に「ア」というヒビキを励発し、本当にそうだ、と脳が認識する思念である。）

「アシアトウアン」とは、「アシアトウア」を「ン」するのことであり、自分の生命は、カタカムナのヒヒキ（アのト）であることを、本当に、アーそうだ、と深くうなずき、自己起励し認識に出して、心からわかることであり、「ウアン」とは、そうした状態で日々、生命活動を発生し、調和的に安定したマノスベの生き方を全うすることである。

* 要するに、「アシアトウアン」とは、「現象は始元量の重合によって発生し自己起励して、調和的に安定した状態になる」という意味である。

因みに、「アシアトウアン」の図象は、「ウルハシ」「カシラ」と、同象である。

私共は、「アシアトウアン」「ウツシ」「マツル」「カタカムナ」「ヒヒキ」「マノスベシ」等々、カタカムナ文献（ウタヒ）の



学が受け入れるには、おそらく何世紀もかかるだろう。古典科学が現代科学に変るのさえ200年を要したのだから……』と、**榎崎臯月**は言っていた。(九号17~23頁, 前号補遺4 300頁)

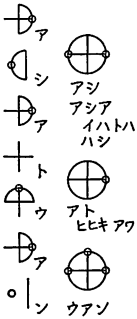
このような次第で、私共は、**マ**とか**カ**とか**ミ**とか**ヒ**とか(四十八の上古代語を)、原語のまま使うしか無いのである。

しかし、それらは上古代語ではあるが、幸いにも、現在の日本語(の**マ**とか**カ**とか**ミ**とか**ヒ**とか)には、その原語の思念を伝えもつものがあるから、日本語を使って生きて来た我々には、よく感受してみれば、その意味が、何となく通じてくるものがあるのは、有り難いことである。

*** 榎崎臯月解説** アシアトウアン ウツシ マツル カタカムナ ウタヒ (十号(29)~(45)頁)

*** 概要** 「カタカムナ ヒヒキ マノスベン」というサトリを、「アシアトウアン」が、「ウツシ マツル」のが、「カタカムナ ウタヒ」である。

*** 解説** 「アシアトウアン」を人名ととって、概要のように読めば、意味は一応通る。



しかし、スナホに考えれば、「アシアトウアン」というのは、人名としては、かなりヘンである。それに、カタカムナ人が、自分の発見したサトリを表明するのに、果して、現代人が自分の著書の序文に署名を入れるような書き方を、したものであろうか? という素朴な疑念も出る。

しかし又、金鳥山の狐塚の芦屋道満が、カタカムナの最後の統領であった、という平十字氏の言葉もあるから、「アシアトウアン」はその人であるとしてもよい。しかし、なぜ「アシアトウアン」なのだろう?

「アシアトウアン」の基底思念を感受してみれば、「アシ」は「アの示し」であり、「ア」とは、人間と限らず、動物が、口を開けて、声を出せば、誰でも出せる声音である。何かを見つけた

アシアトウアン
ウルハシ
カシラ

られるとよい。) 檜崎臯月は、何とかして四十八の思念を知ろうとして『字引を三つ、つぶした』と語っていた。

どの民族の言葉にも、例えば「神」(GOD) という言葉にも、はじまりは、おそらく意味があったに違いないが、今我々は、それをたどることはできない。(日本語の「カのみ」のように、「G の O の D,」というわけにはゆかない。)

しかし日本語は、どのコトバにも、そのコトバの一つ一つの声音に意味が示されている。例えばカミとは、「カのみ」であり、カツとは「カのツ」である。カンラは「カのシのラ」であり、クヒは「クのヒ」である。

日本語の起源は、カタカムナのサトリにあることがわかって、はじめて、今までの日本語の謎がとけたのである。

我々は今も、マとか力とかいう日本語を使ってはいるが、その声音の思念の意味するモノは、科学者の概念には無いものであるから、「マ」や「カ」を、科学的に訳して説明しようとしても用語が無い。

ということは、科学は、カタカムナ人が感受して(発見して)、カム・アマと称したモノを、まだ発見していない、ということである。

因みに、科学が、電磁波、原子、素粒子、電子、正孔、原子核、陽子、遺伝子、又は、万有引力、時間・空間・位置エネルギー等といっているものに相当する上古代語を、檜崎臯月は解説している。

というより、檜崎臯月が物理学者で、それらのことを、よく知っていたから、解説できたのであろう。

そして、現代科学では未知の、(檜崎が疑問をもち、長年悩んでいた) 電気磁気の本質は何か? その正体、原子構造の発生や、遺伝子の発生の物理、要するに、物質生命質の発生に関する根本原理が、そこに明示されていることに、彼は心から驚嘆したのである。

* 日本語の「チカラ」「ヒカリ」「イノチ」を直訳できる言葉は、西欧語には無い。なぜならそれは、「カ」を知った人の造ったコトバであるから、「カ」の認識の無い民族の言葉には、あり得ないわけである。

『将来の科学は、カタカムナの潜象物理に追随することになるしか無い。しかし、このカタカムナ人の直観のサトリ(カム・アマの始元量の存在)を、科

そして又、カムから発生してあらゆる現象になったものを、カタカムナ人はマという思念で感受し、それは宇宙のあらゆる万物万象になるものだから、全体として「アマ」とよんだ。

宇宙全体がアマであり、宇宙の中の万物万象は、マである。

宇宙の万物万象（マ）は、カムのカからタしたカムナの、ヒヒキであり、カムナのカカワリで様々に変遷する。そのスガタが、マノスベに示される（シ）わけである。

それ故、「カからタしたカムナ」は、カの微量の実質（カのミ）であり、それはすべての根元（ヒ）であり、あらゆるもののハジマリの始元量（ア）の、根源（カミ）なのだ、ということが、感受ワカルできるようになる。

「カ」や「マ」や「カムナ」は、宇宙に実存する物理量であって、一般の「神」や「仏」や「梵」や「天」とか、「靈魂」や「靈的生命」「生命素」等の思想レベル（大脳次元で造る観念）で解釈してはならない。

* 日本語には「カ」のつくコトバがたくさんあるが、それは、「カ」が何であるかということを知った（感受した）人が、造り出したコトバであった。

彼らは、自分たちの生命にカカワリ、その生命を生かしているモノを感受して、そのモノを「カ」という声音にウツシて「カ」とよび、宇宙の万物万象が、「カ」によって生起していることを感受し、その状態を、四十八の声音にウツシ、あらゆるコトバを造り出した。それが、我々の日本語のハジマリであった。

カミ・カガミ・カム・カタ・カゲ・カヅ・カゼ・カサ・カホ・カラ・カヒ・カン・カタチ・スカタ・カカワリ・カエシ・チカラ・ヒカリ・カナメ・カハリ・カマヘ・カマケ・カミナリ・カスカ・ハルカ・ササヤカ・ユルヤカ・蚊……

私共は、カタカムナを勉強して四十八の声音の意味を知り、「カ」が何であるか？ わかるにつれ、これらのカミ・カヅ・カゼ、又はヒカリ・チカラ・オカン・カムカヘル等というコトバを造った人の思念（思想）がわかって来て、心の底から感心したのである。

「マ」についても「ヒ」についても、同様である。（読者も、自分で調べてみ

しかし、このことを知らぬ人々には、日本語のもつヒビキは、わかりようがない。わからないから、あいまいだ、とか不合理だ、などと思うのである。

* 「カタカムナ ヒビキ マノスベシ」とは、要するに、『宇宙の万物万象の存在（生命）の根本原理は、カタカムナである』ということであり、宇宙のあらゆる万物万象は、すべてカタカムナの相似象である、という、いわば、現代科学がまだ解明できないでいる、宇宙のあらゆるチカラの時間・空間の統一場の原理の表明である。

* ここで、我々は、カタカムナ人が「カ」といい、「カムナ」といい、そして、「カ」があらゆる万物万象のすべてのヒである、といった意味を思念する。

「カタカムナ」というコトバは、『カムのチカラのカが、現象に出て（タ）、カムナになる』という意味であるから、『すべての根元のヒから引き出されて発生する（ヒキ）』の、「ヒビキ」というコトバと、意味がつながる。そしてそれが、『宇宙の万物万象（マ）の、生成 発展 消滅 還元のスガタ（ノスベ）に、示される（シ）』の、「マノスベシ」というコトバの意味につながって、このコンパウンドのスジが通ってくる。

* このようにして、カタカムナの思念に馴れてくると（勉強していると）、ヒというのは、すべての根元という思念であり、その宇宙の万物万象の根源を、カタカムナ人はカという思念で感受していたこと。そしてカは、目には見えないが、「無限に六方に存在しているもの」であるから、全体として「カム」とよび、その無限量のカムからタして、（独立的に出て、）現象にカカワル、カムの微分量を「カムナ」とよんだ、ということが、ハッキリとしてくる。

「カムナ」とは、カムのナ、（カムのくりかえし、カムの代表、代理、）実際に、自分の生命にカカワル「カムの名」である。

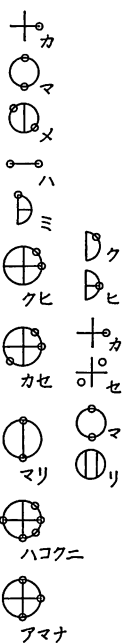
それ故、「カからタして出たカムナ」は、「ヒからヒキしたヒビキ」である。

重合的に融通して、その意味を 感受 して頂かなければ、カタカムナの^カコトバ^ナをわかることは出来ない。

* というのは、カタカムナの^カコトバ^ナ（日本語）というものの造語法（ナリタチ）を、よくわかっていなければならないからである。日本語の語根は 四十八の基底思念 をもち、一音のみならず、ズバリその思念の意味を表わすが、二音・三音とつなげるものは、（コンパウンドのように、）それぞれの声音思念を重合し、融通して、その意味をありのままに表明している。

（例えば、一音のみの カは「カム」を、マは「アマ」を、又、メは「メ」則ち目・芽の状態を、ハは「ハ」則ち葉・歯の状態を、ミは「ミ」則ち三・実・身・味の状態を表すが、首に当るコトバは「ク」の「ヒ」、風は「カ」の「セ」、粒子は「マ」の「リ」、原子は「ハ」の「コ」の「ク」の「ニ」、原子核は「アマ」の「ナ」というように、そして、「カタ カムナ ヒ ヒキ マノ スヘ シ」のように、四十八の声音のそれぞれを組合せて、適切なコトバが造られたのである。）（第五・六首）

このような成り立ちであるから、このことを知らぬ人々は、とかく、日本語は、あいまい、もことして、フジーな、不確実な、不合理な、近代性のない言語のように誤解するのであるが、しかし、よく考えてみれば、実際に存在する天然自然、人間社会のどんなものでも、単一の状態で存在することはむしろ稀であって、（そもそも、現象物質の最小単位である電気粒子の「ミツゴ」「モコロ」からして、「イカツミ・マクミ・カラミ」という、三つの要素の重合互換状態であるように、）いくつもの要素が、共役的・調和的・融通的に重合して存在している。それ故、その状態をありのままに表示することのできる造語法 でつくられた日本語は、実は、最も完璧に近いコトバ（人間語）であるといえるのである。



千年余、誰も気がつかなかった) 釈迦の真正覚の真相を、解明することが出来たのである。

しかし解明はできたが、この釈迦のコトバを、現代の日本語に訳すことは、至難(というよりも不可能)であった。(「感受性について」その三 212~頁, 二号 53~頁)

(因みに、檜崎皐月は、筆者がこの話をした時、その「ブヤダムマーサンカーラー」というコトバを、筆者に発音させ、声音符にし、図象符にし、しばらく考えて、釈迦の真意を言い当て、驚嘆させられたことがあった。)

今、カタカムナの上古代語を、檜崎皐月は解読したが、それを現日本語に訳すことは、やはり、至難である。(しかし、何とかして解説をころもてみよう。)

* 「カタカムナ ヒヒキ マノスベシ」(十号(3)~(29)頁)

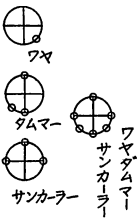
「ヒヒキ」は、「ヒ」(根元)があるから、ヒ から ヒ いて発生してヒヒキになる。

「マノスベ」は、マ から次々と変遷して「マノスベ」となる。「スベシ」とは、進む方向の示し、則ちマの変遷の^{スガ}タの示し、である。

「カ」は、すべてのヒであり、「カからタする」とは、「ヒからヒキする」こと。

カからタした「カムナ」は、ヒからヒキした「ヒヒキ」であり、「カタ」の「ヒヒキ」は、「マ」から「ノ」する「スベ」である。

説明するとなると、どうしても以上のように「は」とか「の」とか「と」とか「を」などの助詞をつけて、分析的に言わねばならない。しかし、コンパウンドの場合、それぞれのコトバは、別の意味ではなく、同じものを三つの角度から観たものであるから、並列につないで読んで、理解しようとしても無理である。



何としても、自分の脳の落し穴に気がつかなければならない。

自分の 脳の落し穴に気がついた者は、人間として与えられた生命を、完全発揮する生き方を知らなければならない。

* 今、カタカムナ人に教えられて、私たちは、はじめて、気がついたのである。

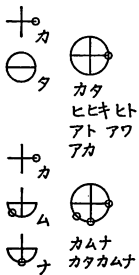
それ故、私たちは、「カタカムナ」というコトバの意味を、正しくわかることが、何よりも大事である。

正しくわかるには、頭で理解して、わかった気になるのでは無く、自分自身の感受性の共振によって、自分の生命の根源（カタカムナ）を、カタカムナ人のように、感受することが出来なければならない。

八十首の「カタカムナ ウタヒ」は、私たちが、自分の生命の根源に、よりよく共振して（「カタカムナ」をより多く感受して）、健全に生きることが出来るようになる為に、知るべき（照すべき）「マノスへ」の物理を示すものである。

それ故、これから出てくるカタカムナのコトバは、すべて、頭の理解に止らず、感受によってわかることに、努めて頂きたい。

（その為には、ただ 眼で読み流すだけでなく、自分の感受性を使って、少くとも自分の手で、書きうつしながら、繰返し読んで頂くことがのぞましいと、筆者自身の経験から、申しそえておく。）



* 「カタカムナ」と「ヒヒキ」と「マノスヘシ」とは、別々のコトバをつないだのでは無く、三つが、コンパウンドになって、その意味を表明している。

それは丁度、釈迦が、自分ののはじめて知った、新しい真正覚の体験を表明する為に、「ヴァヤ」と「ダムマー」と「サンカーラー」という、三つのコトバをコンパウンドにして造ったのと、相似象である。

富永老師はそのことに気がつき、この未知の（釈迦の死後二

「アワ」は、カムのチカラ であるから、自分自身の持っている基本的な生命のチカラであるにもかかわらず、感受性（生命カン）の劣化した現代人には、最もわかり難いもの、実際にそのチカラで生かされているのに、気がつかないものになってしまったのである。

人間は気がつかなくても、天然自然（カム・アマ）は、昔も今も、つねに存在している。自然の生物は、皆それを知って、（その恵みを豊かに受けて、）生きている。人間の脳のみが、それを知らぬ為に、現在の困った状態になってしまっているのであるが、しかも、そのことに気がつかず、人間とはこういうものだと思っている。（脳の落し穴）

* 「アワ」は、生命の感受性のチカラである。

我々の生命力の感受性が、我々の生命の根源に共振する（カムウツシを感受する）ということがなければ、我々は、生命活動（サヌキ）を発動して、生存を維持することはできないのである。

その、我々の生命が 共振（感受）すべき根源 が、「カタカムナ」なのである。（カタカムナヒビキマノスヘシ、ヤタノカカミ カタカムナ カミ）

我々現代人の感受性が著しく劣化し、現実の判断行為の為の機能ばかり発達させてしまった為に、我々の文化は、古代人より進歩したように見えるが、実際は、根本を失った、（生命の感受性の麻痺した、）病的な癌化した状態 になっている。（脳の落し穴）

その原因は、我々の感受性が 感受すべきモノ を、我々の 脳が知らない まま、無理な生命活動をしているからである。

我々は、感受性（生命カン）を劣化させてしまった為に、そのような自分の状態を、感覚できなくなってしまっている。自分が脳の落し穴に陥っていることに、気がつかないのである。気がつかなければ、自分の癌を直すことは出来ない。

現代人の心身の癌は、手術や薬で闘うような文化で、撲滅できるものではない。

しかし、その生命の根源が何であるか？ は、知らなかった。(ヤタノカカミのサトリ 第二首)

まして、その生命活動のチカラが、「カム」と「アマ」(「アワ」と「サヌキ」)であるという物理は、全く知らなかった。(フトタマのサトリ 第三首)

我々は、今まで、現象に出る「サヌキ」のチカラしか知らなかったが、潜象の「アワ」のチカラが生命力の基本であり、あらゆる生命活動は、その「アワ」から出る「サヌキ」のチカラである、ということである。

我々が大マカに「生命力」といっているものは、生命体を保つ(枝を伸し葉を茂らせている)サヌキのチカラ(アマウツシ)だけでなく、そのもとに、アワ(カムウツシ)のチカラがあったのである。

なぜなら、あらゆる生物は、カムアマの始元量の変遷物であるから、つねに、生命の根源に共振(感受)して、生命力の補給を受けなければ、生存を保つことは出来ない。

我々生命体は、そのカミからうつつされるカムのチカラ(アワ)によって、生命活動(サヌキ)をいとなみ、生命体を維持している。

我々の生命体の生命活動を、実際にいとなんでいるのは「サヌキ」のチカラである。(我々は、このチカラしか知らなかったが、)実は、その「サヌキ」に、生命活動(あらゆる判断行為)をいとなませているのは、「アワ」であった。

* 「サヌキ」は現象のチカラであるから、我々も(科学もよく研究して、)知っていた。

「アワ」を我々が知らなかったのは、(科学も研究の対象にしなかったのは、)現象のチカラでは無いからである。

例えば「電気」にしても、科学は、最近まで、「サヌキ」(電子)しか知らず、「アワ」は、無視(気がつかなかった)していた。(半導体の研究から、ようやくホール存在を知った。)

科学が不可解で、行き詰っている問題は、ほとんど、アワ系の(潜象の)分野であるといつてよいであろう。

* 植物が大地に立って、大きく茂っている。

秋になると、その夥しい葉はすべて落ち、春になると新しい葉が出て、再び大きく茂る。

その盛大な生命活動は、太陽の光のもと、根から水や養分を吸いあげ、それによって、枝を伸し葉を茂らせていることは、わかっている。

しかし、その水や養分を吸い上げ、太陽の光を受け入れているチカラ（エネルギー）は、一体どこから出ているのか？

渡り鳥にしても、飛び立つ前に餌をたくさん食べ、それによって、渡りをしている間の身体が養われていることは、わかる。

しかし、何百キロを飛びつつけている、その大きなチカラ（エネルギー）は、一体どこから出ているのか？

更にいえば、我々も、水や食物や空気をとり入れて、身体を保っていることは、わかる。

しかし、そもそも、その水や食物や空気を、自分の肉体にとりいれ、必要なものを必要なだけ、送りこんでいる、そのチカラ（エネルギー）は、一体、どこから出ているのか？

今まで、我々は、そのチカラを、つきつめて考えたことは無かった。考えてみてもつきとめることは出来なかった。

漠然と、「生命力」というような観念用語で、大マカに言っておくしか無かったのである。

我々が「大マカに「生命力」と言うしかなかった、生命のチカラの根源(本質)は、マサに、「カタカムナ」の「カミ」(カム アマ 始元量)であり、我々の生命活動のチカラは、「カム」の「アワ」と、「アマ」の「サヌキ」であり、「アワ」が、生命力の根本であることを、カタカムナのサトリによって、はじめて知らされたのである。(フトマエのサトリ 第三首)

* 我々は皆「生命」をもっている。生命活動については、生物や解剖学の勉強をして、その状態は、かなりよく知っている。

脳の働き（マノスベの精神作用）が行えなくなる、最も重要な、必須の、生命の情報である。

日本民族の遠い祖先のカタカムナ人は、このことに気がついて（この物理を発見して）、「カタカムナ」という最高の根源情報^{コトバ}を示してくれていたのである。

檜崎皐月の解説によって明かされた「カタカムナ」というコトバを、今、私共は、このように、感受^{ワカク}することが出来たのである。（ヤタノカカミ カタカムナ カミ 第二首）

* まことに、脳の進化した人間は、カタカムナ（自分の生命の根源^{カミ}）が何であるかを、脳に深く知って（感受して）生きることが、何よりも根本であり、生れてくる子供にも、何よりも先に、教えこまなければならぬものなのである。

しかし、子供にはカタカムナという言葉で教えるわけにはゆかぬから、カタカムナ（自分の生命の根源^{カミ}）の^{アリガタサ}をわかっている親が、ミを以て（カタカムナの^{カミ}の畏しさと^{アマ}のやさしさを以て）、子供の生命^{カミ}を育て養わなければならないのである。（ミツゴのタマンヒ百まで、アマの愛情のみでなく、何よりもカミの畏しさを子供の生命^{カミ}に植えつけること、生命の基底波「感受性について」補遺2 73～、109～、123～、209～頁 同補遺4 95～、185～、304～307頁、カゴメカゴメの童歌 後出）

そして、このような人間の生き方の思想（脳の考え方^{カミカヘ}）が、日本人の文化の伝統の起源に、（則ち民族の発祥の上古代期に、）確立していたのであった。

因みに、日本語に敬語という心理のある原因（根拠）も、ここにあったのである。

要するに「カタカムナ」とは、生命の根源^{カミ}は、「カミ」であることを示す、カタカムナ人の生命^{カミ}の情報である。

この情報を受けとった読者（の脳）は、自分の観念^{ワカク}で記憶するだけでなく、自分の感受性を鍛え教えて、自分の感受性でカタカムナを感受し、これがカタカムナだ、と認識に出す、というようになって頂くのが、本当の直観鍛練であり、カタカムナの伝達である。（カタカムナの順序（マノスベ）のサトリに対する、逆序（カシラ）のサトリ）

たせなければ、則ち 脳の感受性をマツトウに鍛え養わなければ、マツトモな生存を果すことは出来ない。

なぜなら、進化した脳があるといっても、生れた時は、まだ何も知らない犬や猿の子と同じ状態であるが、放っておけば、欲望追求の「サヌキ性」の方がどんどん強くなって、「カミ感覚」(生命の本能)の方は、退化してしまうからである。

しかし、現代人は、この「サヌキ性」(判断行為のチカラ)を育てることしか考えず、「アワ性」(生命の本能のチカラ)を育てることを知らない。則ち、我々の生命力は、「サヌキ」だけではなく、「アワ」が基本であることを、認識してはいないのである。

驚いたことに、カタカムナの上古代人は、つとに、このことを覚り、人間の脳がもつべき(共振すべき)、則ち人間のオヤが子に教え伝えるべき、「カミ感覚」のカミが何であるか? を、示していたのであった。

それが、「カタカムナ」だったのである。(ミツゴのタマシヒ、生命の基底波、カミに向う向上性 別冊「感受性について」)

そして、その生命のカミ(カタカムナ)に共振する方法、則ち生命本能のチカラ(アワ性)を鍛え高める方法(マノスペシ)を、四十八のコトバ(カタカムナ ウタヒ)として、示していたのであった。

* 「カタカムナ」とは、我々の生命が、よりよく生きる為に、知らなければならぬ 生命の根源 が何であるかということを、(自然の生物が、皆、本能として知っているモノを、)我々の脳に教える、最も端的な 生命の情報 だったのである。

我々の目や耳の 感覚 した情報が、電気信号(という情報)にうつされて脳に感受されるように、我々の感受すべき 生命の根源 が、「カタカムナ」というコトバ(情報)にうつされて、脳に伝えられるわけである。

それは、恰も、DNAの遺伝情報によって我々の生命体がつくられ、生命活動がなされるように、人間の精神活動がマツトウになされる為の、脳の精神構造の基礎をつくる根源情報のようなものである。もしそれが欠ければ、正常な

又、カムナホグ（第十首）とか、カムナホヒ（第四十六・六十九首）もある。
又、「カタカムナ」と同じように、第十七首から第八十首までのウタに屢々出てくる大事なコトバに、「カムナガラ」がある。（41 回）

「カタカムナ」とは、声音の思念では、「カ から タ した カムナ」という意味であるが、それが、最も大事な、代表的なコトバとして、お題目のように、繰返し使われているということは、何と考えたらよいのであろうか？

何としても、私たちは「カタカムナ」の意味を、アタマで理解するだけでなく、自分自身の感受によってわかり、「カタカムナウタヒ」を読むのでなければ、「カタカムナのサトリ」をわかることはできない、ということ、読者はどうか、よくわきまえて、その「カタカムナ」の意味を知りたい（感受したい）という気持をもって、読み進んでいただきたい。（カタカムナというコトバ）

* 因みに、その気持（「カタカムナ」を知りたいと思ふ^{キツ}気持）を、檜崎皐月は、人間の持つ「カミ感覚」といつていた。

それは、生物が皆もっている、自分の生命の^ネ根源に^{キョウ}共振したい（感受したい）という^ホ生命本能である。人間は^{ノウ}脳が進化したから、^{ノウ}脳が、^{キツ}そういう気持をもつわけである。（生命本能とカミ感覚 19頁）

生物は、その本能によって自分の生命の^ネ根源に^{キョウ}共振し（感受して）、一生懸命に（マノスベに）^キ生きている。

それ故、「カミ感覚」とは、「^カ生命^{カン}」（^カ生命の^{カン}感受性）といってもよい。

又、それは^カ生命力の（^ササ^キ又^キ・^アア^ウの^チチ^{カラ}の）、^カ潜在^アア^ウ量といってもよい。

とにかく、生物は、その「^カ生命^{カン}」（^カ生命の^{カン}感受性）を、^ママ^ツウに^カ鍛え^ツづけていなければ、^カ生存を^カ全うすることは出来ないものである。

自然の動物は、皆、そのようにして、（自分の生命の^ネ根源に^{キョウ}共振する、^カ生命本能を^カ鍛え^ツづけることによって、）^カ生きている。

人間も、いかに進化した^{ノウ}脳があっても、生物であるからには、^カ生命の^{カン}感受性を^ママ^ツウに^カ鍛えて、その^{ノウ}脳に、この^カ生命の本能（^カカミ^{カン}感覚）をしっかりと持

私共としては、そのような妨害がいかに多くとも、その方は、天然の淘汰に任せ、（自分から「バチが当る」にまかせて、）こちらは、カタカムナの本拠「相似象」の波動量^{ハツカ}を、いよいよ鍛え高めて、一人でも、カタカムナに共振波動をもつ読者に出会い、この祖先の（アジアトウアンの）サトリを、どうか正しく「ウツシ マツル」ことが出来るよう、ひたすら念願して、せい一杯、よい解説を書くことに、努めるまでである。

共振波動をもつ読者は、どうか、この、人間の脳（自分の脳）のもつ能力のクセをよくわきまえ、自分の脳の感受性に正直にしたがい、私共の祖先の示^シしてくれたサトリを、スナホに勉強する心になって、読み進んで頂きたい。（「人間の脳の落とし穴」「脳の下剋上」感受性について その一・その三）

* 榎崎皐月解説 カタカムナ ヒヒキ マノスベシ

* 解説 「カタカムナ」とは、「カ から タ した カムナ」、「カ から タ する」とは、ヒ（根源）から ヒキ（引き出されて発生）すること。「カムナ」とは、「カムのナ」則ち、カムのチカラが、実際に、現象にカカワル時のカムの実質をいう。（十号（23）頁）

* 「カタカムナ」とは何か？

私共は、「カタカムナ文献」とか「カタカムナ人」とかといっているが、それは、榎崎皐月の解説した巻物の、最初に出てくるコトバが、「カタカムナ」であり、第一首から第四十五首までに屢々（23回）出てくる、最も大事な、代表的なコトバであると、感じたからである。

八十首のウタを示してくれた（カタカムナの）上古代人が、「カタカムナ」というコトバを、ウタの中で、しばしば使っているのは、一体、どういう気持だったのであろうか？

第二首では、カタカムナ カミ といっている。

又、第三首に「フトマニ」というコトバがあり、カムナマニマニ ともいっている。（第四十八・五十八・六十首）

の「カミ」に違いないことを、知っているからである。

要するに、その波動量の人々の心理としては、「神・仏・靈魂」のレベルで受けとめるしか無いのだから、筆者としては、それを、とがめてみても、はじまらない。

それ故、彼らの本心を親和（アワ）して、（いつか、真のカミを感受する心になって下さるトキを念じて、）「黙っている」しか無いのである。

* しかし、ことは、それでよいわけは無い。

更に大きく考えれば、人々の現在の文化（思想）を放置すれば、人類は滅亡へ赴き、我々は、人類の軌道を修正し、人間の真の文化を復活させる機会を失うことになる。（もろともに亡びの道 前号 補遺3 396頁～）

それ故、カタカムナの思想を今、筆者が、いかに一生懸命説明しても、大多数の人々には、正しく受けとって頂けないであろうが、極めて少数の人（「神・仏・天国・地獄・靈魂」の思想や現代科学の思想に満足せず、なお、つきつめずにいられぬ波動量をもつ人々）の為に、筆者は、カタカムナの「カミ」が、「靈魂」や「神」「仏」と違う所以を明らかにし、人間のあるべきスガタとして、人間が、本来、持つべき最もマトモな、人間として最もアタリマエなカタカムナの思想を、筆者のわかり得た限りをつくして、述べなければならぬのである。

思えば、釈迦の思想が、「仏教」のレベルのものとして二千数百年の間、世界中に、まことしやかに伝えられ、富永老師が究明するまで、釈迦の真実は、黙秘され、埋没していた。多くの宗派が出たということは、いずれも本ものでは無く、皆、釈迦の思想を、その程度のものとして伝えていた、ということの証拠である。（「感受性について」（その三）仏教の整理）

しかし、真実というものは、いかに妨害するものが多くとも、いつか、共振波動をもつ者の出現によって、明かされずにいないものである。

大和朝成立以来、匿されていたカタカムナ文献も、榑崎皐月によって、その真実が明かされたが、しかし今、又、いろいろの反作用を受けるのも、全く、やむを得ぬことなのであろう。

殊に、それが、単に、神や仏やアートマンや靈魂等の存在を腦の觀念の次で認めるという程度ではなく、心から、神や仏の信仰をもつに至った者は、(それを回心といい、悟りともいうのだが、)一たび神や仏の信仰に目覚めてみると、今まで、一般常識の世俗の我執迷妄の世界に暮っていたのとは、精神状態が一変し、ものの見方、考え方、価値観が、全く違ってしまったことを自覚する。

それ故、そのような信仰の悟りの体験は、人間の腦の覚作用の発達の第一段階(ベータの覚)、第二段階(ウパニシャッドのアートマンの覚)の相似象とみてよいであろう。(そしてそれは、神も仏も持たず、求めようもしない人々よりは、よいに違いないし、個人の幸せや救いという意味では、何も文句をいうことは無いが、)しかし、真の覚作用の完全発揮とは、異なるものであるといわねばならない。

なぜなら、彼らの信仰には、神の契約や仏の法に従うばかりで、「神」や「仏」とよぶモノの感受が無いからである。

真に信じ、従い、祈るものならば、真実の「カミ」の感受(根拠)がなければ、本ものではない。

しかるに彼らの神や仏の思想は、神や仏の正体(根拠)は知らされぬまま、腦の觀念の(大脳次元の陶醉)で満足する程度のものである。

その為に、カタカムナ人のような、カム・アマの感受(根拠)に基いて、カミを畏れ親和する生き方を知り、生命発生の物理を開発することは、不可能なのである。

今、相似象会誌が、カタカムナの「カミ」をいかに説明しても、「神」「仏」のレベルでしか受けとれない人が、大きな顔をしていても、筆者は、アタマから、その人を、冷く否定(嫌悪・非難・排撃)する気にはなれないで、結局「黙りこんでしまう」ことになるのは、(本人の腦はわかっていないが、)いやしくもその人の本心は、自分の生命のカミを求めている筈だ、と思われるからである。彼らの生れながらの生命の本心が、本当に求めているものは、カタカムナ

「天国・地獄」「輪廻転生」等の観念の思想となったのである。又、彼らの詩や芸術は、自分たちの脳がまだ認識しない真実の生命のカミを、本能的に求めたものであろう。

ということは、彼らが「神」「仏」として求めたモノの真実は、カタカムナの「カミ」であり、「靈魂」と思っているモノの真実は「アマナ」であり、「宇宙エネルギー・多次元・死後・靈界の世界」と思っているモノの真相は「カム・アマ」の物理である、ということになる。

彼らは今、「神」や「仏」や「靈魂」等の観念の思想で満足してしまっているが、実は、彼らの生命の本心が本当に欲しいものは、彼らの「神」や「仏」のような観念の陶醉ではなく、真実のカタカムナの「カミ」の救いであり（ヤタノカカミ）、彼らの生命の本心が本当に求めたものは、彼らの「靈魂」や宇宙エネルギーのような思想ではなく、カタカムナの「アマナ」の命のサトリなのである（ミミコト フトマニ ニ）。

しかし、そうはいつでも、今の彼らには、「カミ」や「アマナ」や「カム・アマ」の真実の意味は、わからせようがない。

今、筆者が、『神や仏は「カミ」とは違う』と、いかに説明してみても、彼らに、カタカムナの「カミ」や「アマナ」を、感受させる（わからせる）ことは出来ない。

しかし、又、考えてみれば、実際に、現実の生活に於て、「神」も「仏」も持たず、自分の生命のカミを 求める心など失ってしまっている人々よりは、「神」や「仏」のレベルの思想でも、それをもつの方が、よいに定っている。

* 思えば、人間が、神や仏やアートマンや宇宙生命等の思想をもつということは、生物の脳の発達の段階としてみれば、たしかに、人類の脳のもつ 覚作用の一つの「覚」の段階の相似象であるに違いない。（脳の覚作用の発達段階、動物次元から進化した第一段階は「ベエダの神の覚」、第二段階は「ウバニシャッドのアートマンの覚」、第三段階の「釈迦の真正覚」は、覚作用の完全発揮 前号 感受性について 補遺3 13～、136～、201～、224～、259～、403 頁 前号その三 377～頁）

「仏」等という思想は、まだ、人々の通念には無かった。というより、そのような思想を持つ必要が無かったのである。「靈魂・靈界」や「神・仏」等の思想は、「カタカムナ」のような祖先の教えの無かった民族の人々が、その為に苦しみ悩み、救いを求め、祈って、つくり出した思想である。

しかし、カタカムナの上古代以来、祖先の教えを日本の心として伝えもって来た日本人が、今や、甚しくその心を失い、「アジアトウアン ウツシ マツル」といった祖先の心を、このように無下にふみにじる者が出るのも、思えば、どうしようも無いことかも知れない。

当人に悪気は無く、いくら説明してもヒビク波動量が無い、(無いことをわからせることが出来ない)のだから、筆者も、個人としては、抗弁する気もなく、黙りこんでしまう。

(はじめは、出版停止の裁判を起すことを考えたが、結局、一切、放置して、すべて、天然の淘汰に任せることにしたのである。)

* 『すべて天然の淘汰に任せ、結局、黙りこんでしまう』のには、一つには、次のような気持もあった。

大きく考えれば、人間は、自分の生命のカミを失っては生きられないものであり、あらゆる動物が、皆、本能として、自分の生命のカミを知っているように、人間も、(人間には進化した脳があるから、その脳が、)自分の生命のカミを知っていなければ、人間としてマトモに、生きることは出来ないものである。(生命本能とカミ感覚 24頁)

我々の祖先のカタカムナ人は、このことに気がつき、その脳を教えるカミのサトリを開発してくれたのであったが、(それが日本語の発祥であり、日本人の心の根拠であり、日本の文化の根源になったのであるが、)他の民族に於ては、そのことに気がつかぬまま、風土的なきびしい環境条件の中で、現実の生活の為に、もっぱら脳を働かして生きるしかなかった。(それが彼らの科学や哲学や宗教の文化である。)

しかし、その中であって、彼らの脳は、やはり本能として、自分の生命のカミを求めずいられぬものがあった。それが、彼らの「神」「仏」「靈魂」「靈界」

介する本を書く能力は無い」といくら止めても、気にせず、『それでもどうしても出す、出版は個人の自由だ』と言われるなら仕方がない』と言えば、『宇野多美恵氏の了承を得て』とすりかえ、『カタカムナの全容を公開する』と称して、今日まで、私共が、一言一句、大切に大切に、慎重に扱って来たカタカムナのウタを、(相似象会誌の図版や、榎崎皐月の解説したカタカナ文字を、)無残に使用して、憚りも無い。

本人としては、真面目で優秀な学者であっても、まことに、畏れを知らぬ者は、世にも恐ろしいことを、少しの悪意もなく、平然と、やってのけるものである。(「活動的な無知 ほどおそろしいことは無い」(ゲーテ))

なお、深野氏は、『相似象会誌は難しいから、私にわかり易く紹介した』といわれているが、やさしく書く ということ、内容を引き下げる ことと、マ違えてはならない。

カタカムナ文献の解説に当って、筆者が最も^{オソ}畏れているのも、このことである。

いかに自分としては誠実であっても、熱意が強くても、自分自身が本当にカタカムナを正しくわかる能力(波動量)を持っていなければ、この過誤を犯してしまうからである。

因みに、筆者は榎崎皐月から『わかる能力の無い者を、わかった気にさせるような文章を書いてはならない』と言われたことを、肝に銘じている。

又、考えようによっては、何はともあれ、この本によって、カタカムナが存在を、心ある人に知らせる縁が生じる、という効果もあることだろう。

しかし、あからさまに言えば、このような誤った(引き下げた)紹介のされ方をすると、なまじ、わかる能力のない人々に空しい興味をもたせ、逆に、本ものの研究者の(本当に読んでほしい人の)関心を阻むことになる **おそれが大きい**。

今までにも、相似象会誌を勝手に使って本を出す人はあったが、そのままにしていた。もともと、「カタカムナ」は、榎崎や宇野の個人のものではなく、日本民族のもつ、祖先のものである。子孫の人々が、それをどう扱うも、自由の筈である。「カタカムナ」を、どのように解釈するも、勝手であろう。「アマナ」を靈魂ととり、「カムナ」を靈的生命の主ととり、「潜象」の意味を異次元世界・靈界・宇宙エネルギー等ととるのも、仕方がないことである。(波動量が無いのだから。)

因みに、カタカムナの世には、「靈魂」や「靈界」(死後の世界)や「神」

「民族の祖先から受けつがれた個人の本能的生命力（潜在アワ量）」という条件に於て、欠けるものがあつたわけである。

その為、彼らは風土的なきびしい環境条件のもとで、必然的に「サヌキの文化」に進行し、強力な「サヌキ型社会」を成立した。（彼らのサヌキ型社会とは、「神・仏・天国・地獄・靈魂」の思想レベルで、もっぱら科学技術を発達させ、欲望追求・戦争・侵略・権力支配・革命をくりかえす文化である。）

人類に、このような強力なサヌキ型社会が成立してからは、他の、原始以来のアワ型社会をいとなんで来た人々も、一たび、この強力なサヌキ型社会の文化に出会えば、忽ち圧倒され、まきこまれずにいなかった。（彼らは、人類の文化は、こういうものと思ひこみ、自分たちを文明人・先進国と称し、他を未開人・後進国・発展途上国とみなしている。）

かくて、祖先にカタカムナのサトリをもたなかつた民族はもとよりのこと、今や、祖先のサトリ（伝統）を失つた日本人も、ともどもに、人類は、とうとうとして、サヌキ型社会の文化に支配されてしまつてゐる。（人類文化の正・反性十号、どこまでつきつめるか「感受性について」補遺4）

* このような次第であるから、今、「神」「仏」や「靈魂」の思想を最高とする人々は、カタカムナの「カミ」や「アマ」というコトバを聞いても、自分たちの「神」「仏」の波動量で考えるしか無い。

彼らは、先に述べたように、「カタ カムナ ヒヒキ マノスベシ アシア トウアン ウツシ マツル カタカムナウタヒ」という檜崎卓月の解説を読んで、わかつた氣になり、実は、自分が、「カ」も「タ」も「カムナ」も「ヒヒキ」も……知らないことに、氣がつかない。

氣がつかぬどころか、自分の思想で共鳴を感じるところのコトバのみをとりあげて、『アマナは靈魂にあたり、カムナは靈的生命体のヌシである』『カタカムナ人はカムナとテレパシーで交信する超能力者』『カムアマは宇宙エネルギー』等と勝手にこじつけ、要するにカタカムナを自分の思想レベルのものとして、一般に紹介しようとする（というより、自分の思想の本を売る為、にカタカムナを利用することになる）のである。（深野一幸著 超科学シリーズ）

その類の者は、「あなたはまだカタカムナがわかつていないから、カタカムナを紹

ものである。

その条件とは、風土的な（アフリカとかヨーロッパとかアジアとか、）地球上の「場」としての環境条件と、社会的な（原始自然発生的な、オサ中心の、生命尊重の文化をもつ「アワ型社会」か、あるいは人類にのみ進化した脳のサヌキ性尊重の文化をもつ、欲望追求・権力支配・民主的な「サヌキ型社会」かの）文化的環境条件と、そして、民族の祖先から受けつがれた、個人の本能的生命力（潜在アワ量）とである。

カタカムナの思想は、日本という風土的（イヤシロチ）環境と、原始・オサ的「アワ型社会」の環境条件に於て、カタカムナ人とよぶ日本民族の祖先の上古代人によって開発され、受けつがれた、「カタカムナのサトリ」に基く思想である。

そこでは人々は、生命発生の物理を知り、自分の生命の起源（根玄）を畏れて親和し（ヒレフシ・イヤマヒ）、自分の生命のチカラ（アワ量）を鍛え高めることを生きるヨロコビとして（マノスベに生き）、侵略や戦争ということを知らず、地球自然の存続する限り、生存を全うしうる、そういう思想をもっていた。つまり、彼らの社会には、民族の発祥以来、親から子へ、オサから人々へ、教え伝えるサトリがあった。進化した脳をマツトウに働かす為のスペ（逆序のサトリ）である。

* それに対し、有史以来今日までの「サヌキ型社会」の環境条件に於て、発見され開発された思想は、カタカムナの思想には無かった「神」「仏」「天国・地獄」「靈魂」「死後の生命の再生や輪廻」等の思想と、そして「科学」の思想を持った。そして人々は、たえず、侵略と戦争をくりかえし、今や人類の滅亡が警告されている。

もっとも彼らも、有史以前、その初期に於ては、（旧訳聖書のエデンの園とか、プラトン等のアトランチスやクレタ島の伝説によれば、）豊かな生命の向上のよろこびを以て生き、戦争も侵略も知らぬ理想郷をいとんでいた、というから、人類のハジマリは、皆、「アワ型社会」の文化（思想）であったのであろう。つまり、彼らもハジマリはカタカムナの的であったが、しかし、彼らの民族の祖先には、「カタカムナ」ほどのサトリは開発されなかった、ということであろう。

だと思いきこんでいる。

ところが、実は、仏教にもキリスト教にも、道教にも、儒教にも、ニュアンスの違いはあるが、波動量のレベルとしては、同等のものが多い。

民主主義も共産主義もヒューマニズムも実存主義も、又、騎士道も武士道も、皆、独自の思想とと思っているが、又最近の「ボランティア」の思想は日本には無かった等といわれるが、実は波動量のレベルとしては、同等のものが多い。

いずれにしても、(キリスト教も仏教も……) 自分の脳の集めた情報を抽象して、自分としては最高と思うまでに高めたものであるから、それが、その人々の、則ちその民族の波動量の最高の思想である。

しかし、もし、そこまでつきつめた思想でも満足できず、なおも、つきつめずにいられぬ者があれば、(釈迦やゲーテのように、極めて稀なことであるが、) 心理的転換(高調波)が、生じている。

富永老師はそれを、人間の「真正覚」とした。(しかし、それは、その天才ひとりのもので、一般人には受け容れられないものであった。)(「人間の覚作用向上性」前号 補遺3)

因みにカタカムナには、そういう「心理的転換」のような事例は無いが、人間の波動量のレベルとしてみれば、「真正覚」といわれたものは、「カシラ」といっているものの状態に当るであろう。(第六十一首)

則ち、極めて稀な「心理的転換」(ゲーテのいう「ペンディング」)に達した人の思想は、カタカムナ人の思想に、共振波動をもつ(わかりあうことの出来る)ものである。しかし、前述の、「自分としては最高と思うまでに高めた思想」であっても、それに不満をもたずに安住している人々は、「カタカムナ」に出合っても、共振波動が起きない(感受することは出来ない)。

しかし、人間の脳の能力として、自分に感受はなくても観念の情報として共鳴はするから、自分ではわかったつもりで、自分の思想にとりいれることはできるのだが、その自分の理解がマ違ってすることに、気がつくことが無い。(共振と共鳴「感受性について」補遺2 263~266頁)

* 言いかえれば、人間の思想というものは、その人の 生きている条件なりの

あらゆる生物は（鉱物も植物も動物も）、生れながらの固有振動をもっている。その振動数は、個体としては一生変らぬものであるが、長い目でみれば、（元素にも同位元素があり、原子転換があるように、）あらゆるものは、変遷し、還元するものである。

固有振動をもつものは、判断行為をすれば（生命活動をすれば）それなりの波動を出す。我々人間も、自分の固有振動の波動量なりに生きているわけであるが、人間には進化した脳がある為に、その脳が、自分で自分自身を教え、鍛え、高めることができる。（逆序の能力）

あらゆる生物は、固有振動を、一生、変えることは無いのに、人間だけが、自分の生命の波動量の高調波をもつことができるようになったのである。

その代りに、又、その脳が異常を来したり、痴呆化したりして、逆に、生命の波動量を下向し、欠落させることもある。

要するに、我々の思想は、その、自分自身の波動量なりのものである。（たとえ、他人の思想や学問や智識をいかに多く取りこんでも、感受が無ければ波動量は高まらない。）

人間の思考力は、脳の生命力（潜在アワ量）から出る。

思考力は、本来、自分の感受に基いて働くものであるが、人間の脳は、自分に感受が無くても、様々な情報を集めて、様々な、役に立つ思考判断を出すことができる。

しかし、「直観」や「創造」といわれるものは、そのような観念の次元の思考力からは出せない。

「直観」は、あくまで、自分の「感受」に基く判断であり、「創造」も、新たな生命力（潜在アワ量）の発生ヒツクの感受がなければ、不可能である。（対向発生フットのサトリ 第三首）

* 人間は皆、子供の時から様々の情報（智識や常識）を集め、自分の思想をもっている。それは極めて多様性がある。しかし、波動量のレベルで見れば、整序することができる。

しかし、この波動量の物理を知らぬ者は、自分のもった思想が、最高で真実

どこにも 救われる道が無かった。

しかし、今、はじめて、カタカムナのサトリによって、私共は、今までの自分たちの 疑問や、悩みや、不満や、又、心身の病や癌は、皆、脳の落し穴に陥った為であることに気付かされ、逆序のサトリを^{さべ}実行する道 を、知ることが出来た。

しかし、そのカタカムナを、現代人に伝えるに当り、檜崎阜月の解説をいかに懇切に述べても、正しく受けとって（わかって）頂くことは、不可能であることも知らされた。

なぜなら、カタカムナのサトリは、脳の落し穴に陥った思想では無い からである。

ということは、カタカムナは、自然の動物と同じ鋭い感受性に基いて、現代人と同じ高度に進化した脳 を、マッウに働かせて開発した思想 であるから、落し穴に陥っている脳の人には、わかりようが無いわけである。

カタカムナを、読者に受けいれて正しくわかって頂く為には、何としても、読者の脳の 受け入れ態勢 を（脳のマトモな使い方を）用意して頂かなければならないのである。

どうか、読者は、先ず、自分の脳の落し穴に、ハッキリと 気がついて 頂くことが、何よりも先決問題である。そして、自分の脳から自分を教え、鍛える態度になって、読んで頂きたい。

そのようにして、カタカムナの感受性（受け入れ態勢）を鍛えてゆくことが、読者自身の 最高の幸（真の救い）に、確実につながるのである。

カタカムナのサトリは、それを、教えてくれている。（脳の落し穴、感受性について その二 1～頁、 その三 159～171頁）

* 因みに、人間の思想は、（というより、人間の心理とか人生観といった方がよいかも知れないが、要するに人間の脳の能力というものは、）自分の 波動量のレベル なるのものであることを、知らねばならない。

波動量とは、脳のもつ 生命のチカラ であり、カタカムナの物理でいえば 潜在アワ量（アマナ量）である。

その方法を示す者は無い。

なぜなら、誰も、原因がわからないからである。

それ故、私共は、これを、なまじ人類の脳が進化した為に、**脳の落とし穴**に陥った、困った状態というのである。

しかし私共は、人類の滅亡を予言する人々のような絶望は、していない。

なぜなら、人間の脳には、**逆序の能力**があることを知っているからである。

逆序の能力とは、自分の脳から自分自身の感受性を教えかえして、自分の**生命の波動量**を、変える（向上させる）ことが出来る能力である。

しかし、いかに逆序の能力があるといっても、自分で穴から出たいと思う人でなければ、引っぱり出すわけにはゆかない。

* 「脳の落とし穴」といわれても、思えば我々は、親子代々、その穴の中に生れ、いやおうなしに、その中で生きなければならなかったのである。（仏教はこの世を苦の世界とみ、キリスト教は原罪の人間とみている。しかしそれが、人間の脳が進化した為の落とし穴であるという、ハッキリとした認識（自覚）は無かった。）

今までの宗教や道徳や民族的な教訓は、（脳の落とし穴から脱け出させる根本的な教えは考えられないから、）その穴の中で生きるしかない人々が、出来るだけ、不幸や病や争いに陥らぬ為の、（異常バランスの）救いを説くものであった。

それ故、脳の落とし穴の中に生きていても、一向に疑いをもたず、神や仏の思想を信じて、つましく平安にくらす人々には、何もいうことは無いし、又、落とし穴の中の世界に様々な不満や矛盾を感じても、その中で、自分なりの欲望満足と安楽を求めて、けっこう、よろしく立ちまわり、又は自分たちの**脳**の能力を競い、優越して満足する、という類の一般多数者には、どうしようも無い。

現在の文化に**根本的な疑問**をもち、自分の脳に**悩みや不満をもつ者**は、今までは、そういう人があっても、（釈迦・孔子・ゲーテ・其角・富永老師のような特別な天才なら、自力で逆序のサトリを啓発することが出来たが、）凡人は、

しかも、自分の方の誤解には気がつかず、カタカムナを、自分のレベルに利用したり、あべこべに、優越的に批判し、食ってかかたりする。

そのような人々に、自分のレベルを（それが誤解であることを）わからせることは、何としても不可能である。（それ故にこそ、脳の落とし穴というしかないのである。）

* そもそも人間の脳が進化したということは、人間が、「カシラ」の能力をもったということである。

「カシラ」（力の示しのあらわれ）の能力とは、生命を発生する場をつくる能力である。

「力」（天然自然）が万物万象の生命を発生する「順序」の能力に対し、人間の脳が、生命発生場をつくることを、「逆序」の能力という。

人間は、自分では、木の葉一枚生産することは出来ないが、脳の働きによって、（自分自身を教え鍛えて、）新たな生命力を発生させたり、自己の固有振動を変えることが出来る。

又、植物を耕作したり動物を飼育して、新たな生命を発生させる場をつくる事が出来る。

それ故、生物は、本来は、感受がなければ脳は働かぬものであるが、人間は、自分の脳の正しい使い方を知れば、（逆序のサトリの能力があるから、）自分で自分自身を教えて、（自分の脳から自分自身の感受性を教えかえして、）新しい生命を発生させ、正常に（マノスベに）生きることが出来るのである。

その代りに、人間が、もし自分の脳を正常に（マノスベに）使うことを知らなければ、進化した脳（の逆序の能力）がアダになり、自己を破滅させ、他の生物や環境を破壊させることになる。

現在の現人類の状態は、まさにその危険信号である。

しかし人々は、そのことに気が付かず、これが人類の社会というものであり、文化の発達した為の必要悪だと思っている。

中には人類の滅亡を予言する人があっても、それならどうすればよいか？

おかげで人類は今日の文化と繁栄をものにしたが、しかし、そのような脳の使い方しか知らずに生きてると、) 感受性が悪くなり、生命カンが退化して、本来の、生命の感受性に基いてスナホに考える、という マットウな脳の使い方が出来なくなってしまう からである。(「生命カン」19・24頁)

しかも、現代人は、多かれ少なかれ、殆んど誰でも、その困ったクセが、こびりついてしまっているのです、自分で、自分の困ったクセに、気がつくことが無い。反省する、とか、発想を変える、とか、発明・発見・創作・独創などといっても、観念のレベルでしか出来ず、それ以外の^{フタヘ} ^ヘ ^{ツラキ} ^{クセ} があるとは、全く考えられない。

* 我々は日常何をするにも、(立っていても坐っていても歩いていても、食べたり飲んだり、入浴やトイレの際でも、) つねに、絶え間なく脳が働いていて、感受性はお留守の状態になっている。

立ったり坐ったり歩いたりする姿勢が悪くなっていても、手足や首の動かし方が無理な緊張をためこんでいても、又、胃腸や肺や心臓などの内臓の状態が、^{ストレス} 疲れや歪みを来していても、そして、その為に、何となく、アンバランスな不快感や嫌悪感をかかえていても、既に、それが、無意識のクセになってしまっているから、その不快感や嫌悪感を意識に上らせることなく押し流して、(あきらかな病気の苦痛や癌の症状が出るまで、) 気がつかない。

否、病気になって気がつく(ヤマヒによってヒを知る)者は稀で、大ていはいは、癌になっても気がつかず、更に、(感受の無い) ^{フタヘ} ^{クセ} 脳を働かして「闘病」すること(手術や新薬や民間療法などを求めるサヌキ)しか考えられない。

それ故、脳の落とし穴に陥った、困った状態、というのである。

釈迦・孔子、ゲーテのような聖人天才とよばれる人は、そのことに気がついて、(落とし穴から脱けて、) マットウな思想を説いたが、人々は、自分たちの^{フタヘ} ^{クセ} 脳の(観念の落とし穴の)レベルでしか受けとれなかった。

今、カタカムナに出合っても、(脳の落とし穴に陥っていることに気のつかぬ人々は、) 自分たちの観念のレベルでしか、受けとることは出来ない。

ところが、進化した人間の脳は、このような直接の感受に基く 正常なハタラキ だけでは無く、その経験の中から様々な 欲望が派生し、その欲望を満足させる 為に、自分の感受した情報のみでなく、自分には感受の無い他人の経験の情報 をいくらでも集めて、自分の思想（欲望を満足させる思想）を、造りあげることが出来るようになったのである。

しかし、その人の思想の高さは、自分の 感受に基いて働いた分の波動量 なるものであるから、自分の 感受のない情報 を集めて、いかに活躍したとしても、波動量は高まることは無い。（しかし世間的にはこの種の者が、立派な博士や教授や作家になり、有名人としてまかり通っている。）

それ故、概要を読んだだけでわかった気になるような読み方ばかりしていると、（自分に感受の無い情報をいくら集めても、脳の波動量は向上しないから、）自分では、カタカムナを勉強したつもり（わかった気持）でいても、カタカムナ人の示してくれた本当の意味は、わかっていない。しかも、自分のわかっていないことに、気づくことも出来ない、という有様になるのである。

（実は、そういう有様で、カタカムナをわかったつもりの人々が、相似象会誌を勝手に引用し、自分の思想の本を売る為に利用して、畏れも憚りも無い、という困った事例が、少からず出現している。）

今は、そういう種類の情報（カタカムナを紹介する本など）も、たくさん出ているから、読者は、何としても、この、人間の脳（自分の脳）の悪い落とし穴に陥ることの無いよう、どうか、自分の「感受」を大切に、正直に、自分の感受性（波動量）を 鍛え高めて、会誌を読みこんで頂かなければならないのである。

＊ カタカムナの解説を読んで頂くに当り、人間の脳的能力と、困った習性（脳の落とし穴）について、もう少し、聞いておいて頂きたい。

人間の進化した脳の困ったクセを「脳の落とし穴」というのは、そのような脳の働き方（感受のない観念の能力）ばかり使っていると、（実は、その能力の

カタカムナの解説を始めるに当って、読者は、どうか、人間の脳(自分の脳)というもののナリタチを、よく、わきまえてかかって頂きたい。

それでなければ、いかに熱心に読んでも、正しく受けとることは、できないからである。(前号「感受性について」は、このことを、本当にわかって、自分自身の脳のクセを、よくつきとめて 頂く為に出したのである。)

そもそも、生物の脳は、感受したものを判断し、適切な行為を指令するものである。(本来は、感受がなければ、脳は、働き出さない。)

早い話が、美しい風景や珍しいものを見た者(感受した者)は、それを言葉でいろいろ説明できる。しかし、どんなにうまく説明しても、他人にそれを見させる(感受させる)ことはできない。おいしいものも、どんなにうまく説明しても、他人にそれを味わわせる(感受させる)ことは出来ない。

しかし、美しい風景やおいしいものなら、実際にその場につれて行き、食べさせるなどして、経験をさせればわからせることは出来る。(百聞は一見に如かず。)ところが、思想の経験は、いくら教えられてもわからないばかりか、その人に会い、その人の言葉を直接に聞いたとしても、自分が実際に体験しない限り、本当にわかることは出来ない。

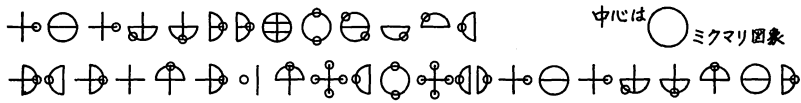
自然の動物は、皆、感受に基いて、脳が働くという「順序」で生きている。感受なしに脳が働くということは無い。

しかるに、進化した人類の脳は、今、直接の感受がなくても、他人から教えられたり、自分の過去の経験の記憶など、内外環境の刺激によって、いくらでも働くことの出来る能力をもってしまった。(実際に見なくてもわかった気になり、本当に体験しなくてもわかった気になれる。)

* 我々は、子供の時から、一つ一つ、感受したものを判断し、その経験(記憶情報)を集めて、自分の思想(智識や常識)をもって来た。それが自分の脳の波動量である。

そして、機能には向上性があるから、その経験(の質と量)が多くなるにつれて、波動量は高くなるものである。

❖ 第一首



* 榎崎皐月解説 カタカムナ ヒビキ マノスベシ アシアトウアン ウツシマツル カタカムナ ウタヒ (十号 第一首 (3)~(29) 頁参照)

* 概要 「カタカムナのヒビキはマノスベシである」「アシアトウアンは、このサトリをウツシマツル者となり、カタカムナのウタヒをよみました。」

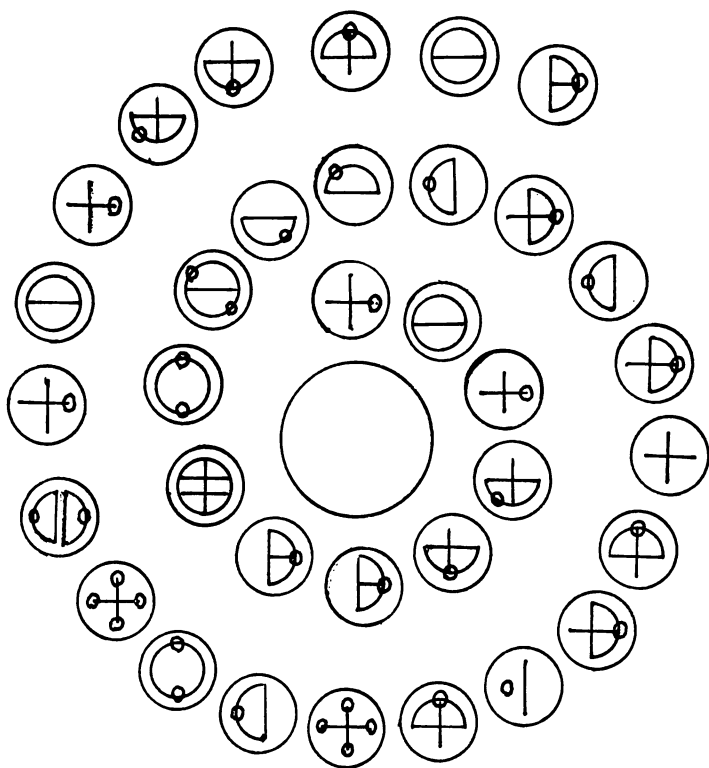
これは、カタカムナ人の開発した「カタカムナ ヒビキ マノスベシ」のサトリを、「アシアトウアンが、ウツシマツル、カタカムナウタヒ」の宣言である。

* 榎崎皐月の解説を、このように概説すれば、我々は、何となくわかった気持になるであろう。

普通の古代語の解説なら、それですむのであるが、しかし、カタカムナの場合は、それだけですませては、このコトバを示したカタカムナ人の言わんとした意味は、則ち、榎崎皐月の解説の意味は、何も、伝わりはしないのである。

なぜなら、我々の脳は、「カタカムナ」とか「ヒビキ」「マノスベシ」等の個々のコトバの意味は知らなくても（感受が無くても）、それらのコトバを集めた『カタカムナ ヒビキ マノスベシ……』という文^{コトバ}を読むと、何となく、わかる（気持になる）ことが出来る、という観念^{観念}の能力があるからである。

それ故、我々は、この、自分の脳の能力の限界^{限界}をよく知っていないと、概要を読んだだけで、わかった気になり、本当は、自分はまだ、何もわかっていないことに、気がつかず、読み流してしまう危険がある。



カタカムナ文献解読

判明したことである。

決して、一方的な（自己陶酔的独善的な）、又宗教的民族主義的な、それこそ、人類の脳の落し穴に陥った現代文化の中で、観念の優劣を競う程度の次元のものでは無い。

その証拠として、カタカムナ文献の解説を公表し、相似象会誌「感受性について」を出しているのである。

＊ カタカムナ文献の大要については、則ち、カタカムナ文献の原本と、解説の経緯、カタカムナ文献の形式と解説のしかた等については、第十号に述べた。本号は、第十号につづいて、カタカムナウタヒ第四首からの解説を進めるのであるが、その前に、第一首から、改めて読みかえし、その意味を、自分自身の感受性で、感受してみることから始めよう。（第十号 3～、27～頁）

＊ カタカムナ文献の凶象文字は、榎崎皐月が解説して、「カタカムナ」の八十首の歌として第九号に公表したのであるが、そして、榎崎自身には、その意味が、わかっていたのであるが、しかし、一般人は、榎崎の解説法を教えられても、それだけでは、「カタカムナ」というコトバは読めても、「カタカムナ」が、どういうモノか？ まして八十首の歌詞が何を意味しているか？ 全くわからない。わけのわからぬ祝詞をきかされているようなものでしかないであろう。

それで、筆者は、自分が師から教えられたように、四十八の声音の基底思念を説明し、カタカムナのコトバの成り立ちをよく説明すれば、わかるであろうと思ひ、（第十号では、それを精一杯こころみたのであるが、）しかし、いかに詳しく説明してみても、やはり、それだけで、カタカムナの意味を、本当にわかる（感受する）ことは、不可能のようである。

このような困難な状況をふまえて、本号は、榎崎皐月が解説し、諒解していた「カタカムナ」の真意を、何とかして、出来るだけ正しく、お伝えすることに、及ばずながら微力の限りをつくす所存である。

* カタカムナ人は、自分たちの感受した生命の根源を、後代人の「神」「仏」のような観念で、(大脳次元の操作で片付けて、「神」はすべての創り主、「仏」は衆生の救い主、等という観念で)満足する、というレベルの思想では無く、自分たちの感受した天然自然のあらゆる状態を抽象して、万物万象の生命の根源を直観し、ありのままの物理を開発していた。

ということは、その、天然自然の現象のあらゆる変遷の状態を、(則ち、カムアマの始元量が、「光」となって発生し、光は「色」に変換され、「電気」に変換され、又「音」に変換され、雨や雲の「気象」や、星や地球や、そして地球上のあらゆる生物の「生命」に、生成還元されている、その、宇宙環境の、ありのままの変換のしかたを、)コトバに表明し、更にそれを表示する図象符を造って、伝達していたのである。

それが、八十首のウタヒのカタカムナ文献である。そして、それは、四十八の日本語の起源を示すものでもあったのである。

カタカムナ人の造り出したコトバと図象符(四十八の声音符と図象符)は、現代人の概念の言語・文字とは異なるものがあるが、正しく、人類の根原言語・文字というべきものである。

それ故、その図象符によって示されたカタカムナ人の物理(カタカムナ文献)の解説は、現代人の観念的な理解(大脳次元の操作)では、わかることは出来ない。どうしても、読者自身の感受性を起励して読む態度になって頂かねば不可能なのである。

* 日本民族の祖先のカタカムナ人のサトリ(思想)が、現人類の持ちうる文化の、最高度の思想である、ということは、所謂、エジプト・ギリシャ・ローマ人、又はユダヤ人やナチスや又敗戦前の日本の軍部の持ったような、選民思想の類でいうのでは、全く無い。

このことは、富永老師の、世界の古今東西の民族の持った思想の究明を通し、三人の師の、人間の生き方の思想の研究を受けついで上で、カタカムナ人の表示したサトリ(思想)のコトバを、ミを以て感受して、はじめて、確実に、

✦ カタカムナ文献解説

* 原初の人類は、我々現代人のもつ文明の利器は何一つ無しに、自然の動物たちと同じ鋭い感受性をもって、現在のような人工の、何一つ加わらぬ、天然の大自然の、豊かな、しかし厳しい環境の中に、生きていた。

そして、その、自然の動物と変らぬ鋭い感受性をもつ人類の脳の機能が著しく進化して、自分たちの感受性が見、聞き、経験したものごとが何であるかを判断して認識に出し、コトバで示せるようになっていた。(しかし、まだ文字をもってはいなかった。)

それが、有史以前の上古代期(後氷期とよばれる頃)の人間の状態であった。(読者は、どうか、自分もその状態の人間になった気持(感受)で、読んで頂きたい。)

* 彼らの中には、毎朝、地平のかなたから登る輝く太陽に真実の「美」(命のよろこび)を感受し、そして又、山の端に沈む荘厳な夕陽のスガタに、生命の根源(命の畏れ)を感じて、太陽崇拜の思想をもった民族があった。

又、もろもろの生きもの(山や川や土や石や海や月や星や、植物や、鳥や獣や虫や魚や……)あらゆるものの中に「神」を感じて、原始多神教的な宗教をもった民族もあった。(そして彼らのそのような思想は、今日まで、彼らの子孫の民族に受けつがれている。)

ところが、同じ頃、日本列島に住むカタカムナ人のもった思想は、既に、彼らとはおよそスケールの違うものに高まっていた。

同じく、強烈な、そして荘厳な太陽を仰ぎ、満天の星を眺め、大自然の万物万象の、生成・変遷・消滅のスガタを感受して生きていたが、カタカムナ人の脳は、単に、太陽を特別にとりたてて拝むとか、多神教一神教的な「神」や「仏」の宗教をもつことで、満足する程度の波動量ではなかった。

カタカムナ文献解説

* 第十号のあと、「感受性について」を八冊まで出してしまったが、ようやく、カタカムナ文献解説の本道に立ちかえることが出来た。

* カタカムナ文献とは、我々の遠い祖先のカタカムナの上古代人が開発し、日本語の起源となり、日本民族の文化の根拠となったサトリを示す文献であり、日本人に生まれた者は、誰でも、そのサトリの心によって教えられ、育てられてきたものである。

しかし、カタカムナのサトリそのものは、有史以来埋没されて、人々の意識からは失われ、今日に至っていた。

* 昭和の敗戦直後、榎崎皐月の解説によって、カタカムナに関する真実が明らかになったのであるが、そして、世界に比類の無い日本語を話す我々は、その日本語の起源である、遠い祖先のカタカムナ人のサトリを、当然知るべきであると思ひ、榎崎皐月は、後継者を鍛え、相似象学会誌を発行して、カタカムナのサトリの伝達の道を啓いたのであったが……、カタカムナの世にあっては誰にでも、アタリマエのこととして伝達できたものが、現代人にとっては、至難のわざとなつてしまつていた。

二十年この道に全力をつくして来て、今、筆者は、自分がカタカムナをよりよくわかってくるのと引きかえに、人にわからせることの難しさを、つくづく、思い知らされ

ている。

* カタカムナ文献の解説によってわかつたことだが、我々の日本語は、我々の民族の祖先（のカタカムナ人）が、カタカムナのサトリを伝える為につくつてくれたもので、日本語を話す者（進化した脳をもつ人間）は、このサトリを知らなければマトモに生存を全うすることは出来なくなるものであり、人類として最も根源的なサトリである。

（カタカムナのサトリは、後代人が、大脳次元で思考した哲学や宗教的真理や科学的物理のような文化レベルの思想ではない。）

* このようなことを言えば、現代の智識人からは、独善だとか独断だとかと頭から非難されるであろうが、それは、「カタカムナ」を知らないからである。脳の落し穴にズッポリとつかりきつて、現代文明以上の、高度な人類の文化（カタカムナ文明）の思想を受けいれる感受性を、失つてしまつているからである。

* 我々の民族の祖先のカタカムナ人は、このことを、（則ち脳の進化した人類は、カタカムナのサトリを知らなければ、マトモに生きられなくなることを、）認識して、このサトリを親から子へ、師から弟子へ、伝え教える為のコトバを整理して、日本語の四十八の原型をつくつてくれたのである。

それ故、我々は、日本語を使って生きている限り、（カタカムナ人がそうしたように）カタカムナのサトリを知ら

なければならなかったのである。

* 人間とはそういうものであり、日本語とは、そういうものであったのである。

明治開国までの日本の文化は、まがりなりにも、このカタカムナ人の伝統をうけつぐものであった。

しかし、現代文明なるものは、祖先に、カタカムナの（人類の最も根原の）生命のサトリをもたなかった民族のつくり上げたものである。

我々は、現代文明のどんな文化を学ぶよりも前に、カタカムナの生命のサトリを知るべきなのである。

現代の世に生れ、カタカムナを知らされた者は、それが、いかに至難のわざであっても、自分がそれを正しくわかることに努めると共に、人にも（親から子へ、若者へ、と）、正しく伝えることは、人間として、当然のことなのである。

「カタカムナ」とは、そういうものなのである。

* 読者は、人間の脳の落し穴ということ、観念の上で承知する程度では無く、本当に、自分の脳が、自分自身の生命の感受性を無視して、勝手に働きまくってきたことに、（その為に病になり、様々なトラブルを起していたことに）、心から気がつく、ということがない限り、自分ではカタカムナを勉強し、感受性を鍛練しているつもりでも、実は、脳の感受性（アワの心）ならぬ、欲望追求（サヌキアタマ）の鍛練になってしまい、カタカムナを正しく

わかることは出来ない、ということ、本当に心から気付いて頂かねばならない。

* というのは、現代人は誰でも、頭のよい人もカンのない人も皆、人類的に、脳が進化した為に、必然的に脳の落し穴に陥った状態にあり、しかも、自分では、そのことに気がつかないものであるが、少くとも相似象会誌の読者は、このことを知らされているから、自分では一生懸命感受性を鍛えようと思っているに違いないのだが、実際は、鍛えるべき感受性（アワの心）が、今まで、もの心ついて以来、無視され通して退化してしまっている為に、観念の上で感受性を鍛練しようと思っても、脳のスイッチは、自動的にサヌキを出してしまう。しかし自分の意識では鍛練したつもり、ということになるのである。

* 自分の脳が、人類の脳の落し穴に陥っていることに心から気がつかなければならぬといっても、気がつく能力（感受性）を失っている人に、何をいっても、気がつかせることは出来るものではない。

* このことは実に大へんな難しい問題である。

思えば、釈迦の真正覚を、弟子たちが、自分ではわかったつもりで、実は感受できずに「仏教」にしてしまったのも、其角の俳句の心が誰にも伝えられなかったのも、ゲーテの転換の心が親友にも通じなかったのも、そして、富永老師が、その真実をいかに教えても、高弟たちは、自分ではわかったつもりで、実は師の心（アヤダムマーサンカー

ラー)を感じてできなかったのも、いずれも、この人間の脳の落し穴に気がつかなかった故であった。

* 今日まで人類は、自分たちが脳の落し穴に陥っていることを、誰も、ハッキリと知らなかった。

「人間の原罪」とか「人間の業や劫」という者はあっても、そこから脱出して、本来の生命の感受性を復活させる方法を、示し得た者は無かった。

* しかし、この問題が片付かぬ限り、人類は、自分たちの文化が、脳の落し穴の中のものにすぎないことを知らぬまま、(本当の人間の文化というものの豊かな恵みを知らぬまま)乱れ、汚れ、苦しみ、陶酔の果て、滅亡に赴くしかないであろう。(「生物は、進化した機能によって亡ぼされる」危険をもっている。)

* 今、私共は、今日まで謎であった日本語の起源を知り、脳の落し穴に陥らぬ人間の真の文化というものがあり得たことを知らされた。

そして我々現代人でも、退化した生命の感受性を起し復活させる方法があることを、知らされた。

* 脳の落し穴に気がつかず、カタカムナに無縁の人は、どうしようも無いが、少くとも、カタカムナに出合い、カタカムナ人の生命のサトリを知らされ、人類的な脳の落し穴から脱出して、自分の生命を完全發揮して生きたい、と思われる読者は、何としても、自分の感受性(アワの心)を鍛えて、カタカムナ人が、「ヤタノカ」といい、「フトマ

ニ」といい、「ヒフミヨイ」といったモノを、自分の脳の感受性によって本当に感受できるようになるまで、(観念の理解の程度では無く)本当に、カムウツシ・アマウツシの生命の幸を豊かに受けて、生きられるようになるまで、(この大自然の前に男一匹として立てるまで)どうか、生きぬいて頂きたい。

* 三月末、筆者は思わぬ通行事故(歩道上で、やくざの男に、背後から突き倒され、救急車で入院、大腿骨頸部骨折)という思いもよらぬ災難に会い、その為に、おくれた本号の出版が、更に遅延することになった。

* 当初、筆者は、自分が今、なぜこんなメに合わされるのか、どうしても不審でならなかった。もう二度と病院に入るような病気にはなるまいと決心し、ヤマヒのヒにかえて、一生懸命に努力したおかげで、七十歳をすぎ、生れてはじめての健康な状態にならせて頂けたと、感謝の日々をすごしていた矢先のことである。

* しかし、どうしても入りたくなかった病院に四十五日を過ごすうち、檜崎先生が、『僕は今まで、次々と試練をうけて、それに一つ一つパスして、カタカムナをたまわるに至った』といわれていたことが、心からわかる気がして来た。

又、先生は『僕は動物だから、あなた方のようなご立派な人間さまではありません』と、よく笑っていられたこと

が、改めて思いかえされた。

* 「試練」ということばは誤解を受けやすいが……（「限りある身の力ためさん」のような難行苦行的なサヌキでは無く、又「神の御意志みこごころに従う」というような信仰心でもない。）

* 自然の動物は、どんな「思わぬ災難」にあっても、理不尽な不公平な目にあっても、一切文句をいわず、ひたすらその場その場の、自分に出来る限りの努力（アワの感受性）をつくして生きるだけである。

つまり彼らは、「生きる」ということは、すべて、自分の感受性の「鍛練」である、という、生物の根本態度（天命）を全うしているのである。

人間には脳があるから、それを生命の「試練」（自分の波動量の鍛練）と感じるわけである。

先生が「僕は動物だから」といわれていたのは、そういう気持であった。

* まことに人間は進化した脳があるから、何かにつけ、どうして自分がこんな目にあうのか、と恨み悪み怒り、口惜しがり、歎き悲しみ、悔み、愚痴り、釈迦のいう通り、「苦の現象」の上に、五蘊サンカライラマヤキの盛を燃やしてしまう。（四諦五蘊観」前号感受性について）

* 脳があるのだから、どうしてこんな目に会ったのか、と、現実の苦の因をつきとめることは当然である。しかしそれを「苦」に病んで、五蘊の盛を燃やすのは（無駄なサ

ヌキを出すのは）愚なこと（不幸）である。（それは、進化した脳の落し穴に陥ることである。）

* 進化した脳があるなら、その脳を起励して、（生物の本来の根本態度を自分自身によく教えて）、自分の今の「苦の現象」を、スナホに（動物のように）アワの心アワの心で、自分の波動量の鍛練の場（試練）として受け、一杯の努力をつくして、当面の試練をうまくパスする為に、則ち自分の感受性をうまく鍛える為に、脳を一生懸命働かす態度になつてこそ、進化した脳をもつ人間である。

* 要するに我々は進化した脳（逆序の能力）がある為に、何かにつけ、動物のもたぬ「苦」を発生して、不幸な脳の落し穴に陥るのがつねであるが、いかなる場合にも、その進化した脳をマトモに働かせる生物の根本態度（アワの心）を起励すればよい、ということである。（逆序のサトリ）

そうすれば、同じ「苦の現象」の中におかれても、それを克服して（その試練をうまくパスして）、不幸を幸に転換することが出来る。

* そのようなわけで、筆者の「思わぬ災難」も、医師たちも「驚くべき早さ」で治癒し、もともと、身体は弱って心は元気であったから、入院中も校正をつづけ、おくればせながら、本号も無事出版の運びにこぎつけた次第である。

読者も、いろいろの場に合われるであろうが、どうか、

自己起励につとめ、すべて、感受性鍛練の心で、読みを深め、読みつづけて頂きたい。

*いつものことながら、筆者の面倒さわまる原稿を、このようなりつくしい本に造り上げて下さった、現代社と、カイト印刷の方々に、深く御礼を申し上げます。

(一九九四年七月三十一日 宇野)

相似象学会「相似象」を学ぶ会 について

- ▼相似象学は、「相似象」^{ソウジゾウ}を学ぶ最も能率の良い勉強法であります。
- ▼「相似象」とは、天然、宇宙、自然界、人間界を通ずる森羅万象に、相似^{ヒトシカ}の象があるという、カタカムナ（日本上古代民族の直観）に基く潜象物理であります。
- ▼婦人の知性の遅れは、民族の後進性、人類文明の退化に連なります。
- ▼本会は、会誌「相似象」を発刊し、知的水準の高い母性（アワ）の養成によって、民族の優生化と、人類文化の軌道修正を志すものであります。
- ▼会員は発想を転換し、人間の価値観を（ヒト）としての波動量におき、カタカムナ方式による、直観体験（カン）の鍛練を実習し、高度の常識を学び、婦人の特性である、前駆流の向上に努めます。
- ▼〈カタカムナ〉とは、人類社会の平和、親子夫婦の和合や健康な長寿など、良いとわかっていないことをマットウに達成しうる為の根拠を究明した上古代語であります。
- ▼会員は婦人に限りません。会誌の配布を受け見学会や勉強会に参加できます。

相似象学会誌 相似象 第二十一号

初版 一九九四年七月三十一日発行 ©
第二版 一九九七年七月三十一日発行

〈購読会費〉 一冊四〇〇〇円

〈編集者〉 宇野多美恵

〈発行者〉 宇野多美恵

制作 ▼ 株式会社現代社

発行所 ▼ 相似象学会事務所

(〒一五〇) 東京都渋谷区神泉一七一二

電話 〇三―三四六一―八九九三

振替 〇〇一五〇―一―一六一八四四

(印刷・中央印刷 製本・誠製本)

